前中西遺跡Ⅴ

二〇一〇　埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第７集

前　中　西　遺　跡　Ⅴ

―熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅵ―

２　０　１　０

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第７集

前中西遺跡Ⅴ

（まえなかにしいせき）

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅵ－

２０１０

埼玉県熊谷市教育委員会

第32号溝跡出土土器

第２号方形周溝墓出土土偶型容器顔面

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。市内上之で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、原始・古代から中世に至るおびただしい遺跡が確認されました。熊谷市教育委員会では遺跡の重要性を鑑みて、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事等に関しては、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成18・19年度に発掘調査を行った前中西遺跡について報告するものでございます。今回報告する調査では弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落跡や墓、そして河川跡などが確認されました。遺跡の主体となる弥生時代は大量の遺物が出土し、土器や石器の他に土偶などの特殊な遺物も発見されました。また河川跡からは廃棄されたと思われる遺物が大量に出土し、下駄などの木製品も見つかりました。前中西遺跡に関する調査報告は今回で５回目となり、遺跡の様相について徐々に明らかにすることができてまいりました。今後、本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、御理解、御協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理中央事務所、並びに地元関係者に厚くお礼申しあげます。

平成22年３月

熊谷市教育委員会
教育長　野原　晃

例　　言

1　本書は、埼玉県熊谷市箱田18番地１他に所在する前中西遺跡（埼玉県遺跡番号59－092）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、下記のとおりである。

平成18年度：平成18年４月19日～平成18年６月27日
平成19年１月９日～平成19年２月９日
平成19年度：平成19年９月３日～平成19年12月25日
平成19年12月１日～平成20年３月14日

整理・報告書作成期間は、平成21年４月13日から平成22年３月19日までである。

5　発掘調査の担当は、平成18・19年度ともに熊谷市教育委員会吉野　健が行い、本書の執筆・編集は、松田　哲が行った。

6　発掘調査における写真撮影は吉野が、遺物の写真撮影は松田が行った。

7　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

8　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、五十音順）

青木克尚　石川日出志　市川　修　柿沼幹夫　川口志津子　栗島義明　小林　高　菅谷浩之
鈴木敏昭　知久裕昭　村松　篤　吉田　稔
埼玉県教育局生涯学習文化財課　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

調査区全測図…1／1,200・1／300　　住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡・柵列跡・土坑…1／60

溝跡平面図…1／120　　溝跡断面図…1／60　　井戸跡…1／40　　方形周溝墓平面図…1／160

方形周溝墓断面図…1／60　　畠跡平面図…1／100　　畠跡断面図…1／60

河川跡平面図…1／200　　河川跡断面図…1／50・1／60　　谷状落込跡…1／160

2　遺構挿図中のスクリーントーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

＝地　山　　＝焼　土

3　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・施釉陶器・陶磁器・瓦・土錘・石器・石製品…1／4

土偶…1／3　　木製品…1／4・1／8

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。なお、木製品の断面については木取りの方向を極力示した。

弥生土器・土師器・土師質土器・陶磁器・土錘・石器・石製品断面：白抜き　須恵器断面：黒塗り

施釉陶器断面：　瓦断面：　赤彩：　黒色処理：

須恵器底部調整　回転糸切り　　回転ヘラ削り　　回転ヘラナデ

6　遺物拓影図のうち、左右あるものは向かって左に外面、右に内面、左のみのものは外面を示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、gである。（ ）が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子　B…黒色粒子　C…赤色粒子　D…褐色粒子　E…赤褐色粒子

F…白色針状物質　G…長石　H…石英　I…白雲母　J…黒雲母　K…角閃石

L…片岩　M…砂粒　N…礫

8　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行　1994）を参考にした。

目　　次

口　絵
序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要 ……1
　1　調査に至る経過 ……1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 ……1
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織 ……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 ……4
Ⅲ　遺跡の概要 ……9
　1　調査の方法 ……9
　2　検出された遺構と遺物 ……9
Ⅳ　遺構と遺物 ……19
　1　住居跡 ……19
　2　竪穴状遺構 ……27
　3　掘立柱建物跡 ……30
　4　柵列跡 ……32
　5　溝　跡 ……32
　6　土　坑 ……63
　7　井戸跡 ……72
　8　方形周溝墓 ……73
　9　畠　跡 ……80
　10　ピット ……80
　11　河川跡 ……82
　12　谷状落込跡 ……117
　13　遺構外出土遺物 ……119
Ⅴ　調査のまとめ ……123

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図 ……4
第２図　周辺遺跡分布図 ……6
第３図　調査地点位置図 ……10
第４図　調査区全測図 ……13
第５図　第１区全測図 ……15
第６図　第２区全測図 ……16
第７図　第３区全測図 ……17
第８図　第３・４区全測図 ……18
第９図　第１号住居跡・出土遺物 ……19
第10図　第２・３号住居跡 ……21
第11図　第２・３号住居跡土層断面図 ……22
第12図　第２号住居跡出土遺物 ……23
第13図　第３号住居跡出土遺物 ……24
第14図　第４号住居跡 ……25
第15図　第５号住居跡 ……26
第16図　第１・２号竪穴状遺構 ……27
第17図　第３号竪穴状遺構 ……28
第18図　第３号竪穴状遺構出土遺物 ……29
第19図　第１号掘立柱建物跡 ……31
第20図　第１号柵列跡 ……31
第21図　第１号柵列跡出土遺物 ……32
第22図　第１～18号溝跡 ……34
第23図　第19～31号溝跡 ……38
第24図　第32～37号溝跡 ……44
第25図　第１～９号溝跡土層断面図 ……45
第26図　第10～18号溝跡土層断面図 ……46
第27図　第19～24号溝跡土層断面図 ……47
第28図　第25～31号溝跡土層断面図 ……48

第29図　第32～34号溝跡土層断面図 ・・・・・・・・・49
第30図　第35～37号溝跡土層断面図 ・・・・・・・・・50
第31図　溝跡出土遺物（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・54
第32図　溝跡出土遺物（2）・・・・・・・・・・・・・・・・・55
第33図　溝跡出土遺物（3）・・・・・・・・・・・・・・・・・56
第34図　溝跡出土遺物（4）・・・・・・・・・・・・・・・・・57
第35図　溝跡出土遺物（5）・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第36図　溝跡出土遺物（6）・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第37図　溝跡出土遺物（7）・・・・・・・・・・・・・・・・・60
第38図　第１～６号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第39図　第７～16号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
第40図　第17～23号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
第41図　土坑・ピット出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・72
第42図　第１号井戸跡・出土遺物 ・・・・・・・・・・・72
第43図　第１号方形周溝墓・出土遺物 ・・・・・・・73
第44図　第２号方形周溝墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・75
第45図　第２号方形周溝墓出土遺物（1）・・・・・76
第46図　第２号方形周溝墓出土遺物（2）・・・・・77
第47図　第１号畠跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
第48図　第１号河川跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
第49図　第１号河川跡土層断面図（1）・・・・・・・84
第50図　第１号河川跡土層断面図（2）・・・・・・・85
第51図　第１号河川跡遺物出土状況（1）・・・・・86
第52図　第１号河川跡遺物出土状況（2）・・・・・87
第53図　第１号河川跡遺物出土状況（3）・・・・・88
第54図　第１号河川跡出土遺物（1）・・・・・・・・・89
第55図　第１号河川跡出土遺物（2）・・・・・・・・・90
第56図　第１号河川跡出土遺物（3）・・・・・・・・・92
第57図　第１号河川跡出土遺物（4）・・・・・・・・・93
第58図　第１号河川跡出土遺物（5）・・・・・・・・・94
第59図　第１号河川跡出土遺物（6）・・・・・・・・・96
第60図　第１号河川跡出土遺物（7）・・・・・・・・・97
第61図　第１号河川跡出土遺物（8）・・・・・・・・・98
第62図　第１号河川跡出土遺物（9）・・・・・・・・・99
第63図　第１号河川跡出土遺物（10）・・・・・・・101
第64図　第１号河川跡出土遺物（11）・・・・・・・102
第65図　第１号河川跡出土遺物（12）・・・・・・・103
第66図　第１号河川跡出土遺物（13）・・・・・・・104
第67図　第１号河川跡出土遺物（14）・・・・・・・105
第68図　第１号河川跡出土遺物（15）・・・・・・・106
第69図　第１号河川跡出土遺物（16）・・・・・・・107
第70図　第１号河川跡出土遺物（17）・・・・・・・109
第71図　第１号河川跡出土遺物（18）・・・・・・・110
第72図　谷状落込跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
第73図　谷状落込跡遺物出土状況･出土遺物・・119
第74図　遺構外出土遺物（1）・・・・・・・・・・・・・・120
第75図　遺構外出土遺物（2）・・・・・・・・・・・・・・121

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表 ・・・・・・・20
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表 ・・・・・・・23
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表 ・・・・・・・25
第５表　第３号竪穴状遺構出土遺物観察表 ・・・30
第６表　第１号柵列跡出土遺物観察表 ・・・・・・・32
第７表　溝跡出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・60
第８表　土坑出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・72
第９表　第１号井戸跡出土遺物観察表 ・・・・・・・73
第10表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表 ・・・74
第11表　第２号方形周溝墓出土遺物観察表 ・・・79
第12表　ピット出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・82
第13表　第１号河川跡出土遺物観察表 ・・・・・・111
第14表　谷状落込跡出土遺物観察表 ・・・・・・・・119
第15表　遺構外出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・122

図版目次

図版１　第１区全景（北から）
第１区全景（南から）
第１区14～17－187～189Ｇ全景(西から)
図版２　第１区14～17－195・196Ｇ全景(西から)
第２区（平成18年度調査）全景（南から）
第２区（平成19年度調査）全景（東から）
図版３　第３区南側全景（北から）
第３区全景（南から）
第４区38～42－164～166Ｇ全景(西から)
第４区38・39－163～169Ｇ全景(北から)
遺　構
図版４　第１号住居跡
第２号住居跡
第２号住居跡Ｐ16遺物出土状況
第３号住居跡
第３号住居跡遺物出土状況
第４号住居跡・第５号溝跡・第４号土坑
第５号住居跡
第１・２号竪穴状遺構・第６号土坑
図版５　第３号竪穴状遺構
第１号掘立柱建物跡
第１号溝跡
第２号溝跡・第１号土坑
第４号溝跡
第７～９号溝跡・第９～11号土坑
第10号溝跡
第12号溝跡
図版６　第13・14号溝跡
第15号溝跡
第18号溝跡
第19号溝跡
第20・21号溝跡
第22号溝跡
第23号溝跡
図版７　第24号溝跡
第25・26号溝跡
第27号溝跡
第28号溝跡
第28号溝跡遺物出土状況
第29～31号溝跡・第21号土坑
第32号溝跡
図版８　第32号溝跡遺物出土状況
第33・34号溝跡
第35号溝跡
第35号溝跡遺物出土状況（1）
第35号溝跡遺物出土状況（2）
第35号溝跡遺物出土状況（3）
第２号土坑
第５号土坑
図版９　第７号土坑
第８・12・13号土坑
第15号土坑
第20号土坑
第１号井戸跡
第１号方形周溝墓
第２号方形周溝墓
第２号方形周溝墓遺物出土状況
図版10　38－167ＧＰ１遺物出土状況
第１号河川跡（南から）
第１号河川跡（北から）
第１号河川跡（西から）
第１号河川跡西側（北から）
第１号河川跡37・38－150・151Ｇ遺物出土状況
第１号河川跡37・38－152Ｇ遺物出土状況
第１号河川跡遺物出土状況（1）
図版11　第１号河川跡遺物出土状況（2）
第１号河川跡遺物出土状況（3）
第１号河川跡遺物出土状況（4）

第１号畠跡（南東から）
第１号畠跡（東から）
谷状落込跡（南東から）
谷状落込跡弥生土器出土状況（上から）
谷状落込跡弥生土器出土状況（東から）

遺　物

弥生土器

図版12　第２号住居跡　第12図６・７
第３号住居跡　第13図１
第20号溝跡　第31図20－１
第32号溝跡　第32図32－１・２
図版13　第32号溝跡　第33図32－４・６・７
第35号溝跡　第34図35－１・２
図版14　第35号溝跡　第34図35－４・５・６
第35図35－21・25・26
第37図35－65
図版15　第37号溝跡　第37図37－1
第２号方形周溝墓　第45図１・５
第１号河川跡　第54図１・２・４・11・12
図版16　第１号河川跡　第54図13
第55図44・46・49
谷状落込跡　第73図１
遺構外　第74図１
図版23　第１号住居跡　第９図１～４
第２号住居跡　第12図１・８～13
第３号住居跡　第13図２～７
第３号溝跡　第31図31－１
第15号溝跡　第31図15－１
第16号溝跡　第31図16－１
第19号溝跡　第31図19－３～６
第20号溝跡　第31図20－６～９
第22号溝跡　第31図22－１・２
第23号溝跡　第31図23－１・２
第24号溝跡　第31図24－１
第28号溝跡　第32図28－３～７
第31号溝跡　第32図31－１・２
図版24　第32号溝跡　第33図32－５・８・22～38・40
第35号溝後　第34図35－３
第35図35－22・23・27～37
図版25　第35号溝跡　第36図35－42～61
第37図35－69～74
第37号溝跡　第37図37－１
第２号方形周溝墓　第45図14～25
図版26　第２号方形周溝墓　第45図26～33・35～40
第46図41～56・58～61
ピット出土遺物　第41図１・３～６
第１号河川跡　第55図50～54
図版27　第１号河川跡　第55図55～64
第56図65～91
図版28　第１号河川跡　第56図94～101
第57図102～111・114～117・121～123・125・126
遺構外　第74図２・14～19・21～23・26・29
図版29　第35号溝跡　第35図35－38
第36図35－39～41
第２号方形周溝墓　第45図34
遺構外　第74図20

土師器（古墳時代前期）

図版17　第28号溝跡　第32図28－１
第１号河川跡　第59図136・139・140

須恵器・土師器・土師質土器（古墳時代後期～平安時代）

図版17　第35号溝跡　第37図35－75
第１号井戸跡　第42図１
第１号河川跡　第60図144・152・153
図版18　第１号河川跡　第60図155・157・162・163・164・165・173・175・178・

179
図版19　第１号河川跡　第60図180・181
第61図182・190墨書・197墨書・220墨書・223墨書・226墨書・227墨書・233墨書
図版20　第１号河川跡　第62図234墨書・248
第63図251
第68図313・314・315・316・317・318
図版21　第１号河川跡　第68図319・320・329墨書
第69図332・334・337墨書・338・339・340・341
図版22　第１号河川跡　第69図343・348・349・351・362・364
第70図375・376・379
図版30　第３号竪穴状遺構　第18図１～８
第１号柵列跡　第21図１
第27号溝跡　第31図27－１～３
第１号河川跡　第62図243～245
図版31　第１号河川跡　第63図260～264
第64図265～273
図版32　第１号河川跡　第65図274～284
第66図285～287
図版33　第１号河川跡　第66図288～294
第67図295～301
図版34　第１号河川跡　第67図302～305
第68図306～312
遺構外　第75図34～39
石器・石製品
図版35　第２号住居跡　第12図19・20
第３号住居跡　第13図８
第３号竪穴状遺構　第18図13
第３号溝跡　第31図３－２
第15号溝跡　第31図15－２・３
第20号溝跡　第31図20－11
図版36　第32号溝跡　第34図32－41
第２号方形周溝墓　第46図62・63
第１号河川跡　第58図127～132
図版37　遺構外　第74図30・31
第１号柵列跡　第21図２
第１号河川跡　第70図396・397
土製品
図版37　第２号方形周溝墓　第46図64・65
第１号河川跡　第70図381～394
木製品
図版38　第１号河川跡　第71図399～406

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

昭和61年６月６日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成７年11月13日から平成８年１月19日にかけて遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成８年２月９日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。文化財保護法第94条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成18年４月10日及び12月20日、平成19年５月15日及び11月13日付けで提出された。発掘調査は平成18年度及び平成19年度に熊谷市教育委員会により実施された。

発掘調査に関わる熊谷市教育委員会及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成18年度　平成18年４月17日付け熊教社発第56号
　　平成18年５月１日付け教生文第３－34号
　　平成18年12月25日付け熊教社発第932号
　　平成19年１月15日付け教生文第３－1083号
平成19年度　平成19年８月29日付け熊教社発第1352号
　　平成19年６月８日付け教生文第３－199号
　　平成19年11月22日付け熊教社発第1514号
　　平成19年12月３日付け教生文第３－784号

2　発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

平成18年度

発掘調査は二回に分けて二地点で行われた。１区として報告した調査区は面積が767.1㎡であり、調査期間は平成18年４月19日から６月27日までである。２区とした調査区は面積が120.6㎡、調査期間は平成19年１月９日から２月９日までである。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、１区は４月下旬から６月上旬にかけて、２区は１月中旬から下旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。６月中旬及び２月初旬からは遺構平面図を作成し、

６月下旬及び２月上旬には調査区の全景写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

平成19年度

発掘調査は平成18年度と同じく二回に分けて行われた。３区として報告した調査区は南北と東西の道路部分を二回にわけて実施した。３区南北道路部分及び４区は面積が合計636㎡、調査期間は平成19年９月３日から12月25日までである。２区及び３区東西道路部分は面積が合計644.2㎡、調査期間は平成19年12月１日から平成20年３月14日までである。このうち、３区東西道路部分は今回報告するのが208.2㎡分のみであり、残りについては次年度以降に報告する予定である。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、３区南北道路部分及び４区は９月中旬から11月下旬にかけて、２区及び３区東西道路部分は12月中旬から２月中旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。12月上旬及び２月下旬からは遺構平面図を作成し、12月下旬及び３月中旬には調査区の全景写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

（２）整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成21年４月から平成22年３月まで実施した。第１四半期は遺物の洗浄、注記、接合、復元作業等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。第２四半期に入ると、遺物の実測・トレース、遺構のトレースを開始し、第３四半期には遺構・遺物の版組を作成した。第4四半期に入ると、遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け、編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、数回の校正を行い、３月下旬に報告書を刊行した。

３　発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

（１）発掘調査

平成18年度

教育長	野原　　晃
教育次長	増田　和己
社会教育課長	長島　泰久
社会教育課担当副参事	今井　　宏
社会教育課副課長	新井　　端
社会教育課副課長	出縄　康行
社会教育課主幹兼文化財保護係長	金子　正之
社会教育課主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主任	松田　　哲
主事	松村　　聡

平成19年度

教育長	野原　　晃

教育次長	増田　和己
社会教育課長	関口　和佳
社会教育課担当副参事	今井　　宏
社会教育課副課長	新井　　端
社会教育課副課長	出縄　康行
社会教育課主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主任	松田　　哲
主事	松村　　聡

（２）整理・報告書作成事業

平成21年度

教育長	野原　　晃
教育次長	柴崎　　久
社会教育課長	斉木　千春
社会教育課担当副参事	小林　英夫
社会教育課副課長兼文化財保護係長	新井　　端
社会教育課副課長	出縄　康行
社会教育課主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主査	鯨井　敬浩
主任	松田　　哲
主任	蔵持　俊輔
主事	山下　祐樹
発掘調査員	長谷川一郎
発掘調査員	原野　真祐

Ⅱ　遺跡の立地と環境

熊谷市は埼玉県北部に位置する県北最大の市である。平成17年10月１日には妻沼町及び大里町と、平成19年２月13日には江南町と合併し、人口20万を超える市として新たに発足したところである。

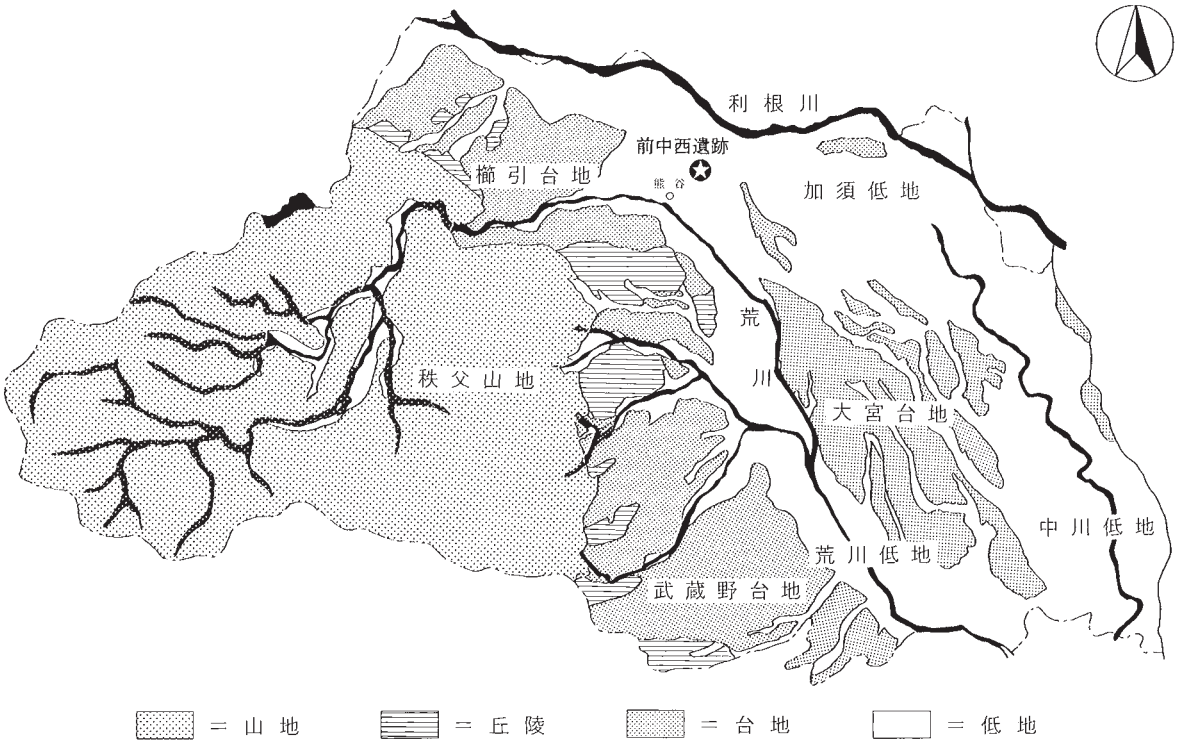
熊谷市は北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に流れており、両河川が最も近接する地域にある。地形的には主に市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛引台地は洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東はJR高崎線籠原駅から北へ約２㎞の西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。櫛引台地の東側には沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がる。新荒川扇状地は熊谷市の南西に位置する深谷市（旧川本町）菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する前中西遺跡は、その新荒川扇状地の縁辺部、標高24m前後の自然堤防上に立地している。遺跡は熊谷市東部の上之に所在し、JR高崎線熊谷駅からは北東へ約1.2㎞、荒川からは北へ約2.0～2.5㎞、利根川からは南へ約7.0～9.0㎞の距離にある。現地表面から遺構確認面までの深さは１m前後であった。

次に前中西遺跡周辺の歴史的環境について概観する（第２図）。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市東部では確認例が極めて少ない。この段階の遺跡は主に熊谷市西部から深谷市域にかけて多くみられ、地形的には櫛引台地及び台地直下の妻沼低地自然堤防上に集中する。旧石器時代については、櫛引台地東端に立地する熊谷市籠原裏遺跡（地図未掲載）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛引台地北端に位置する深谷市東方



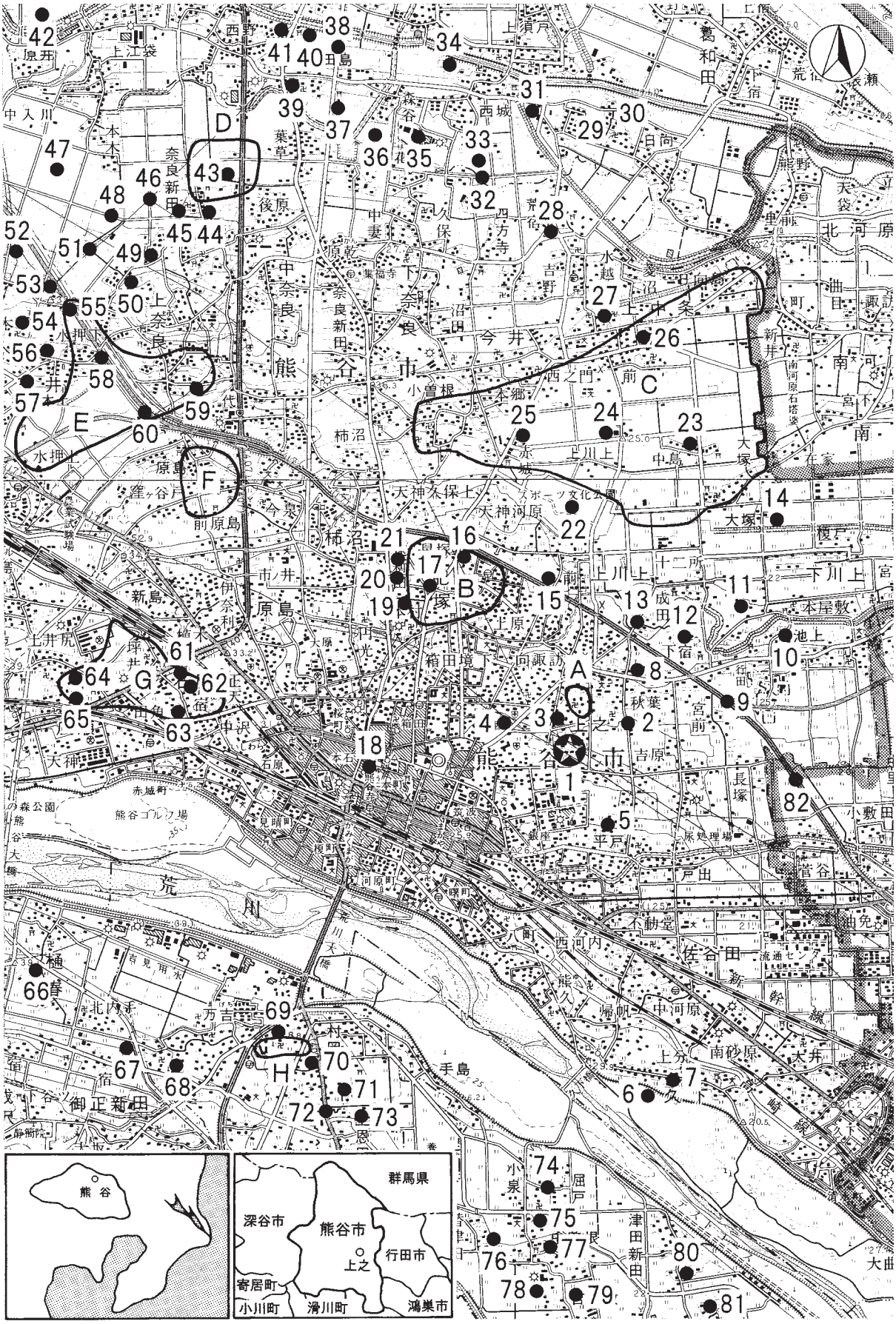
第１図　埼玉県の地形図

城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず低地上にも出現しはじめ、中期も特に後半段階の加曽利Ｅ式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として櫛引台地及び台地直下の低地上に集中している。後期になると徐々に低地へ進出しはじめ、西城切通遺跡（34）、場違ヶ谷戸遺跡（39）など櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が認められるようになる。前中西遺跡周辺では隣接する諏訪木遺跡（2）でのみ確認例がある。晩期は遺跡数が減少する。諏訪木遺跡では後期に続いて集落が営まれているが、唯一の事例と言える。熊谷市遺跡調査会による調査（熊谷市遺跡調査会2001）や埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002・2007）では、後期末から晩期の遺物が検出されている。特に後者では遺構に伴って大量の遺物が出土し、集落跡の存在が明らかとなっている。この他では櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）で晩期最終末の浮線文土器が多数検出されている。遺構からの検出ではなかったが、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階である前期末から中期前半は隣接する藤之宮遺跡（3）で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡は櫛引台地直下の低地上に集中するが、集落ではなく、再葬墓である。横間栗遺跡（地図未掲載）では、前期末から中期前半頃の再葬墓が13基確認されており、再葬墓一括資料は1999年３月に埼玉県指定になっている。この他にも熊谷市（旧妻沼町）飯塚遺跡、飯塚南遺跡（ともに地図未掲載）や先の深谷市上敷免遺跡などでも再葬墓が検出されており、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。また、上敷免遺跡では包含層からであるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期中頃になるとこれまでの状況と一変して集落跡が増す。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（9）、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（82）などがあり、本格的に展開される。中期後半は今回報告する前中西遺跡（1）や諏訪木遺跡、北島遺跡（22）などで集落が営まれており、前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡では方形周溝墓も検出されている。特に前中西遺跡では遺跡範囲南東部で方形周溝墓が多数検出されており、集落･墓ともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている（熊谷市教育委員会2002・2003）。諏訪木遺跡では県埋蔵文化財調査事業団による調査（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）で初めて住居跡と方形周溝墓が確認された。両者はほぼ同一箇所で確認されたことから時間差を持つ。確認された住居跡は１軒のみであり、出土土器も甕１点のみであるため断言はできないが、出土土器の比較では方形周溝墓が住居跡よりも新しい要素を持つ。北島遺跡では大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されている。そして、特筆すべきことは水田に引き込む水路や堰が造営されていたことが挙げられる。これは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語っており、北島遺跡はその規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目されている。後期初頭以降については藤之宮遺跡で土器片が若干検出されているが、遺構は確認されていない。遺構が認められた遺跡としては前中西遺跡以外に近辺では確認例がない。

古墳時代になると低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。前代に引き続いて前中西遺跡、諏訪木遺跡、藤之宮遺跡、北島遺跡では集落跡が確認され、北島遺跡では弥生時代に続いて大規模集落が営まれており、墓域も形成されている。諏訪木遺跡では、県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査で河川跡から大量の木製品が出土しており、注目すべきは板倉造り建物の「樋部倉矧」と呼ばれる特殊な加工が施された壁板材が検出されたことが挙げられる（埼玉県埋蔵文化



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

№	遺　跡　名	時　　代	№	遺　跡　名	時　　代
熊　谷　市			47	別府条里遺跡	奈良・平安
1	前中西遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安	48	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
2	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳後、奈良・平安、中・近世	49	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
3	藤之宮遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安、中世	50	奈良氏館跡	平安末～中世
4	箱田氏館跡	平安末	51	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
5	平戸遺跡	弥生中・後、古墳後、平安、中・近世	52	寺東遺跡	縄文前～後
6	久下氏館跡	中世	53	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
7	市田氏館跡	中世	54	玉井陣屋跡	平安末～中世
8	成田氏館跡	中世	55	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
9	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	56	水押下遺跡	古墳後
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	57	稲荷木上遺跡	古墳後
11	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	58	下河原中遺跡	奈良・平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	59	本代遺跡	古墳後、近世
13	成田遺跡	古墳後	60	下河原上遺跡	近世
14	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	61	天神前遺跡	古墳中・後、中世
15	河上氏館跡	中世	62	兵部裏屋敷跡	中世
16	八幡山遺跡	古墳	63	御蔵場跡	近世
17	出口下遺跡	古墳後	64	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
18	熊谷氏館跡	中世	65	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
19	肥塚館跡	中世	66	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
20	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	67	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
21	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	68	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
22	北島遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中世	69	村岡館跡	平安末
23	中島遺跡	古墳後、奈良・平安	70	北西原遺跡	奈良・平安
24	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	71	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
25	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	72	西浦遺跡	奈良・平安
26	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	73	腰廻遺跡	奈良・平安
27	中条氏館跡	中世	74	北方遺跡	奈良・平安
28	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	75	宮前遺跡	奈良・平安
29	先載場遺跡	古墳後、奈良	76	西浦町遺跡	奈良・平安
30	八幡間遺跡	古墳後、奈良	77	宮前町遺跡	奈良・平安
31	東城館跡	平安	78	宮町遺跡	奈良・平安
32	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	79	仲町遺跡	奈良・平安
33	西城館跡	平安	80	旭町遺跡	奈良・平安
34	西城切通遺跡	縄文後	81	北町遺跡	奈良・平安
35	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	行　田　市		
36	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	82	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
37	鷺ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	古　墳　群		
38	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	熊　谷　市		
39	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	A	上之古墳群	古墳後～末
40	宮前遺跡	奈良・平安	B	肥塚古墳群	古墳後～末
41	実盛館	平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
42	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
43	横塚遺跡	古墳前、平安	E	玉井古墳群	古墳後
44	東通遺跡	古墳後	F	原島古墳群	古墳後
45	西通遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
46	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安	H	村岡古墳群	古墳後

財調査事業団2008)。中条遺跡（26）では木製の農具が検出されており、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が多数出土している。この他にも古墳時代前期はたくさん確認例があるが、遺跡は主に利根川流域沿いの自然堤防上に分布する傾向にある。中期は確認例が少ないが、前段階に続いて前中西遺跡や藤之宮遺跡、中条遺跡などで集落跡が営まれている。また、５世紀末頃の鎧塚古墳や女塚１号墳（C：中条古墳群)、市の指定史跡である横塚山古墳（D：奈良古墳群）などといった古墳も築造されている。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡２箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚１号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳はB種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。

後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡は規模が大小あるが、多数営まれる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続するものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造され始める。低地上では前中西遺跡北側に分布する上之古墳群（A）の他に、肥塚古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは概ね６世紀から７世紀末ないし８世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では埋葬施設に角閃石安山岩、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概ね大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では二重の堀が巡る台形区画内から建物跡が検出されており、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの施釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された９世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では区画溝内に四面庇の付いた大型掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡の集中する地域といえる。

集落以外では北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡（14）、行田市南河原条里遺跡（地図未掲載）などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡を明確に残す。

平安時代末から中世にかけては武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる段階であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（8）、久下氏館跡（6）、市田氏館跡（7）、河上氏館跡（15）、熊谷氏館跡（18）、肥塚館跡（19）、中条氏館跡（27）などがある。このうち、前中西遺跡に近い成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされており、隣接する諏訪木遺跡では近年の調査で成田氏関連と思われる遺構や遺物が確認されている。まず県事業団による平成13年度調査では、館跡から南に約300mの所で中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002）。同じく県事業団による平成14年度調査では、井戸枠に器高70㎝を超える常滑大甕を使用した井戸跡が確認されており、常滑大甕は13世紀中頃のものと推定されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008）。そして、熊谷市教育委員会による平成20年度調査では、古墳時代後期の古墳周溝が埋没した後に掘削された土坑から大量の埋蔵銭が検出されている。埋蔵銭は現在整理調査中であるが、おそらく15世紀前半を上限とし、枚数が5,000枚以上と膨大な数であることから成田氏に関連するものであることは間違いない。

中世段階については館跡を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、依然として資料が不足している状態である。そして、近世段階についても同様で隣接する諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

１　調査の方法

今回報告する地点は、平成18・19年度に行われた第７次及び第８次調査についてである。平成18年度は調査地点が二箇所、平成19年度は三箇所に分かれている（第３図）。このうち両年度に調査が実施された２区は接していることから一つの調査区として扱った。また平成19年度調査の３区は調査の都合から二回に分けて行われた。今回報告する調査面積の合計は1,731.9㎡である。

調査は、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行った。実測作業を行うにあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように設定された一辺５ｍのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。今回報告する調査地点のグリッドは、東西が13から42まで、南北は149から199までが該当する。なお、区画整理地内全体のグリッド図については、過去の前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会2002・2003）に記載されていることから本報告では省略した。

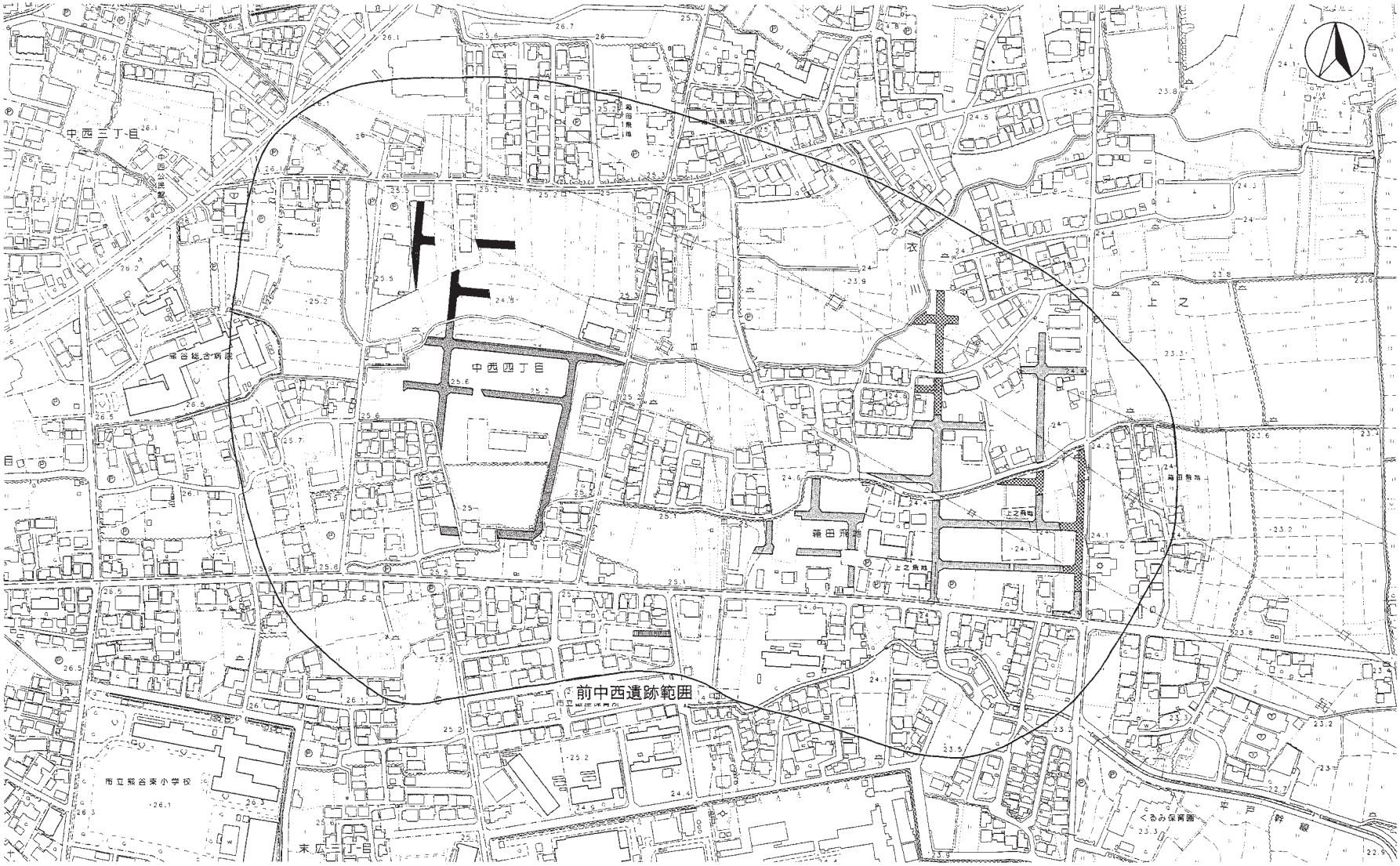
２　検出された遺構と遺物

今回報告する地点は遺跡範囲北東部と東部にあたり、調査区は四箇所に分かれている。検出された遺構は、全調査区を通して住居跡５軒、竪穴状遺構３基、掘立柱建物跡１棟、柵列跡１列、溝跡37条、土坑23基、井戸跡１基、方形周溝墓２基、畠跡１箇所、ピット多数、河川跡１条、谷状落込跡１箇所である（第４～８図）。遺構の大半は第１・３・４区からの検出であり、第２区は畠跡と谷状落込跡のみ検出された。

住居跡は第１区が２軒、第３区が１軒、第４区が２軒の計５軒が検出された。第１・４区はほぼ中央付近、第３区は南端に位置する。時期は第１区の２軒が奈良時代、第３・４区の３軒は弥生時代中期後半から後期初頭までの段階に収まる。他の遺構との重複が激しいものが多く、弥生時代は全形を検出できたものがない。奈良時代は横長の長方形を呈し、北壁にカマドを持つ。遺物は弥生時代の住居跡からは弥生土器や石器が検出された。土器は破片、石器は一部を欠くものが多く、残存状態はあまり良くない。奈良時代の住居跡は伴う出土遺物が皆無であるが、過去に実施した周辺の調査状況から奈良時代と判断した。

竪穴状遺構は第１区から２基、第３区から１基の計３基が検出された。第１区の２基はほぼ中央付近に位置し、他の遺構と重複し合っていた。第３区は南端に位置する。全形を検出したものはないが、第１区の２基は方形ないし長方形を呈すると思われることから住居跡に似るが、カマドが確認されなかったことから竪穴状遺構とした。第３区の１基は北西部付近のみの検出であり、大型の土坑になる可能性もある。時期は第１区の２基は出土遺物に伴うものがないが、他の遺構との新旧関係などから古墳時代後期以降、第３区の１基は出土遺物から７世紀後半と思われる。出土遺物は須恵器、土師器があるが、残存状態の良いものはみられなかった。

掘立柱建物跡は第１区南端から１棟検出された。全形を検出できなかったが、東西棟の側柱建物跡になると思われる。出土遺物はなかったが、過去に実施した周辺の調査状況などから奈良時代と思われる。



＝ 平成10年度報告地点(熊谷市前中西遺跡調査会)　＝ 平成13年度報告地点(熊谷市教委)　＝ 平成14年度報告地点(熊谷市教委)

＝ 平成20年度報告地点(熊谷市教委)　＝ 本報告地点

第３図　調査地点位置図

柵列跡は第４区の北端から１列検出された。柱穴は三つのみの確認であり、北東から南西方向を向く。出土遺物に須恵器があるが破片であるため、時期は古墳時代末以降としか言えない。

溝跡は第１区が18条、第３区が９条、第４区が10条の計37条が検出された。ほぼ東西方向に走るものと北西から南東方向に走るものがある。時期は不明確なものが約半分を占めるが、弥生時代から中・近世までと幅広い。出土遺物は弥生土器、石器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期以降の須恵器、土師器、中・近世の陶器がある。北西から南東方向に走る溝については弥生時代のものが多く、過去に実施した周辺の調査状況や軸が合うことなどから方形周溝墓になる可能性がある。このうち32・35号溝跡からは大量の遺物が検出されており、良好な資料を得ることができた。

土坑は第１区が19基、第３区が１基のみ、第４区が３基の計23基が検出された。大半は第１区からの検出である。平面プランは隅丸の方形ないし長方形、楕円形を呈するものが多い。出土遺物が少なく、時期の不明確なものが大半を占める。

井戸跡は第４区南端から１基のみ検出された。弥生時代の溝跡覆土を切って掘り込まれていた。時期は出土遺物から奈良時代と思われる。

方形周溝墓は第４区北側から２基検出された。他の遺構と重複し合っており、１号が２号より古い。ともに大半が調査区外にあるため全形を検出することはできなかったが、１号は四隅が切れるタイプ、２号は東溝中央に土橋を持つタイプと思われる。時期は１号が弥生時代中期後半、２号が後期初頭と思われる。出土遺物は弥生土器、石器、土偶型容器があるが、土偶型容器については流れ込みの可能性が高い。２基とも他の遺構との重複が激しいため方台部から主体部と思われる掘り込みは確認されなかった。

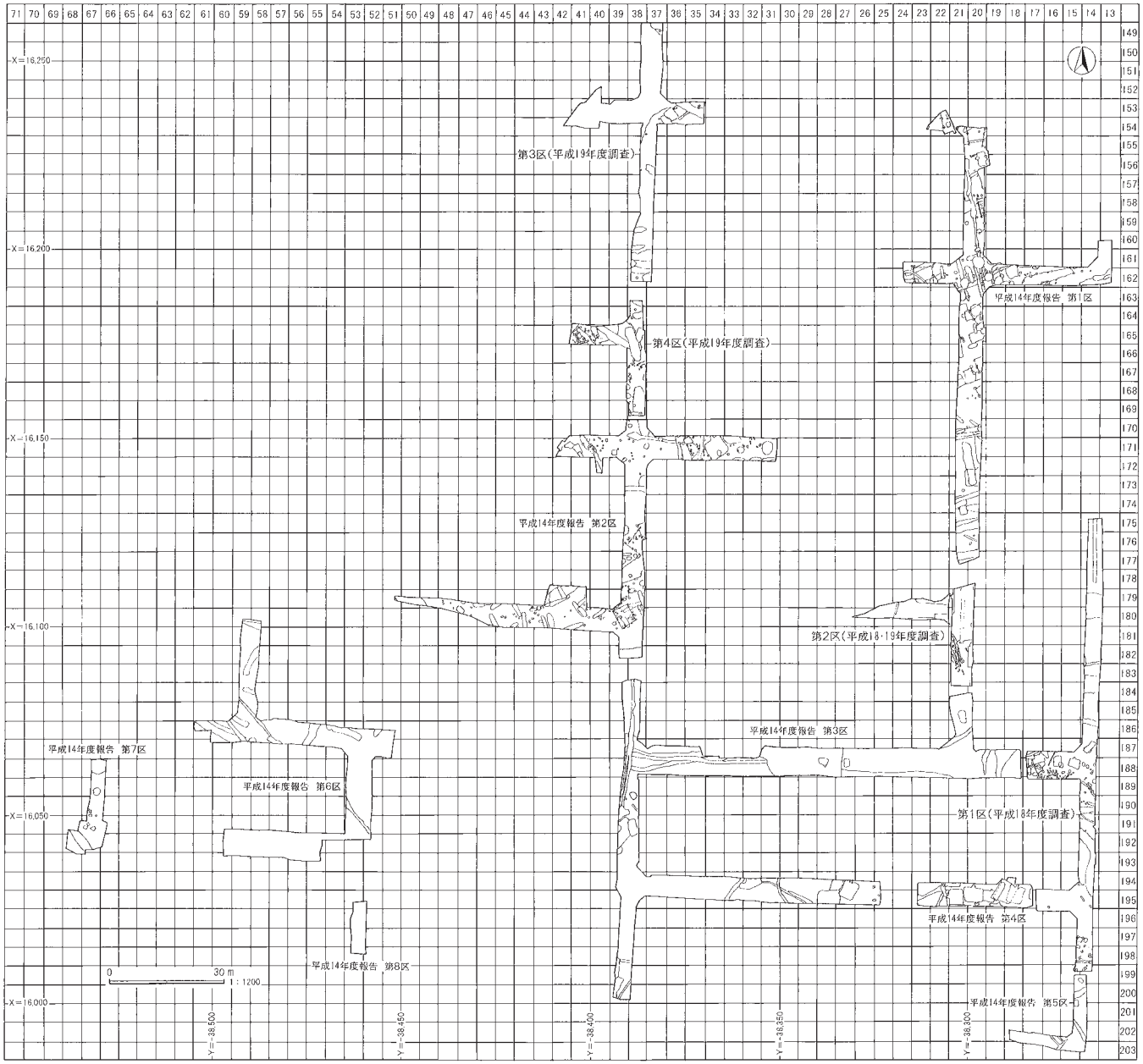
畠跡は第２区南側から検出された。出土遺物がないため時期は特定できないが、北側の弥生土器が検出された谷状落込跡が埋没した後に掘り込まれていることから弥生時代以降であることは間違いない。

ピットは第２区以外から検出された。１区は主に14～17－188～189グリッド、４区は主に40・41－165グリッドと38－166～169グリッドに集中し、３区は少ないがほぼ全面に点在している。規則性が見出せず、また出土遺物は皆無に近く、かつ流れ込みが多いことから時期の特定は困難である。

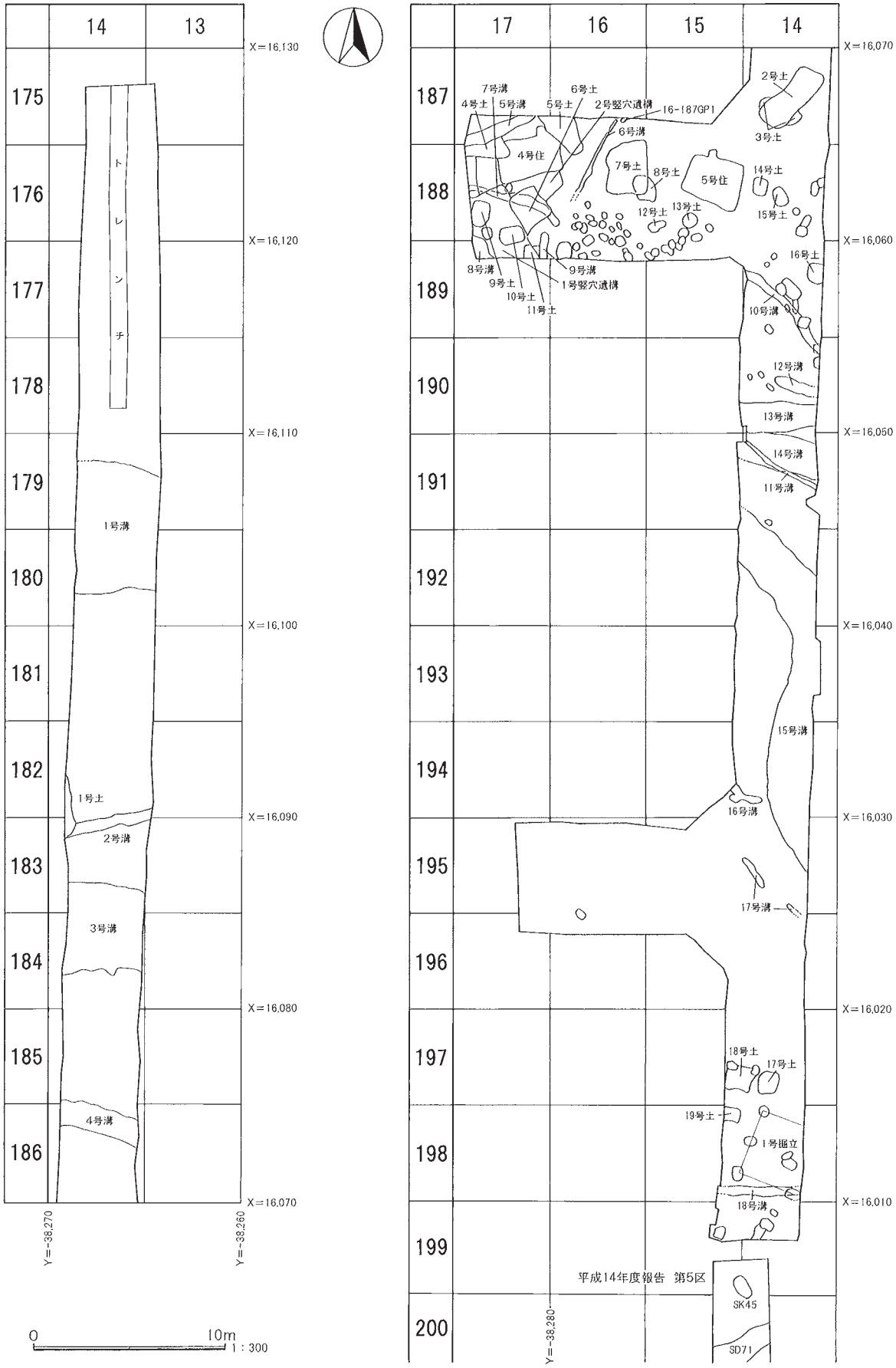
河川跡は第３区北側から検出され、３区の大半を占める。37・38－152グリッド以南は南西から北東方向、37・38－151グリッド以北は北西方向に流れていた。遺物は弥生土器、石器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器、奈良・平安時代の須恵器、土師器、土師質土器、施釉陶器、瓦、土製品、石製品、木製品、中世の陶器など大量に検出され、特に奈良・平安時代のものが多い。出土遺物はその時期から弥生時代、古墳時代前期、古代の大きく三段階に分けられ、各段階で出土位置にそれぞれ傾向がみられた。

谷状落込跡は第２区の北側で検出された。21－179グリッド西端から口縁部を欠く比較的残りの良い弥生土器が検出されたことから時期は弥生時代と思われる。

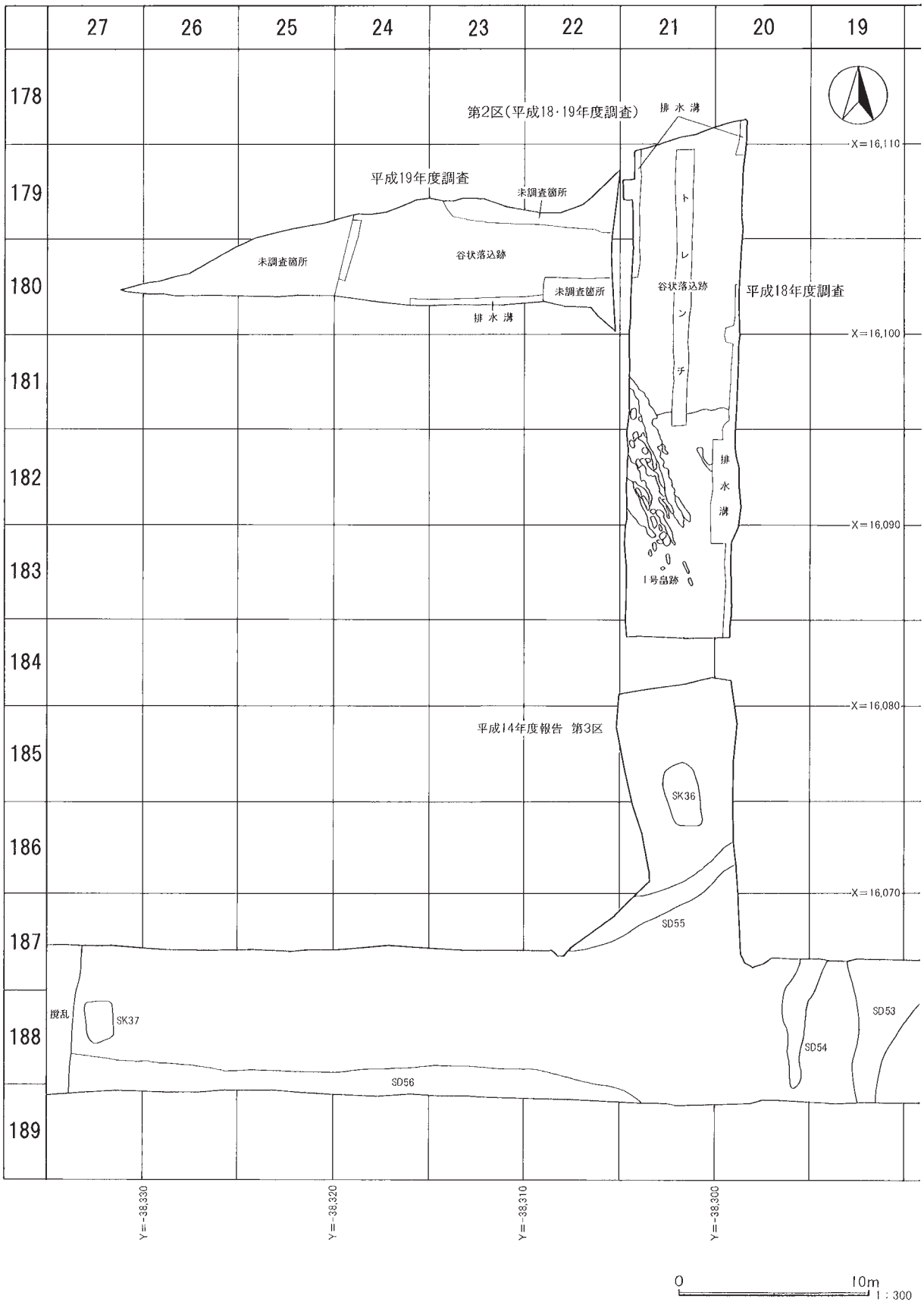
遺構外出土遺物は弥生土器、石器、奈良・平安時代の須恵器・土師器、中世の青磁などがある。弥生土器は４区、奈良・平安時代の遺物は３区からの検出が多い。


第3区(平成19年度調査)
第4区(平成19年度調査)
平成14年度報告 第1区
平成14年度報告 第2区
第2区(平成18・19年度調査)
平成14年度報告 第3区
第1区(平成18年度調査)
平成14年度報告 第4区
平成14年度報告 第5区
平成14年度報告 第6区
平成14年度報告 第7区
平成14年度報告 第8区
X=16,250
X=16,200
X=16,150
X=16,100
X=16,050
X=16,000
Y=-38,500
Y=-38,450
Y=-38,400
Y=-38,350
Y=-38,300
0
30 m
1 : 1200

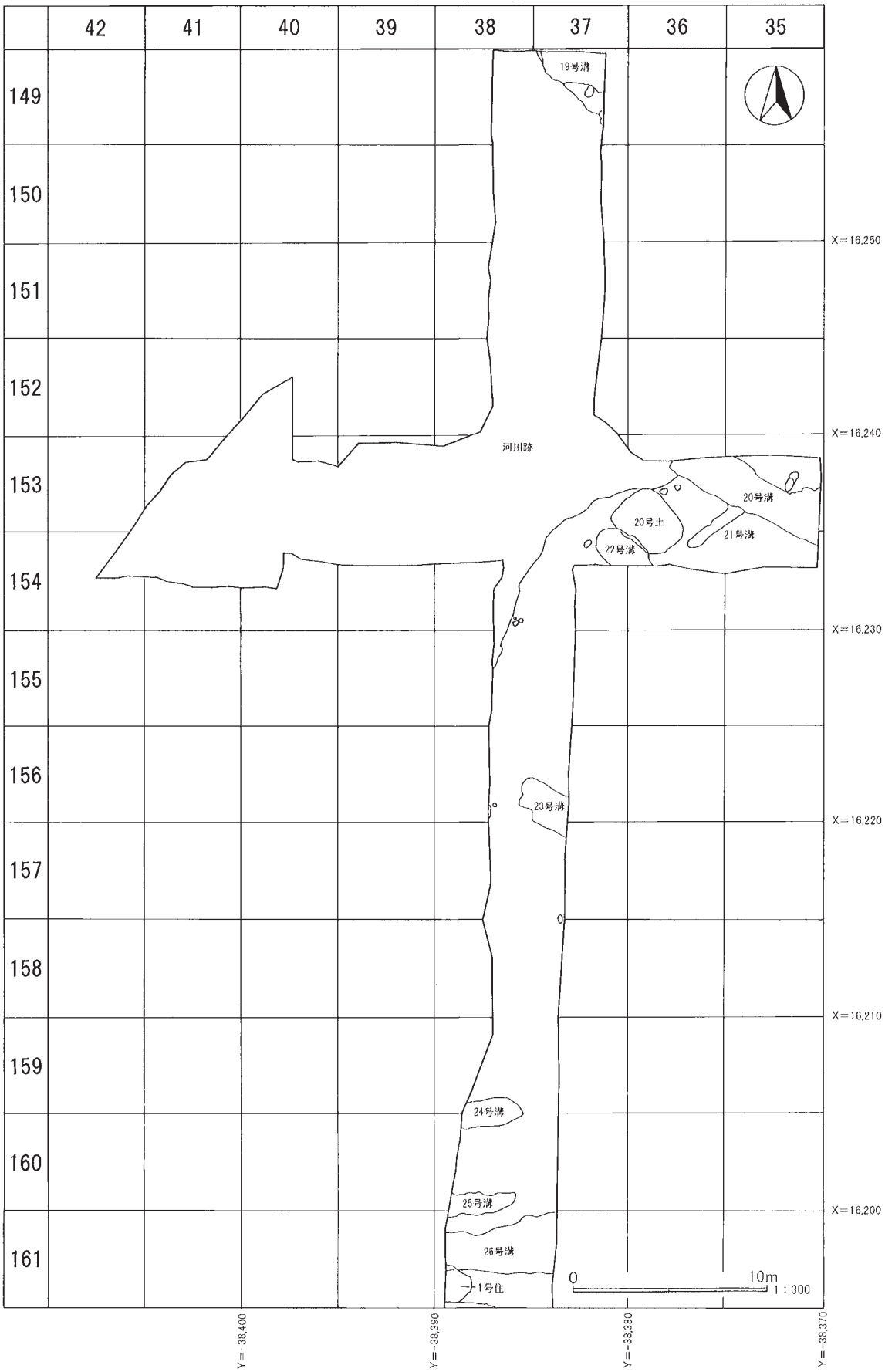
第4図　調査区全測図


14
13
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
X=16,130
X=16,120
X=16,110
X=16,100
X=16,090
X=16,080
X=16,070
トレンチ
1号溝
1号土
2号溝
3号溝
4号溝
Y=-38,270
Y=-38,260
0
10m
1：300
17
16
15
14
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
X=16,070
X=16,060
X=16,050
X=16,040
X=16,030
X=16,020
X=16,010
7号溝
4号土
5号溝
5号土
6号土
2号竪穴遺構
16-187GP1
6号溝
4号住
7号土
8号土
5号住
2号土
3号土
14号土
15号土
12号土
13号土
16号土
8号溝
9号土
10号土
11号土
9号溝
1号竪穴遺構
10号溝
12号溝
13号溝
14号溝
11号溝
15号溝
16号溝
17号溝
18号土
17号土
19号土
1号掘立
18号溝
平成14年度報告　第5区
SK45
SD71
Y=-38,280

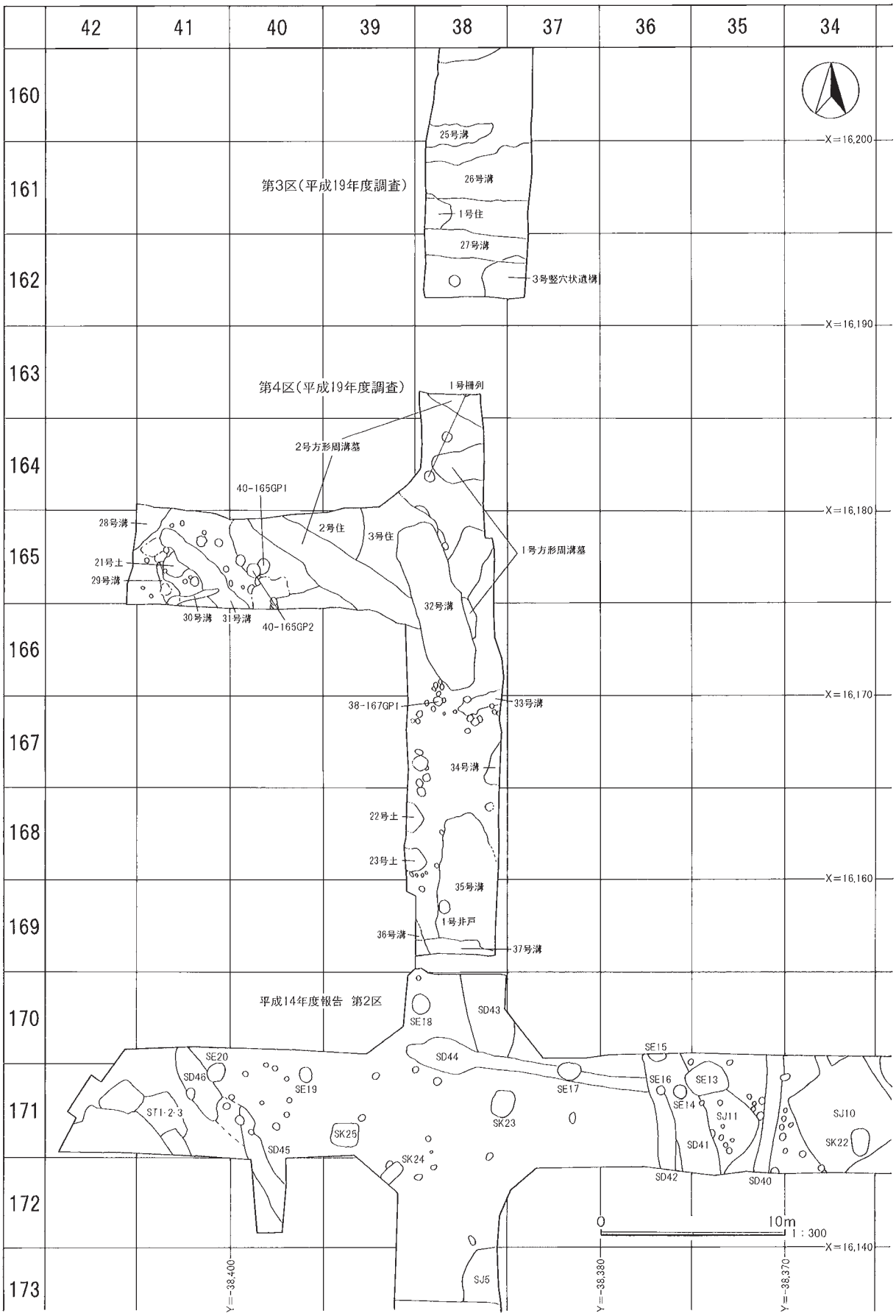
第５図　第１区全測図


27
26
25
24
23
22
21
20
19
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
第2区(平成18･19年度調査)
排水溝
平成19年度調査
未調査箇所
谷状落込跡
未調査箇所
未調査箇所
排水溝
トレンチ
谷状落込跡
平成18年度調査
排水溝
1号畠跡
平成14年度報告 第3区
SK36
SD55
SD53
SD54
撹乱
SK37
SD56
X=16,110
X=16,100
X=16,090
X=16,080
X=16,070
Y=-38,330
Y=-38,320
Y=-38,310
Y=-38,300
0
10m
1:300

第6図　第2区全測図


42
41
40
39
38
37
36
35
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
X=16,250
X=16,240
X=16,230
X=16,220
X=16,210
X=16,200
Y=-38,400
Y=-38,390
Y=-38,380
Y=-38,370
19号溝
河川跡
20号溝
20号土
21号溝
22号溝
23号溝
24号溝
25号溝
26号溝
1号住
0
10m
1：300

第７図　第３区全測図


42
41
40
39
38
37
36
35
34
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
X=16,200
X=16,190
X=16,180
X=16,170
X=16,160
X=16,140
Y=-38,400
Y=-38,380
Y=-38,370
第3区(平成19年度調査)
25号溝
26号溝
1号住
27号溝
3号竪穴状遺構
第4区(平成19年度調査)
1号柵列
2号方形周溝墓
40-165GP1
28号溝
2号住
3号住
1号方形周溝墓
21号土
29号溝
30号溝
31号溝
40-165GP2
32号溝
38-167GP1
33号溝
34号溝
22号土
23号土
35号溝
1号井戸
36号溝
37号溝
平成14年度報告 第2区
SE18
SD43
SD44
SE20
SD46
SE19
ST1・2・3
SK25
SD45
SK24
SE17
SK23
SE15
SE16
SE13
SE14
SJ11
SD41
SD42
SD40
SJ10
SK22
SJ5
0
10m
1:300

第８図　第３・４区全測図

Ⅳ　遺構と遺物

１　住居跡

第１号住居跡（第９図）

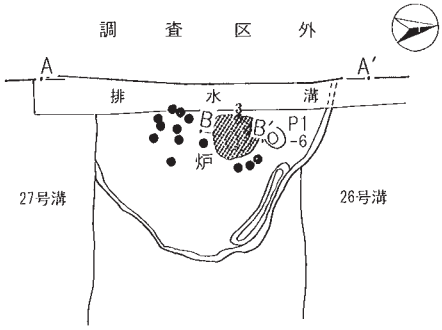
平成19年度調査の第３区38－161グリッドに位置する。大半が調査区外にあり、検出できたのは北東隅付近のみである。南側を27号溝跡に切られており、北側では26号溝跡を切っている。

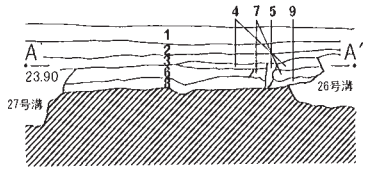
正確な規模は不明であるが、検出できた南北は1.88m、東西は1.43mを測る。平面プランは隅丸方形ないし長方形を呈し、主軸方向はN－52°－Eを指すと思われる。確認面からの深さは0.08mと浅かったが、調査区壁での土層断面観察から0.15m前後の深さであったことが確認された。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は六層（４～９層）からなる。炭化物をはじめ混入物を含む層が多くみられたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

床面からは炉跡と思われる掘りこみとピットが一つずつ確認された。炉跡と思われる掘り込みは位置的に疑問があるが、被熱層等が認められたことから炉跡と判断した。径0.35m前後、床面からの深さは0.06mを測る。平面プランは不整円形を呈する。ピット１は炉跡北側の北壁との間に位置しており、径0.15m前後、床面からの深さは0.06mと浅い。北壁には北東隅からピット１前まで短い壁溝が確認された。幅0.1m前後、床面からの深さは0.05mを測る。貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物は少なく、図示可能な遺物は弥生土器壺（１～３）、甕（4）の四点のみである。すべて破片であり、３のみ炉跡直上、それ以外は覆土から検出された。

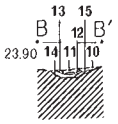
１～３は壺。１・２は同一個体。１が肩部片、２が胴上部片である。ともに一条の波状沈線下に二条の平行沈線が横位に巡る。３は胴部中段の破片。上部は沈線によりフラスコ文に近い文様が描かれ、そ

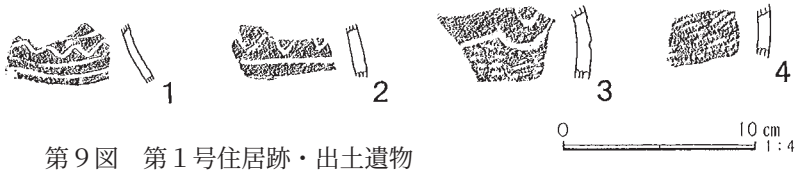




第１号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 灰　色　土：耕作土。
2 灰 白 色 土：シルト質。火山灰、酸化鉄少量含む。
3 灰　色　土：酸化鉄、灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
4 灰褐色シルト：酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒微量含む。
5 黄 灰 色 土：酸化鉄、炭化物微量含む。
6 灰　色　土：シルト質。酸化鉄多量、炭化物微量含む。
7 灰白色シルト：酸化鉄多量、炭化物微量含む。
8 灰　色　土：酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量、灰白色粒少量含む。
9 褐 灰 色 土：シルト質。炭化物、灰白色粒微量含む。
10 灰　色　土：灰多量、焼土粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
11 灰　　層：灰色粒少量、焼土粒、炭化物微量含む。
12 灰　色　土：炭化物多量、炭化物、灰微量含む。
13 灰 褐 色 土：被熱層。
14 褐 灰 色 土：酸化鉄微量含む。やや被熱。
15 褐 灰 色 土：酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。

▒ ＝ 焼 土　● ＝ 土 器　0 2m 1：60





第９図　第１号住居跡・出土遺物

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	－	－	－	ABIKN	にぶい褐色	B	肩部片	№2と同一個体。内面剥離顕著。
2	弥生土器　壺	－	－	－	ADHN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	№1と同一個体。
3	弥生土器　壺	－	－	－	ACHIKN	橙色	B	胴部片	
4	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHMN	橙色	B	胴部片	

の下にＬＲ単節縄文が施文されている。４は甕の胴部中段の破片。ＬＲ単節縄文が施文されている。１～４の内面調整は３のみ横・斜位、その他は横位のヘラナデである。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第２号住居跡（第10・11図）

平成19年度調査の第４区39・40－164・165グリッドに位置する。ほぼ中央を北西から南東方向に走る２号方形周溝墓、西壁を時期不明のピット群や撹乱に切られており、東側では３号住居跡を切っている。北壁付近は調査区外にある。

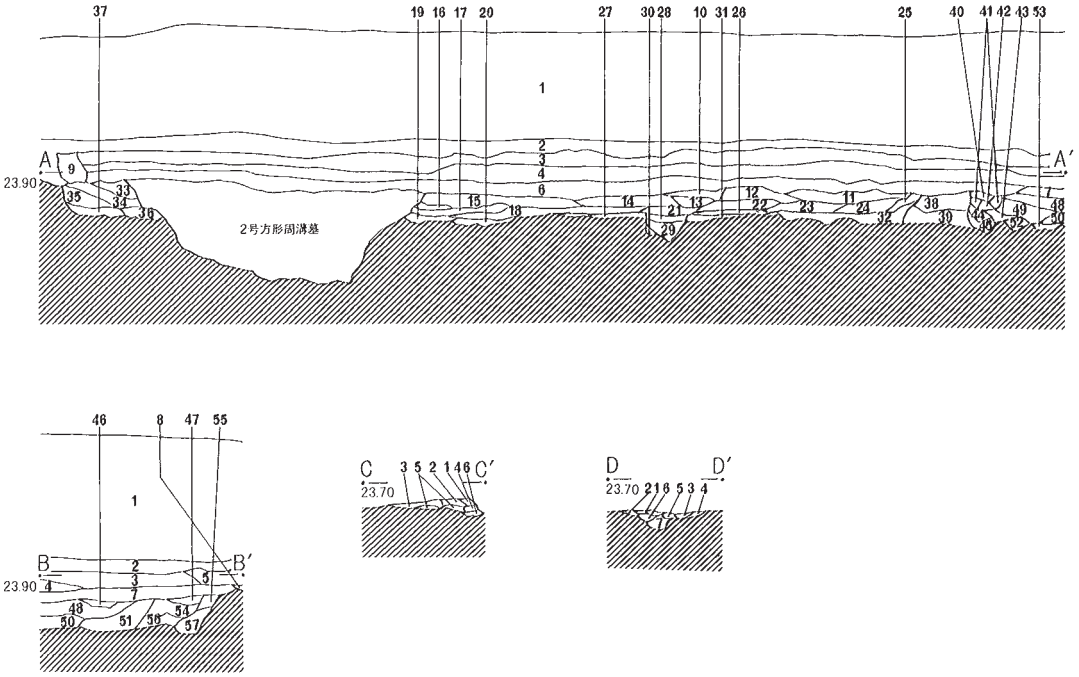
規模は長軸が7.13m、短軸は不明であるが、検出できた長さは4.37mを測る。平面プランは楕円形を呈し、主軸方向はN－59°－Eを指す。確認面からの深さは0.08mと浅かったが、調査区境の土層断面では0.25m前後の深さであったことが確認された。床面は一部凹凸がみられたが、概ねほぼ平坦であった。覆土は27層（11～37層）からなる。混入物が多く、ランダムな層位を示すが自然堆積と思われる。

炉跡は床面ほぼ中央からやや北東寄りに位置する。南西半分を２号方形周溝墓に切られており、長軸は不明であるが、短軸は0.75mを測り、床面からの深さは0.13mである。平面プランはややいびつな楕円形を呈すると思われる。ピットは計20基と多数確認されたが、西側に位置するものの大半は本住居跡に伴わない可能性が高い。壁溝や貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第12図）は、弥生土器壺（１・８）、甕（２～５・９～18）、高坏（6）、椀（7）、磨石（19）、砥石（20）がある。１・２・４～６・11・15～20は床面直上、７はＰ16内、10はＰ12上、13は炉跡、14はＰ14上から、その他は覆土から検出された。

１・８は壺。１はやや受け口状を呈する口縁部。端部に粗雑な波状沈線が三条巡り、以下の無文部と内面はヘラナデ調整である。８は肩部片。横位の細い沈線下は無文で縦・斜位の丁寧なヘラナデが施されている。内面調整は斜位のヘラナデである。２～５・９～18は甕。文様は櫛歯状工具による波状文が主体となる。外面の調整はハケメ（２・９～12・14～18）とヘラナデ（３～５）があるが、前者が多い。内面調整はすべて横位ないし横・斜位のヘラナデである。２～５は胴下部から底部にかけての部位及び底部。９は端部に刻みを持つ口縁部片。10は口縁部から頸部、11は頸部の破片であり、10は６本一単位で二段、11は５本一単位の波状文が頸部に巡る。12は小型甕の頸部から胴部中段にかけての破片。頸部及び胴上部には５本一単位の波状文、間には同一工具による簾状文が二段巡り、胴上部の波状文上には刺突の施されたボタン状貼付文が付けられている。13は胴上部片。上下にやや間隔を空けて８本一単位の波状文が巡る。14～18は胴下部片。14のみ縦位の羽状文が描かれており、その他は斜位に施されている。６は高坏の坏部。口縁部が大きく開き、刻みを持つ端部がやや外反する。内外面ヘラミガキ調整で赤彩が施されている。７は椀。内湾する口縁部に５本一単位の波状文が巡り、以下は無文でヘラナデ調整である。内面は磨耗が著しいため定かではないが、ヘラミガキ調整で赤彩が施されている。19は扁平な磨石。両面平滑であり、上部には敲打痕も認められた。砂岩製。20は砥石。一面のみ平滑で擦痕が認められた。一部を欠く。砂岩製。

第10図　第２・３号住居跡



第2・3号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）

1 盛　　土
2 灰　黄　色　土：火山灰、酸化鉄微量含む。
3 黄　灰　色　土：焼土粒、炭化物、灰白色粒少量、黒褐色ブロック微量含む。
4 黒　褐　色　土：焼土粒、炭化物少量、灰白色粒微量含む。
5 黒　褐　色　土：灰白色粒・ブロック多量含む。
6 黄　灰　色　土：酸化鉄多量、焼土粒、炭化物、灰白色粒・ブロック少量含む。
7 灰色シルト：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
8 灰白色シルト：酸化鉄多量、褐灰色粒微量含む。
9 灰　白　色　土
10 褐　灰　色　土：焼土粒、炭化物少量含む。
11 黄　灰　色　土：シルト質。褐灰色粒、酸化鉄多量、焼土粒、炭化物微量含む。
12 灰　　色　土：シルト質。炭化物、灰白色粒微量含む。
13 黒　褐　色　土：焼土粒、炭化物微量含む。
14 黄　灰　色　土：下層に炭化物帯状に含む。
15 褐　灰　色　土：黒褐色ブロック多量、炭化物、灰白色ブロック微量含む。
16 褐　灰　色　土：シルト質。酸化鉄微量含む。
17 褐　灰　色　土：シルト質。酸化鉄、灰白色ブロック微量含む。
18 灰　　色　土：シルト質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
19 黄灰色シルト：褐灰色ブロック少量、酸化鉄微量含む。
20 灰白色シルト：灰色粒多量、褐灰色粒微量含む。
21 褐　灰　色　土：灰白色粒微量含む。
22 黄　灰　色　土：シルト質。炭化物多量、灰白色粒少量、焼土粒微量含む。
23 灰　　色　土：シルト質。炭化物少量、焼土粒、灰白色ブロック微量含む。
24 灰色シルト：酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒微量含む。
25 黄灰色シルト：酸化鉄微量含む。
26 オリーブ黒色土及び灰白色シルトが帯状に堆積した層
27 灰色シルト：灰白色土帯状に多量、黄灰色ブロック微量含む。
28 褐　灰　色　土：灰白色ブロック多量に含む。
29 黄　灰　色　土：焼土粒、炭化物微量含む。
30 黄　灰　色　土：灰白色粒多量に含む。
31 灰色シルト：灰白色土帯状に多量、黄灰色ブロック微量含む。
32 灰色シルト：黒褐色粒・ブロック、灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄少量含む。
33 黄　灰　色　土：灰白色粒少量含む。
34 褐　灰　色　土：酸化鉄、灰白色粒微量含む。
35 黄灰色シルト：明青灰色粒・ブロック少量、酸化鉄微量含む。
36 黄灰色シルト：明青灰色粒多量、炭化物微量含む。
37 明青灰色シルト：黄灰色ブロック少量、炭化物、灰白色ブロック微量含む。
38 褐　灰　色　土：灰白色ブロック多量、酸化鉄微量含む。
39 灰白色シルト：酸化鉄多量含む。
40 灰色シルト：酸化鉄少量、褐灰色粒、灰白色粒微量含む。
41 灰白色シルト：黄灰色粒・ブロック多量、酸化鉄微量含む。
42 灰白色シルト
43 灰白色シルト：酸化鉄少量、炭化物微量含む。
44 灰白色シルト：酸化鉄微量含む。
45 灰色シルト：灰白色シルト多量、酸化鉄微量含む。
46 灰白色シルト：黄灰色粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
47 灰白色シルト：黄灰色ブロック多量含む。
48 灰色シルト：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
49 灰白色シルト：酸化鉄多量、黄灰色ブロック微量含む。
50 灰白色シルト：酸化鉄多量、黄灰色粒微量含む。
51 灰白色シルト：酸化鉄多量、黄灰色粒微量含む。50層より暗い。
52 灰白色シルト：酸化鉄微量含む。
53 灰白色シルト：酸化鉄、灰白色粒微量含む。
54 灰白色シルト：酸化鉄少量含む。
55 灰白色シルト：黄灰色粒多量含む。
56 灰色シルト：灰白色ブロック多量、黄灰色ブロック、酸化鉄微量含む。
57 灰白色シルト：黄灰色粒、酸化鉄微量含む。

土層説明（ＣＣ′）

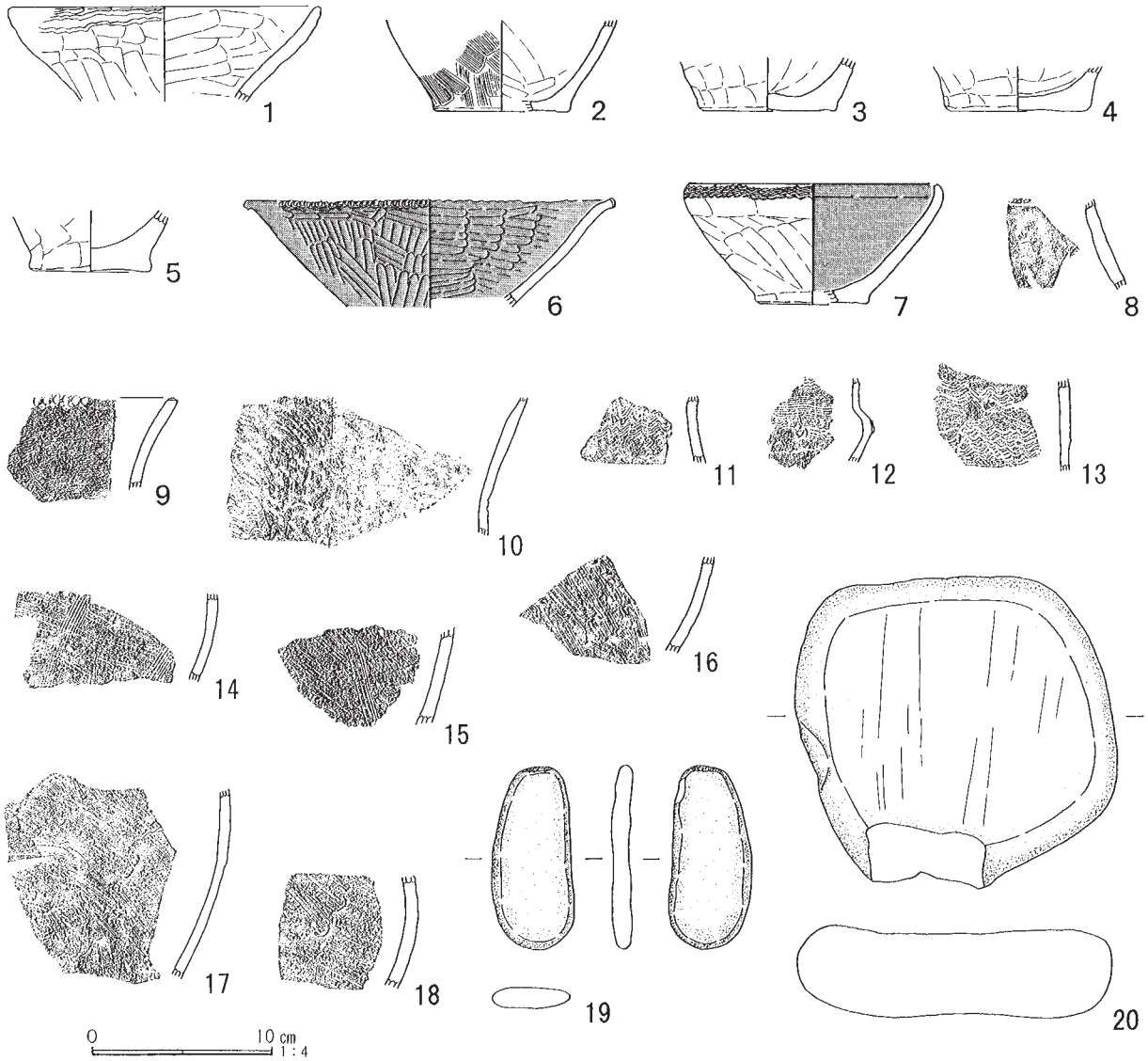
1 黒　褐　色　土：焼土粒、炭化物、灰少量含む。
2 暗　灰　色　土：焼土粒、炭化物、灰少量含む。
3 灰　　色　土：灰、炭化物帯状に多量、焼土粒・ブロック微量含む。
4 灰白色シルト：3層混じる。
5 炭化物層
6 焼　土　層：暗灰色粒微量含む。

土層説明（ＤＤ′）

1 黄　灰　色　土：シルト質。灰白色粒多量、炭化物少量含む。
2 褐灰色シルト：酸化鉄、灰白色粒少量含む。
3 灰色シルト：灰多量、炭化物、灰白色粒微量含む。
4 焼　土　層
5 灰　白　色　土：粘土質。灰色粒微量、焼土、炭化物下層に帯状に含む。
6 灰　白　色　土：炭化物、灰少量含む。
7 青灰色シルト：炭化物少量、灰白色粒微量含む。

0　2m
1：60

第11図　第2・3号住居跡土層断面図



第12図　第２号住居跡出土遺物

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	(17.6)	(5.3)	—	ABGN	明赤褐色	B	口縁部20%	
2	弥生土器　甕	—	(5.1)	(7.7)	ABHN	赤褐色	B	胴～底25%	
3	弥生土器　甕	—	(3.0)	(7.8)	ABDHMN	にぶい黄橙色	B	底部25%	
4	弥生土器　甕	—	(2.5)	8.3	ADIN	にぶい橙色	B	底部60%	
5	弥生土器　甕	—	(3.0)	(6.8)	ABCEIN	橙色	B	底部40%	
6	弥生土器高坏	(21.0)	(6.0)	—	ABCHIK	赤褐色	B	坏部20%	内外面赤彩。
7	弥生土器　椀	(14.6)	6.7	(6.4)	AIJN	赤橙色	B	40%	内面赤彩。内外面磨耗顕著。
8	弥生土器　壺	—	—	—	ABHKN	明赤褐色	B	肩部片	
9	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHIN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
10	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHN	浅黄橙色	B	口～頸部片	外面磨耗顕著。
11	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	暗褐色	A	頸部片	
12	弥生土器　甕	—	—	—	ABDKN	にぶい橙色	B	頸～胴部片	
13	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
14	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHN	暗灰黄色	B	胴下部片	
15	弥生土器　甕	—	—	—	ABHKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	
16	弥生土器　甕	—	—	—	ABCHKN	にぶい橙色	B	胴下部片	
17	弥生土器　甕	—	—	—	ABCHIJKN	にぶい橙色	B	胴下部片	内面剥離顕著。

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
18	弥生土器　甕	―	―	―	ABDHKN	灰黄褐色	B	胴下部片	
19	磨　石	最大長10.3㎝、最大幅4.6㎝、最大厚1.2㎝。重量104.3ｇ。砂岩。完形。両面平滑。上部敲打痕有。							
20	砥　石	最大長(17.4)㎝、最大幅17.8㎝、最大厚4.5㎝。重量(2689.8)ｇ。砂岩。一部欠。一面のみ平滑。							

本住居跡の時期は、弥生時代後期初頭と思われる。

第３号住居跡（第10・11図）

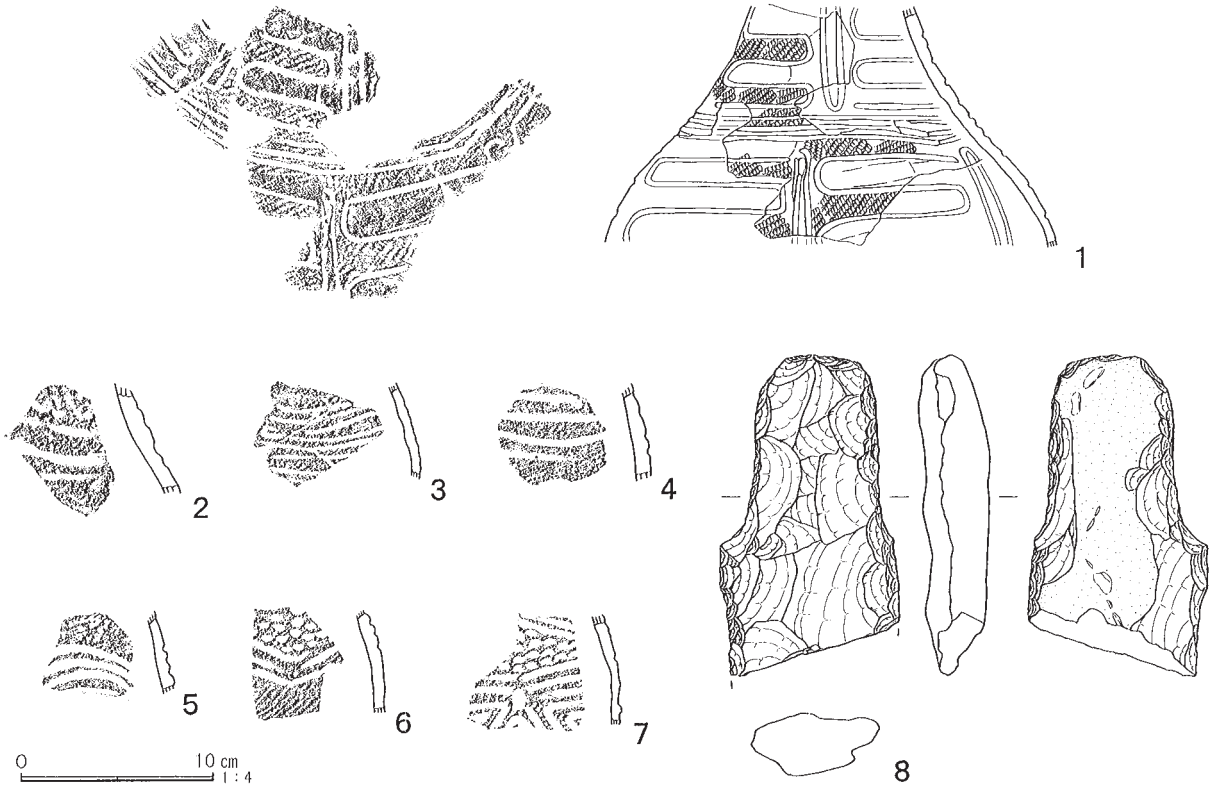
平成19年度調査の第４区38～40－164・165グリッドに位置する。他の遺構との重複が激しく、規模及び平面プランは不明と言わざるを得ない。南側を２号方形周溝墓、東側をほぼ南北に走る32号溝跡、西側を２号住居跡にそれぞれ切られており、北側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は4.17m、東西は6.3mを測る。平面プランは正方形か縦長の長方形を呈し、主軸方向はN－37°－Eを指すと思われる。確認面からの深さは0.06mと浅かったが、調査区境の土層断面観察では0.2m前後の深さであったことが確認された。床面はほぼ平坦であった。覆土は20層（38～57層）からなる。いずれの層も混入物が多く、ランダムな層位を示すが自然堆積と思われる。

炉跡は床面のほぼ中央に位置すると思われる。長軸0.67m、短軸0.25mの細長い楕円形を呈し、床面からの深さは0.13mを測る。ピットは10基確認された。そのほとんどが浅く、本住居跡に伴うものか不明である。壁溝や貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第13図）は、弥生土器壺（１～７）、打製石斧（8）がある。１・４・５・８は床面直上、２は炉跡、７はＰ10上、その他は覆土から検出された。

１～７は壺。１は頸部から胴上部にかけての部位。肩部に巡る三条の太い沈線の上下に同一工具によ



第13図　第３号住居跡出土遺物

第４表　第３号住居跡出土遺物観察表

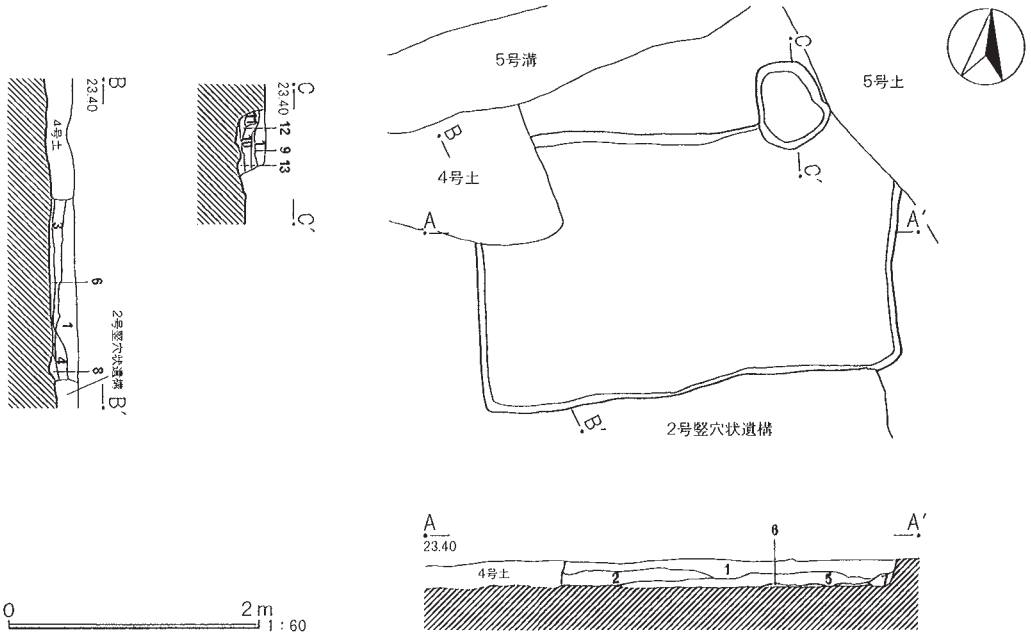
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	－	(12.55)	－	ABCDIKM	明赤褐色	B	頸～胴30%	
2	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHK	浅黄橙色	B	肩部片	
3	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDHIJKMN	明赤褐色	B	胴上部片	内外面磨耗顕著。
4	弥生土器　壺	－	－	－	ABCDEIK	明褐色	B	胴上部片	
5	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIN	赤褐色	B	胴上部片	
6	弥生土器　壺	－	－	－	ACDEK	明黄褐色	B	胴上部片	
7	弥生土器　壺	－	－	－	ABCHIK	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
8	打製石斧	最大長(16.95)cm、最大幅9.3cm、最大厚3.5cm。重量(600.4) g。粘板岩。刃部欠。							

る細長い楕円状の文様を垂下させ、その間にＳ字状の文様が描かれている。文様区画内外にはＬＲ単節縄文が粗雑に施文されている。２は肩部片。ＲＬ単節縄文下に太い沈線が三条横位に巡る。３～７は胴上部片。３は磨耗しているため定かではないが、ＬＲ単節縄文地に細い沈線で重四角文が描かれている。４は太い沈線が横位に四条巡る。５は太い沈線でフラスコ文と思われる文様が描かれており、その上にＬＲ単節縄文が施文されている。６は太い沈線による重菱形文内に刺突を充填し、以下にＬＲ単節縄文が施文されている。７は刺突を充填した重菱形文下に重三角文が描かれており、連結部には円形の刺突が刻まれている。１～７の内面調整は４のみ横・斜位、その他は横位のヘラナデである。８は打製石斧。中段にやや抉りが入り、肩の張る撥型を呈する。片面に自然面を残す。刃部を欠く。粘板岩製。

本住居跡の時期は、弥生時代中期後半でも古い段階としておきたい。

第４号住居跡（第14図）

平成18年度調査の第１区16・17－187・188グリッドに位置する。他の遺構との重複が激しく、北東隅



第４号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′）

1 灰　　色　土：粘土質。しまり強。火山灰、炭化物、灰白色粒・ブロック、礫微量含む。
2 青　灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
3 灰　　色　土：粘土質。灰白色ブロック微量含む。
4 灰　　色　土：粘土質。しまり強。
5 灰　　色　土：粘土質。灰白色粒多量含む。
6 灰　　色　土：粘土質。灰白色粒多量含む。５層より明るい。
7 オリーブ黒色土：粘土質。
8 灰　　色　土：粘土質。灰白色粒多量含む。
9 灰　　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
10 灰　　色　土：粘土質。粘性やや強。灰白色粒微量含む。
11 灰　　色　土：粘土質。焼土粒、炭化物少量含む。
12 灰　　色　土：粘土質。粘性強。
13 灰　　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。

第14図　第４号住居跡

を５号土坑、北西隅を４号土坑に切られており、西壁から南壁にかけては２号竪穴状遺構を切っている。

規模は長軸3.27m、短軸2.18mを測り、平面プランは横長の長方形を呈する。主軸方向はN－９°－Wを指す。確認面からの深さは0.22mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は八層（１～８層）からなり、上層の１層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

カマドは北壁北東隅寄りに位置する。壁外への張り出しは0.47mと短く、焚口部から煙道部まで土坑状を呈する。床面からの深さは0.06mを測る。袖部は確認されなかった。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、11層に焼土粒と炭化物が認められたにとどまる。貯蔵穴や壁溝、ピットは確認されなかった。

出土遺物は伴うものがなく、図示不可能な流れ込みの弥生土器小片が若干検出されているだけである。

本住居跡の時期は、過去に報告した周辺の調査状況から８世紀代としておきたい。

第５号住居跡（第15図）

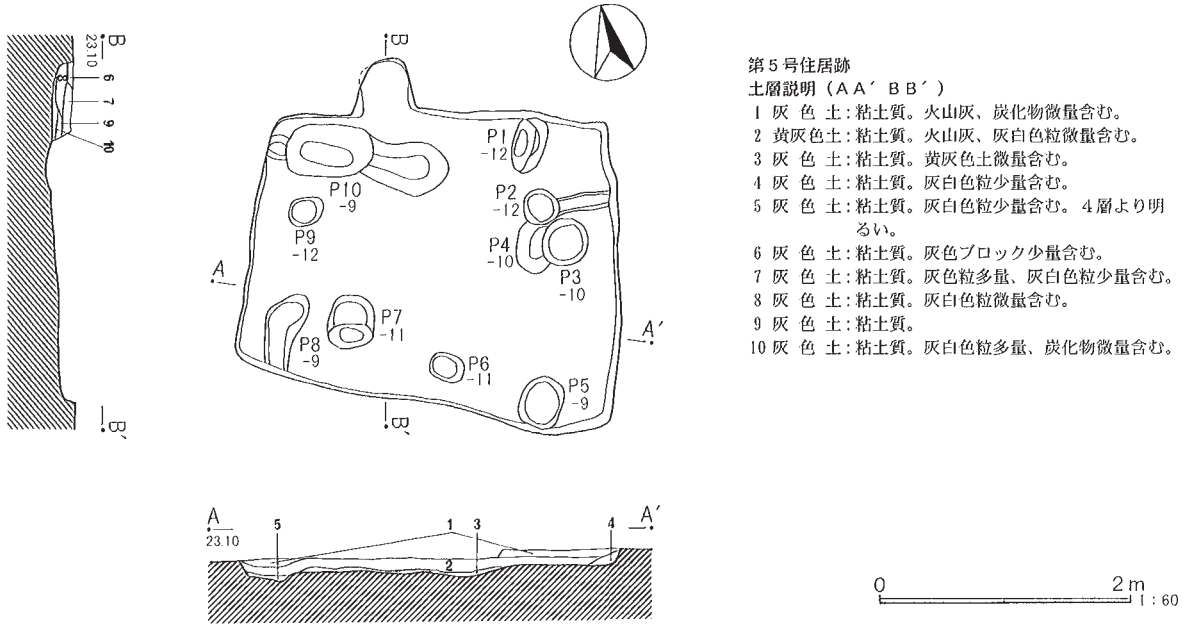
平成18年度調査の第１区14・15－188グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

規模は長軸2.99m、短軸2.4mを測り、平面プランは横長の長方形を呈する。主軸方向はN－19°－Eを指す。確認面からの深さは0.1mを測る。床面は中央付近がやや窪んでいたが、その他はほぼ平坦であった。覆土は五層（１～５層）からなり、１・２層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

カマドは北壁中央からやや西側に位置する。壁外への張り出しは0.42mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から煙道部まで平坦であり、先端はほぼ直角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、最下層の10層で炭化物が微量確認されたにとどまる。

ピットは10基確認された。このうちＰ１・10については貯蔵穴になる可能性もあるが、大半は本住居跡に伴わない可能性が高い。また壁溝は確認されなかったが、Ｐ10からカマド前にかけてと東壁からＰ２～４にかけて浅い溝が確認された。これについても伴うものか定かではない。

本住居跡は出土遺物が皆無であるが、時期は４号住居跡と同じく８世紀代としておきたい。



第５号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 灰 色 土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。
2 黄灰色土：粘土質。火山灰、灰白色粒微量含む。
3 灰 色 土：粘土質。黄灰色土微量含む。
4 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。
5 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。４層より明るい。
6 灰 色 土：粘土質。灰色ブロック少量含む。
7 灰 色 土：粘土質。灰色粒多量、灰白色粒少量含む。
8 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
9 灰 色 土：粘土質。
10 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。

第15図　第５号住居跡

第１・２号竪穴状遺構
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 灰 色 土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。しまり強。
2 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
3 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
4 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。
5 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。
6 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。５層より暗い。
7 撹 乱
8 灰 色 土：粘土質。オリーブ黒色土多量、灰白色粒少量含む。しまり強。
9 灰 色 土：粘土質。火山灰微量含む。
10 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。
11 暗灰色土：粘土質。
12 灰 色 土：粘土質。灰白色ブロック微量含む。
13 灰 色 土：粘土質。しまり強。
14 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。
15 灰 色 土：粘土質。粘性強。
16 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。

0 2m 1：60

第16図　第１・２号竪穴状遺構

2　竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構（第16図）

平成18年度調査の第１区17－188・189グリッドに位置する。北東部のみの検出であり、大半は調査区外にある。他の遺構との重複が激しく、北東隅付近で２号竪穴状遺構と６号土坑を切っている。また直接的な切り合い関係にないが、底面下には９～11号土坑や７～９号溝跡があり、これらの遺構が埋没し

た後に本遺構が構築されている。

正確な規模は不明であるが、検出された南北は4.4m、東西は2.97mを測る。平面プランは正方形か長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.17mを測り、底面はほぼ平坦であった。覆土は六層（１～６層）からなり、上層の１層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物は図示不可能な弥生土器の小片が検出されているが、本溝跡には伴わない。よって、本遺構の時期は周辺の遺構との関係から古墳時代後期以降としか言えない。

第２号竪穴状遺構（第16図）

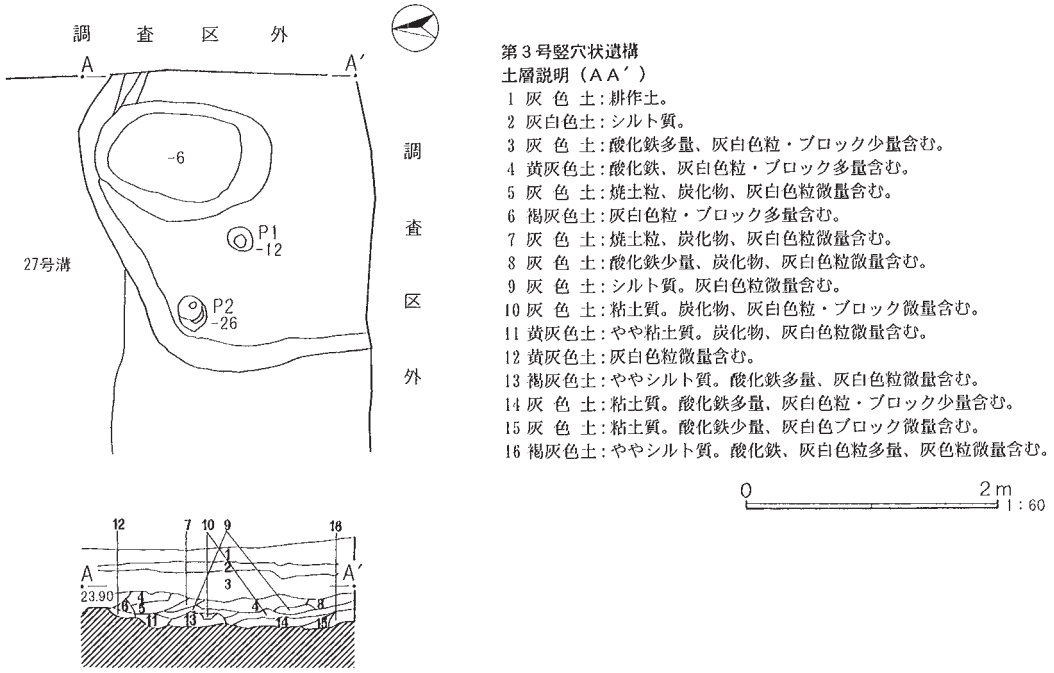
平成18年度調査の第１区16・17－188グリッドに位置する。他の遺構との重複が激しく、北東部から北西隅にかけては４号住居跡と４号土坑に、南西部では１号竪穴状遺構と６号土坑、時期不明のピットに切られている。また、南西部では直接的な切り合い関係にないが、底面下に７号溝跡が走っており、本遺構は７号溝跡埋没後に構築されている。

正確な規模は不明であるが、検出された東西はおよそ4.35mを測る。南北については４号住居跡北側で立ち上がりが検出されていないことから3.5m程になり、平面プランはいびつな方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.18mを測り、底面はやや凹凸がみられたがほぼ平坦であった。覆土は九層（８～16層）からなり、９層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

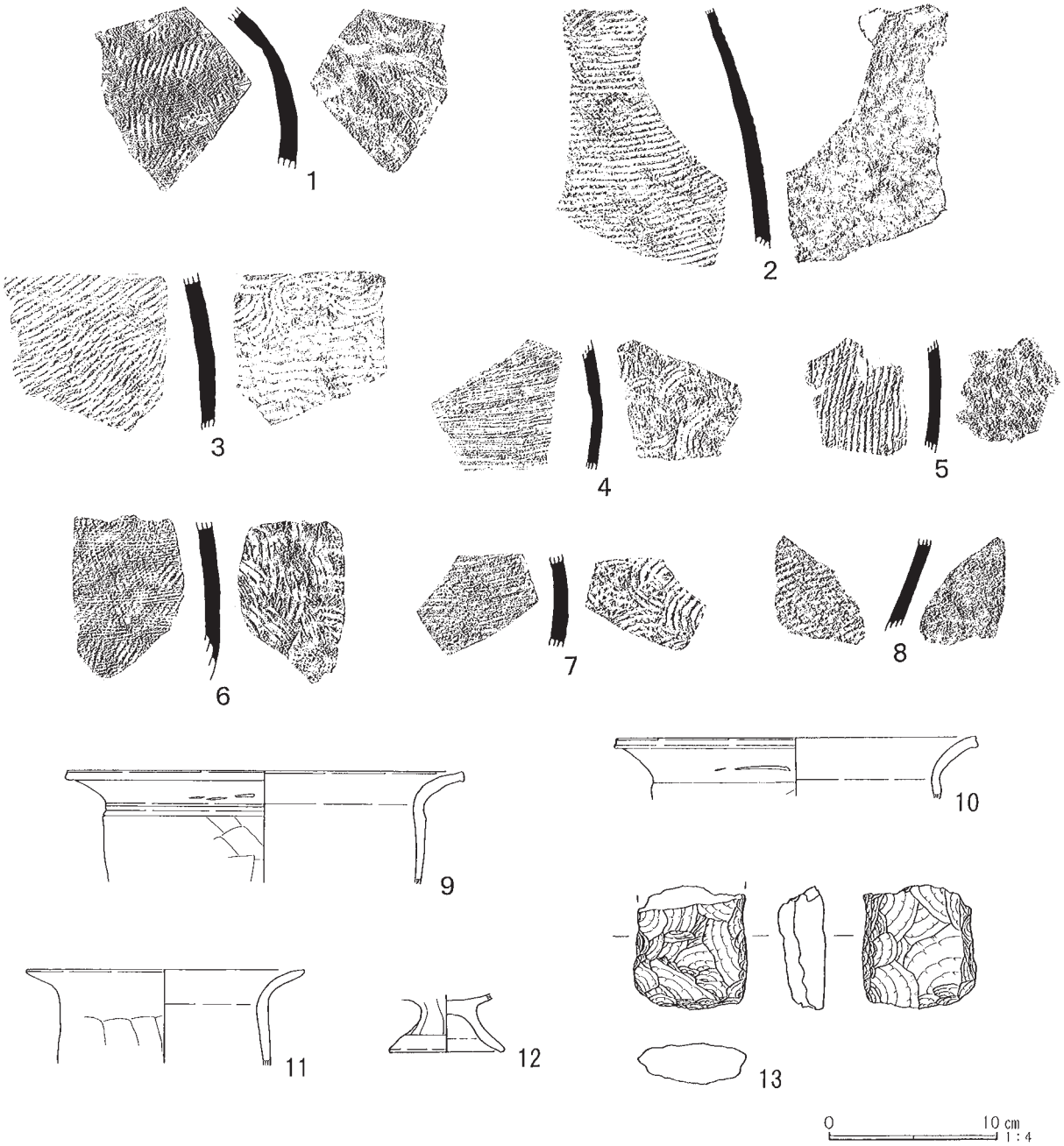
出土遺物は図示不可能な弥生土器の小片が検出されているが、本溝跡には伴わない。よって、本遺構の時期は１号と同じく周辺の遺構との関係から古墳時代後期以降としか言えない。

第３号竪穴状遺構（第17図）

平成19年度調査の第３区37・38－162グリッドに位置する。大半が調査区外にあり、検出できたのは北西隅付近のみである。北側では27号溝跡に切られている。



第17図　第３号竪穴状遺構



第18図　第３号竪穴状遺構出土遺物

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は2.3m、東西は2.37mを測る。平面プランは隅丸方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.15m程であったが、調査区壁での土層断面の観察から0.25m前後の深さであったことが確認された。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は13層（４～16層）からなる。混入物にブロック土がみられ、ランダムな層位を示すことから人為的に埋め戻された可能性が高い。

底面からは土坑状の掘りこみとピットが二つ確認された。土坑状の掘り込みは長軸1.4m、短軸0.94mを測り、深さは0.06mと浅い。平面プランは不整円形を呈する。ピットは径が0.2m前後、深さは１が0.12m、２が0.26mを測る。これらの性格については不明である。

出土遺物（第18図）は、須恵器甕（１～８）、土師器甕（９～11）、高坏（12）がある。すべて覆土か

第５表　第３号竪穴状遺構出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	－	－	－	ACLN	灰色	B	胴上部片	末野産。
2	須恵器　甕	－	－	－	ABDHLN	灰黄色	B	胴上部片	末野産。
3	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰色	B	胴上部片	末野産。
4	須恵器　甕	－	－	－	ALN	灰色	B	胴部片	末野産。
5	須恵器　甕	－	－	－	ABHLN	灰白色	B	胴部片	末野産。
6	須恵器　甕	－	－	－	ABDLN	黄灰色	B	胴部片	末野産。
7	須恵器　甕	－	－	－	ABDELN	褐灰色	B	胴部片	末野産。
8	須恵器　甕	－	－	－	ABHN	灰色	B	胴下部片	産地不明。
9	土師器　甕	(24.0)	(6.75)	－	ABDHKN	にぶい褐色	B	口～胴15%	
10	土師器　甕	(21.8)	(3.7)	－	ABCEIJN	橙色	B	口～胴15%	
11	土師器　甕	(16.8)	(5.75)	－	ABDHN	にぶい橙色	B	口～胴20%	
12	土師器　高坏	－	(3.5)	7.0	ABCN	明赤褐色	B	脚部100%	
13	打製石斧	最大長(7.5)㎝、最大幅(6.8)㎝、最大厚(2.75)㎝。重量(171.7)ｇ。粘板岩。刃部のみ残。							

らの検出であり、破片である。この他にも図示不可能な土師器坏蓋模倣坏や有段口縁坏、北武蔵型坏の小片などが検出されている。また明らかな流れ込み遺物として弥生時代の打製石斧の刃部（13）も検出された。

１～８は須恵器甕の破片。８のみ産地不明であるが、その他は末野産である。１～３は胴上部、４～７は胴部中段、８は胴下部の破片である。すべて外面にはタタキ、内面には円形ないし半円形のあて具痕が残る。９～11は土師器甕の口縁部から胴上部にかけての部位。いずれも口縁部が短く、大きく開く。口縁部は横ナデ、胴上部外面は縦・斜位のヘラ削りが施されている。12は高坏の脚部。ハの字に広がり、短い。外面はヘラ削り後端部のみ横ナデが施されている。13は弥生時代の打製石斧の刃部。粘板岩製。両面とも加工されており、短冊型を呈すると思われる。

本遺構の時期は、７世紀後半を中心とする段階と思われる。

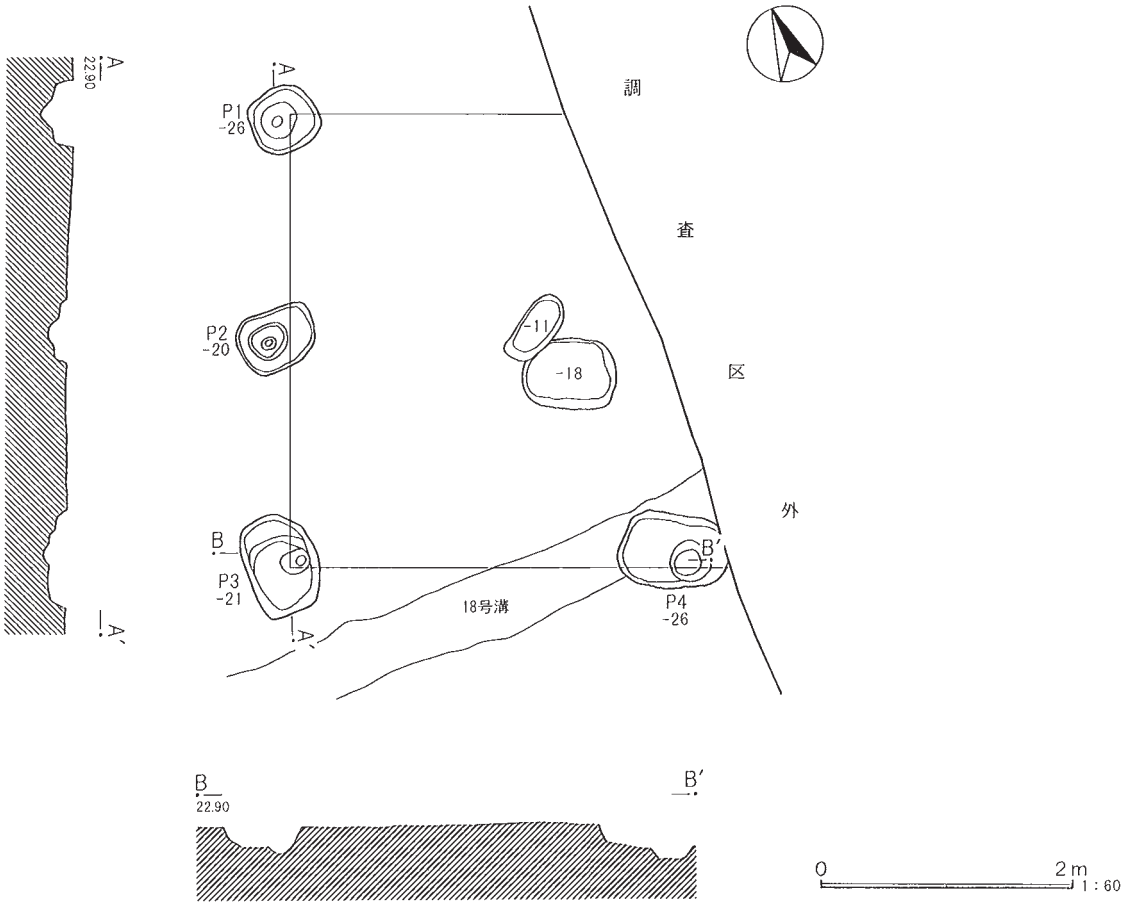
３　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第19図）

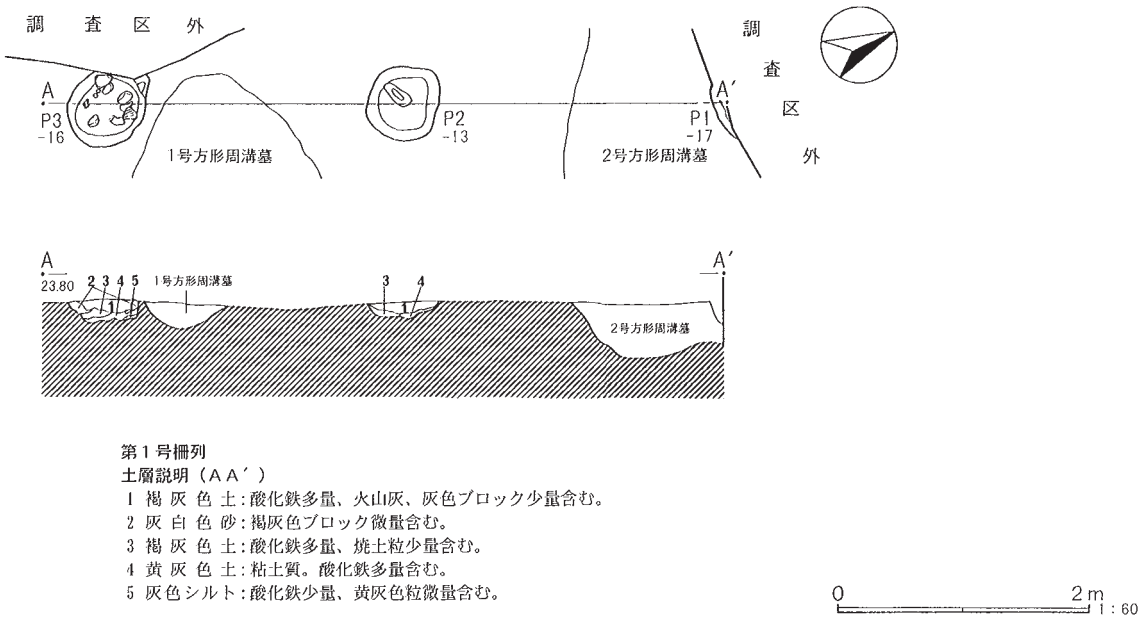
平成18年度調査の第１区14・15－198グリッドに位置する。ピット４が18号溝跡と重複しているが、新旧関係については不明である。建物跡の東側大半は調査区外にある。なお、建物内にピットが二つみられたが、本建物跡に伴うものかは不明である。

検出された状況は２×１間であるが、桁行は確実に東側に延びることから東西棟の側柱建物跡になると思われる。検出した状況での規模は桁行が3.5m、梁行が3.6mを測り、主軸方向はN－68°－Wを指す。柱間は桁行が一箇所のみの確認であるが3.3mを測り、梁行は1.8mで揃う。柱穴はピット１のみ0.5m四方の隅丸方形を呈するが、その他は長軸0.6～0.8m、短軸0.4～0.6m前後の隅丸長方形を呈する。すべての底面に一段下がる掘り込みがみられ、確認面からの深さは浅いもので0.2m、深いもので0.26mを測り、ほぼ一定の深さであった。覆土は図示できなかったが、いずれのピットからも柱痕跡は認められなかった。

いずれの柱穴からも遺物が出土しなかったため時期を特定できないが、本建物跡の時期はその軸や周辺遺構との関係などから８世紀代としておきたい。

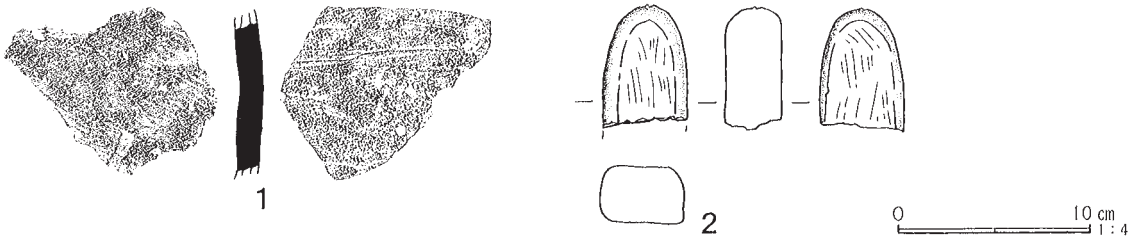


第19図　第１号掘立柱建物跡



第１号柵列
土層説明（ＡＡ′）
1 褐 灰 色 土：酸化鉄多量、火山灰、灰色ブロック少量含む。
2 灰 白 色 砂：褐灰色ブロック微量含む。
3 褐 灰 色 土：酸化鉄多量、焼土粒少量含む。
4 黄 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
5 灰色シルト：酸化鉄少量、黄灰色粒微量含む。

第20図　第１号柵列跡



第21図　第１号柵列跡出土遺物

第６表　第１号柵列跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	－	－	－	AHN	青灰色	B	胴部片	P2出土。産地不明。
2	砥　石	最大長(6.5)cm、最大幅(4.4)cm、最大厚(3.0)cm。重量(157.0)ｇ。砂岩。大半欠。両面平滑。P2出土。							

４　柵列跡

第１号柵列跡（第20図）

平成19年度調査の第４区38－163・164グリッドに位置する。ピット１が２号方形周溝墓の北側周溝を切っている。ピット１は大半が調査区外にあり、本柵列跡は以北にさらに延びる可能性もある。また、ピット２・３間には１号方形周溝墓の北周溝があり、直接的な切り合い関係はないが本柵列跡が新しいことは間違いない。

柱穴は三つ確認された。いずれも径0.55m前後の不整円形を呈し、深さは0.15m前後を測る。柱間はピット１から２までがおよそ2.7m、ピット２から３までが2.4mを測り、やや間隔にズレがある。いずれの柱穴からも柱痕跡は認められなかったが、ピット３では栗石に使用したと思われる礫が底面に多数認められた。

出土遺物（第21図）は、須恵器甕（1)、砥石（2）がある。ともにピット２からの検出である。

１は須恵器甕の胴部中段の破片。産地は不明である。外面にタタキ、内面にあて具痕が残る。２は砥石。大半を欠く。両面平滑であり、使用痕が認められた。砂岩製。

本柵列跡の時期は古墳時代末以降としか言えない。

５　溝　跡

第１号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区13・14－179・180グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びる。検出された長さは4.28m、幅は5.23mと非常に幅広い。南北にテラス状の段を持ち、中央からやや北寄りが最も深く掘り込まれていた。北側の立ち上がりはやや鋭角であったが、南側は緩やかに上がる。確認面からの深さはテラス状の段までが0.5～0.9m、北寄りの最も深い所で1.15mを測る。覆土は25層（11～35層）からなる。混入物を含む層が多く、下層になるにつれて粘土ないしシルト層になる傾向にあった。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはみられなかったが、弥生土器や古墳時代前期の土師器、９世紀後半の須恵器坏の小片が検出されている。本溝跡に伴うのは須恵器であることから時期は９世紀後半と思われる。

第２号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区13・14－182・183グリッドに位置する。西側で１号土坑に切られている。

ほぼ東西方向に走るが、北東から南西方向にやや傾く。北東及び南西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは4.6m、幅は0.6m前後を測る。北東側のみ底面が一段下がるが、確認面からの深さは概ね0.15m前後を測る。断面形は西側が逆台形状、東側は船底状を呈する。覆土は二層（１・２層）からなり、上層の１層では火山灰が少量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはみられなかったが、奈良・平安時代の須恵器坏や土師器甕の小片が検出されている。よって、本溝跡の時期は奈良・平安時代としか言えない。

第３号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区14－183・184グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びる。検出された長さは４m、幅は4.18～4.83mと非常に幅広い。崩落の危険があったことからすぐ埋め戻してしまったため、深さや覆土などについては不明である。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺（第31図３－１）、打製石斧（３－２）があるが、流れ込みと思われる。この他には図示不可能な中・近世の陶器片が検出されている。

１は壺の胴上部片。外面は上部に太い沈線が縦・横位に描かれており、下部の外面無文部及び内面は横位のヘラナデ調整が施されている。２は打製石斧の上端部片。片面に自然面を残す。粘板岩製。

本溝跡に伴うのは陶器片と思われるが、時期は中・近世としか言えない。

第４号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区14－185・186グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走るが、北西から南東方向にやや傾く。北西及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは4.18m、幅は1.3m前後を測る。南北にテラス状の段を持ち、中央が最も深く掘り込まれていた。確認面からの深さはテラス状の段までが0.25～0.34m、最も深い中央で0.6mを測る。覆土は八層（1～8層）からなる。いずれの層も混入物を含み、下層になるにつれて粘土層になっていた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

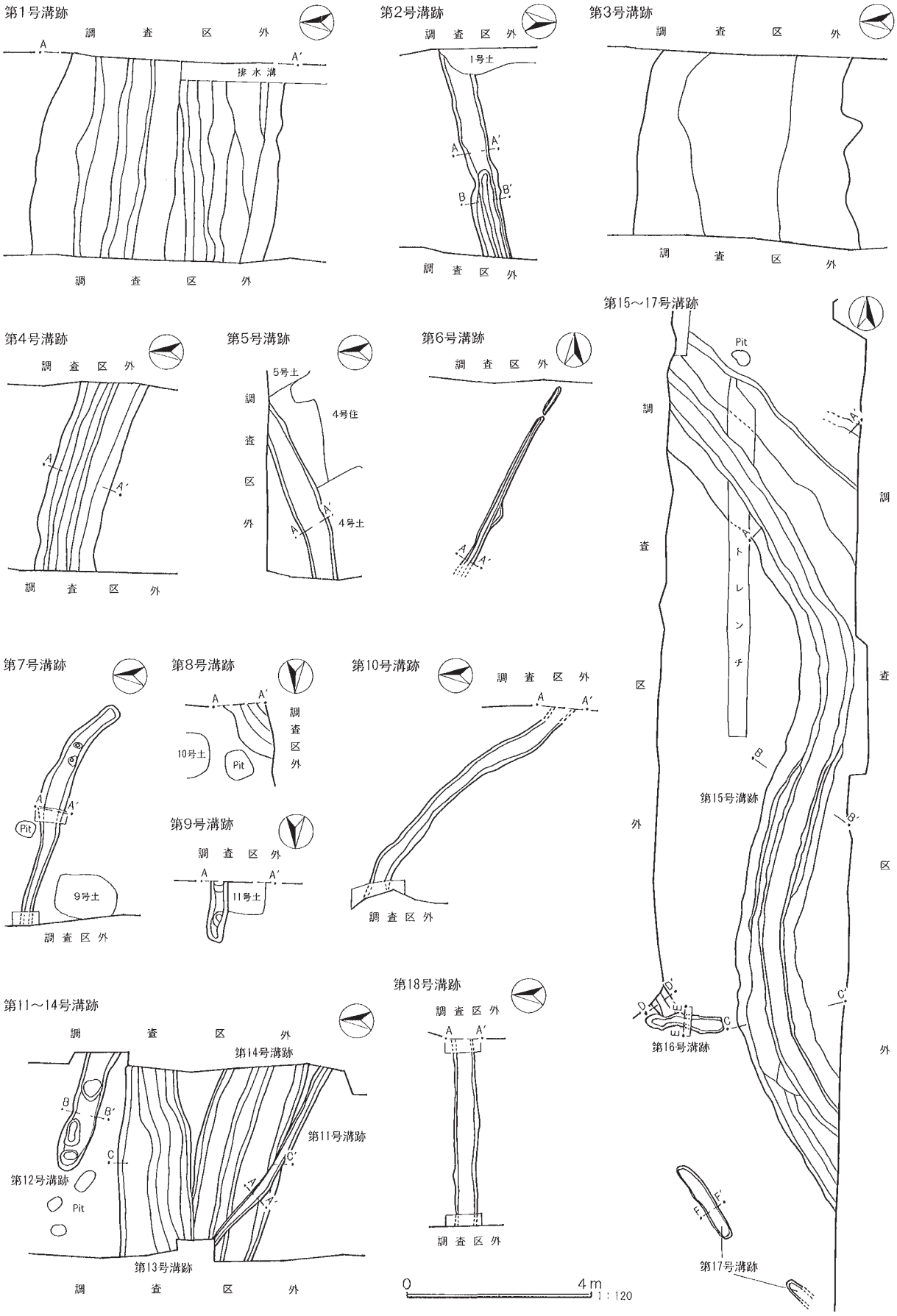
出土遺物は図示不可能な弥生土器の小片が検出されているが、本溝跡には伴わない。よって、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第５号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区17－187・188グリッドに位置する。南西部で４号土坑を切っており、調査区外の延長上で５号土坑と重複するが、新旧関係については不明と言わざるを得ない。

北東から南西方向に走り、北東及び南西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは3.6m、幅は0.6m前後を測る。確認面からの深さは0.2m前後を測り、断面形は逆台形を呈する。覆土は四層（１～４層）からなり、１層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物は図示不可能な弥生土器の小片が検出されているが、本溝跡には伴わない。よって、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。



第22図　第１～18号溝跡

第６号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区16－187・188グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

北東から南西方向に走り、北東及び南西端以降は確認面の都合からか途切れている。北東側は調査区外に延びる可能性がある。検出された長さは4.38m、幅は概ね0.15m前後であるが、一部0.3mの幅広になる所がみられた。確認面からの深さは0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は二層（１・２層）からなり、２層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはみられなかったが、弥生土器や奈良・平安時代の土師器の小片が検出されている。本溝跡に伴うのは後者であり、時期は奈良・平安時代としか言えない。

第７号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区16・17－188グリッドに位置する。直接的な切り合い関係はないが、本溝跡の上に１・２号竪穴状遺構や６号土坑があり、これらの遺構より古い。

ほぼ東西方向に蛇行して走るが、東端は南東方向に傾く。西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.2m、幅は西側が0.22mと狭く、東側は幅広で0.6mを測る。確認面からの深さは0.15m前後であり、断面形は逆台形状を呈する。底面東側ではピット状の掘り込みが二つみられた。覆土は三層（１～３層）からなり、１層では火山灰が微量認められた。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第８号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区17－188・189グリッドに位置する。直接的な切り合い関係はないが、本溝跡の上に１号竪穴状遺構があり、本溝跡の方が古い。

北西から南東方向に走り、北西端及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは0.97mと短く、幅は0.6m前後を測る。確認面からの深さは0.2m前後であり、断面形は船底状を呈する。覆土は五層（３～７層）からなり、上層の３・４層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第９号溝跡（第22・25図）

平成18年度調査の第１区17－188・189グリッドに位置する。西側で11号土坑を切っている。また直接的な切り合い関係はないが、本溝跡の上に１号竪穴状遺構があり、本溝跡の方が古い。

ほぼ南北方向に走り、南端以降は調査区外に延びる。検出された長さは1.28mと短く、幅は0.4m前後を測る。南端及び北端前は一段深く掘り込まれており、確認面からの深さは南端の最も深いところで0.17mを測る。覆土は三層（３～５層）からなり、上層の３層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第10号溝跡（第22・26図）

平成18年度調査の第１区14－189・190グリッドに位置する。図では示さなかったが、本溝跡の下から時期不明のピットがいくつか検出されており、新旧関係は本溝跡の方が新しい。

北西から南東方向に走り、北西端及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは6.06m、幅は0.4m前後を測る。確認面からの深さは0.15m前後であり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は五層（７～11層）からなる。中層の８層と下層の10層では火山灰が認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはなかったが、弥生土器や古墳時代末から奈良時代の北武蔵型坏小片が検出されている。本溝跡に伴うのは後者であり、時期は古墳時代末から奈良時代としか言えない。

第11号溝跡（第22・26図）

平成18年度調査の第１区14－191グリッドに位置する。北西部で14号溝跡を切っている。

北西から南東方向に走り、北西端及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは4.47m、幅は0.2m前後を測る。確認面からの深さは0.1m以下と浅く、断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の灰色土一層のみである。ブロック土を多量含むことから人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第12号溝跡（第22・26図）

平成18年度調査の第１区14－190グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走り、東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは2.69m、幅は0.6m前後を測る。確認面からの深さは0.1m以下と浅く、底面にはピット状の掘り込みが三つみられたが、伴うものか不明である。断面形は船底状を呈する。覆土は三層（１～３層）からなり、１・２層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第13号溝跡（第22・26図）

平成18年度調査の第１区14・15－190・191グリッドに位置する。南西部でほぼ同方向を走る14号溝跡と重複しているが、同時期に存在した可能性が高い。

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びる。検出された長さは3.94m、幅は東側が狭く1.09m、西側1.58はmとやや幅広い。南北にテラス状の段を持ち、中央よりやや南側が最も深く掘り込まれていた。北側の立ち上がりはやや鋭角であったが、南側は緩やかに上がる。確認面からの深さはテラス状の段までが0.13～0.25m、最も深い所で0.38mを測る。覆土は九層（１～９層）からなる。粘土層である下層（８・９層）以外は火山灰を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第14号溝跡（第22・26図）

平成18年度調査の第１区14・15－190・191グリッドに位置する。西側で覆土上部を11号溝跡に切られている。北西部ではほぼ同方向を走る13号溝跡と重複しているが、同時期に存在した可能性が高い。

ほぼ東西方向に走るが、北西から南東方向にやや傾く。北西及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは4.3m、幅は1.8m前後を測る。南北にテラス状の段を持ち、中央よりやや北側が最も深く掘り込まれていた。確認面からの深さはテラス状の段までが0.1m程、最も深い所で0.62mを測る。覆土は11層（10～20層）からなる。粘土及びシルト層である下層（17～20層）以外は火山灰を含んでいた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物は図示不可能な弥生土器の小片が検出されているが、本溝跡には伴わない。よって、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第15号溝跡（第22・26図）

平成18年度調査の第１区14・15－191～195グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

北西から南東方向に逆Ｓ字状に蛇行して走る。北西及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは17.47m、幅は2.3m前後を測る。両側にテラス状の段を持ち、中央よりやや西側が最も深く掘り込まれていた。確認面からの深さは北側ではテラス状の段までが0.3m、最も深い所が0.65m、検出された範囲のほぼ中央付近でテラス状の段までが0.4m前後、最も深い所で0.57m、南側ではテラス状の段までが0.1～0.16m、最も深い所が0.28mを測り、南に向かって徐々に浅くなる。覆土は層位を確認した所では14層（１～14層）からなる。中層付近に火山灰を含む層（２～４・６層）が認められ、下層（11～14層）は粘土層であった。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第31図）は、弥生土器壺（15－１）、打製石斧（15－２・３）があるが、流れ込みと思われる。

１は壺の胴上部片。外面は横位に巡る太い沈線下にＬＲ単節縄文が施文されている。内面は横位のヘラナデ調整である。２・３は打製石斧の上半分。ともに粘板岩製であり、片面に自然面を残すが、２は上部のみに残る。

図示した遺物は本溝跡に伴わないことから時期は不明と言わざるを得ない。

第16号溝跡（第22・26図）

平成18年度調査の第１区14・15－194グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走り、西側では北西方向にもう一条派生している。北西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは東西方向が1.76mで幅0.25m、北西方向は長さ0.5m、幅0.45m前後を測る。確認面からの深さは0.05m前後と浅く、断面形は船底状を呈する。覆土は二層（１・２層）からなる。上層の１層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺（第31図16－１）のみであるが、流れ込みと思われる。

１は壺の肩部片。外面上部は斜位の沈線に沿って刺突列が一列、下部には横位に巡る沈線下に刺突列が二列刻まれている。内面は横位のヘラナデ調整である。

図示した遺物は本溝跡に伴わないことから時期は不明と言わざるを得ない。

第17号溝跡（第22・26図）

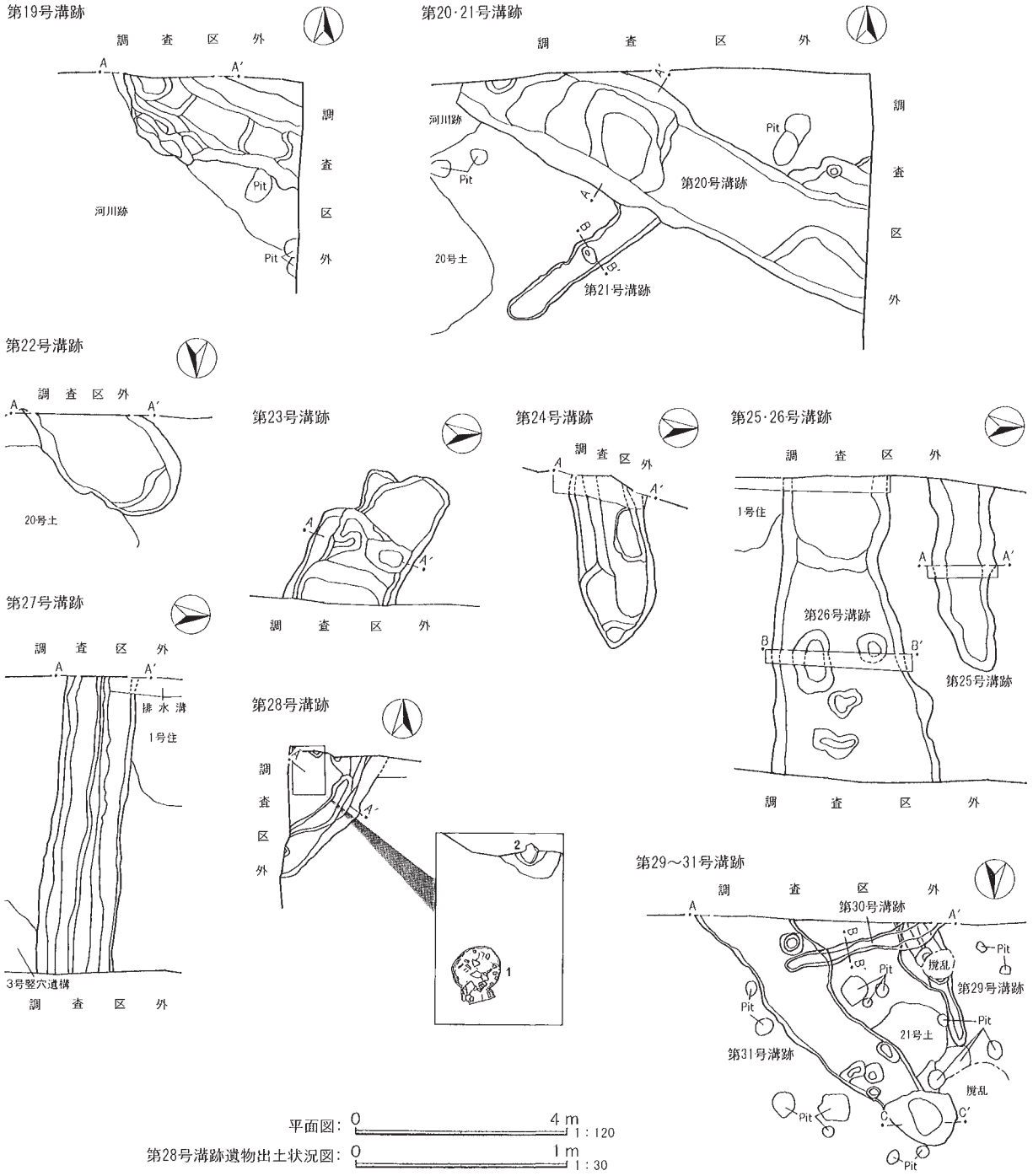
平成18年度調査の第１区14・15－195グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

北西から南東方向に走り、14－195グリッド南西部付近及び南東端以降は確認面の都合からか途切れている。検出された長さは途切れた部分も含めて3.85m、幅は0.3m前後を測る。確認面からの深さは0.03mと浅く、断面形は船底状を呈する。覆土は粘土質の灰色土一層のみである。ブロック土を含んでおり、人為的な埋め戻しの可能性がある。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第18号溝跡（第22・26図）

平成18年度調査の第１区14・15－198グリッドに位置する。図では示さなかったが、本溝跡東端では１号掘立柱建物跡のピット４と重複している。新旧関係は不明である。



第23図　第19～31号溝跡

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びる。検出された長さは4.02m、幅は0.5m前後を測る。確認面からの深さは0.24mであり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は四層（７～10層）からなる。水平に近いが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはなかったが、古墳時代後期以降の土師器甕の小片が検出されている。よって、本溝跡の時期は古墳時代後期以降としか言えない。

第19号溝跡（第23・27図）

平成19年度調査の第３区37－149グリッドに位置する。南西部で河川跡を切っており、東側では時期

不明のピット三つと重複するが、新旧関係は不明である。

北西から南東方向に走り、北西及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは3.2m、幅は1.78～2.35mと幅がある。底面はやや凹凸がみられ、確認面から最も深い所で0.56mを測る。断面形はややいびつであるが、逆台形状を呈する。覆土は10層（３～10層）からなる。混入物が多くみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第31図）は、弥生土器壺（19－１・３・４）、甕（19－５・６）、高坏（19－２）がある。

１・３・４は壺。１は底部。内外面ヘラナデ調整であり、底部外面には分かりづらいが木葉痕が残る。３・４は胴上部片。３はＬＲ単節縄文地にやや太めの沈線二条が弧状に巡る。４はやや太めの沈線により重四角文が描かれている。３・４の内面調整はともに横位のヘラナデである。５・６は甕の頸部から胴上部にかけての破片。５は頸部に櫛歯状工具による7本一単位の波状文が巡り、胴上部は斜位の細かいハケメ調整が施されている。６は頸部に櫛歯状工具による簾状文が巡り、胴上部は同一工具で縦位の羽状文が描かれている。内面調整は5が斜位、６が横位のヘラナデ調整である。２は高坏の接合部から脚部にかけての部位。脚部が短く、ハの字に開く。外面及び坏部内面はヘラミガキ調整で赤彩が施されている。脚部内面はヘラナデ調整である。

本溝跡は整理調査段階では単独での検出であったことから溝跡として報告した。しかし、平成21年度に実施した３区北側の発掘調査において本溝跡の続きが方形に巡ることが確認されたことから方形周溝墓になる可能性が高い。本溝跡の時期は出土遺物に特定できるものが少ないため、本報告の段階では幅を持たせて弥生時代中期後半から後期初頭としておきたい。

第20号溝跡（第23・27図）

平成19年度調査の第３区35・36－153・154グリッドに位置する。北西部で河川跡に切られており、西側立ち上がり中央付近では21号溝跡と重複するが、出土遺物から本溝跡の方が古いと思われる。

北西から南東方向に走り、北西及び南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは7.3m、幅は２m前後が主体となるが、東側は2.5～2.8mとやや幅広になる。底面はやや凹凸がみられたが、確認面からの深さは概ね0.45mを測る。断面形は逆台形状を呈する。覆土は12層（１～12層）からなる。中層の3層では火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第31図）は、弥生土器壺（20－１・２・６～８）、甕（20－３～５・９）、不明石製品（20－11）の他に流れ込みの古墳時代前期の土師器台付甕（20－10）がある。

１・２・６～８は壺。１は胴下部から底部、２は底部である。１は内外面ヘラナデ、２はヘラミガキ調整である。６は口縁部片。複合口縁であり、端部にはＬＲ単節縄文が施文されている。複合口縁外面は横位、以下は縦位のヘラナデが施されている。７は胴上部片。やや太目の沈線で重三角文が描かれ、区画内には刺突が充填されている。８は頸部から肩部にかけての破片。頸部には櫛歯状工具により波状文が二段巡り、肩部は縦・斜位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。６～８の内面調整は横位のヘラナデである。３～５・９は甕。３～５は底部。３のみ内外面ヘラナデ調整、４・５は外面がハケメ、内面はヘラナデ調整である。９は口縁部から頸部にかけての破片。外面にはＬＲ単節縄文が施文されている。内面は横位のヘラナデ調整である。10は土師器台付甕の台部。外面はハケメ調整であるが、磨耗が著しい。内面はヘラナデ調整である。11は不明石製品。撥型を呈し、中段からやや上に抉りが入る。両面とも平滑である。砂岩製。

本溝跡も単独での検出であることから溝跡として報告したが、周辺には弥生時代の方形周溝墓が所在し、軸が合うことなどから方形周溝墓になる可能性が高い。本溝跡の時期も19号溝跡と同じく弥生時代中期後半から後期初頭と幅を持たせておきたい。

第21号溝跡（第23・27図）

平成19年度調査の第３区35・36－153・154グリッドに位置する。北東部で20号溝跡に接続するが、出土遺物から本溝跡の方が新しいと思われる。

北東から南西方向に走る。検出された長さは3.26mと短く、幅は0.5m前後を測る。確認面からの深さは概ね0.1mを測り、底面からピットが一つ検出された。断面形は逆台形状を呈する。覆土は六層（１～６層）からなる。すべてシルト層であり、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはなかったが、古墳時代末以降の須恵器甕の小片が検出されている。よって、本溝跡の時期は古墳時代末以降としか言えない。

第22号溝跡（第23・27図）

平成19年度調査の第３区36・37－153・154グリッドに位置する。北東部を20号土坑に切られている。

北西から南東方向に走り、南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは2.37m、幅は最大1.9mを測る。確認面からの深さは0.28mであり、断面形は船底状を呈する。覆土は10層（４～13層）からなる。大半がシルト層で混入物の認められた層が多い。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第31図）は弥生土器壺（22－１・２）二点のみである。１・２は胴上部片。１は横位の沈線が巡り、無文部は斜位のヘラナデ調整が施されている。２は横位に巡る三条の波状沈線下に無節Ｌが施文されている。１・２の内面調整は横位のヘラナデである。

本溝跡は軸が合うことなどから方形周溝墓かと思われたが、南西部からは対応する溝が検出されていないため単独の溝跡として報告した。本溝跡の時期は弥生時代中期後半と思われる。

第23号溝跡（第23・27図）

平成19年度調査の第３区37・38－156・157グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

北西から南東方向に走り、南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは2.92m、幅は概ね1.9m前後を測る。底面は凹凸がみられ、確認面からの深さは最も深い所で0.36mを測る。覆土は15層（１～15層）からなる。ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第31図）は、弥生土器壺（23－１・２）二点のみである。１は肩部片。横位に巡る沈線下にＬＲ単節縄文が施文されている。沈線上は無文で横位のヘラナデ調整である。２は胴上部片。やや細目の沈線で鋸歯文が描かれている。１・２の内面調整は横位のヘラナデである。

本溝跡の時期は、幅を持たせて弥生時代中期後半から後期初頭としておきたい。

第24号溝跡（第23・27図）

平成19年度調査の第３区38－159・160グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走り、西側は調査区外に延びる。検出された長さは3.25m、幅は1.3m前後を測る。底面は凹凸がみられ、確認面からの深さは最も深い所で0.28mを測る。断面形は船底状を呈する。覆土は四層（６～９層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器壺（第31図24－１）のみである。１は肩部片。やや幅広の沈

線二条で渦巻文が描かれており、沈線間にＬＲ単節縄文が充填されている。内面は剥離が著しいが、横位のヘラナデ調整である。

本溝跡の時期は、弥生時代中期後半と思われる。

第25号溝跡（第23・28図）

平成19年度調査の第３区38－160・161グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走り、西側は調査区外に延びる。検出された長さは3.58m、幅は１m前後を測る。確認面からの深さは概ね0.1mを測り、断面形は船底状を呈する。覆土は五層（１～５層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第26号溝跡（第23・28図）

平成19年度調査の第３区37・38－161グリッドに位置する。南西部で１号住居跡に切られている。

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びる。検出された長さは5.8m、幅は西側が1.95m、東側が３m前後を測る。確認面からの深さは概ね0.15m前後を測り、底面にはピット状の掘り込みが四つみられた。断面形は船底状を呈する。覆土は七層（１～７層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は図示不可能な弥生土器の小片が検出されているが、弥生時代中期後半の１号住居跡に切られていることから流れ込みの可能性もある。本溝跡の時期は弥生時代中期後半以前としか言えない。

第27号溝跡（第23・28図）

平成19年度調査の第３区37・38－161・162グリッドに位置する。北西部で１号住居跡、南東部では３号竪穴状遺構を切っている。

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びる。検出された長さは5.59m、幅は1.4m前後を測る。南北にテラス状の段を持ち、ほぼ中央が最も深く掘り込まれていた。確認面からの深さは最も深い所で0.32mを測るが、調査区境の土層断面観察では0.47mの深さであったことが確認された。覆土は11層（４～14層）からなり、中層の10・12層では火山灰が認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第31・32図）は、須恵器甕（27－１～３）がある。この他にも図示不可能な遺物で９世紀後半から10世紀初頭の須恵器高台付椀や土師器坏の小片が検出されている。また明らかな流れ込み遺物として古墳時代後期の土師器甑（27－４）、弥生時代中期後半以降の壺（27－５）、甕（27－６）も検出された。

１～３は須恵器甕。１は肩部、２・３は胴部中段の破片である。１・２は末野産、３は産地不明である。１は内外面回転ナデ、２は外面にタタキ、内面にはあて具痕が残る。３は外面が回転ナデ、内面は半円形のあて具痕が残る。４は土師器甑の把手。５・６は弥生土器の底部であり、５は壺、６は甕である。ともに内外面ヘラナデ調整である。

本溝跡の時期は、９世紀後半から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

第28号溝跡（第23・28図）

平成19年度調査の第４区41・42－163・164グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

北東から南西方向に走るが、大半は調査区外にあり、検出できた範囲はごく一部のみである。検出された長さは南東部の立ち上がりで3.05m、幅は不明である。確認面からの深さは概ね0.45m前後を測るが、立ち上がり底面には住居跡の壁溝のような溝が走っており、底面からの深さは0.08m程を測る。覆土は11層（１～11層）からなる。下層の10・11層ではブロック土が多量認められたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第32図）は、土師器壺（28－１）のみが本溝跡に伴うものであり、弥生土器壺（28－３・４）、甕（28－２・５～７）は流れ込みである。

１は古墳時代前期の土師器壺。いわゆる瓢壺である。口縁部は開きが小さく、最大径を胴部中段よりやや下に持つ。調整は口縁部内外面及び胴部がヘラミガキであり、胴部外面のみ赤彩が施されている。胴部内面はヘラナデ調整である。３・４は弥生土器壺。３は口縁部から頸部にかけて、４は頸部から肩部にかけての破片である。３は複合口縁で端部に刻みを持つ。外面は無文で横位のヘラナデ調整が施されている。４は頸部と肩部の境に巡る横位の太い沈線を境に上の頸部には櫛歯状工具による平行沈線、下の肩部には細い沈線により鋸歯文が描かれ、区画内には斜位の沈線を充填、区画外はヘラミガキ調整で赤彩が施されている。２・５～７は甕。２は底部。内外面ともにヘラナデ調整である。５～７は頸部から胴上部にかけての破片。いずれも頸部に櫛歯状工具による簾状文が巡る。５は９本一単位の簾状文下に同一工具で横位の羽状文が描かれている。６・７は簾状文下に同一工具による波状文が巡る。単位は６が６本、７が５本である。５～７の外面調整は５がヘラナデ、６・７はハケメである。内面調整は５・７が横位のヘラナデ、６が斜位のハケメである。

本溝跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第29号溝跡（第23・28図）

平成19年度調査の第４区41－165・166グリッドに位置する。南側で直交して走る30号溝跡に切られており、検出された範囲のほぼ真ん中では後世の撹乱により一部を欠く。

北西から南東方向に走り、南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは2.5m、幅は北西部が0.2～0.3mと狭く、南東部は0.8m前後と幅広であった。確認面からの深さは概ね0.17mを測り、断面形は船底状を呈する。覆土は六層（24～29層）からなる。ブロック土を含む層がみられたことから一部人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は図示不可能な弥生土器の小片が検出されている。本溝跡の時期は幅を持たせて弥生時代中期後半から後期初頭としておきたい。

第30号溝跡（第23・28図）

平成19年度調査の第４区41－165・166グリッドに位置する。南西部では29号溝跡、東側では31号溝跡を切っている。

ほぼ東西方向に走るが、北東から南西方向にやや傾く。南西端以降は調査区外に延びる。検出された長さは2.85m、幅は北東部が0.2m、南西部が0.5mを測る。確認面からの深さは0.1m前後と浅いが、調査区境の土層断面観察では0.4m程の深さであったことが確認された。覆土は調査区境の土層断面では六層（18～23層）、検出された範囲のほぼ中央付近では二層（30・31層）確認された。混入物が多くみられ、ややランダムな層位である。人為的な埋め戻しか自然堆積かは不明である。

遺物は図示不可能な７世紀後半の土師器坏と甕の小片が検出されている。よって、本溝跡の時期は７

世紀後半を中心とする段階と思われる。

第31号溝跡（第23・28図）

平成19年度調査の第４区40・41－165・166グリッドに位置する。西側立ち上がりの南側一部を30号溝跡に切られており、北側では21号土坑を切っている。

北西から南東方向に走り、南東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは5.65mで、北西端は土坑状を呈していた。幅は概ね1.1m前後を測る。確認面からの深さは北西端の土坑状を呈する所は0.24m、その他は0.15m前後であったが、調査区境の土層断面観察では0.28m程の深さであったことが確認された。断面形は船底状を呈する。覆土は12層（６～17層）からなる。ブロック土を含む層もみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第32図）は、弥生土器甕（31－１～３）がある。１・２は櫛歯状工具により頸部に簾状文が巡る。外面の調整は１が斜位のハケメ、２は縦・斜位のヘラナデである。１は口縁部から頸部にかけて、２は頸部の破片である。１は端部に刻みを持つ。３は胴下部片。外面調整は横・斜位のハケメである。１～３の内面調整はすべて横・斜位のヘラナデである。

本溝跡の時期は、弥生時代中期末から後期初頭にかけての段階と思われる。

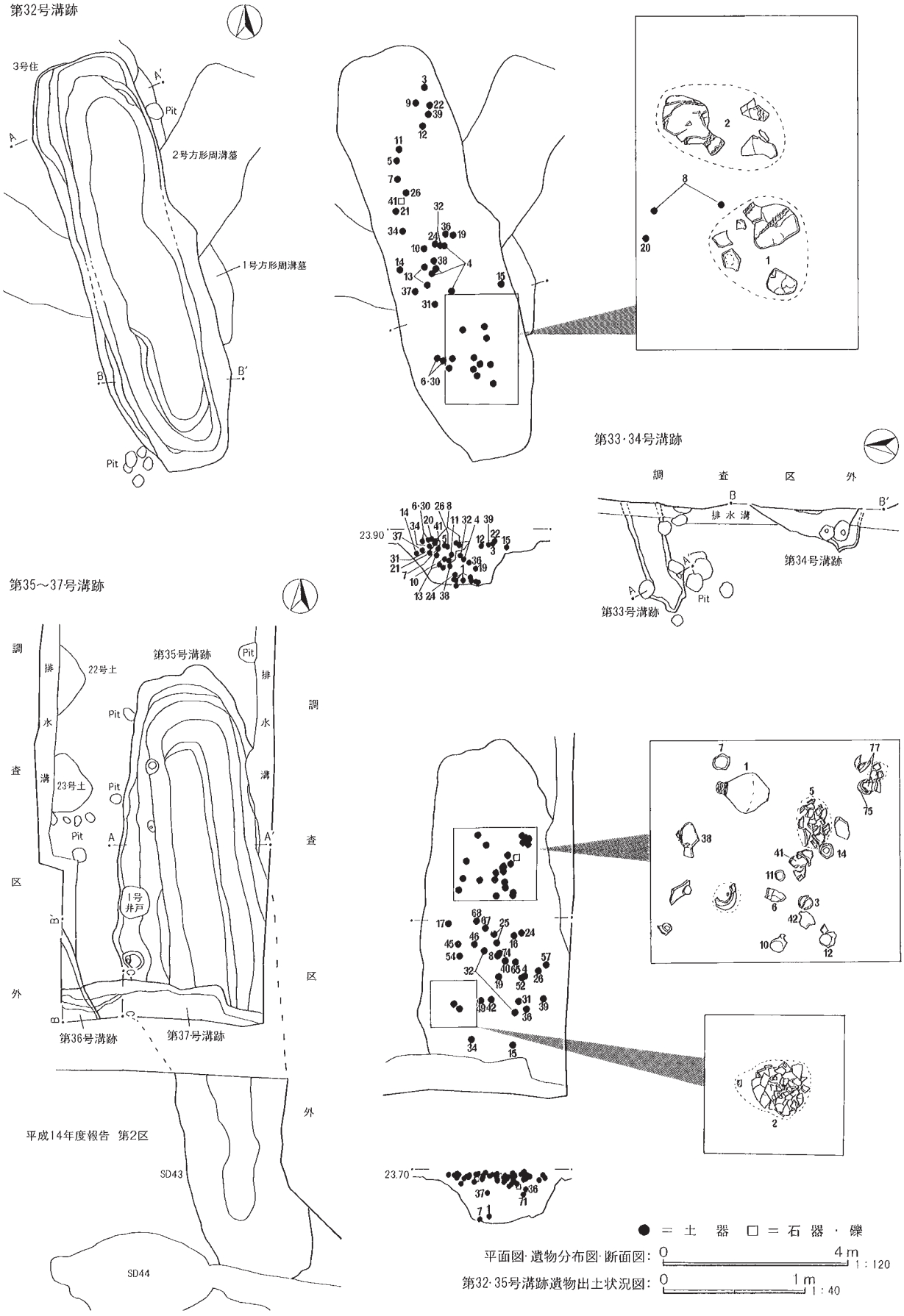
第32号溝跡（第24・29図）

平成19年度調査の第４区38・39－165・166グリッドに位置する。北側で３号住居跡、東側で１号方形周溝墓を切っている。中央付近で重複する２号方形周溝墓との新旧関係は、発掘調査段階では本溝跡が切っていると判断したが、整理調査による出土遺物の比較により本溝跡の方がやや古い段階に相当することが判明した。

北西から南東方向に走る。検出された長さは9.2m、幅は2.3～2.68mである。確認面からの深さは南側の最も深い所で1.02mを測り、断面形は逆台形状を呈する。覆土は層位を確認した所では31層（１～31層）からなる。すべての層に混入物がみられ、上層（２・３層）では焼土粒が微量認められた。下層になるにつれて土質が変わり、中層の14～24層はシルト、下層の27～31層は粘土層であった。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

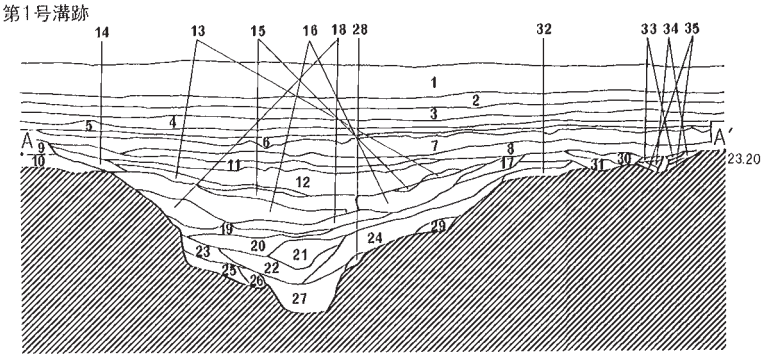
出土遺物（第32～34図）は、弥生土器壺（32－１～４・９～12・22～29）、甕（32－５～８・13～20・30～40）、高坏（32－21）、打製石斧（32－41）がある。図示しなかったものも含め本溝跡からは大量の遺物が検出された。遺物はほぼ全面から検出されており、出土層位は上層から下層にわたる。このうち、残存状態の良い壺１・２は南側底面より検出された。

１～４・９～12・22～29は壺。１は口縁部から頸部にかけて開きが小さく、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。文様帯は口縁部と胴部中段にのみ描かれており、やや太目の波状沈線一条で区画された中にＬＲ単節縄文を充填している。胴部の縄文帯には赤彩が施されている。外面の文様帯以外及び内面の口縁部から頸部にかけてはヘラミガキ調整、胴部以下の内面は磨耗が著しいため図示できなかったが、ヘラナデ調整である。底部外面には木葉痕が残る。２は口縁部から頸部がやや開き、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。文様帯は口縁部、頸部、胴上部、胴部中段に描かれており、口縁部と頸部は２本一単位、胴上部と胴部中段は一条で波状沈線を横位に巡らせ、各区画内にＬＲ単節縄文を充填している。外面の文様帯以外及び内面の口縁部から頸部にかけてはヘラミガキ調整であり、胴部以下の内面はヘラナデ調整である。３は頸部。無文で内外面ヘラナデ調整である。内面には輪積痕が残る。４は

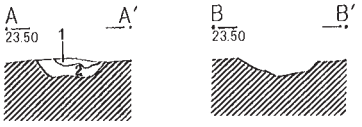


第24図　第32～37号溝跡

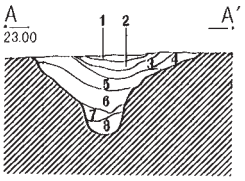
第1号溝跡



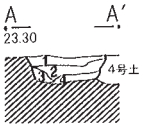
第2号溝跡



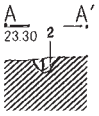
第4号溝跡



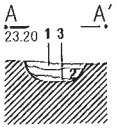
第5号溝跡



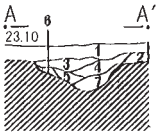
第6号溝跡



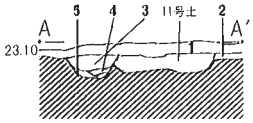
第7号溝跡



第8号溝跡



第9号溝跡



第1号溝跡
土層説明（AA′）

1 表　　土
2 青灰色シルト：火山灰、酸化鉄少量含む。
3 灰色シルト：火山灰、酸化鉄多量含む。
4 灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。しまり強。
5 灰色土：粘土質。火山灰微量含む。
6 暗青灰色シルト：灰色粒少量含む。
7 灰色土：粘土質。酸化鉄、灰色土少量含む。しまり強。
8 灰色土：粘土質。炭化物少量含む。
9 灰色土：粘土質。明青灰色粒多量含む。
10 灰色シルト：明オリーブ灰色シルトブロック多量含む。
11 青灰色土：粘土質。灰白色粒少量、火山灰、炭化物微量含む。
12 灰色土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物少量含む。
13 灰白色土：粘土質。灰色土多量含む。
14 灰色土：粘土質。灰白色粒微量含む。
15 灰色土：粘土質。炭化物少量、灰白色粒、腐蝕木片微量含む。
16 黄灰色粘土：木片微量含む。
17 灰色シルト
18 灰色土：粘土質。炭化物、灰色粒微量含む。
19 明青灰色砂
20 灰色シルト：炭化物微量含む。
21 オリーブ黒色土：粘土質。炭化物多量含む。
22 灰色シルト：明青灰色粒少量、炭化物微量含む。
23 灰色シルト：明青灰色粒微量含む。
24 灰色粘土：明青灰色粒少量、炭化物微量含む。
25 灰色粘土：炭化物多量、明青灰色ブロック微量含む。
26 暗灰色粘土：明青灰色粒微量含む。
27 オリーブ黒色粘土：炭化物多量含む。
28 灰色粘土
29 灰色シルト
30 灰色土：粘土質。炭化物、明青灰色粒少量含む。
31 灰色シルト
32 灰色シルト：31層より明るい。
33 明オリーブ灰色土：粘土質。
34 灰色土：粘土質。明オリーブ灰色粒少量含む。
35 灰色シルト：明オリーブ灰色粒微量含む。

第2号溝跡
土層説明（AA′）

1 暗青灰色シルト：火山灰少量含む。
2 灰色土：粘土質。暗青灰色粒・ブロック、淡黄色粒微量含む。

0　　2m
1：60

第4号溝跡
土層説明（AA′）

1 灰色土：粘土質。灰白色粒微量含む。
2 灰色土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
3 灰色土：粘土質。明緑灰色粒多量、炭化物微量含む。
4 灰色土：粘土質。灰白色粒多量含む。
5 灰色粘土：明緑灰色粒微量含む。
6 灰色粘土：明緑灰色粒多量、暗灰色粒少量含む。
7 暗灰色粘土：明緑灰色粘土多量含む。
8 オリーブ黒色粘土：明緑灰色粒微量含む。

第5号溝跡
土層説明（AA′）

1 灰色土：粘土質。灰白色粒多量、火山灰、炭化物微量含む。
2 オリーブ黒色土：粘土質。炭化物微量含む。
3 灰色土：粘土質。灰白色土微量含む。
4 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量含む。

第6号溝跡
土層説明（AA′）

1 灰色土：粘土質。オリーブ黒色粒、火山灰、灰白色粒微量含む。
2 オリーブ黒色土：粘土質。小礫多量含む。

第7号溝跡
土層説明（AA′）

1 灰色土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。
2 灰色土：粘土質。焼土粒、炭化物微量含む。
3 灰色土：粘土質。灰白色土少量含む。

第8号溝跡
土層説明（AA′）

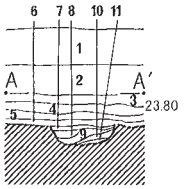
1 灰色土：粘土質。
2 灰色土：粘土質。1層より暗い。
3 灰色土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。
4 灰色土：粘土質。火山灰微量含む。
5 灰色土：粘土質。粘性やや強。
6 灰色土：粘土質。灰白色粒微量含む。
7 暗灰色土：粘土質。粘性強。灰白色粒少量含む。

第9号溝跡
土層説明（AA′）

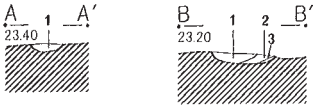
1 灰色土：粘土質。火山灰微量含む。
2 灰色土：粘土質。1層より明るい。
3 灰色土：粘土質。火山灰、灰白色粒微量含む。
4 灰色土：粘土質。3層より明るい。
5 灰色土：粘土質。4層より明るい。

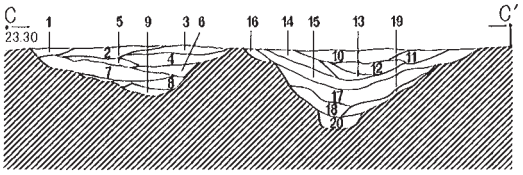
第25図　第1～9号溝跡土層断面図

第10号溝跡

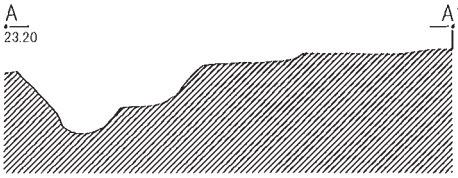


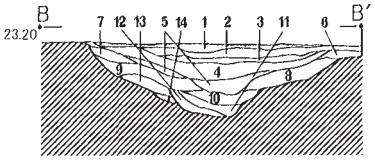
第11～14号溝跡



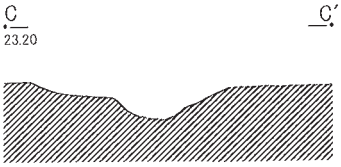


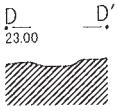
第15～17号溝跡

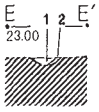


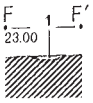


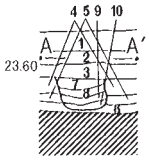
第18号溝跡











第10号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 表　　土
2 灰 黄 褐 色 土：酸化鉄少量含む。
3 灰　色　土：火山灰少量含む。
4 黄灰色シルト：火山灰多量含む。
5 灰　色　土
6 灰　色　土：粘土質。火山灰少量含む。
7 灰　色　土：粘土質。暗青灰色ブロック微量含む。
8 暗青灰色シルト：火山灰少量含む。
9 灰　色　土：粘土質。暗青灰色シルト多量含む。
10 灰　色　土：粘土質。火山灰微量含む。
11 灰　色　土：粘土質。暗青灰色シルト多量含む。

第15号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰　色　土：粘土質。灰白色ブロック多量含む。しまり強。
2 黄　灰　色　土：粘土質。火山灰、炭化物、灰白色粒微量含む。しまり強。
3 暗　灰　色　土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。しまり強。
4 オリーブ黒色土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。しまり強。
5 オリーブ黒色土：粘土質。炭化物多量含む。
6 灰　色　土：粘土質。暗灰色ブロック、火山灰微量含む。
7 灰　色　土：粘土質。暗灰色ブロック微量含む。しまり強。
8 黄　灰　色　土：粘土質。暗灰色ブロック、黒色粒少量含む。
9 灰　色　土：粘土質。暗灰色ブロック微量含む。しまり強。7層より暗い。
10 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物少量含む。
11 オリーブ黒色粘土：灰白色粒多量、炭化物微量含む。
12 黒　色　粘　土：灰白色粒多量含む。
13 灰　色　粘　土
14 灰　色　粘　土：灰白色粘土多量含む。

第11号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：粘土質。オリーブ黒色ブロック多量含む。

第12号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰　色　土：火山灰微量含む。
2 灰　色　土：粘土質。火山灰、灰白色粒微量含む。
3 灰　色　土：粘土質。

第16号溝跡
土層説明（ＥＥ′）
1 灰　色　土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。
2 灰　色　土：粘土質。炭化物微量含む。

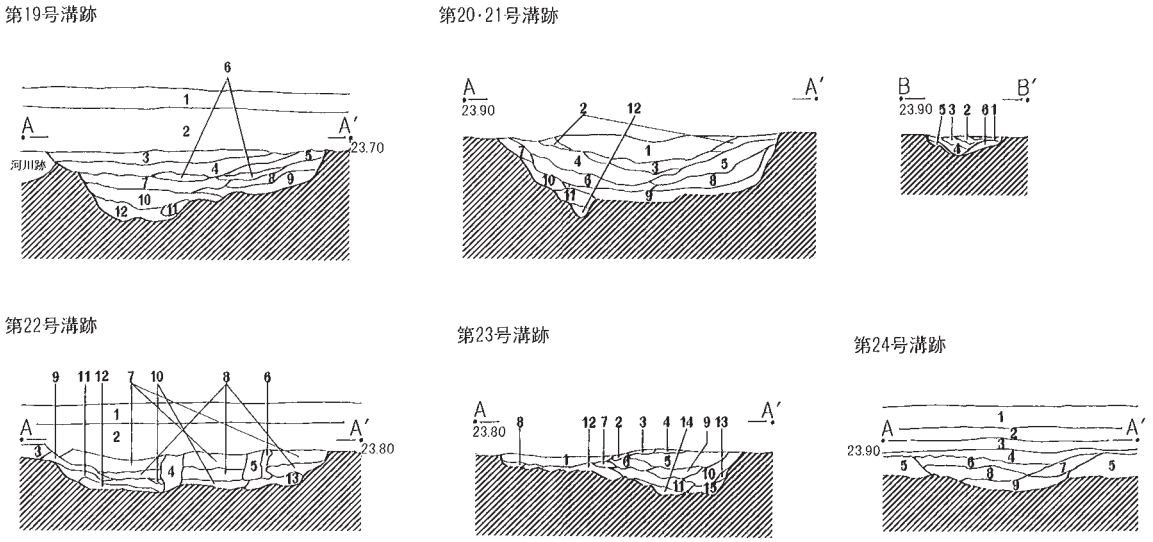
第17号溝跡
土層説明（ＦＦ′）
1 灰　色　土：粘土質。灰白色ブロック少量含む。

第18号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：耕作土。
2 黄　灰　色　土：耕作土。火山灰多量含む。
3 暗　灰　色　土：耕作土。火山灰少量含む。
4 灰　色　土：粘土質。
5 オリーブ黒色土：粘土質。
6 灰　色　土：粘土質。灰白色ブロック多量、炭化物少量含む。
7 青　灰　色　土：粘土質。しまり強。
8 灰　色　土：粘土質。火山灰微量含む。
9 暗　灰　色　土：粘土質。炭化物少量、灰白色粒微量含む。
10 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量、暗灰色土少量含む。

第13・14号溝跡
土層説明（ＣＣ′）
1 黄灰色土：火山灰多量、小礫少量含む。
2 灰　色　土：火山灰多量、小礫、酸化鉄少量含む。
3 灰　色　土：火山灰少量、小礫微量含む。
4 灰　色　土：砂質。火山灰微量含む。
5 灰　色　土：やや粘土質。火山灰少量含む。しまり強。
6 灰　色　土：粘土質。火山灰微量含む。
7 黄灰色土：粘土質。火山灰微量含む。
8 灰色粘土
9 灰色粘土：灰白色土多量含む。
10 灰　色　土：粘土質。火山灰、灰白色粒微量含む。
11 灰　色　土：火山灰多量含む。
12 黒　色　土：粘土質。火山灰少量含む。
13 灰　色　土：火山灰微量含む。
14 灰　色　土：黒色ブロック微量含む。
15 灰　色　土：粘土質。火山灰微量含む。
16 灰　色　土：砂質。火山灰多量含む。
17 黄灰色土：粘土質。火山灰少量含む。
18 灰色粘土
19 灰色シルト
20 灰色粘土：18層より明るい。

0　2m
1：60

第26図　第10～18号溝跡土層断面図



第19号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：耕作土。
2 灰　色　土：酸化鉄多量、灰白色粒・ブロック少量含む。
3 灰色シルト：炭化物、灰白色粒微量含む。
4 灰　色　土：シルト質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
5 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
6 灰白色　土：粘土質。灰色粒・ブロック微量含む。
7 灰　色　土：シルト質。灰白色粒・ブロック多量含む。
8 灰　色　土：粘土質。暗灰色粒・ブロック微量含む。
9 灰　色　土：シルト質。灰色ブロック、灰白色粒・ブロック少量含む。
10 灰　色　土：シルト質。灰白色ブロック少量含む。
11 灰白色シルトブロック
12 灰色シルト：灰白色粒・ブロック多量含む。

第20号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰白色　土：粘土質。灰色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
2 灰色シルト：灰白色粒少量、火山灰、炭化物微量含む。
3 灰　色　土：シルト質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
4 灰　色　土：シルト質。炭化物、灰白色粒微量含む。
5 青灰色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
6 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
7 灰色シルト：灰白色粒少量含む。
8 青灰色　土：シルト質。炭化物、灰白色粒微量含む。
9 暗青灰色土：粘土質。灰白色粒多量、灰白色粘土ブロック少量含む。
10 青灰色シルト：灰白色粒・ブロック微量含む。
11 灰色シルト：青灰色シルト、灰白色粘土ブロック少量含む。
12 灰色シルト：灰白色粒微量含む。

第21号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰色シルト：灰白色粒多量含む。
2 灰色シルト：灰白色粒少量含む。
3 灰色シルト：灰白色粒多量含む。
4 灰色シルト：灰色シルトブロック微量含む。
5 灰白色シルト
6 灰白色シルト：灰白色シルト粒・ブロック多量含む。

第22号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：耕作土。
2 灰　色　土：酸化鉄少量、火山灰微量含む。
3 褐灰色シルト：灰白色粒微量含む。
4 灰色シルト：灰白色粒微量含む。
5 灰色シルト：灰白色粒多量含む。
6 撹　　乱
7 灰色シルト：灰白色粒少量、炭化物微量含む。
8 灰色シルト：灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
9 灰色シルト：灰白色粒多量含む。
10 暗青灰色土：粘土質。灰白色粒少量含む。
11 灰色シルト：灰白色粒多量含む。
12 灰色シルト：灰白色粒多量、暗灰色粒・ブロック少量、灰白色ブロック微量含む。
13 灰色シルト：灰白色粒・ブロック多量含む。

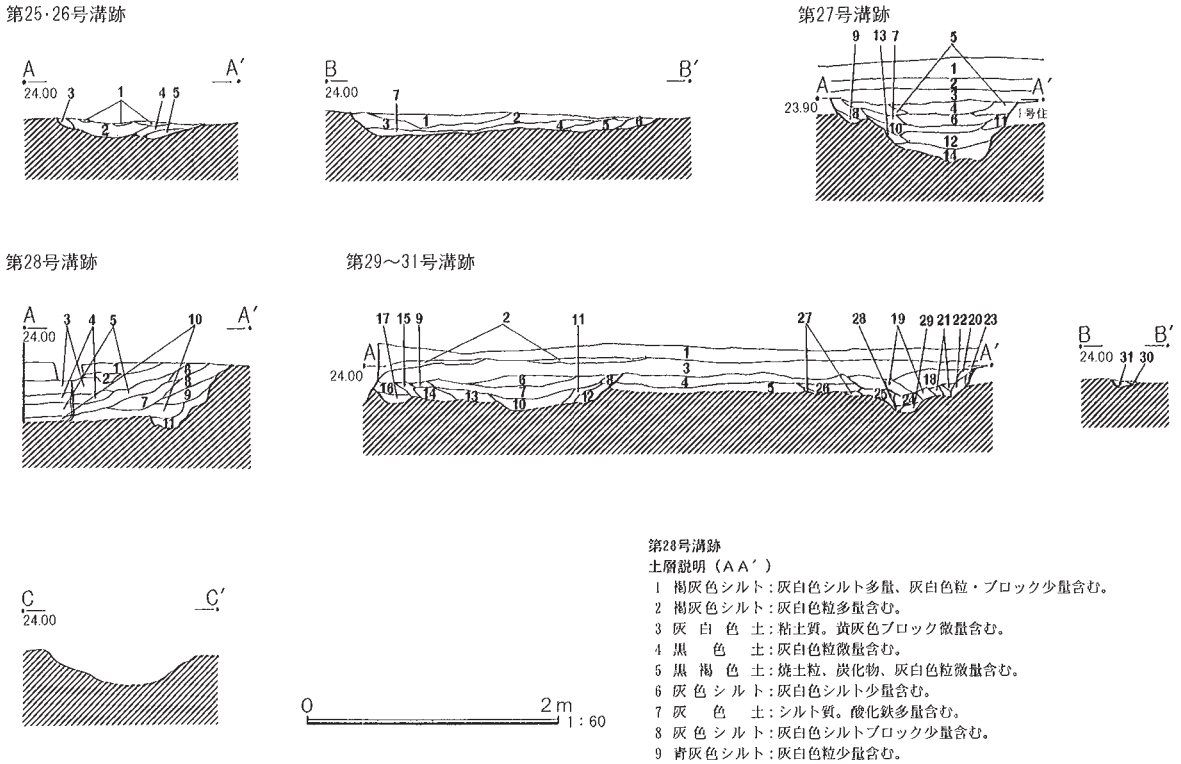
第23号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰色シルト：酸化鉄、灰白色粒少量含む。
2 灰　色　土：灰白色粒多量、炭化物微量含む。
3 灰白色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
4 灰白色土：酸化鉄、灰白色粒少量含む。
5 灰　色　土：酸化鉄、灰色ブロック多量、焼土粒、灰白色粒微量含む。
6 灰　色　土：酸化鉄少量、炭化物、灰白色粒微量含む。
7 灰　色　土：灰白色粒多量含む。
8 灰色シルト：酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
9 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
10 灰白色土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
11 灰　色　土：粘土質。灰白色シルトブロック少量、酸化鉄微量含む。
12 灰　色　土：粘土質。酸化鉄、灰白色粒少量含む。
13 灰　色　土：粘土質。灰白色シルトブロック少量含む。
14 灰　色　土：粘土質。灰白色ブロック少量、酸化鉄、灰白色粒微量含む。
15 灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量含む。

第24号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：耕作土。
2 灰白色　土：シルト質。
3 灰　色　土：酸化鉄多量、灰白色粒・ブロック少量含む。
4 褐灰色シルト：酸化鉄多量、灰色ブロック、灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
5 灰白色シルト：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
6 灰白色シルト：酸化鉄多量、焼土粒、炭化物、灰色粒、灰白色粒微量含む。
7 灰白色シルト：酸化鉄多量、灰白色ブロック微量含む。
8 灰色シルト：酸化鉄多量、灰白色粒・ブロック微量含む。
9 明青灰色土：粘土質。酸化鉄多量、灰色粒・ブロック微量含む。

0　2m
1：60

第27図　第19～24号溝跡土層断面図

頸部から胴部中段までの部位。頸部はほぼ直立し、胴部は大きく膨らむ。頸部のみ文様帯を持ち、８本一単位の櫛歯状工具による簾状文が二段巡る。文様帯以下はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。９～12は胴下部から底部にかけての部位。外面調整は９がハケメ、10がヘラナデ、11・12がヘラミガキである。内面はすべてヘラナデ調整であるが、10は一部ハケメに近い部分がみられた。12は内外面に赤彩が施されていることから広口壺か。外面の赤彩は大半が剥落している。22・23は複合口縁部片。22は



第28号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 褐灰色シルト：灰白色シルト多量、灰白色粒・ブロック少量含む。
2 褐灰色シルト：灰白色粒多量含む。
3 灰白色土：粘土質。黄灰色ブロック微量含む。
4 黒色土：灰白色粒微量含む。
5 黒褐色土：焼土粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
6 灰色シルト：灰白色シルト少量含む。
7 灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
8 灰色シルト：灰白色シルトブロック少量含む。
9 青灰色シルト：灰白色粒少量含む。
10 青灰色土：灰白色ブロック多量含む。
11 灰色土：灰白色ブロック多量含む。

第25号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 褐灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
2 灰白色シルト：酸化鉄、灰白色粒多量含む。
3 黄灰色シルト：酸化鉄多量含む。
4 黄灰色土：やや粘土質。酸化鉄多量、褐灰色粒微量含む。
5 灰白色シルト：酸化鉄多量、灰白色粒少量含む。

第26号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 褐灰色土：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
2 黄灰色土：酸化鉄多量、黄灰色ブロック微量含む。
3 褐灰色土：酸化鉄、灰白色ブロック少量含む。
4 灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰色ブロック、灰白色粒微量含む。
5 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰色粒微量含む。
6 灰白色シルト：酸化鉄多量、灰色粒微量含む。
7 灰白色土：灰白色粒微量含む。

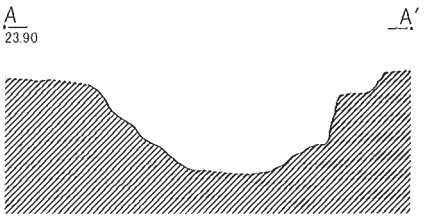
第27号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰色土：耕作土。
2 灰白色土：シルト質。火山灰、酸化鉄少量含む。
3 灰色土：酸化鉄、灰白色粒・ブロック少量、炭化物微量含む。
4 灰色土：酸化鉄少量、灰白色ブロック微量含む。
5 灰色土：酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
6 灰色土：酸化鉄少量含む。
7 灰色土：酸化鉄少量含む。６層より暗い。
8 黄灰色土：酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
9 黄灰色土：酸化鉄少量含む。
10 灰色土：火山灰、酸化鉄微量含む。
11 灰色土：酸化鉄微量含む。
12 黄灰色土：火山灰、酸化鉄微量含む。
13 青灰色土：灰白色粒微量含む。
14 灰白色土：粘土質。灰白色粒微量含む。

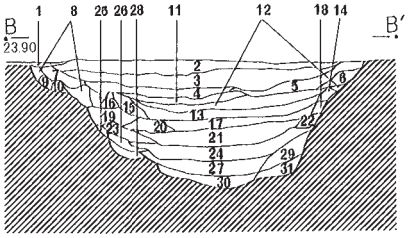
第29～31号溝跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 灰色土：酸化鉄多量、火山灰少量含む。
2 にぶい黄褐色土：火山灰微量含む。
3 褐灰色土：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
4 黄灰色土：酸化鉄少量、焼土粒、灰白色ブロック微量含む。
5 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量、灰白色粒・ブロック微量含む。
6 黄灰色土：酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。
7 褐灰色土：酸化鉄、灰白色粒少量、焼土粒微量含む。
8 灰白色土：シルト質。酸化鉄少量含む。
9 黄灰色シルト：灰白色シルト少量含む。
10 黒褐色シルト：黄灰色ブロック多量、灰白色ブロック少量含む。
11 灰色シルト：灰白色シルト少量含む。
12 黄灰色土：シルト質。炭化物、灰白色粒微量含む。
13 黄灰色土：シルト質。灰白色粒微量含む。
14 灰白色シルト：黄灰色土少量含む。
15 灰色土：シルト質。酸化鉄少量含む。
16 灰色シルト：酸化鉄微量含む。
17 灰色シルト：灰白色粒多量含む。
18 黄灰色土：焼土粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
19 黄灰色土：灰白色粒少量含む。
20 黄灰色土：シルト質。灰白色粒微量含む。
21 褐灰色土：粘土質。灰白色粒微量含む。
22 黄灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
23 褐灰色土：灰白色粒少量含む。
24 灰白色シルト：黄灰色ブロック多量、焼土粒少量含む。
25 灰白色シルト：灰白色粒微量含む。
26 灰色土：焼土粒、灰白色粒微量含む。
27 灰色シルト：黄灰色土少量含む。
28 灰色土：粘土質。
29 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量含む。
30 灰色土：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
31 灰白色シルト：黄灰色ブロック微量含む。

第28図　第25～31号溝跡土層断面図

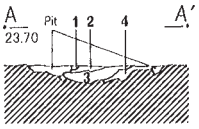
無文で複合口縁は横位、以下は縦位のヘラナデ調整が施されている。23は複合口縁部に４本一単位の櫛歯状工具による波状文が巡り、端部には刻みを持つ。複合口縁以下は横位のヘラナデ調整である。24は頸部片。ＬＲ単節縄文下に横位の沈線が巡る。25・27は肩部片。25は細い沈線による斜格子文下に横位の沈線が一条巡り、その下にＬＲ単節縄文が施文されている。27はやや太目の沈線と波状沈線が横位に巡り、その下に重四角文が描かれている。重四角文連結部には刺突の施されたボタン状貼付文が付けら

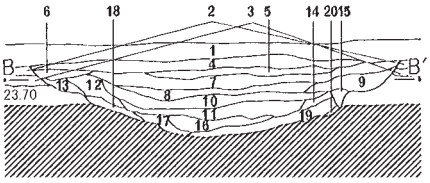
第32号溝跡





第33・34号溝跡





第33号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰白色シルト：酸化鉄少量含む。
2 灰　色　土：酸化鉄、焼土粒、炭化物、灰白色粘土少量含む。
3 灰　色　土：焼土粒、灰白色粘土多量、酸化鉄少量含む。
4 灰　色　土：焼土粒、灰白色粒微量含む。

第32号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰色シルト：灰白色粒微量含む。
2 黄灰色　土：灰白色粒・ブロック多量、酸化鉄少量、焼土粒、炭化物微量含む。
3 黄灰色　土：ややシルト質。灰白色粒少量、焼土粒、炭化物微量含む。
4 黄灰色　土：ややシルト質。灰白色シルト多量、炭化物、灰白色粒微量含む。
5 黄灰色　土：シルト質。酸化鉄多量、灰白色シルト微量含む。
6 灰白色　土：酸化鉄多量、黄灰色粒少量含む。
7 灰　色　土：灰白色粒多量、炭化物微量含む。
8 灰白色シルト：灰色粒少量含む。
9 褐灰色　土：ややシルト質。灰色粒少量含む。
10 黄灰色シルト：灰白色シルト多量含む。
11 灰　色　土：ややシルト質。炭化物多量、灰白色粒少量含む。
12 灰　色　土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒多量、炭化物微量含む。
13 灰　色　土：ややシルト質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒微量含む。
14 灰白色シルト：酸化鉄多量含む。
15 灰色シルト：黒褐色粒多量、灰白色粒少量含む。
16 灰色シルト：酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
17 灰色シルト：酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。16層より暗い。
18 明青灰色シルト：酸化鉄多量、灰白色粒少量含む。
19 灰色シルト：酸化鉄、灰白色粒少量、灰色粒微量含む。
20 灰色シルト：灰白色粒微量含む。
21 青灰色シルト：酸化鉄、炭化物、灰色粒微量含む。
22 灰色シルト：青灰色シルト多量、酸化鉄微量含む。
23 青灰色シルト：灰白色粒・ブロック少量含む。
24 灰色シルト：灰白色粒少量含む。
25 灰白色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。
26 灰色シルト：灰白色粒少量含む。
27 暗灰色粘土：明緑灰色粒微量含む。
28 青灰色粘土：明緑灰色ブロック少量含む。
29 灰色粘　土：明緑灰色粒少量含む。
30 暗灰色粘土：明緑灰色粒・ブロック多量含む。
31 灰色粘　土：明緑灰色粒多量含む。

第34号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 黄灰色　土：ややシルト質。酸化鉄、焼土粒、炭化物多量、灰白色粒微量含む。
2 褐灰色　土：焼土粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
3 灰色シルト：酸化鉄、灰白色シルト少量含む。
4 灰　色　土：ややシルト質。酸化鉄多量、焼土粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
5 黄灰色　土：ややシルト質。焼土粒、炭化物少量、灰白色粒微量含む。
6 黄灰色　土：焼土粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
7 褐灰色　土：ややシルト質。酸化鉄少量、焼土粒、炭化物、灰白色ブロック微量含む。
8 黄灰色シルト：灰白色粒・ブロック微量含む。
9 黄灰色　土：ややシルト質。焼土粒、炭化物、灰白色粒微量含む。
10 灰色シルト：灰白色粒微量含む。
11 灰色シルト：酸化鉄多量、灰白色ブロック微量含む。
12 暗灰黄色シルト：酸化鉄、灰白色シルト少量含む。
13 黄灰色シルト：黄灰色粒少量、灰白色粒微量含む。
14 灰色シルト：灰白色粒微量含む。
15 灰色シルト：酸化鉄少量含む。
16 青灰色　土：ややシルト質。酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
17 灰色シルト：酸化鉄、灰白色シルトブロック少量含む。
18 灰　色　土：粘土質。灰白色シルト多量、灰色シルトブロック少量含む。
19 暗青灰色シルト：酸化鉄、灰白色粒少量、灰白色ブロック微量含む。
20 灰白色　土：灰白色粒多量含む。

0　2m
1：60

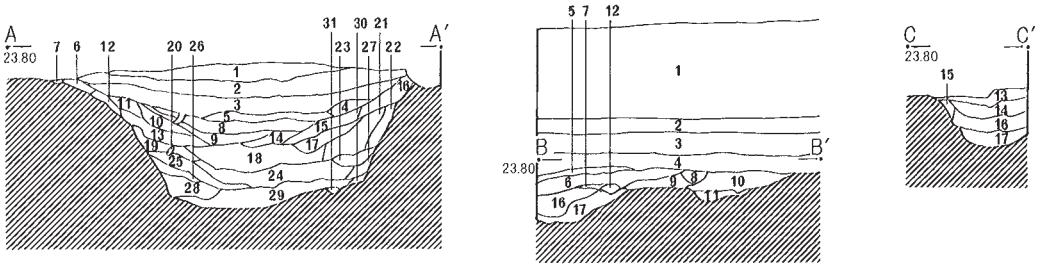
第29図　第32～34号溝跡土層断面図

れている。

26・28・29は胴上部片。26は細い沈線により鋸歯文が描かれており、区画内にＲＬ単節縄文が充填されている。鋸歯文外は斜位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。28はやや太目の沈線で重菱形文が描かれ、連結部には刺突の施されたボタン状貼付文が付けられている。29は細い沈線により重三角文が描かれており、区画外にＬＲ単節縄文が充填されている。22～29の内面調整はすべて横位のヘラナデである。

５～８・13～20・30～40は甕。文様は櫛歯状工具によるものが大半を占め、縄文が施されるものは40のみである。５は頸部から胴上部にかけての部位。頸部に５本一単位の簾状文、その下に同一工具で波状文が巡り、胴部はヘラナデ調整後に同一工具による縦位の羽状文が垂下する。６は口縁部から胴部中

第35～37号溝跡



第35号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄　灰　色　土：灰白色粒・ブロック少量、火山灰、酸化鉄、炭化物微量含む。
2 黄　灰　色　土：酸化鉄多量、炭化物少量、灰白色粒・ブロック、礫微量含む。
3 褐　灰　色　土：酸化鉄少量、焼土粒、炭化物、灰白色粒、礫微量含む。
4 灰　色　シ　ル　ト：酸化鉄少量含む。
5 灰　　色　　土：オリーブ黒色ブロック、灰白色粒微量含む。
6 黒　褐　色　土
7 褐　灰　色　土：灰白色粒多量、酸化鉄少量含む。
8 黒　色　シ　ル　ト：黄灰色シルト少量、灰白色粒微量含む。
9 黄　灰　色　シ　ル　ト：黒色シルトブロック、灰白色ブロック微量含む。
10 褐　灰　色　シ　ル　ト：黄灰色シルトブロック、灰白色粒微量含む。
11 黄　灰　色　シ　ル　ト：灰白色粒少量、酸化鉄微量含む。
12 灰　色　シ　ル　ト：酸化鉄、灰白色ブロック多量含む。
13 灰　色　シ　ル　ト：灰白色粒微量含む。
14 灰　色　シ　ル　ト：黒色シルトブロック微量含む。
15 灰　色　シ　ル　ト：炭化物微量含む。
16 灰　色　シ　ル　ト：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
17 灰　色　シ　ル　ト：灰白色粒微量含む。
18 灰　色　シ　ル　ト：灰色ブロック、明緑灰色粒微量含む。
19 灰　色　シ　ル　ト：灰白色ブロック、明緑灰色粒少量含む。
20 明緑灰色ブロック
21 灰　色　シ　ル　ト：酸化鉄、灰白色粒少量含む。
22 灰　　色　　土：シルト質。灰白色ブロック多量含む。
23 灰　色　シ　ル　ト：灰白色粒少量含む。
24 灰　　色　　土：明緑灰色粒・ブロック少量含む。
25 灰　　色　　土：ややシルト質。明緑灰色粒少量含む。
26 オリーブ灰色土：粘土質。明緑灰色粒・ブロック少量含む。
27 灰　　色　　土：シルト質。灰白色粒多量含む。
28 オリーブ灰色シルト：オリーブ黒色粘土ブロック多量含む。
29 灰　色　シ　ル　ト：明緑灰色粒・ブロック多量含む。
30 暗　灰　色　土：粘土質。明緑灰色粒多量含む。
31 オリーブ黒色粘土

第36・37号溝跡
土層説明（ＢＢ′ ＣＣ′）
1 盛　　土
2 褐灰色土：火山灰少量含む。
3 褐灰色土：酸化鉄多量、焼土粒、炭化物少量含む。
4 黄灰色土：焼土粒、炭化物少量含む。
5 黄灰色土：粘土質。焼土粒、炭化物少量、灰白色粒微量含む。
6 褐灰色土：粘土質。焼土粒、炭化物多量、灰白色ブロック少量含む。
7 灰白色土：粘土質。
8 褐灰色土：粘土質。炭化物多量含む。灰白色粒微量含む。
9 褐灰色土：炭化物少量、灰白色土帯状に含む。
10 黄灰色土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。
11 灰　色　土：やや砂質。灰白色粒少量含む。
12 褐灰色土：粘土質。灰白色ブロック多量含む。
13 灰　色　土：シルト質。灰白色粒多量、焼土粒、炭化物少量含む。
14 灰　色　土：灰白色粒少量、炭化物微量含む。
15 灰　色　土：灰白色粒・ブロック多量含む。
16 黄灰色土：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
17 灰　色　土：シルト質。灰白色ブロック多量含む。

0　　2m
1：60

第30図　第35～37号溝跡土層断面図

段までの部位。やや肥厚した短い口縁部が緩やかに開く。胴部の膨らみが小さく、最大径は口縁部とほぼ同じである。口縁部から胴上部にかけて４本一単位の波状文が計六段巡る。口縁端部に刻みを持つ。胴部中段以下は斜位のハケメ調整である。№30と同一個体。７は胴上部から下部にかけての部位。胴部の膨らみが小さい。胴上部には６本一単位の波状文が二段巡る。以下は横位のヘラナデ調整である。５～７の内面調整は横・斜位のヘラナデである。８は口縁部から胴部中段までの部位。大きく開く口縁部に最大径を持つ。胴部の膨らみはほとんどない。無文で内外面ヘラナデ調整である。13～20は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。13・14は外面の調整がハケメ、その他はヘラナデである。甕としたが壺の可能性もある。すべて内面調整はヘラナデである。30～38は口縁部から胴上部までに収まる破片。口縁部はすべて端部に刻みを持つ。30は№６と同一個体であるが、接合関係はみられない。31～37は頸部に簾状文が巡る。櫛歯状工具の単位は31・32が５本、34が８本、35・37が６本、36が７本である。31は簾状文の上下に同一工具による波状文が巡る。34は簾状文が二段、その下に同一工具による波状文が一段巡る。35は簾状文の下に同一工具による波状文が二段巡る。36は簾状文の下に同一工具による波状文と縦位の羽状文が施文されている。37は簾状文下に同一工具で波状文が一段巡る。無文部の外面調整は、31・32・35・36が横位、34が横・斜位のヘラナデ、33が横・斜位のハケメ、37が斜位のハケメであ

る。38は胴上部片。３本一単位の波状文が二段巡り、以下の無文部は斜位のハケメ調整である。39は胴部中段の破片。ハケメにより縦位の羽状文が描かれている。40は唯一の縄文甕。頸部から胴上部にかけての破片で無節Ｌが施文されている。30～40の内面調整は30・34が横・斜位、31～33・35～37・40が横位、38が斜位のヘラナデ、39は斜位のハケメとヘラナデである。21は高坏の接合部。外面及び坏部内面はヘラミガキ調整であり、赤彩が施されている。41は打製石斧。刃部のみの検出である。片面に自然面が残る。粘板岩製。

本溝跡は単独での検出であることから溝跡として報告したが、周辺には弥生時代の方形周溝墓が所在し、軸が合うことなどから方形周溝墓になる可能性が高い。時期は出土遺物にやや古いもの（27～29）も混在するが、ほぼ完形の壺１・２の存在を重視して弥生時代中期末から後期初頭にかけての段階としておきたい。

第33号溝跡（第24・29図）

平成19年度調査の第４区38－166・167グリッドに位置する。所々を時期不明のピットに切られている。

ほぼ東西方向に走るが、北東から南西方向にやや傾く。北東端以降は調査区外に延びる。検出された長さは2.49m、幅は0.7m前後を測る。確認面からの深さは0.15m前後であり、断面形は船底状を呈する。覆土は四層（１～４層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は弥生土器甕の小片が検出されているが、本溝跡に伴うものか定かではない。よって、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第34号溝跡（第24・29図）

平成19年度調査の第４区38－167グリッドに位置する。南西端の立ち上がり付近にピットが二つあるが、本溝跡に伴うものか不明である。

検出できたのは西側立ち上がりのみであるため定かではないが、ほぼ東西方向に走ると思われる。大半が調査区外に延びる。検出された長さは0.6m、幅は調査区境で2.5mと幅広い。深さは調査区境の土層断面観察で0.62mを測る。断面形は船底状を呈する。覆土は17層（４～20層）からなる。中層から下層にかけてシルト層が多い。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物は弥生土器甕の小片が検出されているが、本溝跡に伴うものか定かではない。よって、本溝跡の時期は不明と言わざるを得ない。

第35号溝跡（第24・30図）

平成19年度調査の第４区38－168・169グリッドに位置する。南側の調査区境で37号溝跡、西側立ち上がり中央付近で１号井戸跡に切られている。本溝跡は平成14年度報告の第２区で検出された43号溝跡と同一遺構である。

北西から南東方向に走る。検出された長さは平成14年度報告分も含めて約13.4mになる。幅は東側立ち上がりが調査区外にあるため定かではないが最大で４m弱になると思われる。確認面からの深さは1.15mと深く、断面形は逆台形状を呈する。覆土は層位を確認した所では31層（１～31層）からなる。中層の８層以下はシルト層が多い。所々にブロック土がみられたが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物（第34～37図）は、弥生土器壺（35－１～４・７～11・27～41）、甕（35－５・６・12～20・42～72）、ミニチュア土器（35－21）、高坏（35－22～26・73・74）がある。図示しなかったものも

含め、本溝跡からは大量の遺物が検出された。遺物は北西端部を除いたほぼ全面から検出されており、１・７が底面、36・37・71が中層、その他の大半が上層からの検出である。また流れ込みの遺物として土師器坏（35－75・76）、甕（35－77）も上層から検出された。

１～４・７～11・27～41は壺。１は口縁部を欠くが、それ以外は完存する。頸部はほぼ直立し、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。文様は頸部のみ描かれ、太い横位の沈線と波状沈線がほぼ等間隔に交互に巡り、区画内にＬＲ単節縄文が粗雑に充填されている。以下はヘラミガキ調整が施されているが、所々にヘラミガキ前のハケメが残る。２は胴上部から下部にかけての部位。無文でハケメ後所々にヘラミガキ調整を施している。１・２の内面調整は図示できなかったが、横位のヘラナデ調整である。３は口縁部から頸部にかけての部位。無文で内外面ヘラミガキ調整であり、赤彩が施されている。４は胴上部から底部にかけての部位。胴部は球形を呈する。無文で内外面ヘラナデ調整である。７～11は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。内外面の調整は７・８がヘラナデ、９～11はヘラミガキである。９は内面、10・11は内外面に赤彩が施されていることから広口壺か。27～29は口縁部片。27はＬＲ単節縄文地にやや太目の沈線が二条巡る。28は二条の突帯が貼り付けられ、口縁端部と下の突帯に刻みを持つ。上の突帯には７本一単位の櫛歯状工具による波状文が巡る。27・28の内面調整は27が横・斜位、28が横位のヘラナデである。29は無文の複合口縁部片。内外面ともに横位のヘラナデ調整である。30は頸部片。外面は斜位のハケメ、内面は横・斜位のヘラミガキ調整であり、内面に赤彩が施されている。31～34は肩部片。31は櫛歯状工具による波状文下は無文であり、横・斜位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。32は横位の細い沈線で区画された中に斜格子文が描かれている。以下は無文で縦位のヘラミガキ調整である。33は横位の細い沈線下に縦位の短い沈線が細かく多数刻まれている。34は横位の沈線上に７本一単位の櫛歯状工具による波状文が二段巡り、下には細い沈線で鋸歯文が描かれ、区画内には斜位の沈線が充填されている。31～34の内面調整はすべて横位のヘラナデである。35～38は胴部片。35・38は胴部中段の破片。35は細い沈線で重四角文が描かれており、区画内には波状沈線が充填されている。内面調整は横位のヘラナデである。38は無文で内外面ヘラナデ調整であるが、外面は一部ハケメに近い部分がみられた。36・37は同一個体。36は胴上部から下部にかけて、37は胴部中段の破片。胴上部には細い沈線が三条横位に巡り、胴部中段には横位に巡る波状沈線区画内にＬＲ単節縄文が充填されている。外面無文部及び内面の調整は横・斜位のヘラナデである。39～41は胴下部片。すべて内外面ヘラナデ調整であるが、外面上部は横位、下部は斜位、内面はすべて横位に施されている。

５・６・12～20・42～72は甕。文様は櫛歯状工具によるものが大半を占める。５・６・42～64は櫛歯状工具による文様が描かれる一群。５は本報告で唯一全形の知り得るものであり、残存状態が比較的良好である。短い口縁部が緩やかに開き、胴部がやや膨らむ。最大径を胴部中段に持つ。口縁端部に刻みを持ち、頸部には８本一単位の簾状文、胴上部から中段にかけては同一工具による波状文が三段巡る。外面無文部及び内面の調整はヘラナデである。６は口縁部から胴上部にかけての部位。口縁部はやや長く、受け口状を呈する。口縁端部に刻みを持ち、頸部には９本一単位の簾状文、胴上部には同一工具による波状文が巡る。調整は外面無文部がヘラナデとハケメ、内面はヘラナデである。12～20は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。20のみ外面がハケメであるが、その他はすべて内外面ヘラナデ調整である。17・18の底部外面には木葉痕が残る。42～61は口縁部から胴上部までに収まる破片。42～49は口縁端部に刻みを持ち、54のみ複合口縁である。42～44・46～48・50・52～60は頸部に簾状文が巡り、

42は簾状文の上下、43・47・58～60は下、50は上、53は口縁部内面にそれぞれ同一工具による波状文が巡る。51は頸部、61は胴上部に二段波状文が巡る。櫛歯状工具の単位が分かるものは、42・48が８本、46・53・58・59が6本、47・60が４本、50が５本である。52はその器形から甕としたが、内外面ともに横位のヘラミガキで赤彩が施されていることから広口壺とみた方が良いものであろう。59は波状文下に縦位の羽状文が描かれている。外面無文部の調整は42・45・47・48・50・51・53が横位、43・44が横・斜位のヘラナデ、46・49が横位、55が横・斜位のハケメ、56は簾状文下が横・斜位のヘラナデ、その下が横位のハケメ、57～59は斜位、60は縦位のハケメ、54は複合口縁が横位のヘラナデ、以下は斜位のハケメである。62～64は胴部中段の破片。62は斜格子状、63は縦位、64は横位の羽状文が描かれている。42～51・53～61の内面調整は42・55・58～60が横・斜位、43～45・47・50・51・53・54・57・61が横位、48が横・縦位のヘラナデ、46・49が横位のハケメ、56は上部が横位のヘラナデ、下部が横位のハケメである。65～68は外面がハケメ調整による一群。65は口縁部から胴部中段にかけての破片。口縁部から頸部までは斜位、以下は横位に施されており、図示しなかったが内面も横・斜位のハケメ調整である。66は頸部片。縦・斜位に施されている。67・68は胴下部片。67は斜位、68は縦位に施されている。66～68の内面調整は66が横位、67は横・斜位のヘラナデ、68は横位のハケメとヘラナデである。69は胴部中段の破片。やや太目の沈線で斜格子状の文様が描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。70・71は縄文が施文される一群。ともに口縁部片である。70は口縁端部に刻みを持ち、外面にはオオバコ系の擬縄文が施文されている。内面調整は横・斜位のヘラナデである。71は複合口縁であり、ＬＲ単節縄文が施文されている。内面は横位のヘラナデ調整である。72は刺突の施されたボタン状貼付文が付けられた胴上部片。無文部は横位のヘラナデである。内面は斜位のヘラナデ調整である。

21はミニチュア土器。外面はヘラナデ調整であり、内面には輪積痕が残る。ほぼ完形。

22～26・73・74は高坏。22・23は坏部。22はほぼ直線的、23はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ヘラミガキ調整で赤彩が施されている。24は接合部。外面はヘラナデ、脚部の内面はハケメ調整である。25は脚部。内面に輪積痕がみられたことから高坏の脚部と判断した。内外面ハケメ調整であり、端部には突帯が巡る。26は接合部から脚部にかけての部位。ハの字に開く。外面はヘラミガキ、脚部内面はヘラナデ調整である。73は口縁部片。端部には４本一単位の波状文が巡り、波状文以下及び内面は斜位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。74は坏部片。内外面ともに横位のヘラミガキ調整であり、内面と外面上部のみ赤彩が施されている。

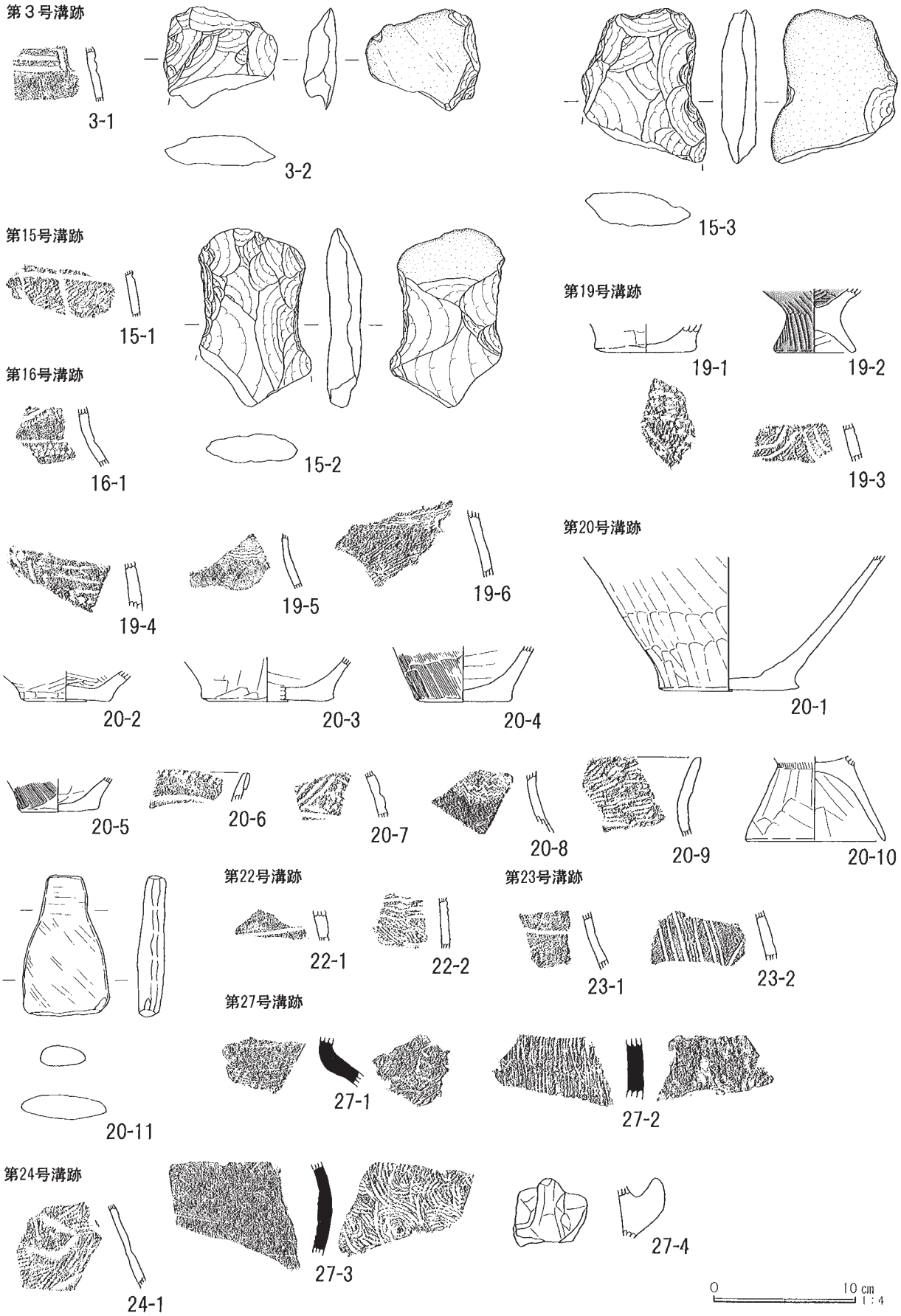
75～77は古墳時代後期の土師器。75・76は坏。75は坏蓋模倣坏、76は有段口縁坏である。77は甕。口縁部から胴上部までの部位。口縁部が短く、開きが大きい。

本溝跡も32号溝跡と同じく単独での検出であることから溝跡として報告したが、周辺には弥生時代の方形周溝墓が所在し、軸が合うことなどから方形周溝墓になる可能性が高い。出土した弥生土器は時期にバラツキがみられるが、残りの良い壺１や甕５などの存在を重視して時期は弥生時代中期後半としておきたい。

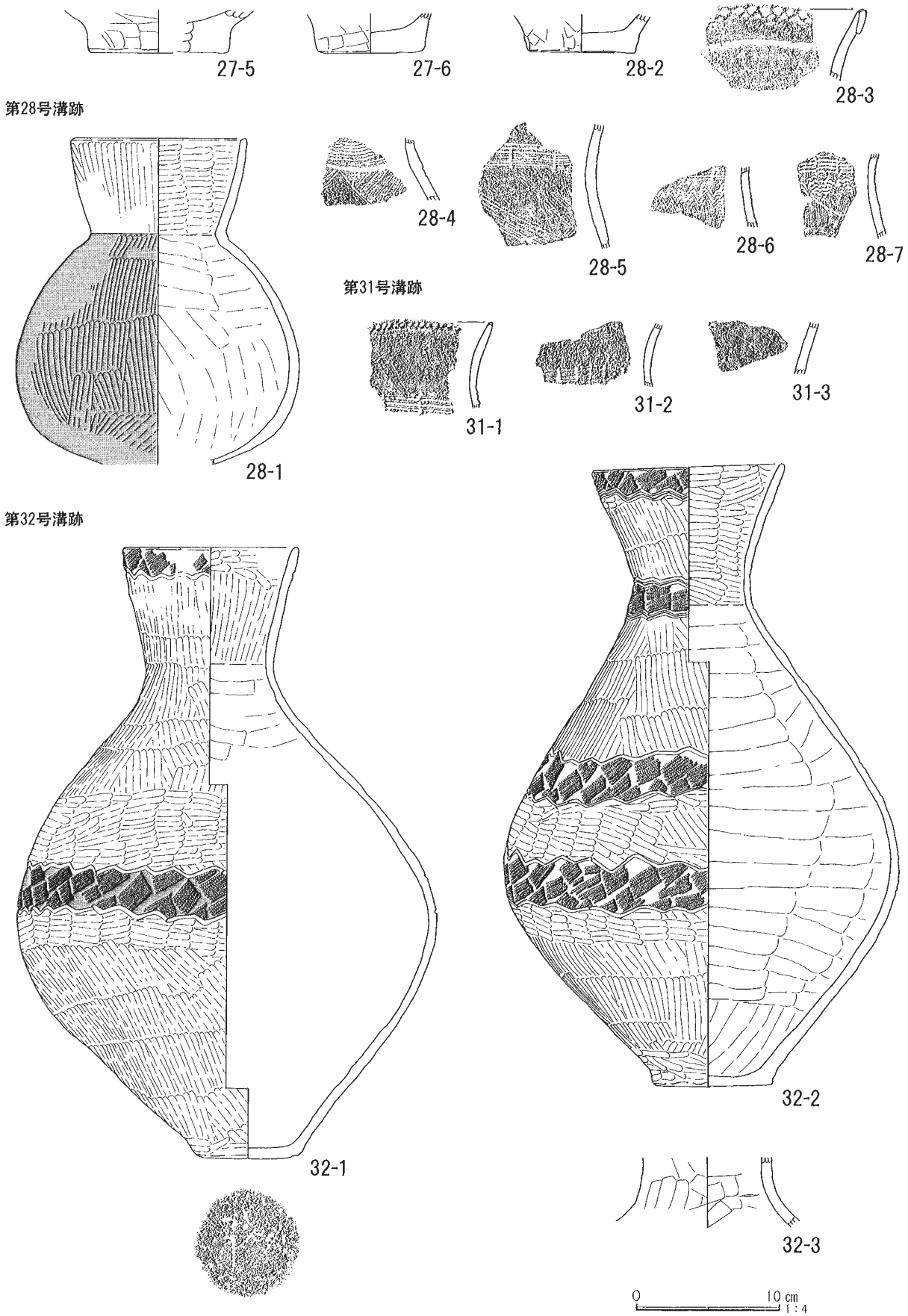
第36号溝跡（第24・30図）

平成19年度調査の第４区38－169グリッドに位置する。南側の調査区境で37号溝跡を切っている。なお、平成14年度報告第２区では確認されていないことから調査区外の範囲内で終息する可能性がある。

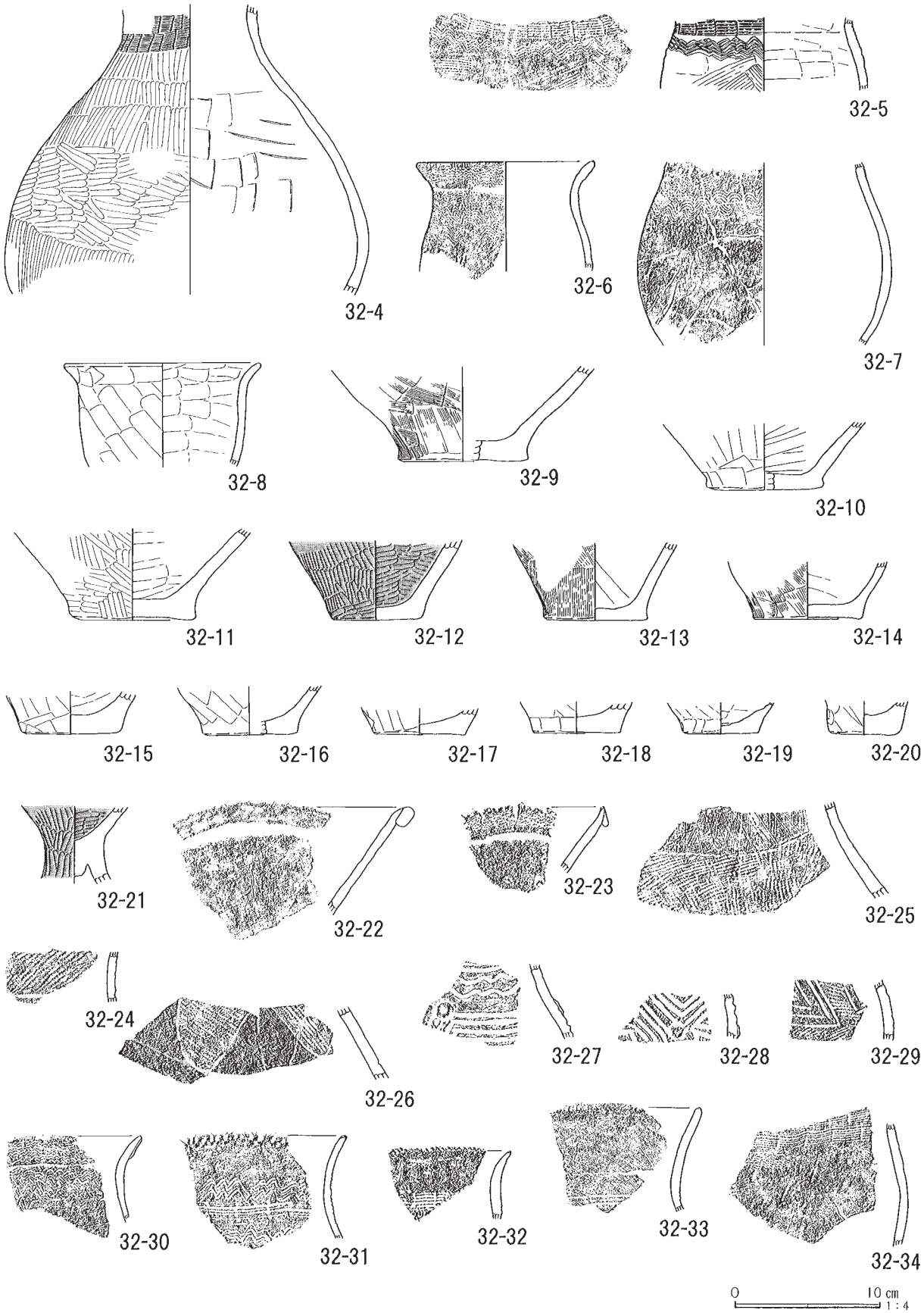
北西から南東方向に走るが、大半が調査区外にある。検出された長さは1.2mと短く、幅は不明であ



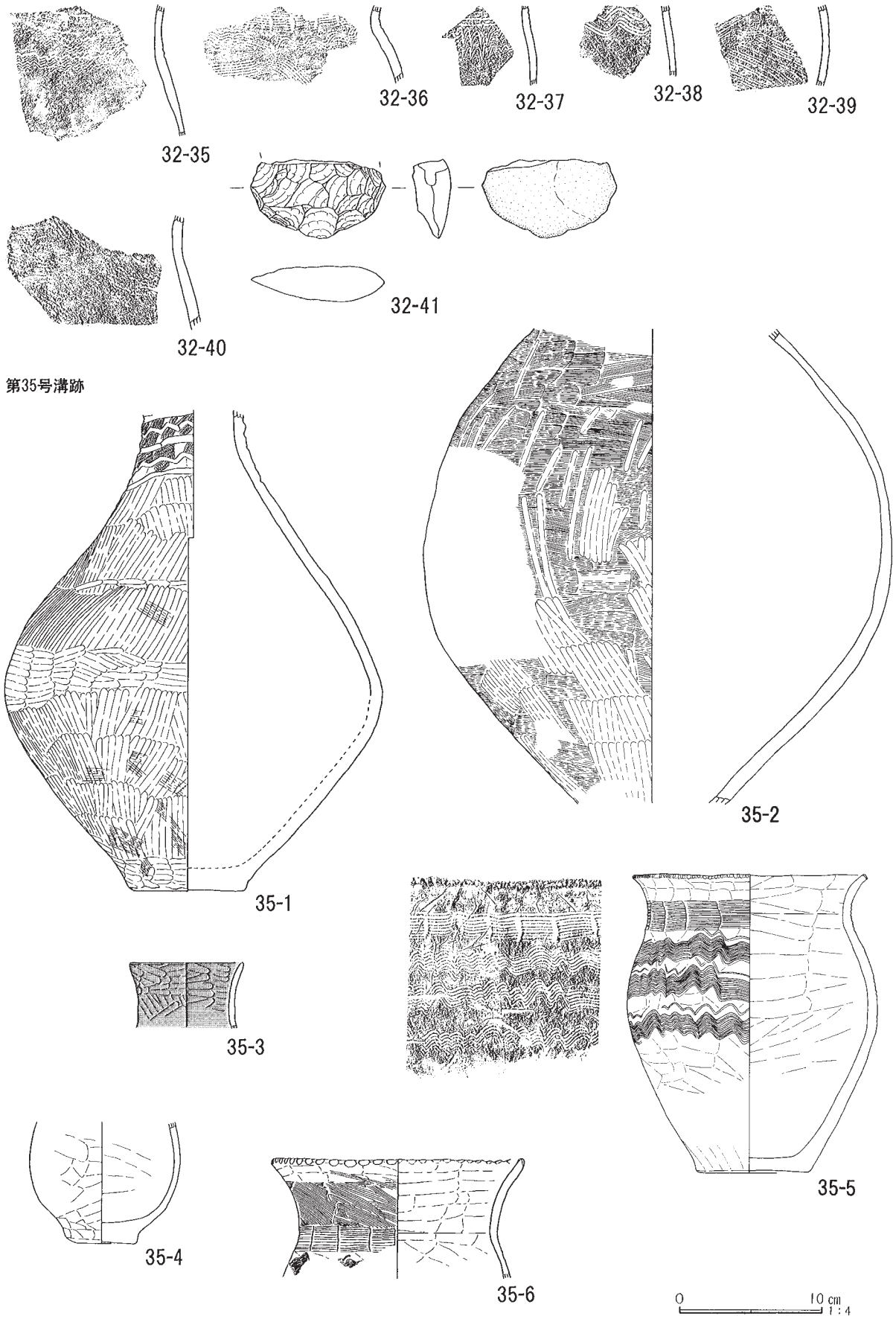
第31図　溝跡出土遺物（1）



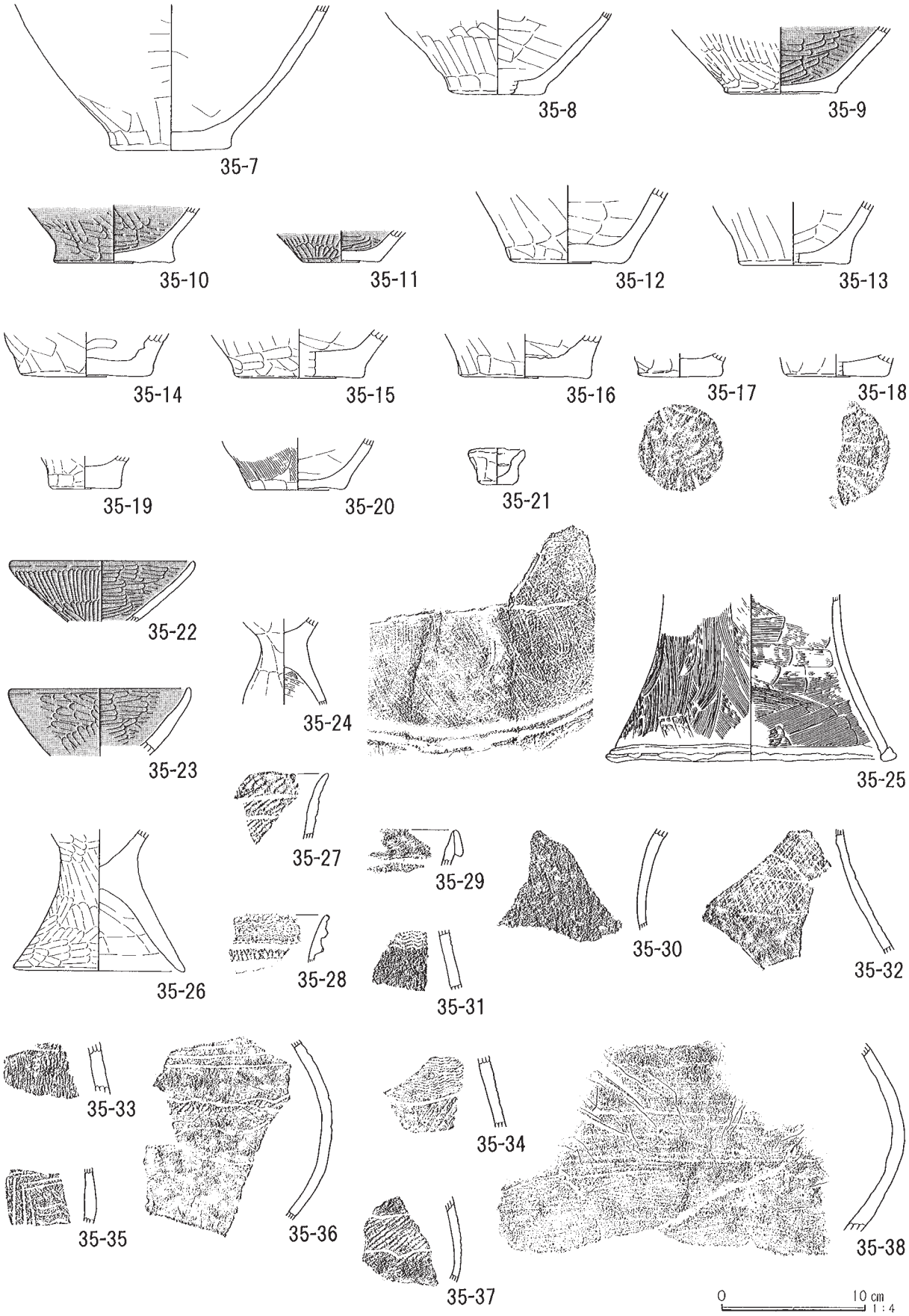
第32図　溝跡出土遺物（2）



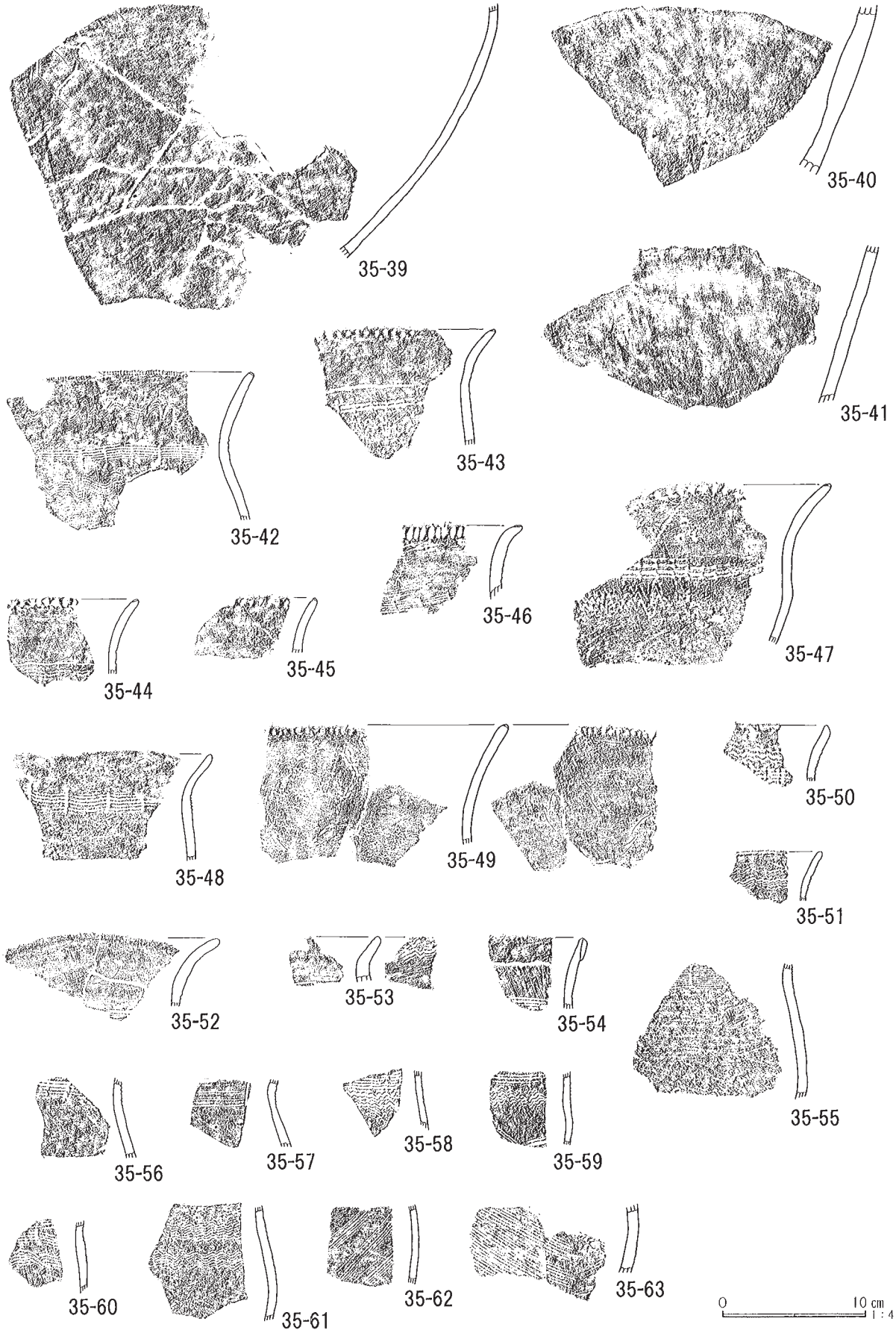
第33図　溝跡出土遺物（3）



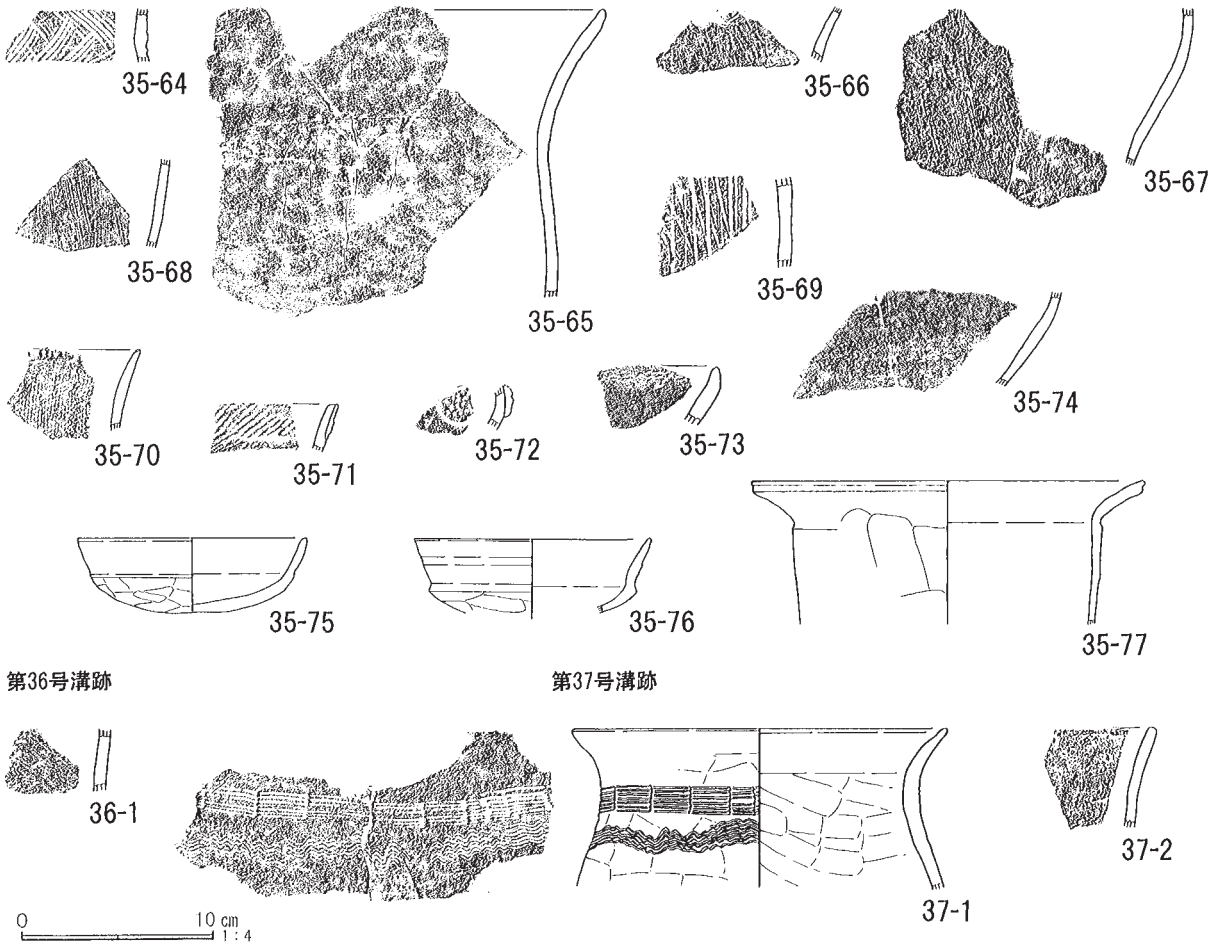
第34図　溝跡出土遺物（4）



第35図　溝跡出土遺物（5）



第36図　溝跡出土遺物（6）



第37図　溝跡出土遺物（7）

第７表　溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
3-1	3号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	AIN	褐灰色	B	胴上部片	
3-2	3号溝跡	打製石斧	最大長(7.25)cm、最大幅(7.9)cm、最大厚(2.2)cm。重量(130.4) g。粘板岩。上端のみ残。							
15-1	15号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	AHIN	灰褐色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
15-2	15号溝跡	打製石斧	最大長(12.8)cm、最大幅(7.5)cm、最大厚(2.5)cm。重量(289.8) g。粘板岩。上半分残。							
15-3	15号溝跡	打製石斧	最大長(11.0)cm、最大幅(8.25)cm、最大厚(2.45)cm。重量(284.6) g。粘板岩。上半分残。							
16-1	16号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	ABIKN	暗灰黄色	B	肩部片	
19-1	19号溝跡	弥生土器　壺	―	(2.0)	(7.4)	ABIJN	灰黄色	B	底部40%	底部外面木葉痕有。
19-2	19号溝跡	弥生土器高坏	―	(4.5)	(5.9)	ABCEHN	赤褐色	B	接～脚80%	坏部内面・外面赤彩。
19-3	19号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	ABCHMN	赤褐色	B	胴上部片	
19-4	19号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	ABDHIKN	黒褐色	B	胴上部片	
19-5	19号溝跡	弥生土器　甕	―	―	―	ABDHIN	黒褐色	B	頸～胴上片	
19-6	19号溝跡	弥生土器　甕	―	―	―	ABHIKN	灰褐色	B	頸～胴上片	
20-1	20号溝跡	弥生土器　壺	―	(9.6)	9.8	ABHN	浅黄橙色	B	胴～底70%	内外面磨耗顕著。
20-2	20号溝跡	弥生土器　壺	―	(2.05)	6.6	ABCEHIN	橙色	B	底部80%	
20-3	20号溝跡	弥生土器　甕	―	(3.1)	(9.5)	ABHIN	明赤褐色	B	底部25%	
20-4	20号溝跡	弥生土器　甕	―	(3.45)	6.9	ABDHN	にぶい黄橙色	B	底部100%	
20-5	20号溝跡	弥生土器　甕	―	(2.35)	5.8	ACIJMN	にぶい赤褐色	B	底部100%	
20-6	20号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	ABDMN	にぶい橙色	B	口縁部片	
20-7	20号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	ABCDIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
20-8	20号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	ACHIK	橙色	B	頸～肩部片	外面無文部赤彩。
20-9	20号溝跡	弥生土器　甕	―	―	―	ABEHKN	橙色	B	口～頸部片	
20-10	20号溝跡	土師器台付甕	―	(6.05)	(10.1)	ABDHIN	明赤褐色	B	台部40%	外面磨耗顕著。
20-11	20号溝跡	不明石製品	最大長10.1cm、最大幅6.1cm、最大厚1.9cm。重量(115.0) g。砂岩。片面一部剥離。両面平滑。							
22-1	22号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	ABHIK	灰黄褐色	B	胴上部片	
22-2	22号溝跡	弥生土器　壺	―	―	―	ABHN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
23-1	23号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABIN	灰黄色	B	肩部片	
23-2	23号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIMN	灰黄褐色	B	胴上部片	
24-1	24号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCEIKN	橙色	B	肩部片	内面剥離顕著。
27-1	27号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	暗青灰色	B	肩部片	末野産。
27-2	27号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	青灰色	B	胴部片	末野産。
27-3	27号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABN	黄灰色	B	胴部片	産地不明。
27-4	27号溝跡	土師器　甑	—	—	—	ABCKN	赤褐色	B	把手片	
27-5	27号溝跡	弥生土器　壺	—	(3.0)	(10.0)	ACHIJKN	橙色	B	底部30%	
27-6	27号溝跡	弥生土器　甕	—	(2.8)	(7.5)	ABDHIKMN	にぶい黄橙色	B	底部40%	
28-1	28号溝跡	土師器　壺	(12.4)	(23.0)	—	ABHJN	にぶい橙色	B	40%	胴部外赤彩、大半剥落。内面やや摩耗。
28-2	28号溝跡	弥生土器　甕	—	(2.75)	(7.6)	ABDHIN	明赤褐色	B	底部40%	
28-3	28号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABEIKMN	にぶい橙色	B	口～頸部片	
28-4	28号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	BDHIMN	赤褐色	B	頸～肩部片	外面無文部赤彩。
28-5	28号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABCIJMN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	
28-6	28号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGIN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
28-7	28号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	AHIKN	黒褐色	B	頸～胴上片	
31-1	31号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	AHIJKN	にぶい赤褐色	B	口～頸部片	
31-2	31号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHIK	灰黄褐色	B	頸部片	
31-3	31号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHK	にぶい黄橙色	B	胴下部片	
32-1	32号溝跡	弥生土器　壺	12.9	43.2	7.6	ABCDHIKN	黒褐色	B	ほぼ完形	底部外面木葉痕有。
32-2	32号溝跡	弥生土器　壺	13.6	44.05	8.5	ABDIKN	灰褐色	B	ほぼ完形	
32-3	32号溝跡	弥生土器　壺	—	(5.0)	—	ABDIN	明黄褐色	B	頸部80%	内面輪積痕有。
32-4	32号溝跡	弥生土器　壺	—	(20.15)	—	ADIJK	橙色	B	頸～胴70%	
32-5	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(5.1)	—	AHIN	にぶい褐色	B	頸～胴40%	
32-6	32号溝跡	弥生土器　甕	(12.4)	(7.6)	—	ABHN	暗褐色	B	口～胴25%	№30と同一個体。
32-7	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(12.7)	—	ABHIJM	にぶい赤褐色	B	胴部40%	
32-8	32号溝跡	弥生土器　甕	(13.8)	(7.3)	—	ABIKMN	にぶい赤褐色	B	口～胴25%	
32-9	32号溝跡	弥生土器　壺	—	(6.55)	(9.1)	ABDN	橙色	B	胴～底30%	
32-10	32号溝跡	弥生土器　壺	—	(4.6)	(8.1)	ABCDEIJKN	赤褐色	B	胴～底40%	
32-11	32号溝跡	弥生土器　壺	—	(6.35)	8.8	ABDHN	明赤褐色	B	胴～底70%	
32-12	32号溝跡	弥生土器　壺	—	(5.5)	6.3	ABEHIKN	にぶい橙色	B	胴～底80%	内外面赤彩、外面大半剥落。
32-13	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(5.4)	(7.3)	ABDIN	にぶい黄褐色	B	胴～底70%	内外面やや磨耗。
32-14	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(4.0)	7.7	ABDHN	にぶい黄橙色	B	胴～底100%	
32-15	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(2.9)	(6.9)	ABIJKN	浅黄色	B	底部50%	
32-16	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(3.35)	(6.7)	ABDHN	にぶい黄橙色	B	底部30%	
32-17	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(1.9)	(6.4)	ABDHMN	にぶい褐色	B	底部40%	
32-18	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(2.2)	6.1	ABDIMN	黒褐色	B	底部100%	
32-19	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(2.15)	(5.2)	ABCN	橙色	B	底部45%	
32-20	32号溝跡	弥生土器　甕	—	(2.35)	4.8	ABDHIKN	灰褐色	B	底部80%	
32-21	32号溝跡	弥生土器高坏	—	(5.4)	—	ABCHKN	明赤褐色	B	接合部100%	坏部内面・外面赤彩。
32-22	32号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABIN	黄橙色	B	口縁部片	
32-23	32号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
32-24	32号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIJKN	にぶい橙色	B	頸部片	内面剥離顕著。
32-25	32号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDN	橙色	B	肩部片	内面剥離顕著。
32-26	32号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDN	明赤褐色	B	胴上部片	外面無文部赤彩。
32-27	32号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIJN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
32-28	32号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	AHIJN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
32-29	32号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
32-30	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	口～胴上片	№6と同一個体。
32-31	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIMN	灰黄褐色	B	口～胴上片	
32-32	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	明褐灰色	B	口～頸部片	
32-33	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい橙色	B	口～頸部片	
32-34	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABKN	にぶい褐色	B	頸～胴上片	
32-35	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ACIJKMN	橙色	B	頸～胴上片	
32-36	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGIKN	褐色	B	頸～胴上片	
32-37	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHKN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	
32-38	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABEHJKN	にぶい褐色	B	胴上部片	
32-39	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	胴部片	
32-40	32号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	
32-41	32号溝跡	打製石斧	最大長(5.6)㎝、最大幅(9.6)㎝、最大厚(2.65)㎝。重量(147.8)ｇ。粘板岩。刃部のみ残。							
35-1	35号溝跡	弥生土器　壺	—	(34.1)	8.4	ABDHIKN	にぶい黄色	B	頸～底100%	

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
35-2	35号溝跡	弥生土器　壺	—	(33.8)	—	ABEIKN	赤褐色	B	胴部80%	外面磨耗、内面剥離顕著。
35-3	35号溝跡	弥生土器　壺	(8.1)	(4.6)	—	ABCDHIN	明赤褐色	B	口～頸25%	内外面赤彩、外面大半剥落。
35-4	35号溝跡	弥生土器　壺	—	(8.6)	5.0	ACDH	浅黄橙色	B	胴～底60%	内外面磨耗顕著。
35-5	35号溝跡	弥生土器　甕	16.4	21.2	7.8	ABDEIKN	赤褐色	B	70%	
35-6	35号溝跡	弥生土器　甕	19.0	(8.5)	—	ABCJ	暗赤褐色	B	口～胴50%	
35-7	35号溝跡	弥生土器　壺	—	(10.3)	(8.6)	ABEHKN	暗灰色	B	胴～底20%	
35-8	35号溝跡	弥生土器　壺	—	(5.95)	6.9	ABCDGHN	にぶい赤褐色	B	胴～底70%	
35-9	35号溝跡	弥生土器　壺	—	(4.7)	(8.1)	ABDHIMN	にぶい黄橙色	B	胴～底30%	内面赤彩。外面磨耗顕著。
35-10	35号溝跡	弥生土器　壺	—	(3.9)	8.6	ACEHIMN	明赤褐色	B	底部100%	内外面赤彩、磨耗顕著。
35-11	35号溝跡	弥生土器　壺	—	(2.2)	5.55	ABHIN	暗赤色	B	底部100%	内外面赤彩。
35-12	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(5.4)	8.4	ABDHIN	にぶい橙色	B	胴～底80%	
35-13	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(4.4)	(8.0)	ABDEIKN	明赤褐色	B	胴～底30%	
35-14	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(3.1)	9.4	ABDHKMN	灰黄色	B	底部100%	
35-15	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(3.4)	(9.2)	ABDHIMN	にぶい黄橙色	B	底部30%	
35-16	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(3.0)	9.4	AEHIJN	にぶい赤褐色	B	底部100%	
35-17	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(1.7)	6.0	ABEIN	にぶい橙色	B	底部100%	底部外面木葉痕有。
35-18	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(1.5)	(7.5)	ABDHIKN	橙色	B	底部45%	底部外面木葉痕有。
35-19	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(2.3)	(5.2)	ABEIM	浅黄橙色	B	底部45%	
35-20	35号溝跡	弥生土器　甕	—	(3.6)	6.8	ABDEHIKN	浅黄橙色	B	底部100%	
35-21	35号溝跡	弥生ミニチュア土器	4.05	2.6	2.4	ACHN	明赤褐色	B	ほぼ完形	内面輪積痕有。
35-22	35号溝跡	弥生土器高坏	(13.2)	(4.3)	—	ABHKN	赤褐色	A	坏部25%	内外面赤彩。
35-23	35号溝跡	弥生土器高坏	(13.0)	4.85)	—	ABHN	浅黄橙色	B	坏部20%	内外面赤彩大半剥落、磨耗顕著。
35-24	35号溝跡	弥生土器高坏	—	(6.2)	—	ABDEHMN	浅黄橙色	B	接合部100%	内外面磨耗顕著。
35-25	35号溝跡	弥生土器高坏	—	(11.8)	(20.6)	AEGN	橙色	B	脚部70%	内面下部輪積痕有。
35-26	35号溝跡	弥生土器高坏	—	(9.9)	12.2	ABCHKN	にぶい黄橙色	B	接～脚90%	
35-27	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEKN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	
35-28	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	AHN	灰黄褐色	B	口縁部片	
35-29	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIMN	灰黄褐色	B	口縁部片	
35-30	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABGIKN	にぶい橙色	B	頸部片	内面赤彩。内面磨耗顕著。
35-31	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIMN	赤褐色	B	肩部片	外面無文部赤彩。内面摩耗顕著。
35-32	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGIN	にぶい橙色	B	肩部片	外面やや磨耗。
35-33	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHN	橙色	B	肩部片	
35-34	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCMN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
35-35	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHKN	褐灰色	B	胴部片	
35-36	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDHIKN	にぶい褐色	B	胴部片	№37と同一個体。
35-37	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	胴部片	№36と同一個体。
35-38	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHN	灰黄褐色	B	胴部片	
35-39	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIMN	にぶい橙色	B	胴下部片	
35-40	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHJN	明赤褐色	B	胴下部片	
35-41	35号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKMN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	
35-42	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	
35-43	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKMN	にぶい褐色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
35-44	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHKN	褐灰色	B	口～頸部片	
35-45	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIKN	にぶい橙色	B	口縁部片	
35-46	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABCH	褐色	B	口～頸部片	
35-47	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABEIMN	橙色	B	口～胴上片	内外面磨耗顕著。
35-48	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABKMN	明赤褐色	B	口～胴上片	
35-49	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIM	にぶい黄橙色	B	口～胴上片	外面摩耗顕著。
35-50	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIMN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
35-51	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHKN	黒褐色	B	口～頸部片	
35-52	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ADEHKMN	赤褐色	B	口～頸部片	内外面赤彩。
35-53	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHN	褐灰色	B	口～頸部片	
35-54	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEHIN	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	
35-55	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABGIJMN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	
35-56	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABCHIN	にぶい赤褐色	B	頸～胴上片	
35-57	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHKMN	灰褐色	B	頸～胴上片	
35-58	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABCHN	黒褐色	B	頸～胴上片	
35-59	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	BCHIN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	
35-60	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIK	褐色	B	頸～胴部片	
35-61	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABCHKMN	橙色	B	胴上部片	外面やや磨耗。
35-62	35号溝跡	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIK	灰黄褐色	B	胴部片	

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
35-63	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHMN	浅黄橙色	B	胴部片	
35-64	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	BDHN	にぶい黄橙色	B	胴部片	
35-65	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKMN	黒褐色	B	口～胴部片	
35-66	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	BDHN	黒褐色	B	頸部片	
35-67	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABGIN	にぶい赤褐色	B	胴下部片	
35-68	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABHN	にぶい赤褐色	B	胴下部片	
35-69	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴部片	
35-70	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHKM	明赤褐色	B	口縁部片	
35-71	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEGIKN	灰黄褐色	B	口縁部片	
35-72	35号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
35-73	35号溝跡	弥生土器高坏	－	－	－	ADIJKN	赤褐色	B	口縁部片	内面・外面無文部赤彩。
35-74	35号溝跡	弥生土器高坏	－	－	－	ABCEIN	にぶい橙色	B	坏部片	内面・外面上部赤彩。
35-75	35号溝跡	土師器　坏	12.2	4.0	－	ABEGHKMN	橙色	B	80%	
35-76	35号溝跡	土師器　坏	(12.6)	(3.9)	－	ABHJKN	明赤褐色	B	20%	
35-77	35号溝跡	土師器　甕	(20.8)	(7.5)	－	ABDEHKN	にぶい黄橙色	B	口～胴25%	
36-1	36号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABCGHI	黄灰色	B	胴下部片	
37-1	37号溝跡	弥生土器　甕	(19.8)	(8.6)	－	ABCDEIKN	明赤褐色	B	口～胴25%	
37-2	37号溝跡	弥生土器　甕	－	－	－	ABDGIK	褐灰色	B	口縁部片	

る。確認面からの深さは0.2m前後を測り、断面形は船底状を呈する。覆土は八層（５～12層）からなる。ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、35号溝跡からの流れ込みである弥生土器甕の胴下部片（第37図36－１）のみである。内外面ヘラナデ調整で外面は斜位、内面は横位に施されている。この他に図示不可能な遺物で古墳時代後期の土師器甕の小片も検出されているが、これは後述する37号溝跡からの流れ込みと思われる。また37号溝跡からは９世紀後半の須恵器坏の小片が検出されているが、これは本溝跡からの流れ込みと思われる。よって、本溝跡の時期は９世紀後半を中心とする段階と思われる。

第37号溝跡（第24・30図）

平成19年度調査の第４区38－169グリッドに位置する。西側で36号溝跡に切られており、東側では35号溝跡を切っている。

ほぼ東西方向に走り、東西ともに調査区外に延びる。検出された長さは4.38m、幅は南側立ち上がりが検出されていないため定かではないが、平成14年度報告第２区では確認されていないことから調査区外の範囲で終息すると思われる。確認面からの深さは0.45m前後であり、断面形は船底状を呈する。覆土は五層（13～17層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、35号溝跡からの流れ込みである弥生土器甕（第37図37－１・２）のみである。１は口縁部から胴上部までの部位。口縁部はやや受け口状を呈する。文様は頸部に７本一単位の簾状文、その下に同一工具による波状文が巡る。外面の無文部及び内面の調整はヘラナデである。２は無文の口縁部片。外面は斜位、内面は横位のヘラナデ調整である。この他に図示不可能な遺物で７世紀後半の土師器坏蓋模倣坏と甕、９世紀後半の須恵器坏の小片が検出されているが、新旧関係を考慮すると前者が本溝跡、後者が36号溝跡に伴う。よって、本溝跡の時期は７世紀後半を中心とする段階と思われる。

６　土　坑

第１号土坑（第38図）

平成18年度調査の第１区14－182・183グリッドに位置する。南東部で２号溝跡を切っている。東側立

ち上がり付近のみの検出であり、大半が調査区外にある。

正確な規模及び平面プランは不明であるが、検出できた南北は3.38m、東西は0.56mを測る。南北にテラス状の段を持つが、その他はほぼ垂直に掘り込まれており、底面はやや凹凸がみられた。確認面からの深さは0.57mを測る。覆土は九層（４～12層）からなる。混入物にブロック土等がみられたが、ほぼレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は２号溝跡との新旧関係から奈良・平安時代以降としか言えない。

第２号土坑（第38図）

平成18年度調査の第１区14－187グリッドに位置する。南側で３号土坑を切っている。

長軸3.89m、短軸1.63mのややいびつな隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは0.35mを測る。立ち上がりはやや緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は四層（１～４層）からなる。ブロック土を含んでいたことから人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物に図示可能なものはみられなかったが、弥生土器や７世紀後半の土師器の小片が検出されている。前者は流れ込みであることから本土坑の時期は７世紀後半を中心とする段階と思われる。

第３号土坑（第38図）

平成18年度調査の第１区14－187グリッドに位置する。中央大半を２号土坑に切られており、検出できたのは東側及び西側の立ち上がり付近のみである。

長軸2.32m、短軸0.9m程の楕円形を呈する。確認面からの深さは0.2mを測る。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面はほぼ平坦であった。覆土は確認できた所が少ないが、四層（５～８層）からなる。上層の５層では火山灰が微量みられた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は２号土坑との新旧関係から７世紀後半以前としか言えない。

第４号土坑（第38図）

平成18年度調査の第１区17－187・188グリッドに位置する。北側を５号溝跡に切られており、東側では４号住居跡、南側では２号竪穴状遺構を切っている。西側は調査区外にある。

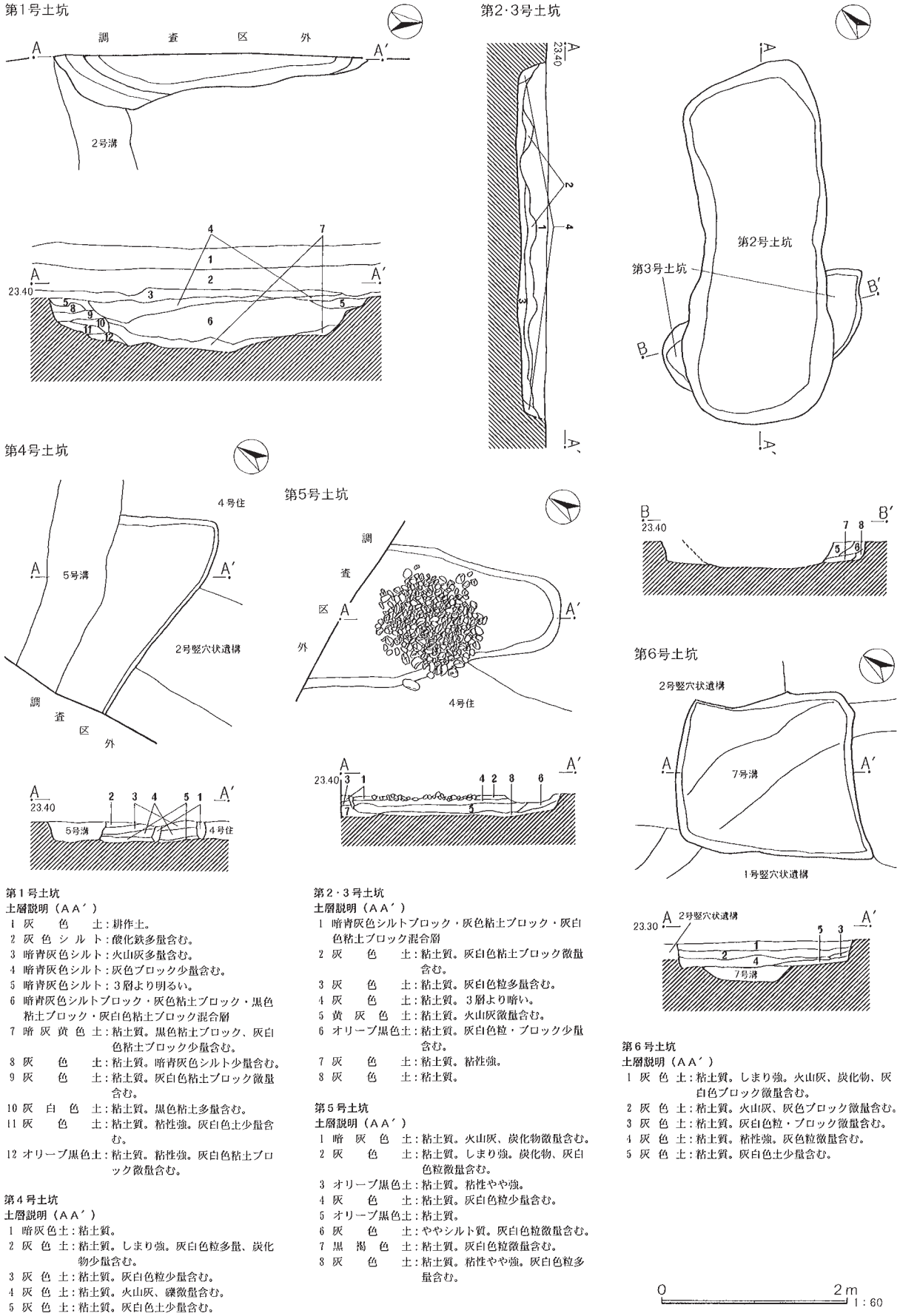
正確な規模及び平面プランは不明であるが、検出できた東西は2.4m、南北は1.13mを測り、おそらくいびつな楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.18mを測る。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は五層（１～５層）からなる。中層の４層では火山灰が微量みられた。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は４号住居跡との新旧関係から８世紀以降としか言えない。

第５号土坑（第38図）

平成18年度調査の第１区16・17－187・188グリッドに位置する。西側で４号住居跡を切っており、北側は調査区外にある。

正確な規模及び平面プランは不明であるが、検出できた南北は2.35m、東西は1.54mを測り、平面プランはおそらく楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.23mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。検出された範囲ほぼ中央付近では覆土上面から礫がまとまって検出され



第1号土坑
土層説明（AA′）

1 灰　色　土：耕作土。
2 灰色シルト：酸化鉄多量含む。
3 暗青灰色シルト：火山灰多量含む。
4 暗青灰色シルト：灰色ブロック少量含む。
5 暗青灰色シルト：3層より明るい。
6 暗青灰色シルトブロック・灰色粘土ブロック・黒色粘土ブロック・灰白色粘土ブロック混合層
7 暗灰黄色土：粘土質。黒色粘土ブロック、灰白色粘土ブロック少量含む。
8 灰　色　土：粘土質。暗青灰色シルト少量含む。
9 灰　色　土：粘土質。灰白色粘土ブロック微量含む。
10 灰白色　土：粘土質。黒色粘土多量含む。
11 灰　色　土：粘土質。粘性強。灰白色土少量含む。
12 オリーブ黒色土：粘土質。粘性強。灰白色粘土ブロック微量含む。

第4号土坑
土層説明（AA′）

1 暗灰色土：粘土質。
2 灰色土：粘土質。しまり強。灰白色粒多量、炭化物少量含む。
3 灰色土：粘土質。灰白色粒少量含む。
4 灰色土：粘土質。火山灰、礫微量含む。
5 灰色土：粘土質。灰白色土少量含む。

第2・3号土坑
土層説明（AA′）

1 暗青灰色シルトブロック・灰色粘土ブロック・灰白色粘土ブロック混合層
2 灰　色　土：粘土質。灰白色粘土ブロック微量含む。
3 灰　色　土：粘土質。灰白色粒多量含む。
4 灰　色　土：粘土質。3層より暗い。
5 黄灰色　土：粘土質。火山灰微量含む。
6 オリーブ黒色土：粘土質。灰白色粒・ブロック少量含む。
7 灰　色　土：粘土質。粘性強。
8 灰　色　土：粘土質。

第5号土坑
土層説明（AA′）

1 暗灰色　土：粘土質。火山灰、炭化物微量含む。
2 灰　色　土：粘土質。しまり強。炭化物、灰白色粒微量含む。
3 オリーブ黒色土：粘土質。粘性やや強。
4 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
5 オリーブ黒色土：粘土質。
6 灰　色　土：ややシルト質。灰白色粒微量含む。
7 黒褐色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
8 灰　色　土：粘土質。粘性やや強。灰白色粒多量含む。

第6号土坑
土層説明（AA′）

1 灰色土：粘土質。しまり強。火山灰、炭化物、灰白色ブロック微量含む。
2 灰色土：粘土質。火山灰、灰色ブロック微量含む。
3 灰色土：粘土質。灰白色粒・ブロック微量含む。
4 灰色土：粘土質。粘性強。灰色粒微量含む。
5 灰色土：粘土質。灰白色土少量含む。

第38図　第1～6号土坑

た。覆土は八層（１～８層）からなり、ほぼレンズ状に堆積していたことから礫は自然堆積の後、人為的に投入されたと思われる。性格については不明と言わざるを得ない。

出土遺物に図示可能なものはみられなかったが、弥生土器や７世紀後半以降の土師器の小片が検出されている。前者は流れ込みであることから本土坑の時期は７世紀後半以降としか言えない。

第６号土坑（第38図）

平成18年度調査の第１区16・17－188グリッドに位置する。西側で１号竪穴状遺構、北側で２号竪穴状遺構を切っている。また直接的な切り合い関係にないが、本土坑下には７号溝跡が走っており、本土坑の方が新しい。

長軸1.93m、短軸1.76mの方形に近い長方形を呈する。確認面からの深さは0.25mを測る。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面はほぼ平坦であった。覆土は五層（１～５層）からなり、１・２層では火山灰が微量認められた。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物に図示可能なものはみられず、弥生土器の小片が検出されているが、流れ込みと思われる。よって、本土坑の時期は他の遺構との新旧関係から古墳時代後期以降としか言えない。

第７号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区15・16－187・188グリッドに位置する。南東部で８号土坑を切っている。

長軸2.75m、短軸2.13mを測る。平面プランは北西部のみいびつであるが、ほぼ長方形を呈する。立ち上がりは鋭角であり、底面はやや凹凸がみられ、やや北側に傾いていた。確認面からの深さは0.32mを測る。覆土は三層（１～３層）からなる。厚く堆積した１層には火山灰が微量認められた。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第８号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区15・16－188グリッドに位置する。北西部を７号土坑に切られている。

長軸1.6m、短軸1.11mのややいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは0.1mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面にはピット状の掘り込みが多数みられた。単独のピットは本土坑周辺に多数存在することから伴わない可能性が高い。覆土は二層（１・２層）からなる。上層の１層では火山灰が微量認められた。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

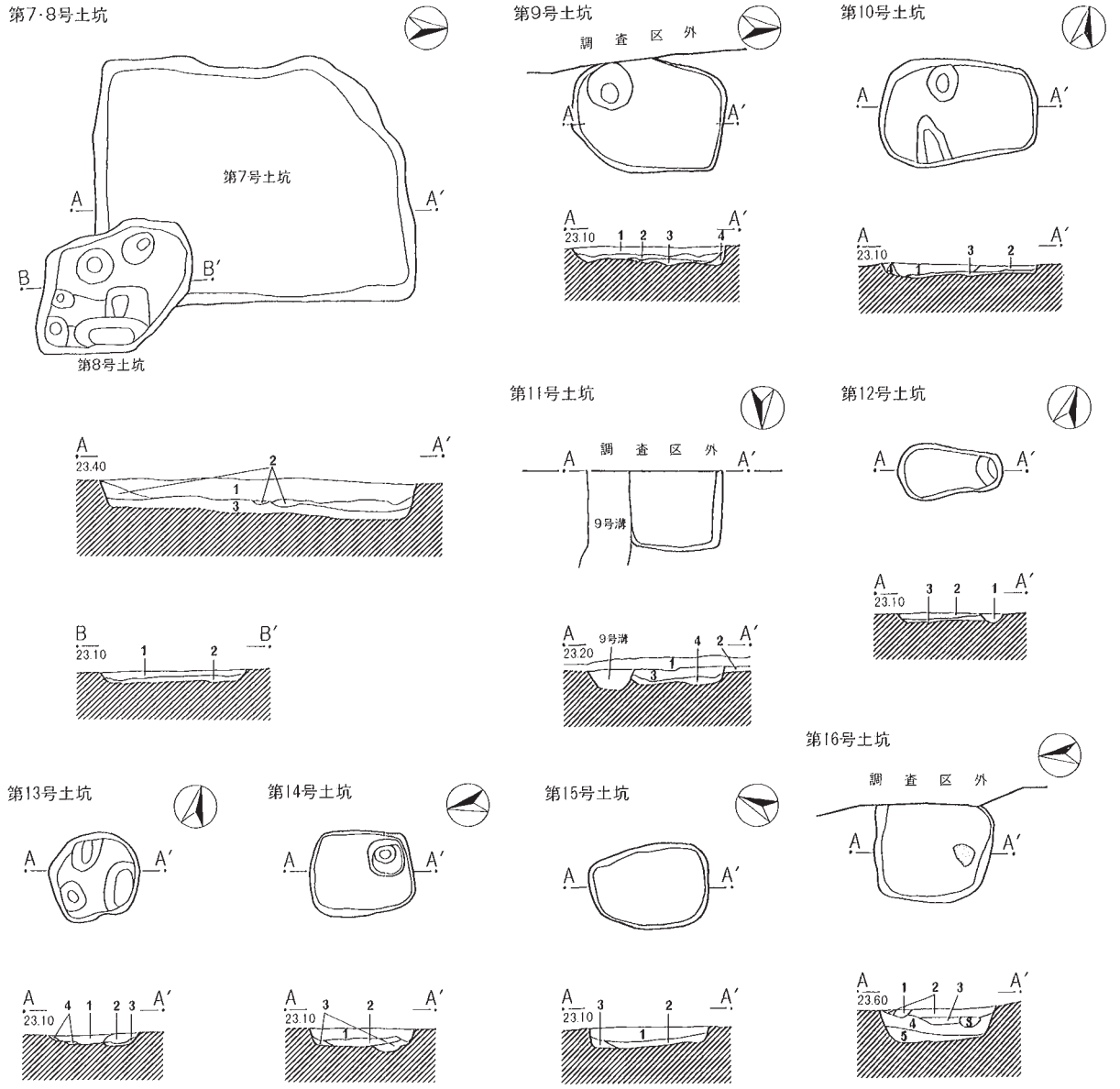
遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第９号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区17－188グリッドに位置する。直接的な切り合い関係にないが、本土坑の上には１号竪穴状遺構があり、本土坑の方が古い。南西隅のみ調査区外にある。

長軸1.32m、短軸0.98mを測り、ややいびつな隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは0.16mを測る。立ち上がりは南側のみ緩やか、その他はほぼ垂直に近い。底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。南西隅からはピット状の掘り込みが検出されたが、伴うものか不明である。覆土は四層（１～４層）からなる。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は他遺構との新旧関係から古墳時代後期以前としか言えない。



第７号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。火山灰、炭化物、灰白色粒・ブロック微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。
3 灰白色土：粘土質。灰色土少量含む。

第８号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。火山灰、炭化物、灰白色粒微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。

第９号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。
3 灰 色 土：粘土質。灰白色土少量含む。
4 青灰色土：粘土質。灰白色粒少量含む。

第10号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。１層より明るい。
3 灰 色 土：粘土質。灰白色土少量含む。
4 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。

第11号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。火山灰微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。１層より明るい。
3 灰 色 土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
4 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。

第12号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。１層より明るい。
3 灰 色 土：粘土質。灰白色土少量含む。

第13号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。炭化物微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。１層より明るい。
3 灰 色 土：粘土質。灰白色土少量含む。２層より明るい。
4 灰白色土：粘土質。灰色ブロック少量含む。

第14号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。
2 灰色粘土：１層より明るい。
3 灰色粘土：２層より明るい。

第15号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。
2 灰色粘土：１層より明るい。
3 暗青灰色粘土

第16号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 砂 層
2 灰 色 土：粘土質。灰白色粘土ブロック少量、暗青灰色シルトブロック微量含む。
3 黄灰色土：粘土質。粘性強。
4 灰 色 土：粘土質。火山灰少量含む。
5 灰 色 土：粘土質。粘性強。

0 2m 1：60

第39図　第７～16号土坑

第10号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区17－188・189グリッドに位置する。本土坑も９号土坑と同じく直接的な切り合い関係にないが、上に１号竪穴状遺構が位置しており、本土坑の方が古い。

長軸1.36m、短軸0.93mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは0.12mを測る。立ち上がりは西側のみが緩やかであり、その他はほぼ垂直に近い。底面はほぼ平坦であり、南北両側にはピット状の掘り込みがみられたが、本土坑に伴うものか不明である。覆土は四層（１～４層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は他遺構との新旧関係から古墳時代後期以前としか言えない。

第11号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区17－189グリッドに位置する。東側を９号溝跡に切られており、南側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた南北は0.7m、東西は0.8mを測り、平面プランはおそらく方形ないし長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.12mであったが、調査区境の土層断面観察では0.16mの深さであったことが確認された。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は二層（３・４層）からなる。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第12号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区15－188グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸0.92m、短軸0.47mのやや瓢箪状を呈する。確認面からの深さは0.07mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であったが、東端にはピット状の掘り込みがみられた。層位をみると確認面から掘り込まれていることから伴わない可能性もある。覆土はピット状の掘り込み部分も含めて三層（１～３層）からなる。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第13号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区15－188グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径0.75m前後の不整円形を呈する。確認面からの深さは0.1mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であるが、ピット状の堀り込みが三つ検出された。底面からの深さは0.03m前後を測る。覆土は四層（１～４層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第14号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区14－188グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸0.88m、短軸0.74mの長方形を呈する。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面はほぼ平坦であった。確認面からの深さは0.16mを測る。南東隅にはピット状の掘り込みがみられた。径0.3m前後、底面からの深さは0.05mを測る。覆土は三層（１～３層）からなる。下層の２・３層は粘土であった。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第15号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区14－188グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸1.03m、短軸0.74mの楕円形状を呈する。確認面からの深さは0.17mを測る。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面はほぼ平坦であった。覆土は三層（１～３層）からなる。混入物はみられず、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第16号土坑（第39図）

平成18年度調査の第１区14－189グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。東側の立ち上がりは調査区外にある。

一辺0.9m前後の隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.28mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であった。覆土は五層（１～５層）からなる。レンズ状に堆積していたが、上層の２層ではブロック土、中層の４層では火山灰が少量認められたことから下層は自然堆積、上層については人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第17号土坑（第40図）

平成18年度調査の第１区14－197グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸1.15m、短軸1.04mのほぼ方形を呈する。立ち上がりは緩やかであり、底面は東側一段下がる。確認面からの深さは東側の最も深い所で0.15mを測る。覆土は六層（１～６層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第18号土坑（第40図）

平成18年度調査の第１区14・15－197グリッドに位置する。北東及び北西隅を時期不明のピットに切られている。

一辺1.25m程のほぼ方形を呈する。確認面からの深さは0.1mを測る。立ち上がりは鋭角であり、底面はほぼ平坦であるが、ピット状の堀り込みが三つ検出された。底面からの深さは0.05m前後を測る。覆土は六層（１～６層）からなる。ランダムな層位であり、人為的な埋め戻しか自然堆積かは不明である。

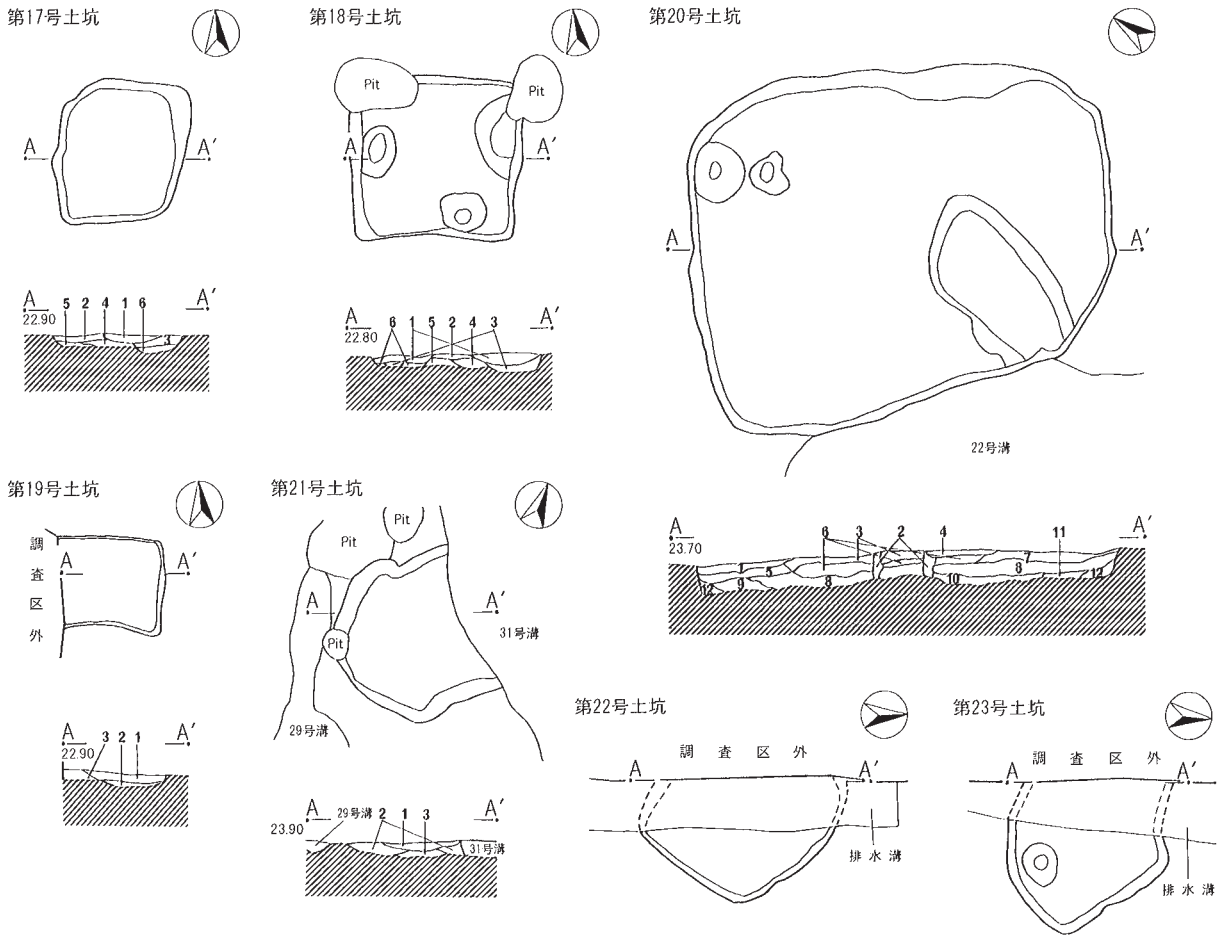
遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

第19号土坑（第40図）

平成18年度調査の第１区15－198グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。西側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた東西は0.82m、南北は0.76mを測り、平面プランはおそらく長方形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.1mを測る。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は三層（１～３層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。



第17号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。
3 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。
4 灰 色 土：粘土質。灰白色土多量含む。粘性強。
5 灰 色 土：粘土質。灰白色土多量含む。粘性強。４層より明るい。
6 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。

第18号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。１層より明るい。
3 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。
4 灰 色 土：粘土質。
5 灰 色 土：粘土質。４層より明るい。
6 灰 色 土：粘土質。灰白色粒多量含む。

第19号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
2 灰 色 土：粘土質。灰白色土多量含む。粘性強。
3 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。

第20号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰白色シルト：炭化物多量含む。
2 灰 白 色 砂
3 黄 灰 色 土：粘土質。炭化物多量含む。
4 灰白色シルト：酸化鉄少量含む。
5 灰白色シルト：炭化物微量含む。
6 灰白色シルト：黄灰色土多量、炭化物微量含む。
7 灰 白 色 土：シルト質。炭化物微量含む。
8 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
9 灰 色 土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
10 灰 白 色 土：粘土質。酸化鉄微量含む。
11 明 青 灰 色 土：シルト質。酸化鉄微量含む。
12 黄 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量含む。

第21号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：シルト質。灰白色粒少量含む。
2 褐灰色土：焼土粒、炭化物、灰白色粒少量含む。
3 黄灰色土：シルト質。灰白色ブロック少量含む。

第22号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 盛 土
2 灰 色 土：酸化鉄多量、火山灰少量含む。
3 灰 白 色 土：褐灰色ブロック、にぶい黄褐色ブロック少量、火山灰微量含む。
4 にぶい黄褐色土：火山灰微量含む。
5 褐 灰 色 土：にぶい黄褐色粒少量、火山灰、焼土粒微量含む。
6 黄灰色シルト：灰白色粒多量、炭化物微量含む。
7 褐 灰 色 土：灰白色シルト多量含む。
8 黄灰色シルト：灰色ブロック、灰白色粒少量含む。
9 灰 色 土：シルト質。灰白色ブロック少量含む。
10 灰色シルト：灰白色ブロック多量、褐灰色粒・ブロック少量含む。

第23号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 盛 土
2 灰 色 土：酸化鉄多量、火山灰少量含む。
3 灰 白 色 土：褐灰色ブロック、にぶい黄褐色ブロック少量、火山灰微量含む。
4 にぶい黄褐色土：火山灰微量含む。
5 黄灰色シルト：褐灰色粒少量含む。
6 黄灰色シルト
7 灰色シルト：灰白色ブロック微量含む。
8 灰色シルト：褐灰色粒・ブロック多量、焼土粒、炭化物少量含む。

0 2m 1：60

第40図　第17～23号土坑

第20号土坑（第40図）

平成19年度調査の第３区36・37－153・154グリッドに位置する。南西部で22号溝跡を切っている。

長軸3.39m、短軸2.82mのややいびつな隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは0.26mを測る。立ち上がりはほぼ垂直に近く、底面はやや凹凸がみられた。底面北東隅からはピット状、南西隅からは土坑状の掘り込みが検出されたが、伴うものか不明である。覆土は12層（１～12層）からなる。土坑中央から北西部にかけては層位に関係なく、炭化物を含む層が多くみられた。ランダムな層位であり、人為的な埋め戻しか自然堆積かは不明である。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は22号溝跡との新旧関係から弥生時代中期後半以降としか言えない。

第21号土坑（第40図）

平成19年度調査の第４区41－165グリッドに位置する。東側を31号溝跡に切られており、西側では時期不明のピットと重複するが、新旧関係は不明である。

長軸は不明、短軸は1.33mを測り、平面プランはおそらくいびつな楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは0.12mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は三層（１～３層）からなる。レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、土師器台付甕の接合部（第41図21－１）のみであるが、流れ込みの可能性が高い。１は胴部がヘラ削り、台部は横ナデ調整である。

本土坑の時期は、31号溝跡との新旧関係から弥生時代中期末以前としか言えない。

第22号土坑（第40図）

平成19年度調査の第４区38・39－168グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。西側は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、検出できた東西は１m、南北は1.6mを測り、平面プランはおそらく方形に近くなると思われる。確認面からの深さは0.27mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は上部を撹乱により欠くが、五層（６～10層）が確認された。ほぼ水平に堆積しており、ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物は図示不可能な弥生土器壺の小片が検出されているが、本溝跡に伴うものか不明である。よって、本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。

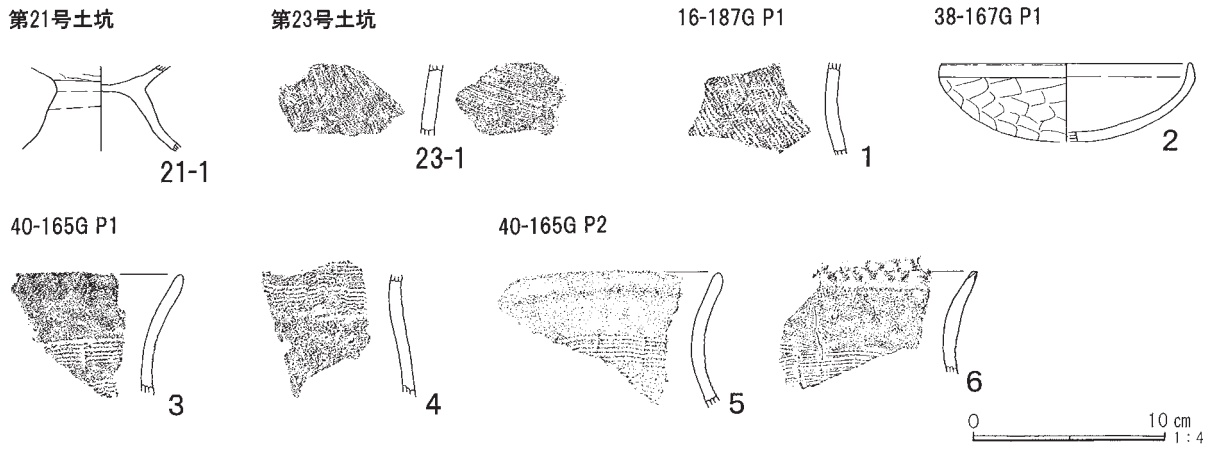
第23号土坑（第40図）

平成19年度調査の第４区38・39－168グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。西側は調査区外にある。

長軸は不明、短軸は1.28mを測り、平面プランはおそらくいびつな楕円形状を呈すると思われる。確認面からの深さは0.12mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は上部を撹乱により欠くが、四層（５～８層）が確認された。ランダムな層位であり、ブロック土を含むことから人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物で図示可能なものは、弥生土器甕の胴下部片（第41図23－１）のみであるが、流れ込みの可能性が高い。１は内外面ともに斜位のハケメ調整である。

本土坑の時期は不明と言わざるを得ない。



第41図　土坑・ピット出土遺物

第８表　土坑出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
21-1	21号土坑	土師器台付甕	―	(4.5)	―	ABCGHIJ	橙色	B	接合部90%	
23-1	23号土坑	弥生土器　甕	―	―	―	ABJKN	明赤褐色	B	胴下部片	

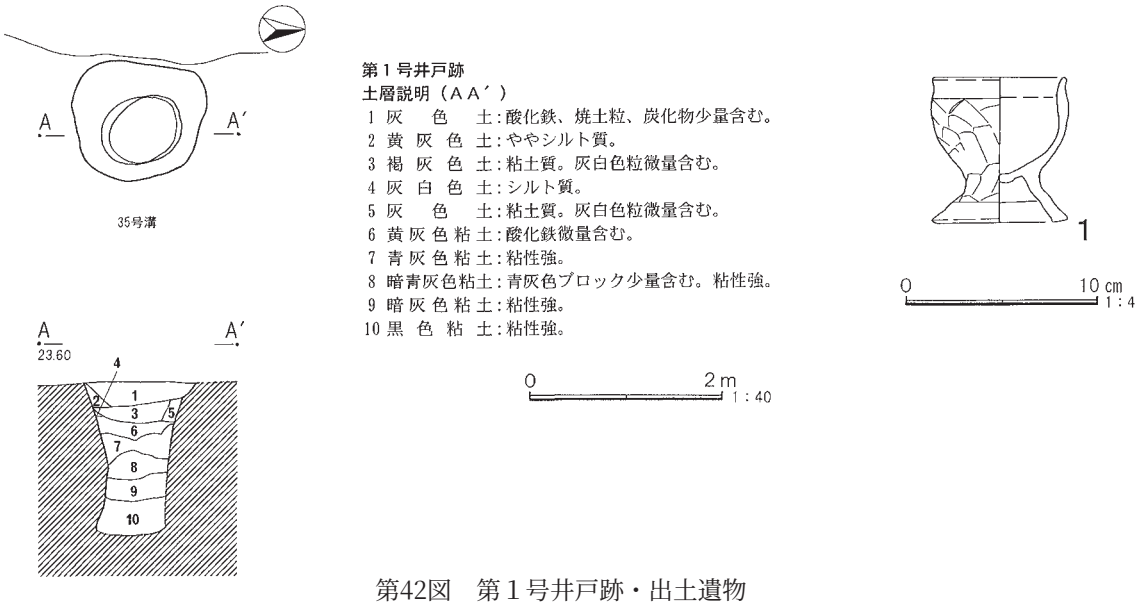
7　井戸跡

第１号井戸跡（第42図）

平成19年度調査の第４区38－169グリッドに位置する。35号溝跡の覆土を切って掘り込まれている。

長軸1.07m、短軸0.94mのやや隅の丸い方形状を呈する。確認面からの深さは1.22mを測り、井戸としてはやや浅めである。立ち上がりは確認面から0.5m下までは斜め、以下はほぼ垂直に掘り込まれており、底面付近は南側がややオーバーハングしていた。底面はほぼ平坦であった。覆土は10層（１～10層）が確認された。中層の６層以下は粘土層であった。ほぼ水平に近いが、レンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、土師器台付椀（１）のみである。口縁部及び台部は内外面横ナデ、胴部は接合部までヘラ削り調整である。またこの他に図示不可能な８世紀中頃から後半にかけての土師器



第42図　第１号井戸跡・出土遺物

第９表　第１号井戸跡出土遺物観察表

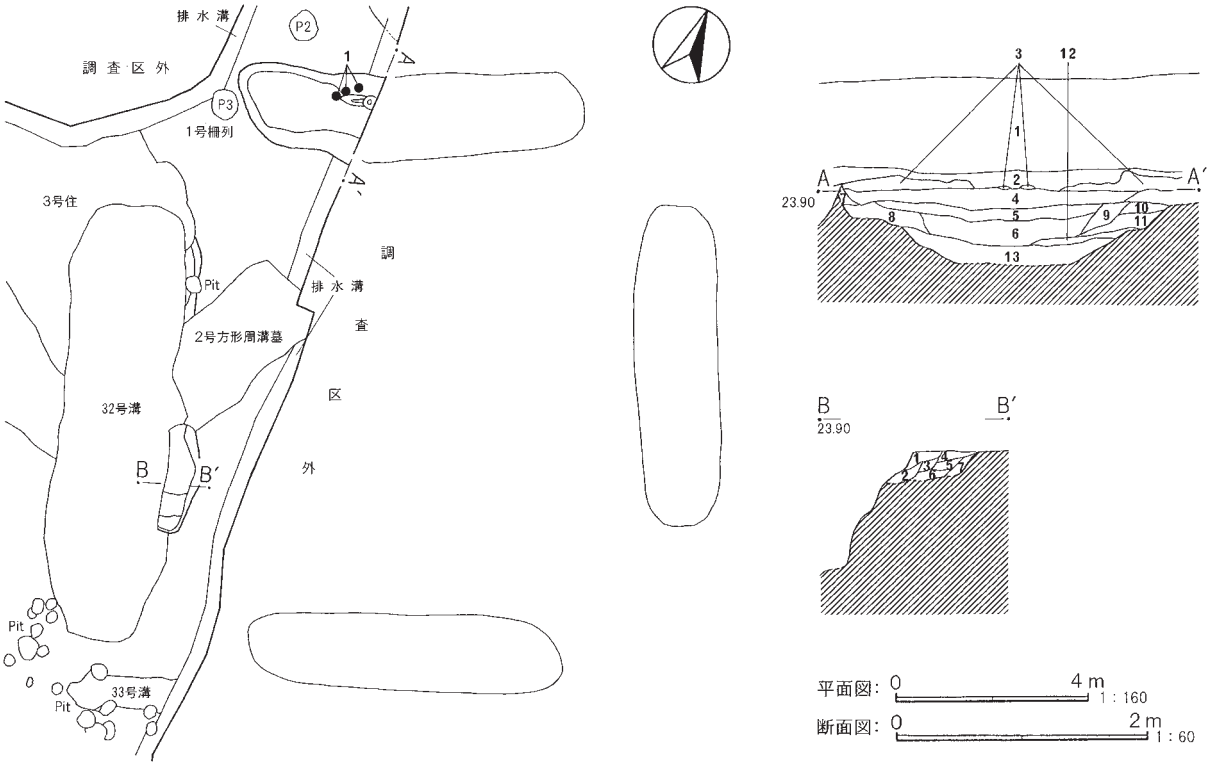
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	土師器台付椀	(7.1)	7.7	(7.1)	ABHN	暗赤灰色	B	50%	

坏の小片が検出されている。よって、本井戸跡の時期は８世紀中頃から後半にかけての段階と思われる。

8　方形周溝墓

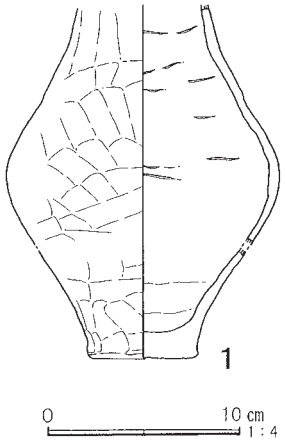
第１号方形周溝墓（第43図）

平成19年度調査の第４区38－164～166グリッドに位置する。検出されたのは北側及び西側の周溝のみである。西側周溝は多くの遺構と重複しており、残存状態が非常に悪い。32号溝跡及び2号方形周溝墓



第１号方形周溝墓
土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 青　灰　色　土：火山灰、酸化鉄微量含む。
3 灰　　色　土：ややシルト質。酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
4 灰　　色　土：シルト質。酸化鉄少量、褐灰色ブロック微量含む。
5 褐　灰　色　土：シルト質。酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
6 黄灰色シルト：酸化鉄多量、炭化物少量、褐灰色粒微量含む。
7 黄　灰　色　土：酸化鉄少量、灰白色粒微量含む。
8 灰　　色　土：褐灰色粒・ブロック多量、酸化鉄微量含む。
9 灰白色シルト：酸化鉄多量含む。
10 灰白色シルト：酸化鉄多量含む。９層より暗い。
11 明青灰色シルト：酸化鉄多量含む。
12 灰色シルト
13 灰色シルト：酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒・ブロック少量含む。

土層説明（ＢＢ′）
1 灰色シルト：酸化鉄多量、灰白色粒・ブロック少量含む。
2 灰白色シルト：酸化鉄多量、灰色粒微量含む。
3 灰　　色　土：酸化鉄少量、灰白色ブロック微量含む。
4 灰色シルト：酸化鉄多量含む。
5 灰白色シルト：酸化鉄多量、灰色粒微量含む。
6 灰　白　色　土：粘土質。酸化鉄多量、灰色粒微量含む。
7 灰色シルト：酸化鉄、灰白色シルト多量含む。



第43図　第１号方形周溝墓・出土遺物

第10表　第１号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	－	(18.7)	5.8	ABCDK	浅黄橙色	B	頸～底90%	内外面やや摩耗。内面輪積痕有。北溝出土。

に切られていることは確実であるが、３号住居跡との新旧関係は出土遺物の比較の結果、本遺構の方が新しいことが判明した。北側周溝は東側半分以上、東側及び南側の周溝は調査区外にある。

正確な規模は不明であるが、おそらく溝の外縁で13m程になり、平面プランは方形を呈すると思われる。北西部と南西部に土橋を持つことからおそらく四隅の切れるタイプであろう。検出された北溝の長さは6.2m、西溝は6.85mであるが、本来は７m程の長さであったと思われる。幅は北溝のみ計測可能であり、最も広い所で２mを測る。確認面からの深さは北構が0.46m、西溝が0.27mである。断面形は北溝が船底状、西溝は逆台形状を呈する。北溝では底面北側にピット状の掘り込みがみられた。覆土は北溝が十層（ＡＡ′４～13層）、西溝は半分のみであるが、七層（ＢＢ′１～７層）確認された。混入物は比較的少なく、大半はシルト層であった。北構はレンズ状に堆積しているが、部分的にブロック土を含んでおり、西溝はランダムな層位でブロック土を含むことから人為的に埋め戻された可能性がある。

方台部はおそらく9.6m程の規模になると思われるが、大半が調査区外にあるため詳細については不明と言わざるを得ない。

出土遺物は少なく、図示可能なものは弥生土器壺（１）のみである。１は北溝の北側立ち上がり調査区境付近から検出された。口縁部及び胴下部の一部を欠く。胴部中段に最大径を持つと思われる。全面無文で内外面ヘラナデ調整である。内面には全面に輪積痕が残る。

本遺構の時期は、重複する遺構との新旧関係から32号溝跡以前の弥生時代中期後半としておきたい。

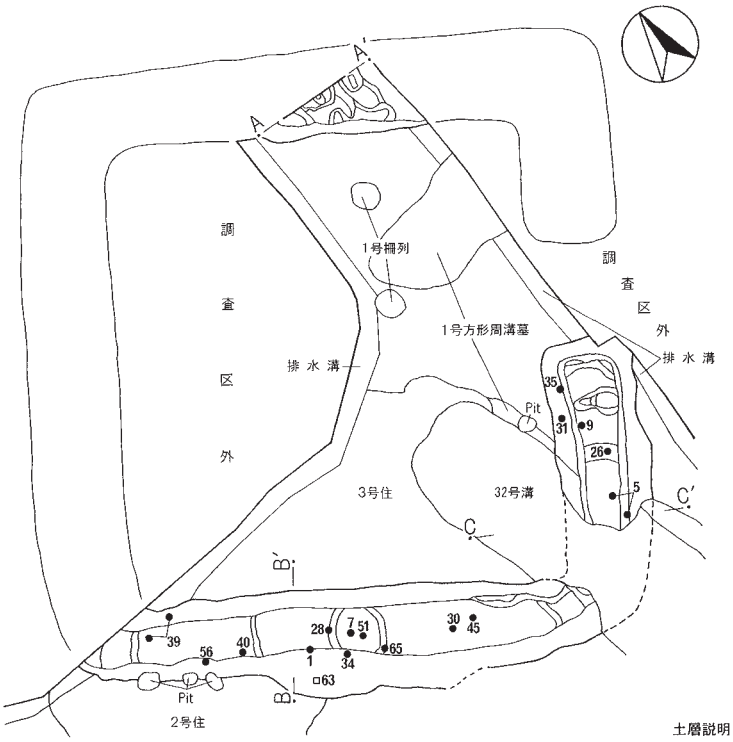
第２号方形周溝墓（第44図）

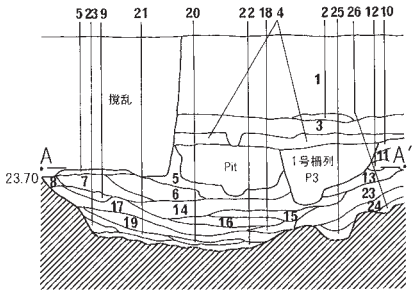
平成19年度調査の第４区38～40－163～166グリッドに位置する。検出されたのは北溝一部と東から南溝にかけてのみであり、大半は調査区外にある。本遺構も１号方形周溝墓と同じく多くの遺構と重複関係にあり、直接的には北溝が１号柵列跡ピット１に覆土を切られており、南東部では本遺構が１号方形周溝墓、32号溝跡を切っている。南溝では本遺構が２・３号住居跡を切っている。間接的には方台部内にも上記の遺構が位置していることから重複関係にあるが、新旧関係は前述のとおりである。

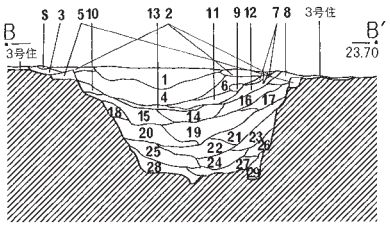
正確な規模は不明であるが、おそらく溝の外縁で13m程になり、平面プランは方形を呈すると思われる。土橋は検出された状況では東溝が途切れていることから東溝中央のみに土橋を持つタイプか。検出された長さは計測可能な南溝で約12mであり、幅は２m前後である。確認面からの深さは北構が0.58m、南溝が0.84mである。断面形はほぼ逆台形状を呈する。底面は北溝と東溝には凹凸がみられ、南溝では隅及び中央付近でやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土は北溝が22層（ＡＡ′５～26層）、南溝が29層（ＢＢ′１～29層）、東溝は12層（ＣＣ′１～12層）のみの確認である。いずれも下層が粘土層であり、ほぼ全層に混入物が認められた。ほぼレンズ状に堆積していたが、所々にブロック土を含むことから部分的に埋め戻された可能性がある。

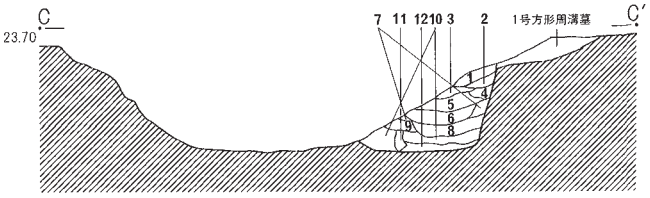
方台部は南北が9.6mを測ることから一辺約10mの方形を呈すると思われる。前述のとおり、方台部には他の遺構がみられたことから主体部等は確認されなかった。

出土遺物（第45・46図）は、弥生土器壺（２～４・14～34）、甕（１・５～13・35～60）、高坏（61）、磨石（62）、砥石（63）、土製紡錘車（64）、土偶型容器（65）がある。図示しなかったものも含め、本









第２号方形周溝墓

土層説明（ＡＡ′）

1 盛　　土
2 青 灰 色 土：火山灰、酸化鉄微量含む。
3 灰　色 土：シルト質。酸化鉄多量、火山灰微量含む。
4 褐 灰 色 土：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
5 灰　色 土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量含む。
6 黄 灰 色 土：シルト質。酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量含む。
7 灰　色 土：シルト質。酸化鉄多量、灰白色ブロック少量含む。
8 灰色シルト：酸化鉄少量含む。
9 灰色シルト：焼土粒、炭化物、灰白色ブロック少量、酸化鉄微量含む。
10 灰　色 土：酸化鉄、灰白色粒・ブロック多量、褐灰色ブロック少量含む。
11 灰　色 土：ややシルト質。酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
12 灰　色 土：シルト質。灰白色粒少量含む。
13 黄 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量、灰白色粒少量含む。
14 灰　色 土：粘土質。焼土粒、炭化物、灰白色粒・ブロック少量、酸化鉄微量含む。
15 灰　色 土：シルト質。焼土粒、炭化物、灰白色粒少量含む。
16 灰 白 色 土：粘土質。黒褐色粒微量含む。
17 暗灰色シルト：酸化鉄、灰白色粒少量、焼土粒、炭化物微量含む。
18 灰　色 土：粘土質。下層に灰白色粒多量含む。
19 灰色シルト：灰白色粒・ブロック多量含む。
20 暗青灰色砂
21 灰色シルト：灰白色粒微量含む。
22 青灰色砂及び灰白色粘土の混合層。
23 灰色シルト：灰白色粒少量含む。
24 灰色シルト：酸化鉄多量、灰白色粒・ブロック微量含む。
25 灰　色 土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量含む。
26 灰白色粘土及び灰白色シルトブロックの混合層。

土層説明（ＢＢ′）

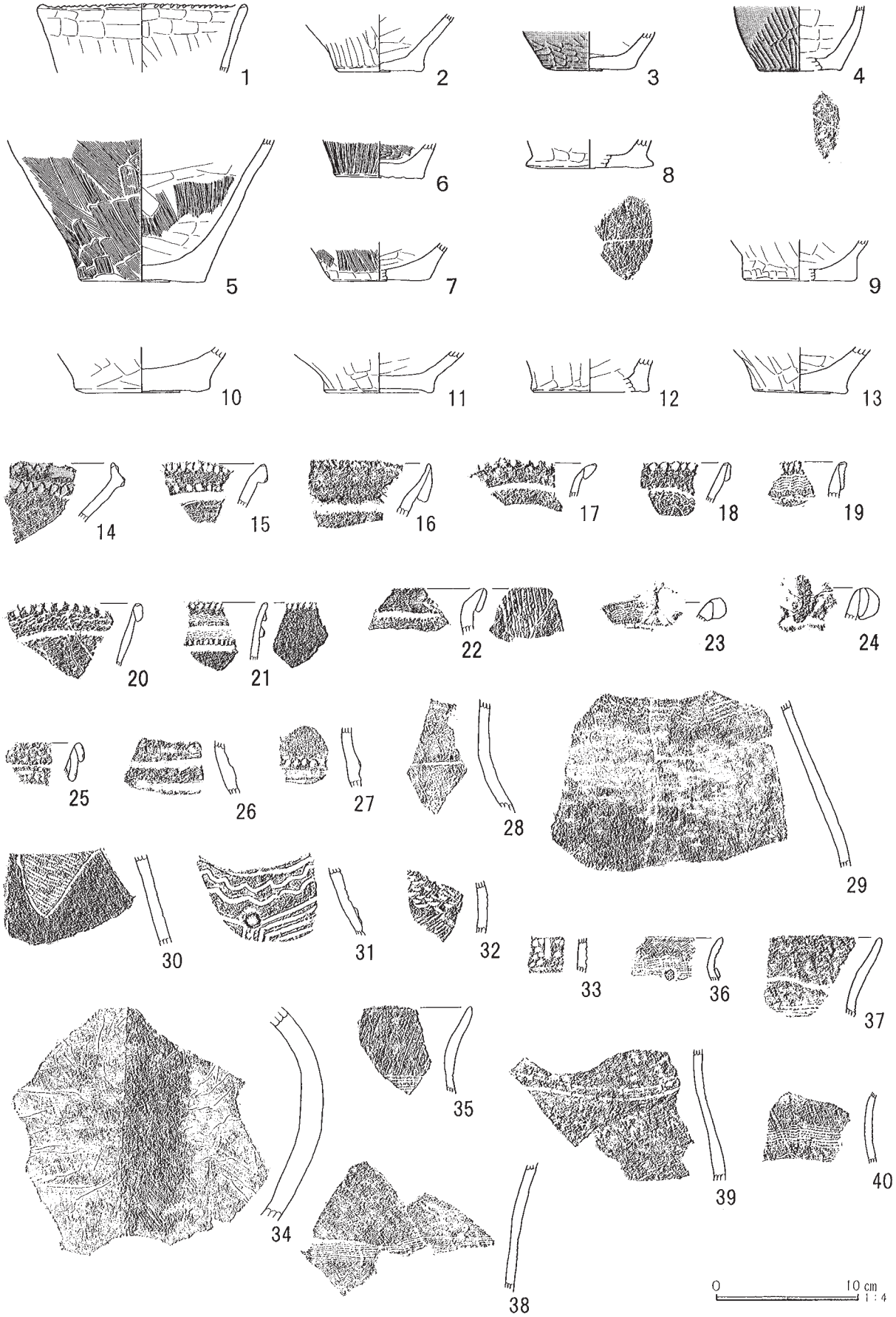
1 灰 白 色 土：粘土質。酸化鉄、黄灰色粒・ブロック少量含む。
2 黄 灰 色 土
3 灰色シルト：灰白色粒微量含む。
4 灰　色 土：酸化鉄多量、焼土粒、炭化物少量、灰白色粒微量含む。
5 黒 褐 色 土：灰白色ブロック多量、酸化鉄少量含む。
6 灰　色 土：ややシルト質。酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒微量含む。
7 灰 白 色 土：ややシルト質。酸化鉄多量含む。
8 黄 灰 色 土：酸化鉄、灰白色粒微量含む。
9 灰白色シルト：酸化鉄多量含む。
10 灰 白 色 土：粘土質。黒褐色ブロック少量含む。
11 青 灰 色 土：シルト質。灰白色シルト微量含む。
12 灰　色 土：灰白色粒少量、黒褐色ブロック微量含む。
13 灰色シルト：灰白色粒微量含む。
14 灰　色 土：粘土質。炭化物、灰白色粒少量含む。
15 灰　色 土：酸化鉄多量、炭化物、灰白色粒微量含む。粘性やや強。
16 青 灰 色 土：灰白色粒・ブロック多量、炭化物微量含む。粘性やや強。
17 暗青灰色土：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。
18 灰　色 土：灰白色粒多量含む。
19 灰　色 土：粘土質。灰白色粒多量、炭化物微量含む。
20 灰　色 土：ややシルト質。灰白色粒微量含む。
21 灰　色 土：粘土質。炭化物、灰白色粒微量含む。
22 暗灰色粘土：明緑灰色粒微量含む。
23 灰　色 土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量、炭化物微量含む。
24 暗灰色粘土：明緑灰色ブロック多量含む。
25 暗灰色粘土：炭化物、明緑灰色粒・ブロック少量含む。
26 灰 色 粘 土：灰白色粒・ブロック多量に含む。
27 黒 色 粘 土：明緑灰色粒・ブロック微量含む。
28 明緑灰色粘土：黒色ブロック多量含む。
29 黒 色 粘 土：明緑灰色粒微量含む。

土層説明（ＣＣ′）

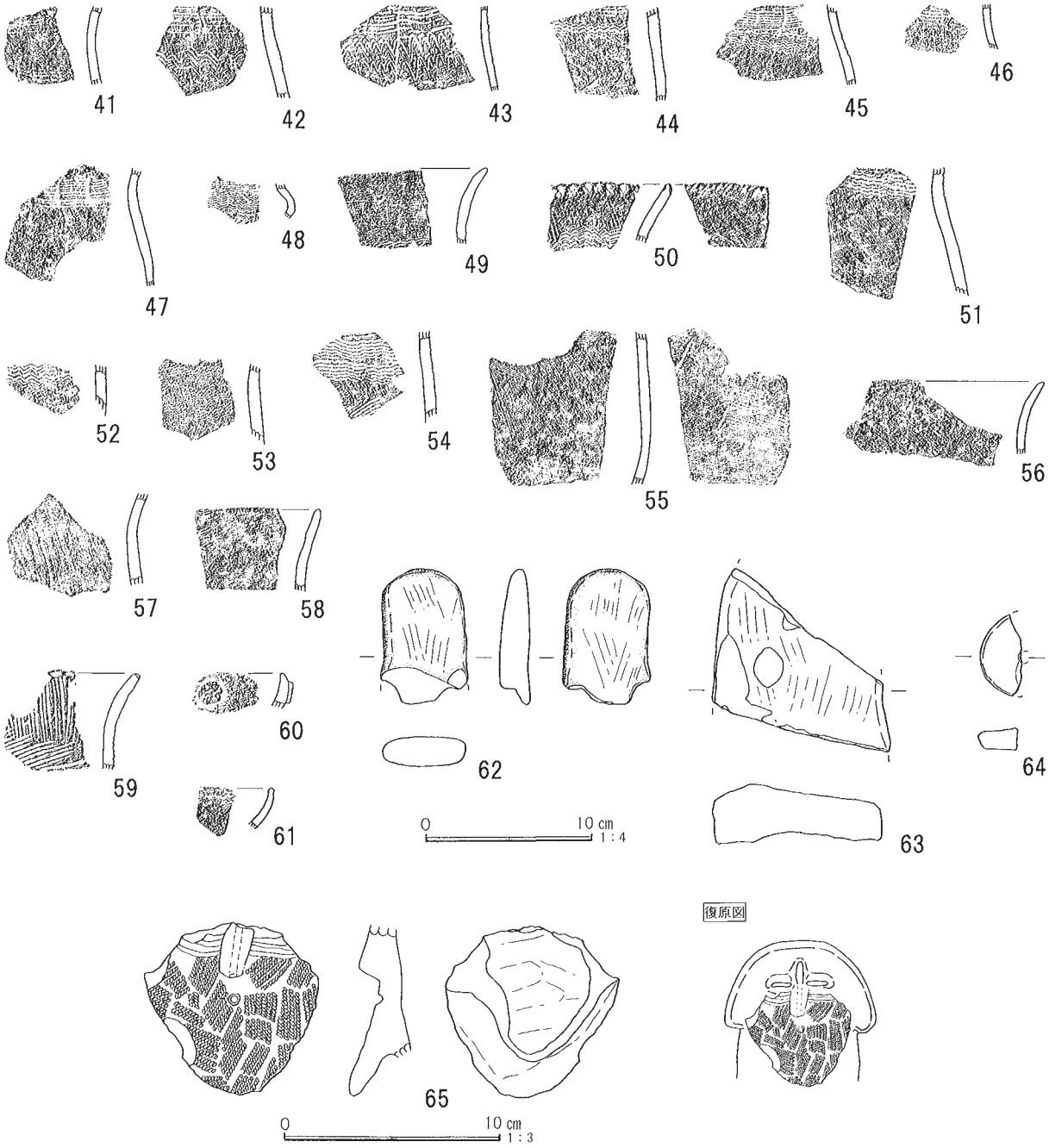
1 灰 白 色 土：ややシルト質。酸化鉄多量含む。
2 灰　色 土：ややシルト質。酸化鉄多量含む。
3 灰　色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
4 灰　色 土：酸化鉄多量、灰白色粒微量含む。しまり強。
5 灰　色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
6 灰　色 土：粘土質。灰白色粒少量含む。５層より暗い。
7 灰　色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。６層より明るい。
8 灰 色 粘 土：灰白色粒・ブロック微量含む。
9 灰 色 粘 土：粘性強。
10 暗灰色粘土：明緑灰色粒少量含む。
11 明緑灰色粘土ブロック
12 明緑灰色粘土：黒色ブロック多量含む。

平面図：0　4m　1：160
断面図：0　2m　1：60

第44図　第２号方形周溝墓



第45図　第２号方形周溝墓出土遺物（1）



第46図　第２号方形周溝墓出土遺物（2）

遺構からは大量の遺物が検出された。そのほとんどは南溝からの検出であり、層位は示さなかったが大半は底面から浮いた状態で検出された。壺26・27・31～33、甕59、土偶型容器については同じ弥生時代であるが、流れ込みと思われる。

２～４・14～34は壺。２～４は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。すべて外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整で３・４の外面には赤彩が施されている。４の底部外面には木葉痕が残る。14～25は口縁部片。14～20・22～25は複合口縁で22～25以外は端部に刻みを持つ。14・15には複合口縁下にも刻まれている。14～18・22は外面が無文である。14は複合口縁下に横位のヘラナデと斜位のハケメ、15～18・20の複合口縁下と22は横位のヘラナデ調整である。22は内面に縦位の短い沈線がほぼ等間隔に刻

まれている。19・20には口縁端部の刻み下に櫛歯状工具による波状文が巡る。櫛歯状工具の単位は19が６本、20は２本である。21は口縁部に二条の突帯が巡り、口縁端部と下の突帯に刻みが施され、その間に３本一単位の波状文が二段巡る。23・24は突起を有する。23は突起脇に５本一単位の波状文が描かれている。25は複合口縁部も含めた外面全面に円形の刺突が施されている。14の複合口縁部、21の突帯以下外面及び内面、20・23の内面には赤彩が施されている。14～25の内面調整は14・21・23が横位のヘラミガキ、15～20・24・25は横位のヘラナデである。26・27は肩部片。26は太目の沈線が二条巡る。27は横位のヘラナデ下に刻みの施された段を持ち、太目の沈線が横位に巡る。内面調整はともに横位のヘラナデである。28は頸部から肩部にかけての破片。頸部は無文で斜位のヘラナデ調整が施され、頸部と肩部の境には細い沈線が横位に巡り、以下に斜格子文が描かれている。内面調整は頸部が横位のハケメ、肩部は横・斜位のヘラナデである。29は肩部から胴上部にかけての破片。肩部には５本一単位の波状文が巡り、以下は無文で横位のヘラナデとハケメ調整が施されている。内面調整は斜位のヘラナデとハケメが施されている。30・31は胴上部片。30は細い沈線で鋸歯文が描かれ、区画内にはＲＬ単節縄文が充填されている。区画外は縦・斜位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。31はやや太目の沈線で上部に横位の沈線、二条の波状沈線が巡り、以下に重四角文が描かれている。重四角文連結部には刺突の施されたボタン状貼付文が付けられている。30・31の内面調整は横位のヘラナデである。32～34は胴部片。いずれも胴部中段の破片。32は上部に半円状の刺突がランダムに刻まれており、下部は斜位のハケメ調整である。33は垂下する太い沈線脇に円形の刺突が刻まれている。34は無文で縦位のヘラミガキが施されているが、一部に横・斜位のハケメ調整が残る。内面調整は32が斜位、33が横位のヘラナデ、34は横位のヘラナデとハケメである。

１・５～13・35～60は甕。文様は櫛歯状工具によるものが大半を占める。１は口縁部。端部内面に刻みを持つ。内外面ともにヘラナデ調整である。５～13は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。壺の可能性もある。５～７はハケメ調整を主体とする。５は内面、７は外面下部及び内面にヘラナデ調整も認められた。８～13は内外面ヘラナデ調整である。８は底部外面に木葉痕が残る。35～55は櫛歯状工具による文様が描かれる一群。35～48は口縁部から胴上部までの範囲に収まる破片で頸部に簾状文が巡る。口縁部に刻みを持つものはみられない。櫛歯状工具の単位が分かるものは36・40・45・48が８本、38が９本、39が３本、42・44が７本、43が５本、47が10本である。39は粗雑で形骸化している。41はやや間隔を空けて胴上部にも巡る。36は簾状文上、40・42～45・48は下に同一工具で波状文が描かれ、43のみ二段巡る。36は簾状文上に刺突の施されたボタン状貼付文が付けられている。外面無文部の調整は35・38・41・44・46が斜位、40は横・斜位のハケメ、37・42・47は横位、39は横・斜位、45は斜位のヘラナデである。内面調整は35・36・38・39・41・45・46・48が横位、37・40・42・44が横・斜位のヘラナデ、43が斜位のハケメとヘラナデ、47は頸部が横位のヘラナデ、胴上部が斜位のハケメである。49～55は口縁部から胴部中段までに収まる破片で頸部に波状文が巡る。波状文の単位が分かるものは51が２本、53・54が６本である。50は口縁端部内外面に刻みを持つ。51は２本一単位で波状文が数段描かれており、53は三段以上巡る。54は二段の波状文下に同一工具で縦位の羽状文が描かれている。外面無文部の調整は49が横位、51・54・55が斜位のハケメ、50・52が横位のヘラナデである。内面調整は49・52が横位、50・53・54が横・斜位のヘラナデ、51が横位のハケメとヘラナデ、55が斜位のハケメである。56～58は口縁部から頸部までに収まる破片でハケメ調整を主体とする一群。56は口縁部に横位のヘラナデ、

第11表　第２号方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　甕	(14.5)	(4.7)	―	ABIN	にぶい黄橙色	B	口縁部20%	南溝出土。
2	弥生土器　壺	―	(4.1)	6.1	ABIJN	明赤褐色	B	胴～底90%	南溝出土。
3	弥生土器　壺	―	(2.75)	(6.5)	ABDHKN	明赤褐色	B	底部40%	外面赤彩。南溝出土。
4	弥生土器　壺	―	(4.6)	(6.0)	ACDIK	にぶい橙色	B	胴～底25%	外面赤彩。底面木葉痕有。南溝出土。
5	弥生土器　甕	―	(10.1)	9.2	ABDIN	明赤褐色	B	胴～底80%	東溝出土。
6	弥生土器　甕	―	(2.5)	(6.5)	ABEHKN	橙色	B	底部40%	南溝出土。
7	弥生土器　甕	―	(2.2)	(7.0)	ABDIKN	橙色	B	底部25%	南溝出土。
8	弥生土器　甕	―	(2.05)	(9.2)	ABDHJN	にぶい橙色	B	底部25%	底面木葉痕有。南溝出土。
9	弥生土器　甕	―	(2.9)	(8.1)	ABDHKN	黒褐色	B	底部45%	東溝出土。
10	弥生土器　甕	―	(3.2)	(9.6)	ABGMN	橙色	B	底部45%	南溝出土。
11	弥生土器　甕	―	(2.9)	7.8	ABEIKN	にぶい黄褐色	B	底部100%	南溝出土。
12	弥生土器　甕	―	2.35	(8.4)	ABDIN	にぶい橙色	B	底部30%	南溝出土。
13	弥生土器　甕	―	(3.3)	6.7	ABDKMN	にぶい橙色	B	底部90%	南溝出土。
14	弥生土器　壺	―	―	―	ABDN	明赤褐色	B	口縁部片	内面・口縁部外面赤彩。南溝出土。
15	弥生土器　壺	―	―	―	ABMN	橙色	B	口縁部片	南溝出土。
16	弥生土器　壺	―	―	―	ABDEMN	浅黄橙色	B	口縁部片	内外面摩耗顕著。南溝出土。
17	弥生土器　壺	―	―	―	ACMN	にぶい橙色	B	口縁部片	南溝出土。
18	弥生土器　壺	―	―	―	ABDH	黄灰色	B	口縁部片	南溝出土。
19	弥生土器　壺	―	―	―	ABCEK	橙色	B	口縁部片	南溝出土。
20	弥生土器　壺	―	―	―	ABCN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	内面赤彩、剥離顕著。南溝出土。
21	弥生土器　壺	―	―	―	ABJN	浅黄橙色	B	口縁部片	内面・外面下部赤彩。磨耗顕著。南溝出土。
22	弥生土器　壺	―	―	―	ABMN	灰黄褐色	B	口縁部片	南溝出土。
23	弥生土器　壺	―	―	―	ABHIKN	明赤褐色	B	口縁部片	内面赤彩。南溝出土。
24	弥生土器　壺	―	―	―	ACMN	にぶい褐色	B	口縁部片	南溝出土。
25	弥生土器　壺	―	―	―	ADMN	にぶい橙色	B	口縁部片	南溝出土。
26	弥生土器　壺	―	―	―	ABDHIMN	浅黄橙色	B	肩部片	東溝出土。
27	弥生土器　壺	―	―	―	ABEHIK	橙色	B	肩部片	南溝出土。
28	弥生土器　壺	―	―	―	AEJM	橙色	B	頸～肩部片	南溝出土。
29	弥生土器　壺	―	―	―	ABDEIN	にぶい橙色	B	肩～胴上片	南溝出土。
30	弥生土器　壺	―	―	―	AMN	にぶい橙色	B	胴上部片	外面無文部赤彩。内面摩耗顕著。南溝出土。
31	弥生土器　壺	―	―	―	ABDEHKN	暗灰黄色	B	胴上部片	東溝出土。
32	弥生土器　壺	―	―	―	ABEHJN	明赤褐色	B	胴部片	南溝出土。
33	弥生土器　壺	―	―	―	AIJN	にぶい橙色	B	胴部片	南溝出土。
34	弥生土器　壺	―	―	―	ABDKN	明赤褐色	B	胴部片	南溝出土。
35	弥生土器　甕	―	―	―	AHIN	黒褐色	B	口～頸部片	東溝出土。
36	弥生土器　甕	―	―	―	ABHIK	にぶい黄褐色	B	口～頸部片	南溝出土。
37	弥生土器　甕	―	―	―	ABHIN	黒褐色	B	口～頸部片	南溝出土。
38	弥生土器　甕	―	―	―	ABHIKN	にぶい褐色	B	頸～胴上片	北溝出土。
39	弥生土器　甕	―	―	―	ABDGHN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	南溝出土。
40	弥生土器　甕	―	―	―	ABCHIKN	にぶい褐色	B	頸～胴上片	南溝出土。
41	弥生土器　甕	―	―	―	BDN	橙色	B	頸～胴上片	北溝出土。
42	弥生土器　甕	―	―	―	ABHIN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	南溝出土。
43	弥生土器　甕	―	―	―	ABCEN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	南溝出土。
44	弥生土器　甕	―	―	―	AHIJN	にぶい赤褐色	B	頸～胴上片	南溝出土。
45	弥生土器　甕	―	―	―	ABDN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	南溝出土。
46	弥生土器　甕	―	―	―	ABDIKN	暗褐色	B	頸～胴上片	南溝出土。
47	弥生土器　甕	―	―	―	ABDEHN	にぶい黄橙色	B	頸～胴上片	北溝出土。
48	弥生土器　甕	―	―	―	ABGIJN	褐色	B	頸～胴上片	南溝出土。
49	弥生土器　甕	―	―	―	ABDHN	灰黄色	B	口～頸部片	南溝出土。
50	弥生土器　甕	―	―	―	ABHN	黒褐色	A	口～頸部片	南溝出土。
51	弥生土器　甕	―	―	―	ABCIJMN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	南溝出土。
52	弥生土器　甕	―	―	―	ACHIN	にぶい赤褐色	B	胴上部片	北溝出土。
53	弥生土器　甕	―	―	―	BCHM	にぶい黄橙色	B	胴上部片	内面摩耗顕著。南溝出土。
54	弥生土器　甕	―	―	―	ABDHIKN	黒褐色	B	胴上部片	北溝出土。
55	弥生土器　甕	―	―	―	ABEN	橙色	A	頸～胴部片	南溝出土。
56	弥生土器　甕	―	―	―	ABDHKN	黒褐色	B	口～頸部片	南溝出土。
57	弥生土器　甕	―	―	―	ABDHIKN	橙色	B	頸部片	内面剥離顕著。南溝出土。
58	弥生土器　甕	―	―	―	ABHN	明褐灰色	B	口縁部片	北溝出土。
59	弥生土器　甕	―	―	―	ABDHIKN	黒褐色	B	口～頸部片	南溝出土。
60	弥生土器　甕	―	―	―	ABD	にぶい黄橙色	B	口縁部片	南溝出土。
61	弥生土器高坏	―	―	―	ABCN	赤色	B	口縁部片	内面・外面無文部赤彩。南溝出土。

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
62	磨　石	最大長(8.2)㎝、最大幅(5.35)㎝、最大厚(1.8)㎝。重量(118.0)ｇ。砂岩。半分欠。両面平滑。南溝出土。							
63	砥　石	最大長(11.15)㎝、最大幅(10.85)㎝、最大厚(3.5)㎝。重量(429.8)ｇ。砂岩。大半欠。一面のみ平滑。南溝出土。							
64	土製紡錘車	最大径(5.2)㎝、最大厚（1.3）㎝、孔径(0.7)㎝。胎土:ABDIN。焼成:B。重量(18.8)ｇ。半分以上欠。南溝出土。							
65	土偶型容器	最大長(7.85)㎝、最大幅(7.9)㎝、最大厚(2.1)㎝。胎土:ABDHIJN。焼成:B。重量(87.5)ｇ。顔面下部のみ残存。南溝出土。							

頸部にハケメ調整が施される。57は斜位のハケメのみである。58は横・斜位のヘラナデとハケメが施されている。内面調整はすべて横位のヘラナデである。59は口縁部から頸部にかけての破片。端部に刻みを持つ。櫛歯状工具により横位の羽状文が描かれている。内面調整は横位のヘラナデである。60は刺突の施されたボタン状貼付文が付いた口縁部片。外面無文部及び内面は横位のヘラナデ調整である。

61は高坏の口縁部片。器壁が薄い。口縁端部に３本一単位の波状文が巡り、波状文以下及び内面は横位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。

62は扁平な磨石。両面平滑である。砂岩製。半分を欠く。63は砥石。一面のみ平滑であり、擦痕が認められた。砂岩製。大半を欠く。64は土製の紡錘車。半分以上を欠く。

65は土偶型容器の顔面下部。南溝ほぼ中央から検出された。角張った鼻の脇にやや太目の沈線二条でイレズミと思われる文様が描かれている。鼻下から突き出た顎にかけてはヒゲを表現したと思われるＬＲ単節縄文が施文されており、鼻下１㎝には径0.6㎜程の円形刺突で口が表現されている。内面は無文でヘラナデ調整である。ヒゲの表現から男性と思われる。流れ込みの可能性が高く、本遺構に伴う遺物より古いと思われる。

本遺構の時期は出土遺物に一部流れ込みと思われるものがあるが、重複する２号住居跡と同じく後期初頭と思われ、新旧関係から２号住居跡よりは新しい段階に相当すると思われる。

9　畠　跡

第１号畠跡（第47図）

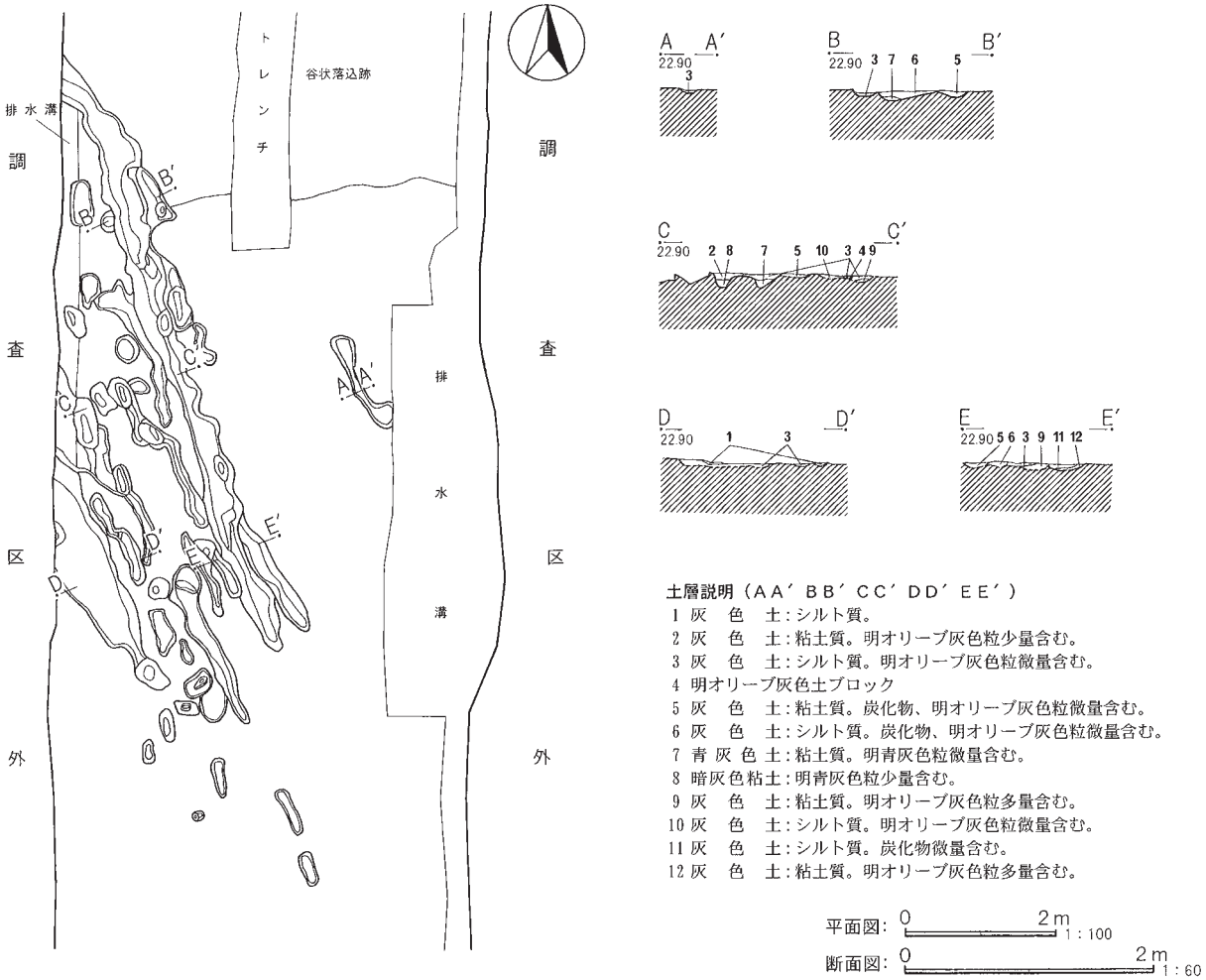
平成18年度調査の第２区21－181～183グリッドに位置する。北側に位置する谷状落込跡が埋没した後に掘り込まれている。平成19年度調査の２区では検出されていないことから調査区外の範囲内で終息すると思われる。

畝は北西から南東方向に走り、所々途切れてピット状を呈する所もみられた。同方向に走るものが重複してみられたことから数回にわたって掘り替えられている。畝の幅は概ね0.2m前後であるが、最小で0.1m、最大で0.75mを測る所もみられた。確認面からの深さは0.05m前後と浅い。覆土は灰色土を主体に混入物の内容から計12層（１～12層）が確認された。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため時期は不明であるが、弥生時代以降であることは間違いない。

10　ピット

ピットは第２区以外から検出されている。第１区は14～17－188グリッド以南にみられるが、主に14～17－188～189グリッドに集中する。第３区は検出数が少ないが、ほぼ全面に点在している。第４区もほぼ全面に位置するが、主に40・41－165グリッドと38－166～169グリッドに集中する。検出されたピットは所々で他の遺構と重複するが、時期の特定が難しいため新旧関係を把握することは困難であった。大半が規則的に並ばず、詳細については不明と言わざるを得ない。



第47図　第１号畠跡

出土遺物は少ないが、図示しなかったものも含めて検出された遺物は、弥生土器と須恵器・土師器に限られる。最も多く検出されたのは前者であるが、流れ込みの可能性が高い。

図示可能な遺物（第41図）は、弥生時代中期後半～後期初頭の甕（１・３～６）、古墳時代末以降の土師器坏（２）のみである。以下、順を追って述べるが、これらの遺物が出土したピットのみ全測図にピット名を記載してある。

１は弥生土器甕の頸部片。外面はＲＬ単節縄文が施文され、輪積痕が残る。内面は横位のヘラナデ調整である。第１区16－187グリッドピット１出土。２は土師器北武蔵型坏。口縁部がやや内湾し、底部は丸底である。第４区38－167グリッドピット１出土。３・４は第４区40－165グリッドピット１出土の甕。３は口縁部から頸部、４は頸部から胴上部にかけての破片である。頸部に簾状文、その下に同一工具による波状文が巡る。櫛歯状工具の単位はともに６本である。外面無文部の調整は３が横位、４が斜位のヘラナデである。内面調整はともに横位のヘラナデである。５・６は第４区40－165グリッドピット２出土の甕。ともに口縁部から頸部にかけての破片であり、頸部に簾状文が巡る。５は簾状文下に波状文が描かれ、６は口縁端部内外面に刻みを持つ。５の櫛歯状工具の単位は８本である。外面無文部の調整は５が横位のヘラナデ、６が横・斜位のハケメである。内面調整は５が横位のヘラナデ、６が斜位のヘラナデとハケメである。

第12表　ピット出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	16-187GP1	弥生土器　甕	－	－	－	AHN	明赤褐色	B	頸部片	外面輪積痕有。
2	38-167GP1	土師器　坏	－	－	－	ABHKN	橙色	B	30%	
3	40-165GP1	弥生土器　甕	－	－	－	ABDEHKN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
4	40-165GP1	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIN	にぶい褐色	B	頸～胴上片	
5	40-165GP2	弥生土器　甕	－	－	－	ABDIN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
6	40-165GP2	弥生土器　甕	－	－	－	ABCHIJKN	明赤褐色	B	口～頸部片	

11　河川跡

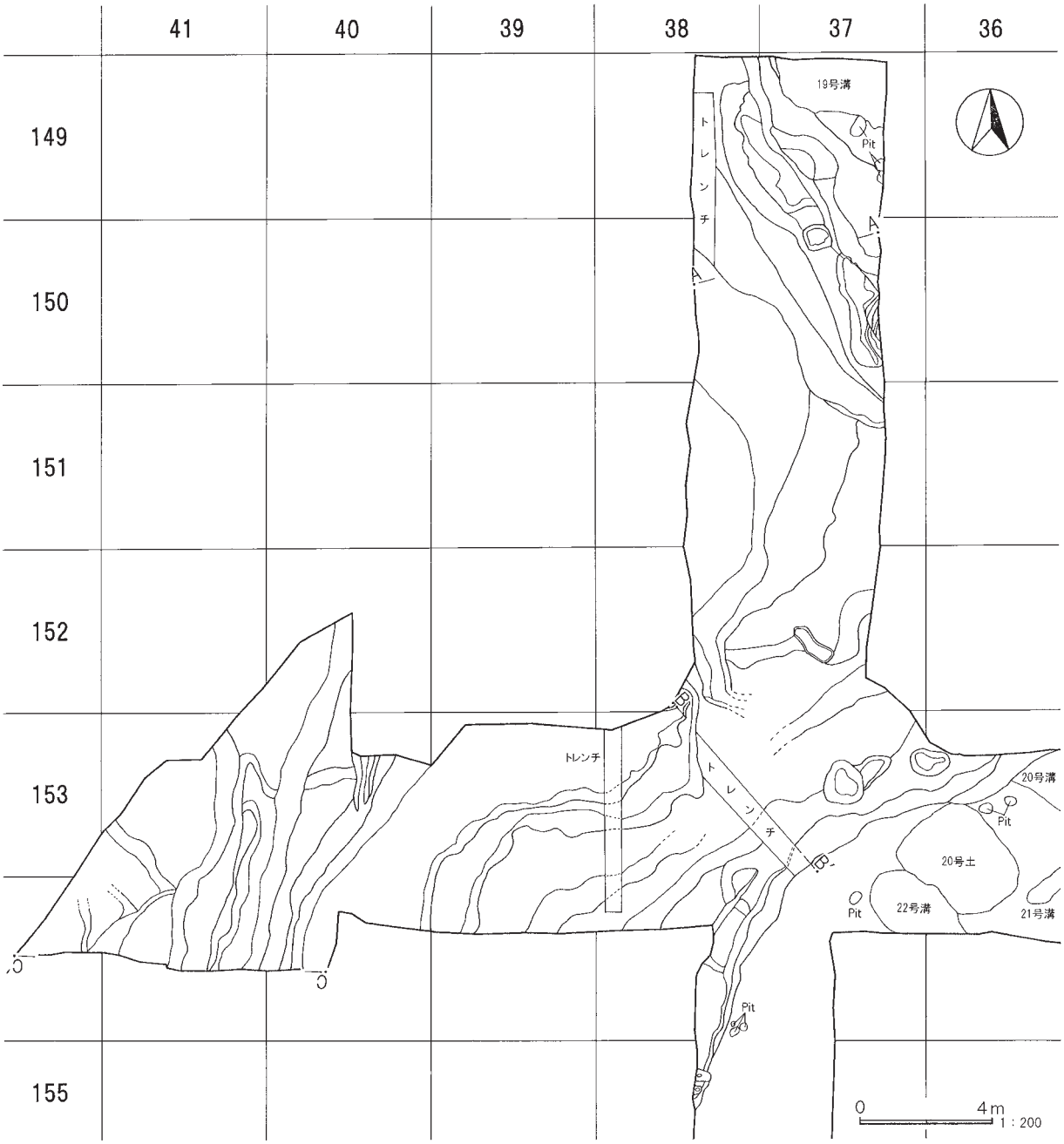
第１号河川跡（第48～53図）

平成19年度調査の第３区36～42－149～155グリッドに位置し、３区北側の大半を占める。北東端の37－149グリッドで19号溝跡に切られており、東端の36－153グリッドでは20号溝跡を切っている。

37・38－152グリッド以南は南西から北東方向へ流れるが、37・38－151グリッド以北は向きを変えて北西方向に流れる。検出された長さはおよそ42mである。幅は調査区内で西側の立ち上がりを検出することができなかったため正確な数値は得られなかったが、非常に幅広であることは確かである。確認面からの深さは、北側の37・38－150グリッド付近では0.5～0.8m程、検出したほぼ中央付近の37・38－153グリッド付近では0.8～1.3m程を測り、西端の41・42－153・154グリッド付近では1.5～3.2mと非常に深い所がみられた。覆土は三箇所で確認したが、下層になるにつれて粘土ないしシルト層になる傾向にあった。いずれもレンズ状に堆積していたことから自然堆積と思われ、上層では火山灰、中層以下には腐蝕植物片、木片などの混入物が認められた。また40～42－154グリッドの土層断面（ＣＣ′）では、41－154グリッド中央付近で立ち上がりが認められたことから41－153・154グリッド以西が埋没した後、東側に流れを変えていたことが判明した。このことは後述する出土遺物からも裏付けられる。

出土遺物（第54～71図）は、弥生土器壺（１～10・50～93）、甕（11～43・94～125）、高坏（44～48）、筒型土器（49・126）、打製石斧（127～132）、古墳時代前期の土師器甕（133・134・141）、台付甕（135）、高坏（136・137）、小型壺（138）、器台（139・140）、古墳時代末以降の須恵器蓋（142～146）、坏（147～179・183～233）、高台付椀（180～182・234～238）、椀（239～242）、甕（243～251・260～307）、瓶類（252～258・308～312）、無頸壺（259）、灰釉陶器椀（313・314）、高台付皿（315）、緑釉陶器皿（316）、高台付椀（317）、土師器坏（318～331・334～337）、皿（332・333）、甕（376～379）、土師質土器坏（338～360）、高台付椀（361～375）、平瓦（380）、土錘（381～394）、滑石製臼玉（395）、砥石（396・397）、中世以降の陶器甕（398）、時期不明の建築部材と思われる木製品（399）、経巻具（400）、板状の木製品（401～404）、不明木製品（405）、下駄（406）などがある。これらはすべて廃棄されたものと思われる。また図示しなかったが、上記の遺物以外にも獣骨片などが少量検出された。

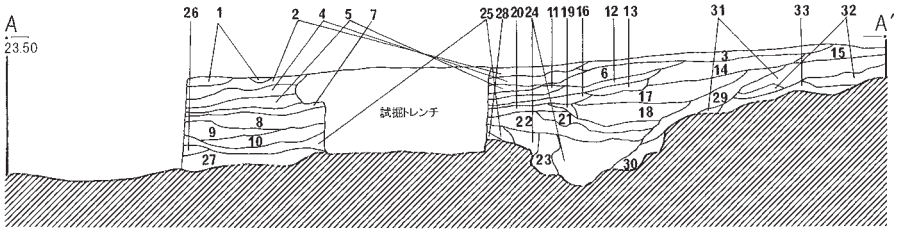
遺物は主に弥生時代、古墳時代前期、古代の大きく三段階に分けられ、中でも古代の遺物が大量に検出された。そして各段階で出土位置にそれぞれ傾向がみられた。弥生土器はその大半が西端の41・42－153・154グリッドに集中し、前述した41－153・154グリッド以西の埋没箇所からの出土が多い。古墳時代前期の土師器は散在しているが、37・38－152グリッド以南に限定される。古代の遺物はほぼ全面から検出されているが、37・38グリッドからの検出が多い。そして時期によってさらに出土位置に違いがみられ、８世紀代は主に37・38－149～151グリッド、９世紀代は遺物数が少ないが37・38－151・152グリッド、10世紀以降は37・38－152・153グリッドに集中している。以下、各時代・時期及び遺物ごとに

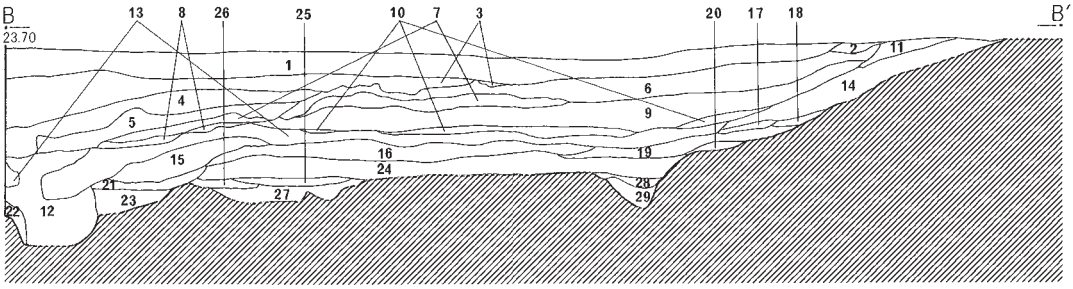


第48図　第１号河川跡

順を追って述べる。

１～132は弥生時代中期中頃から後期初頭の遺物。１～10・50～93は壺。１は口縁部から胴上部までの部位。短い口縁部が大きく開く。文様は頸部にのみ描かれ、６本一単位の櫛歯状工具が縦位に施文されている。外面無文部はヘラナデ調整であり、内面は磨耗が著しいため図示していないが、外面と同じである。２は口縁部から頸部にかけての部位。口縁部が大きく開く。頸部に簾状文が巡り、外面無文部及び内面は磨耗が顕著であるため不明である。３～10は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。３・８は内外面ヘラナデ調整、その他は外面がヘラミガキ調整である。４は内面の磨耗が著しいため図示していないが、６・７・９・10とともに横・斜位のヘラナデ調整である。５は内外面ヘラミガキ調整で赤彩が施されていることから広口壺か。９は底部外面にヘラミガキ前のハケメが残る。10は外面に赤





土層説明（ＡＡ′）

1 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量含む。
2 オリーブ黒色土：火山灰、腐蝕植物片多量含む。
3 黄　灰　色　土：粘土質。火山灰、炭化物少量含む。
4 灰　色　土：粘土質。炭化物、木片微量含む。
5 灰　色　土：粘土質。炭化物微量含む。粘性やや強。
6 黄　灰　色　土：粘土質。炭化物多量、木片少量、火山灰微量含む。
7 オリーブ黒色土：粘土質。腐蝕植物片帯状に少量、灰白色粒微量含む。
8 灰色シルト：明青灰色粒、木片微量含む。
9 黄灰色シルト：にぶい黄色ブロック、木片少量含む。
10 灰色シルト：黄灰色土多量、木片少量含む。
11 灰　色　粘　土：炭化物微量含む。
12 黄　灰　色　土：灰白色粒少量、炭化物、木片微量含む。
13 褐　灰　色　土：炭化物、木片微量含む。
14 黄　灰　色　土：ややシルト質。火山灰、炭化物少量含む。
15 灰　色　土：灰白色粒・ブロック微量含む。
16 灰　色　土：粘土質。炭化物、木片少量含む。
17 黄　灰　色　土：炭化物、木片少量含む。
18 オリーブ灰色土：シルト質。木片多量含む。
19 黄　灰　色　土：粘土質。
20 灰　色　土：シルト質。明青灰色シルト、木片微量含む。
21 明青灰色粘土：灰色ブロック多量含む。
22 灰　色　粘　土：明青灰色粒、木片微量含む。
23 明オリーブ灰色砂
24 灰　色　粘　土：青灰色砂多量、木片少量含む。
25 にぶい黄色シルト
26 にぶい黄色シルト：明青灰色ブロック少量含む。
27 黄　灰　色　砂：小礫、灰白色シルト少量含む。
28 灰白色粘土：木片微量含む。
29 灰　色　粘　土：灰白色粒多量、木片少量含む。
30 灰　色　粘　土：灰白色粒・ブロック多量、木片少量含む。
31 灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック多量含む。
32 灰　色　土：シルト質。灰白色粒少量含む。
33 灰白色シルト

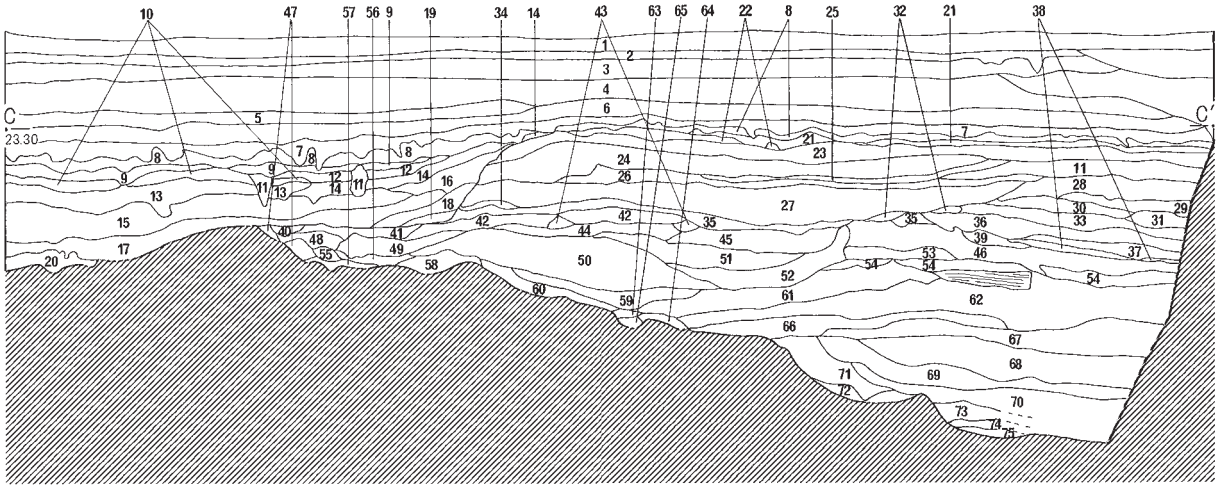
土層説明（ＢＢ′）

1 灰　色　土：粘土質。火山灰少量、酸化鉄、炭化物微量含む。
2 灰　白　色　土：シルト質。灰色ブロック多量、炭化物少量含む。
3 黄　灰　色　土：粘土質。火山灰、酸化鉄微量含む。
4 褐　灰　色　土：粘土質。火山灰、灰白色粒・ブロック、腐蝕植物片微量含む。
5 黒　色　土：粘土質。腐蝕植物片、木片多量、火山灰、灰白色粒少量含む。
6 黄　灰　色　土：粘土質。灰白色ブロック帯状に多量、火山灰、炭化物少量含む。
7 オリーブ黒色土：粘土質。火山灰、腐蝕植物片多量、灰白色粒・ブロック、木片少量含む。
8 灰　色　粘　土：腐蝕植物片、木片少量含む。
9 黄　灰　色　土：シルト質。灰白色粒多量、黄灰色粒、オリーブ黒色粒、火山灰、炭化物、木片少量含む。
10 灰　色　土：ややシルト質。木片多量、灰白色粒少量含む。
11 灰　色　土：シルト質。灰白色粒少量、炭化物微量含む。
12 明青灰色砂：木片少量含む。
13 灰　色　粘　土：木片多量、炭化物、腐蝕植物片少量含む。
14 黄　灰　色　土：シルト質。灰色粒少量、炭化物、灰白色粒微量含む。
15 褐灰色粘土：オリーブ灰色粒・ブロック多量、炭化物、腐蝕植物片、木片微量含む。
16 オリーブ灰色粘土：木片少量、黒色ブロック、灰色ブロック微量含む。
17 褐　灰　色　土：粘土質。炭化物少量含む。
18 黄　灰　色　土：シルト質。灰白色粒微量含む。
19 灰　色　粘　土：明オリーブ灰色ブロック少量、炭化物微量含む。
20 褐灰色粘土：木片少量、灰白色粒微量含む。
21 オリーブ灰色砂：炭化物、礫微量含む。
22 灰白色シルト：酸化鉄微量含む。
23 灰　色　粘　土：明青灰色ブロック多量含む。
24 暗灰黄色粘土：炭化物、木片多量含む。粘性強。
25 明青灰色砂：木片微量含む。
26 オリーブ灰色砂：木片微量含む。
27 黄　灰　色　土：シルト質。明青灰色粒・ブロック多量、明緑灰色粒少量含む。
28 黄　灰　色　砂：灰色ブロック、木片微量含む。
29 灰　色　粘　土：明青灰色砂多量含む。粘性強。

0　1m
1：50

第49図　第１号河川跡土層断面図（1）

彩が施されている。50～61は口縁部から頸部までに収まる破片。口縁部は60以外すべて複合口縁である。51～53・58は口縁端部に刻みを持ち、53は複合口縁下にも刻みを持つ。50～52は複合口縁部に櫛歯状工具による波状文が巡り、51は内面にも描かれている。櫛歯状工具の単位は50が４本、51・52が７本である。53は複合口縁上下の刻み間にＬＲ単節縄文が施文されている。50・53は複合口縁部下及び内面にヘラミガキ調整と赤彩が施されている。ヘラミガキは50が横位、53が横・斜位に施されている。51・52は複合口縁部以下及び内面に横・斜位のヘラナデ調整が施されている。54～57は外面が無文である。54・56は内外面横位のヘラナデ、55は外面が横位のヘラナデ、内面は横位のハケメ調整である。57は外面が



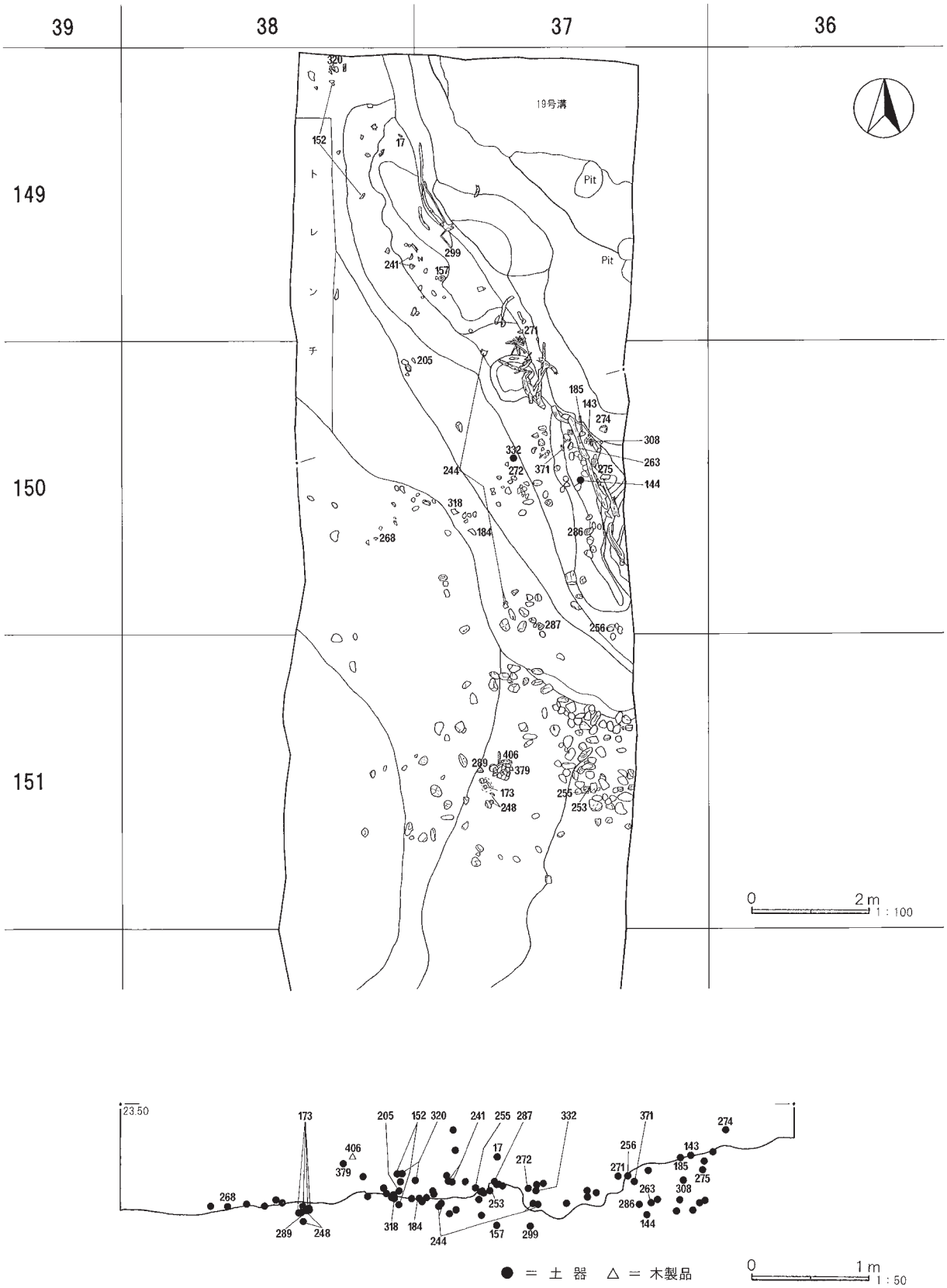
土層説明（ＣＣ′）

1 灰　色　土：耕作土。
2 灰　色　土：火山灰多量、酸化鉄微量含む。
3 灰　白　色　土：火山灰、酸化鉄少量含む。
4 灰　色　土：酸化鉄多量、火山灰微量含む。粘性やや強。
5 灰　色　土：火山灰微量含む。
6 灰　色　土：粘土質。火山灰、炭化物、灰白色粒微量含む。
7 黄　灰　色　土：粘土質。火山灰、酸化鉄、炭化物微量含む。
8 オリーブ黒色土：粘土質。火山灰、腐蝕植物片、木片多量含む。
9 灰　色　土：粘土質。腐蝕植物片少量、灰白色粒、木片微量含む。
10 灰　色　土：粘土質。腐蝕植物片少量、炭化物、木片微量含む。
11 黄　灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック微量含む。
12 オリーブ灰色土：粘土質。灰白色粒、腐蝕植物片少量含む。
13 褐　灰　色　土：粘土質。灰白色粒・ブロック、腐蝕植物片、木片少量含む。
14 灰　色　土：粘土質。灰白色粒、腐蝕植物片、木片微量含む。
15 灰　色　粘　土：炭化物、明青灰色ブロック微量含む。
16 黄　灰　色　粘　土：明青灰色粒・ブロック多量、炭化物少量、灰色粒微量含む。
17 灰　色　土：シルト質。炭化物、灰白色粒・ブロック、木片微量含む。
18 灰　色　粘　土：灰オリーブ色砂多量含む。
19 灰　色　土：シルト質。明青灰色粒微量含む。
20 灰　白　色　砂：灰色粘土多量含む。
21 灰　色　粘　土：黄灰色粒・ブロック少量含む。
22 黄　灰　色　粘　土：灰白色粒・ブロック少量含む。
23 黄　灰　色　土：粘土質。炭化物、灰白色粒少量含む。
24 灰　黄　色　土：粘土質。灰色土を帯状に多量、炭化物微量含む。
25 褐　灰　色　土：粘土質。灰黄色土を帯状に多量、炭化物微量含む。
26 灰　色　土：粘土質。灰黄色土、腐蝕植物片を帯状に多量含む。
27 黄　灰　色　土：粘土質。オリーブ灰色シルト多量、灰白色粒・ブロック、腐蝕植物片、木片微量含む。
28 灰　色　粘　土：腐蝕植物片多量、明青灰色粒微量含む。
29 オリーブ黒色粘土：灰白色粘土を帯状に多量、腐蝕植物片、明青灰色砂微量含む。
30 明　青　灰　色　砂：オリーブ黄色砂多量含む。
31 青　灰　色　砂：灰色粒、木片微量含む。
32 灰　色　砂：黄灰色粒、木片微量含む。
33 灰　色　粘　土：青灰色砂多量、炭化物、木片微量含む。
34 灰　白　色　砂：灰色砂多量含む。
35 オリーブ灰色砂：炭化物、灰白色粒微量含む。
36 黄　灰　色　粘　土：明オリーブ灰色粘土を帯状に多量、腐蝕植物片、木片微量含む。
37 褐　灰　色　粘　土：木片を帯状に多量含む。
38 黄　灰　色　粘　土：明オリーブ灰色粘土、明緑灰色シルトを帯状に多量含む。
39 明緑灰色シルト：黄灰色粒微量含む。
40 明　青　灰　色　砂：灰色ブロック多量含む。
41 灰　黄　色　砂：浅黄色砂多量、灰色砂少量、炭化物微量含む。
42 暗青灰色シルト：腐蝕植物片、木片多量、明青灰色ブロック少量含む。
43 灰　白　色　砂
44 浅　黄　色　砂：褐灰色ブロック微量含む。
45 黄　灰　色　粘　土：オリーブ灰色砂多量、炭化物、腐蝕植物片微量含む。
46 黄　灰　色　粘　土：明オリーブ灰色粘土を帯状に多量、オリーブ灰色砂多量、灰白色粒、木片微量含む。
47 黄　灰　色　土：シルト質。灰黄色砂微量含む。
48 褐　灰　色　土：シルト質。炭化物多量、灰色砂少量、灰白色粒微量含む。
49 黄　灰　色　粘　土：黒色粘土を帯状に多量、炭化物多量、灰色砂微量含む。
50 灰色砂及び明青灰色砂、灰白色砂の混合層。
51 明オリーブ灰色砂：灰白色砂多量含む。
52 暗黄灰色粘土：明青灰色砂を帯状に多量、木片微量含む。
53 褐　灰　色　粘　土：木片微量含む。
54 黒　褐　色　粘　土：暗灰色砂多量、木片少量含む。
55 灰　色　粘　土：明青灰色砂少量、炭化物、灰白色粒微量含む。
56 黄　灰　色　粘　土：黄灰色ブロック、明青灰色粒少量、炭化物微量含む。
57 灰　色　粘　土：灰白色粒少量含む。
58 灰　色　砂：灰白色ブロック微量含む。
59 黄　灰　色　粘　土：灰色砂少量、明青灰色粒微量含む。
60 灰　色　シ　ル　ト：明青灰色粒・ブロック多量、灰白色ブロック微量含む。
61 黒　褐　色　粘　土：木片少量、明青灰色砂微量含む。
62 褐　灰　色　粘　土：明青灰色ブロック、木片多量、腐蝕植物片少量、炭化物、明緑灰色砂微量含む。
63 灰白色粘土及び明青灰色粘土の混合層。
64 灰　色　砂：黒褐色ブロック多量含む。
65 灰　色　シ　ル　ト：明青灰色粒微量含む。
66 明　青　灰　色　砂：腐蝕植物片、木片多量含む。
67 青　灰　色　砂：腐蝕植物片、木片多量含む。
68 明　青　灰　色　砂：腐蝕植物片、木片多量含む。
69 黄　灰　色　粘　土：青灰色砂少量、木片微量含む。
70 黄　灰　色　粘　土：明青灰色砂、木片多量含む。
71 灰　色　粘　土：明青灰色粒・ブロック微量含む。
72 灰　色　粘　土：灰色ブロック、灰白色粒・ブロック少量含む。
73 青灰色シルト：黄灰色ブロック多量、木片微量含む。
74 明　青　灰　色　砂：黒褐色粘土を帯状に多量含む。
75 灰　色　粘　土：粘性強。

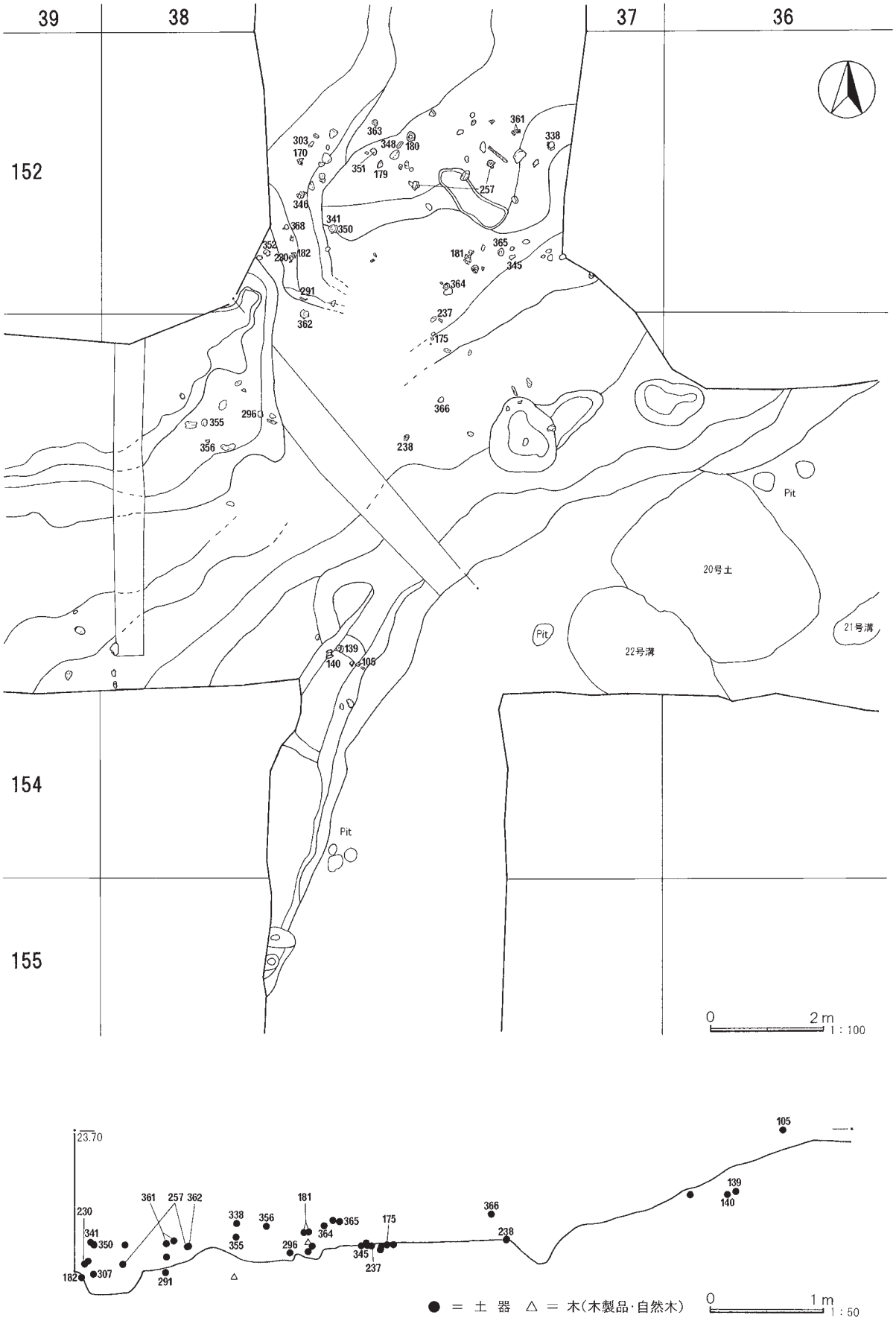
0　2m
1：60

第50図　第１号河川跡土層断面図（2）

複合口縁部のみ横位のヘラナデ、以下は斜位のハケメであり、内面は横・斜位のハケメ調整である。58・59は複合口縁部に縄文が施文されており、以下及び内面は横位のヘラナデ調整である。縄文は58がＬＲ単節縄文、59が無節Ｒである。60は無文で口縁端部に刺突の施されたボタン状貼付文が付けられている。内外面の調整は横位のヘラナデである。61は頸部片。二条の沈線が横位に巡る。外面調整は横・斜位、内面は縦・横位のヘラナデである。62～64は肩部から胴上部にかけての破片。横位の平行沈線や波状沈線が数条巡る。62・63は上部に巡る平行沈線間に刺突列が刻まれており、63は肩部に縦位の羽状



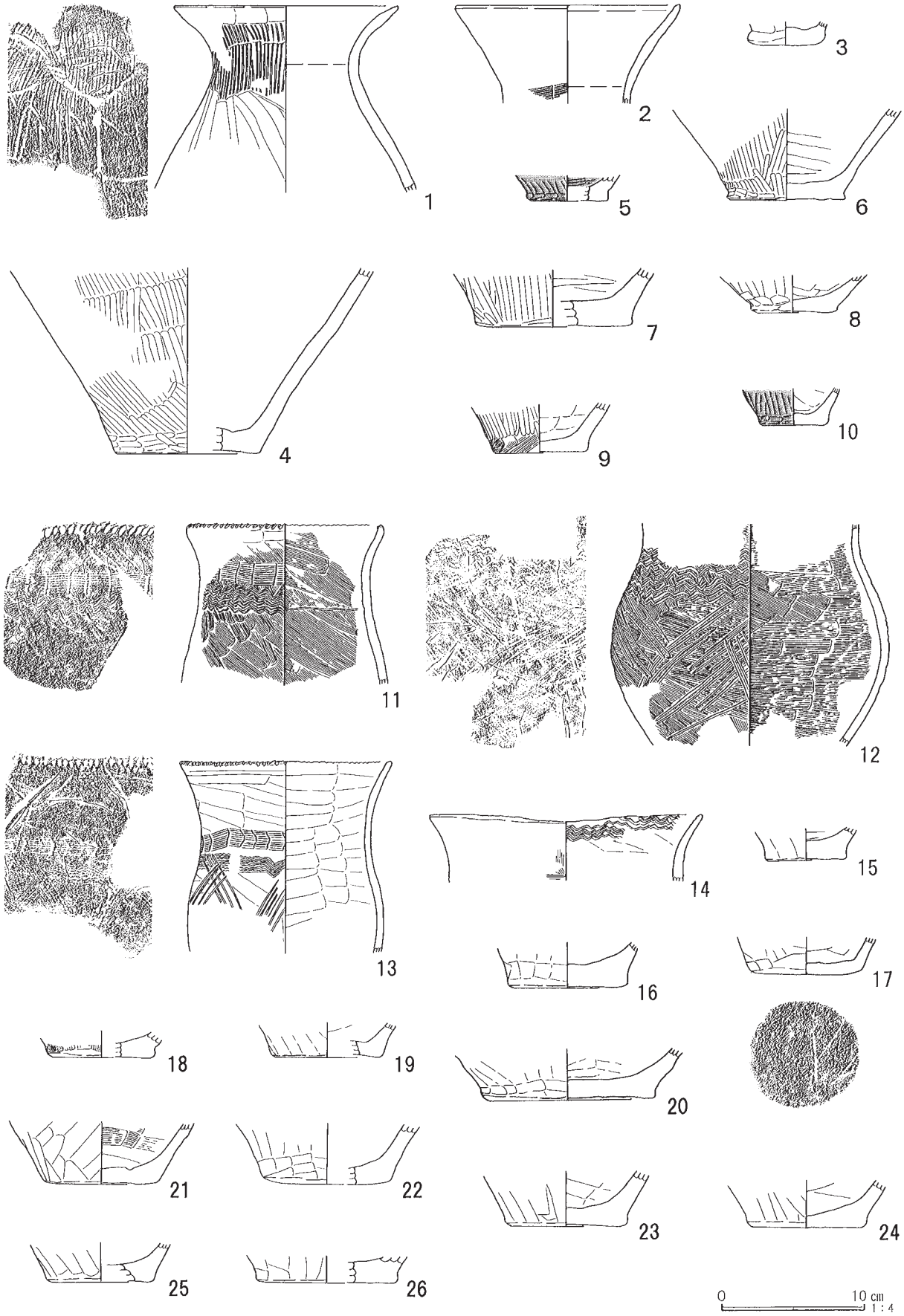
第51図　第１号河川跡遺物出土状況（1）



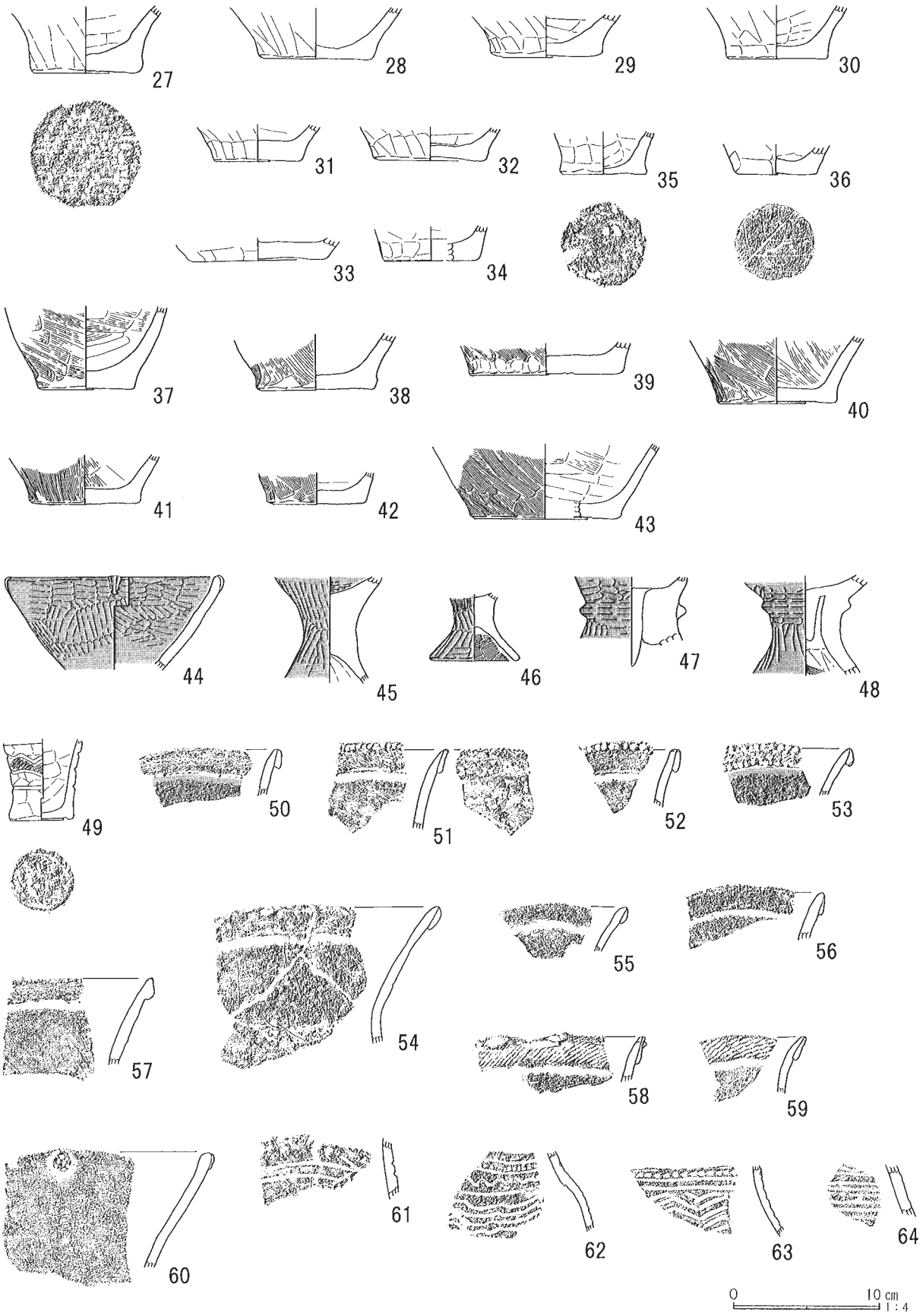
第52図　第１号河川跡遺物出土状況（2）

第53図　第１号河川跡遺物出土状況（3）

文が描かれている。内面調整は63が横・斜位、その他は横位のヘラナデ調整である。62は内面に輪積痕が残る。65～68は沈線により重四角文が描かれる胴上部から中段にかけての破片。68は重四角文外にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は67が横・斜位、その他は横位のヘラナデである。69は胴部片。やや太目の沈線が上部は縦位、下部は横位に描かれ、横位の沈線間に刺突列が刻まれている。内面は横・斜位のヘラナデである。70～72は胴上部片。70は沈線によるフラスコ文と思われる文様、71・72は太目の沈線で重三角文ないし菱形文が描かれている。70・71・72は地文にＬＲ単節縄文が施文され、72は文様区画内に刺突が刻まれている。内面調整は70が横位、71は斜位、72は横・斜位のヘラナデである。73～75は刺突が刻まれた肩部から胴上部にかけての破片。刺突は73・74が半円状、75が円形を呈し、73



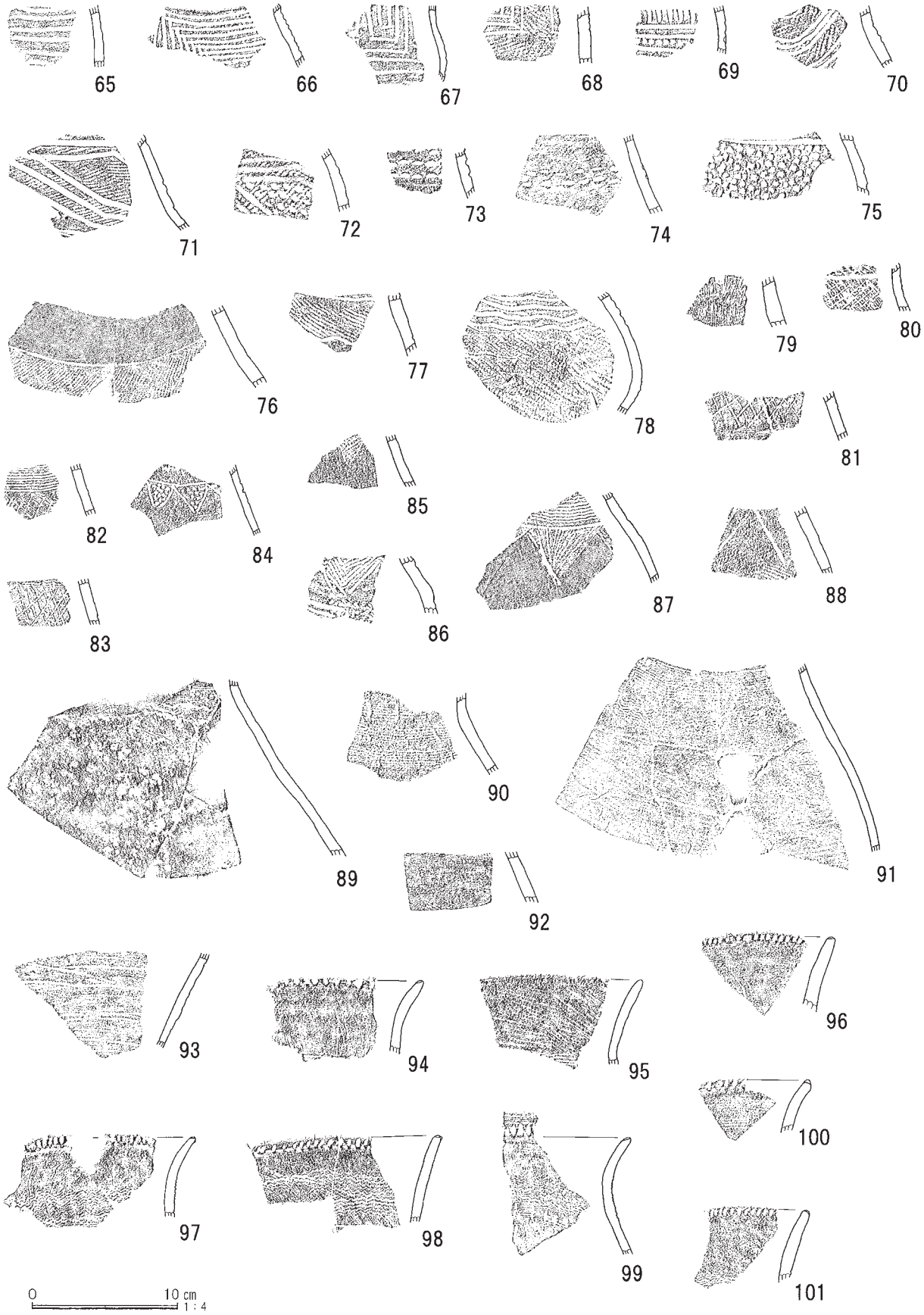
第54図　第１号河川跡出土遺物（1）



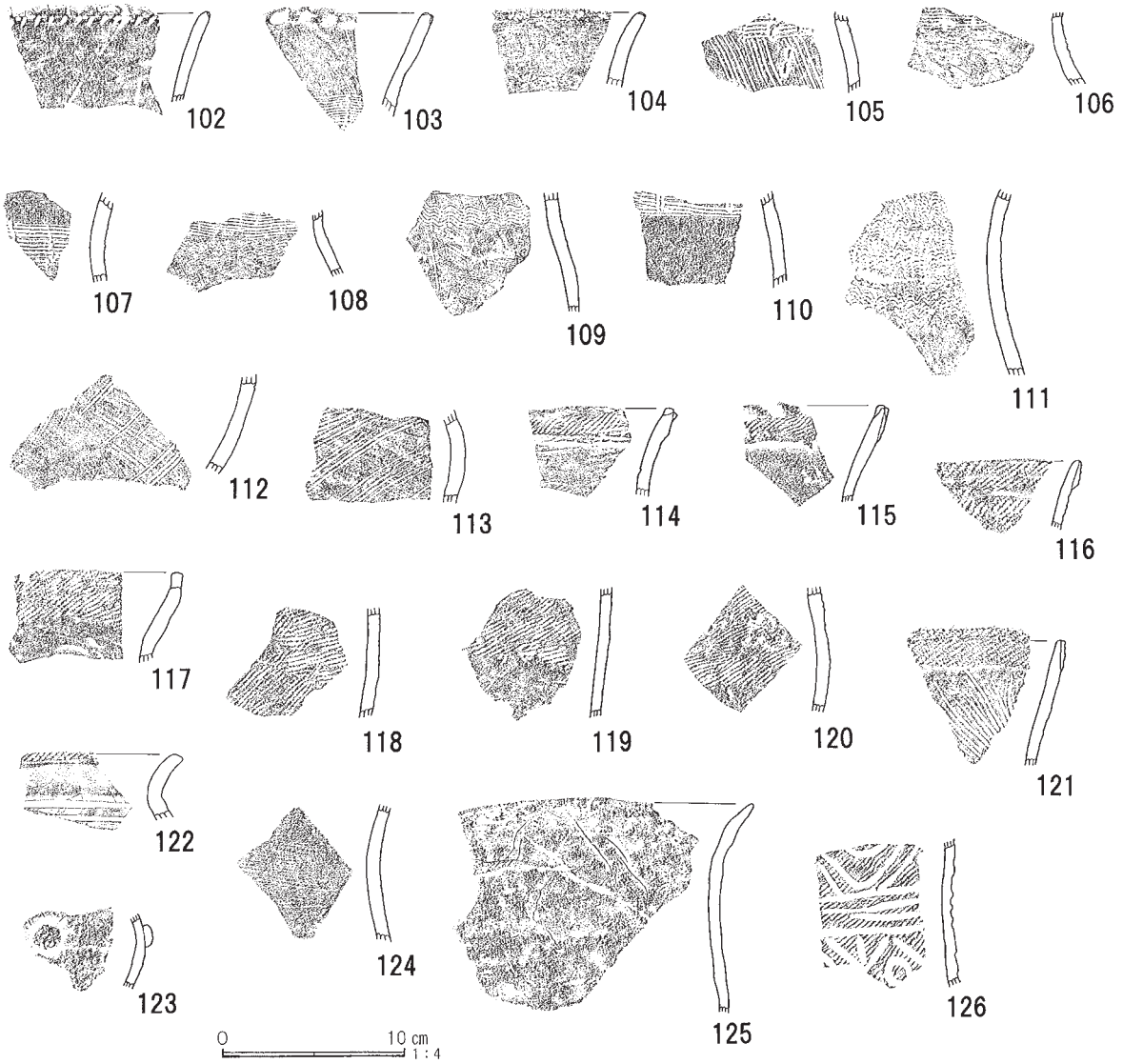
第55図　第１号河川跡出土遺物（2）

はＬＲ単節縄文地、74は横位のヘラナデ上に刻まれている。75はランダムに刻まれた刺突上に横位の沈線が巡る。内面調整は75が横・斜位、その他は横位のヘラナデである。76～78は縄文が施文された破片。76は肩部片。沈線下にＬＲ単節縄文が施文されており、上部は無文で横位のヘラミガキ調整と赤彩が施されている。77は胴上部片。横位の沈線と波状沈線間にＲＬ単節縄文が施文されている。78は胴上部から中段にかけての破片。横位に巡る太目の波状沈線下にＲＬ単節縄文が施文されている。内面調整は78が横・斜位のハケメ、その他は横位のヘラナデである。76は内面に輪積痕が残る。79は短く細い沈線が縦位に刻まれた肩部片。内面は横・斜位のヘラナデである。80～83は頸部から肩部までに収まる破片で細い沈線で斜格子文が描かれている。80は斜格子文上に横位の沈線が巡り、その上は斜位の沈線が描かれている。82は斜格子文上に櫛歯状工具による平行沈線が簾状文状に巡る。83は斜格子文上に櫛歯状工具による波状文が巡る。内面調整は80が縦位、81が横位、82・83が斜位のヘラナデである。84～88は細い沈線で鋸歯文が描かれた肩部から胴上部にかけての破片。84は鋸歯文内に円形の刺突が刻まれ、鋸歯文上には櫛歯状工具による波状文と横位の沈線が巡る。外面無文部は横位のヘラナデ調整である。85は鋸歯文内に斜格子文が描かれ、無文部は斜位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。86は鋸歯文内に２本一単位の櫛歯状工具で羽状文が描かれている。鋸歯文下には横位の平行沈線が巡り、間に刺突列が刻まれている。87は斜位の沈線を充填した鋸歯文上に櫛歯状工具による波状文と簾状文状の平行沈線が巡る。鋸歯文外は斜位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。88は鋸歯文内にＲＬ単節縄文が施文されている。内面調整は86が横・斜位、その他は横位のヘラナデである。89～91は頸部から胴上部までに収まる破片であり、櫛歯状工具による簾状文が巡る。櫛歯状工具の単位が分かるものは90が７本、91が８本である。89・91は簾状文下に同一工具による波状文が巡り、90は簾状文が数段巡る。89は剥離が顕著であるため定かではないが、波状文下は横位のヘラミガキ調整である。91は波状文下が横・斜位のハケメ調整である。内面調整は89が横位、90が横・斜位、91が横・斜位のハケメである。92は胴上部片。外面は横・斜位のヘラミガキ調整であるが、所々にヘラミガキ前のハケメ調整が残る。内面は横位のハケメ調整である。93は胴下部片。横位のヘラナデ調整であるが、条痕状を呈している。内面調整は横・斜位のヘラナデである。

11～43・94～125は甕。11～14・94～113は櫛歯状工具により文様が描かれる一群。11は口縁部から胴部中段までの部位。口縁部がやや受け口状を呈し、胴部の膨らみは小さく、最大径が口径とあまり変わらない。口縁端部に刻みを持ち、頸部に櫛歯状工具による11本一単位の簾状文が巡り、その下に同一工具で波状文が巡る。外面無文部は口縁部のみヘラナデが横位に施され、その他は内面も含めハケメ調整である。12は頸部から胴下部にかけての部位。頸部はほぼ直立し、胴部は球形を呈し、最大径を中段に持つ。頸部は残存箇所が少ないが簾状文が巡り、その下に２本一単位の波状文が四段、さらにその下には縦位の羽状文が描かれている。内外面の調整はハケメである。13は口縁部から胴下部にかけての部位。やや長い口縁部が緩やかに開き、胴部の膨らみが小さく、口径と胴部最大径がほぼ同じである。口縁端部に刻みを持ち、頸部には９本一単位の簾状文、その下には同一工具で波状文が巡り、胴部には細い沈線四～六条で鋸歯文が描かれている。外面無文部及び内面の調整はヘラナデである。14は口縁部から頸部にかけての部位。口縁部は緩やかに開く。頸部に簾状文が巡り、口縁部内面に同一工具による波状文が描かれている。内面波状文の単位は４本である。外面無文部の調整はハケメ、内面はヘラナデである。94～104は口縁部から頸部までに収まる破片。口縁端部は103のみ指頭圧痕、94・96～102・104は刻みを

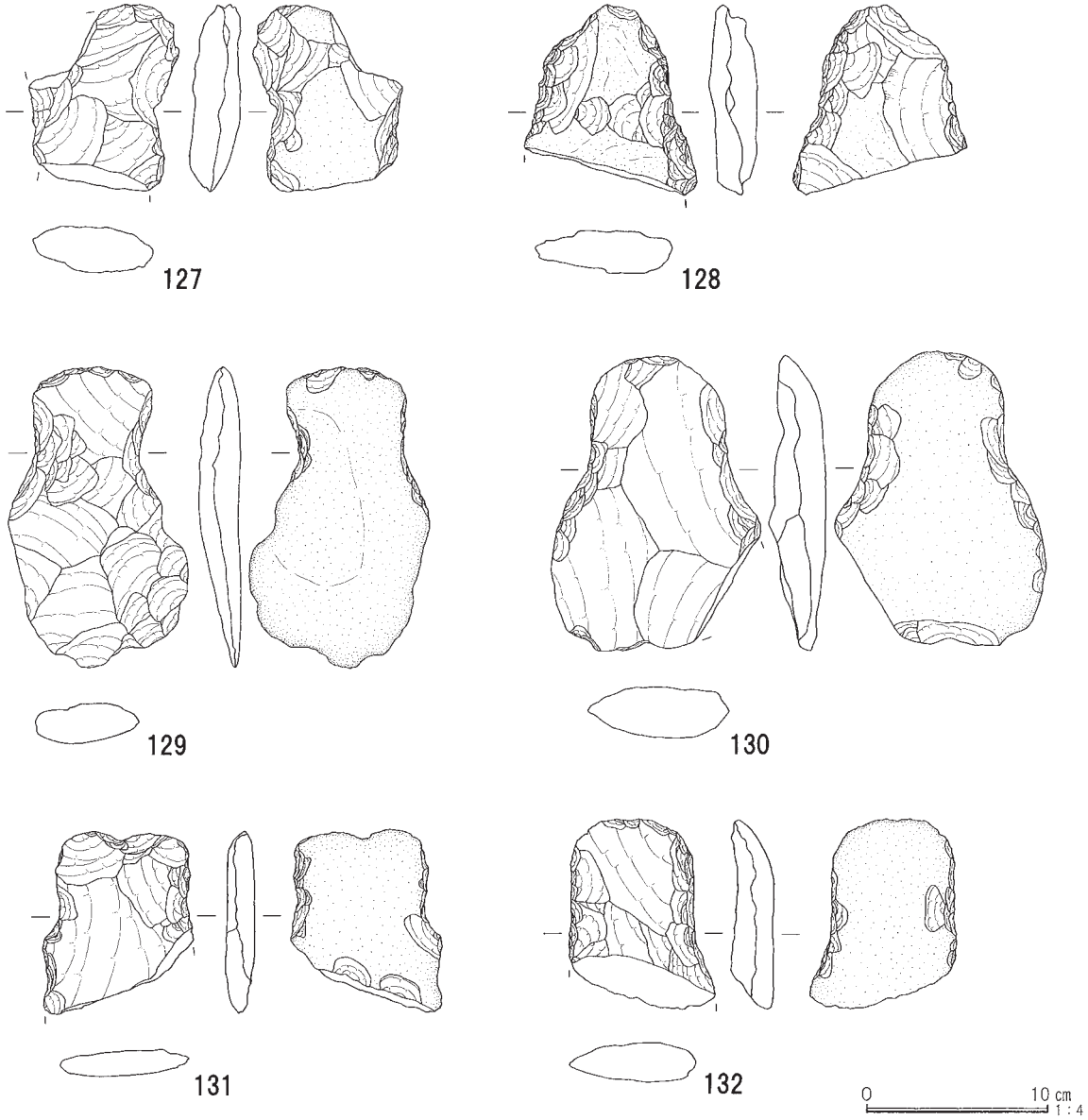


第56図　第１号河川跡出土遺物（3）



第57図　第１号河川跡出土遺物（4）

持ち、95は素口縁である。刻みを持つ口縁部のうち、94・99は端部内面、97・98は内外面、その他は端部上面に刻まれている。頸部には簾状文が巡るもの（94・95・99・103）、波状文のみが巡るもの（97・98・101）、無文のもの（96・100・102・104）があるが、無文のものについては簾状文か波状文が頸部に巡る可能性がある。簾状文が巡るもののうち、99はその上に同一工具で波状文が二段巡る。波状文のみのものは97・98が二段巡る。櫛歯状工具の単位が分かるものは、97が７本、98が６本、99が８本である。外面無文部の調整は94・100が横位、95が斜位、96・98が横・斜位のハケメ、97・99・101・103・104は横位、102が横・斜位のヘラナデである。内面調整は94・95が横・斜位、96・100は横位、98は斜位のハケメ、97・101は横・斜位のヘラナデ、99は横位のハケメとヘラナデ、102～104は横位のヘラナデである。104は内外面に煤が付着していた。105～111は頸部から胴上部までに収まる破片。105～108は頸部に簾状文が巡る。105は簾状文下に同一工具で横位の羽状文が描かれている。106～108は簾状文下に同一工具による波状文が巡る。櫛歯状工具の単位が分かるものは107が11本、108が８本、109が９本、110が２本、111が８本である。110は２本一単位が複数巡ることで擬簾状文が描かれている。頸部



第58図　第１号河川跡出土遺物（5）

以下は横・斜位のハケメ調整である。111は波状文が四段以上描かれており、以下は縦位のハケメ調整である。外面無文部の調整は106が横位のヘラナデ、107が縦位の細かいハケメ、108は斜位、109は横・斜位のハケメである。内面調整は105・108・111が横・斜位、106・109・110が横位のヘラナデ、107が斜位のハケメである。112・113は胴下部及び胴部中段の破片。２本一単位で縦位の羽状文が描かれている。内面調整はともに横位のヘラナデである。15～43は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。ヘラナデ調整主体のもの（15～17・19～36）とハケメ調整のもの（18・37～43）がある。前者の21は内面にハケメ調整も認められた。17・36は底部外面に木葉痕、27・35は網代痕が残る。甕としたが壺になる可能性もある。114～122はＬＲ単節縄文が施文される一群。114～117は口縁部から頸部にかけての破片。114～116は複合口縁であり、114・115は端部に刻みを持つ。また117は口縁端部の一部に四角い窪みを持つ。縄文は116のみ全面、その他は複合口縁部のみ施文され、頸部は無文である。頸部外面の調整は114が横・斜位のヘラナデ、115は複合口縁直下が横位のヘラナデであり、以下は斜位のハケメ、117は

横位のヘラナデである。118～120は胴部中段の破片。119・120は下部が無文で119は斜位、120は横位のヘラナデ調整である。121・122は口縁部から頸部にかけての破片。121は縄文と櫛歯状工具による文様の折衷型。複合口縁で端部まで縄文が施文され、頸部には櫛歯状の沈線が斜位に施文されている。122は縄文が口縁端部にのみ施文されている。口縁部は無文で横位のヘラナデ調整が施され、頸部には太目の沈線が横位に巡る。114～122の内面調整は114・121が横・斜位、115～117・120・122が横位、118・119が斜位のヘラナデである。123は刺突の刻まれたボタン状貼付文が付いた胴上部片。外面無文部は横・斜位、内面は横位のヘラナデである。124は無文でハケメ調整の頸部片。内外面ともに横・斜位に施されている。125は口縁部から胴上部にかけての破片。内外面無文で口縁部外面及び内面は横位、頸部以下は斜位のヘラナデ調整である。

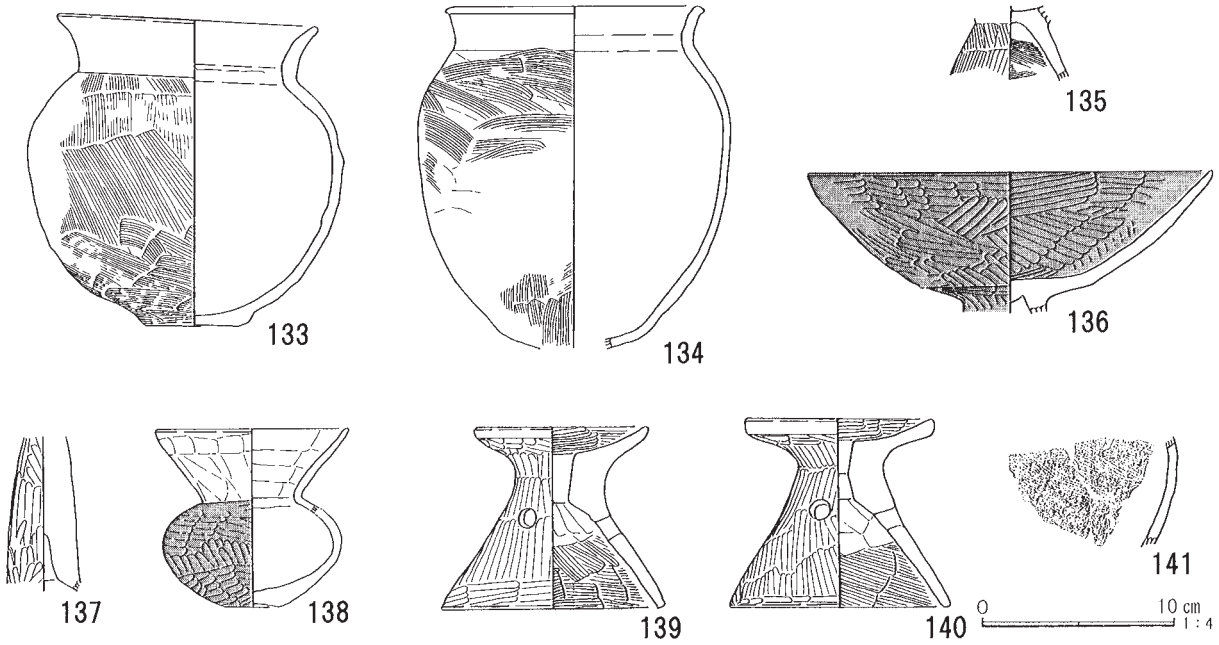
44～48は高坏。44は坏部、45・47・48は接合部、46は接合部から脚部にかけての部位である。外面及び44・45の坏部内面はヘラミガキ調整で赤彩が施されている。44は深身でやや受け口状を呈し、口縁端部に突起を持つ。46は接合部にヘラミガキ前のハケメ調整が残る。脚部内面の調整はハケメである。47・48は接合部に突帯が巡る。

49・126は筒型土器。49は胴部がほぼ直立する。胴部上下にやや太目の沈線が横位に走り、その間に波状沈線が二条巡り、区画内にＬＲ単節縄文が充填されている。外面無文部及び内面はヘラナデ調整である。底部外面に木葉痕が残る。126は胴部片。やや太目の沈線で横位の平行沈線上下に菱形文、区画内に円形文様が描かれている。地文にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は横位のヘラナデである。筒型土器としたが壺の頸部の可能性が高く、弥生時代中期中頃のものと思われる。

127～132は打製石斧。完形品は129のみである。すべて粘板岩製であり、片面に自然面を残すものが多い。127・129は分銅型、128・130は中段にやや抉りが入り、分銅型と撥型の中間的な形状、131・132は短冊型を呈すると思われる。

133～141は古墳時代前期の土師器。133・134・141は甕。133は口縁部が緩やかに外反し、胴部はほぼ球形を呈し、最大径を中段よりやや上に持つ。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部以下は外面がハケメ、内面はヘラナデ調整である。口縁部内面に輪積痕が残る。134は口縁部がやや外反する。胴部は倒卵形を呈し、最大径を中段より上に持つ。口縁部は内外面ともに横ナデ、胴部以下は外面がハケメ調整であるが所々に隙間がみられ、ハケメ前にヘラナデ調整が施されていることが認められた。内面はヘラナデ調整である。141は胴下部片。外面は斜位のハケメ、内面は横位のヘラナデ調整である。135は台付甕の接合部から台部上部にかけての部位。内外面ハケメ調整であるが、外面は目が粗いのに対し、内面は細かい。136・137は高坏。136は坏部、137は脚部である。136はやや深身で坏部下に稜を持つ。口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。坏部内面及び外面はともにヘラミガキ調整で赤彩が施されている。137は柱状を呈し、調整はヘラミガキである。138は小型壺。口縁部はやや受け口状を呈し、胴部はやや詰まった球形を呈する。底部はやや上げ底である。口縁部は内外面ともにヘラナデ、胴部外面はヘラミガキで赤彩が施されている。胴部内面はナデ調整であり、上部に輪積痕が残る。139・140は器台。ともに完形品であり、38－154グリッドより並んで出土した。器受部は浅く、台部はハの字に開く。台部には三つ透かし孔を持つ。口縁部外面は横ナデ、口縁部以下の外面及び器受部内面はヘラミガキ調整であり、台部内面は上部がヘラナデ、下部はハケメ調整である。

142～397は古代の遺物。土器は判別が可能なものに限り種類及び時期別に述べる。時期区分は主に８



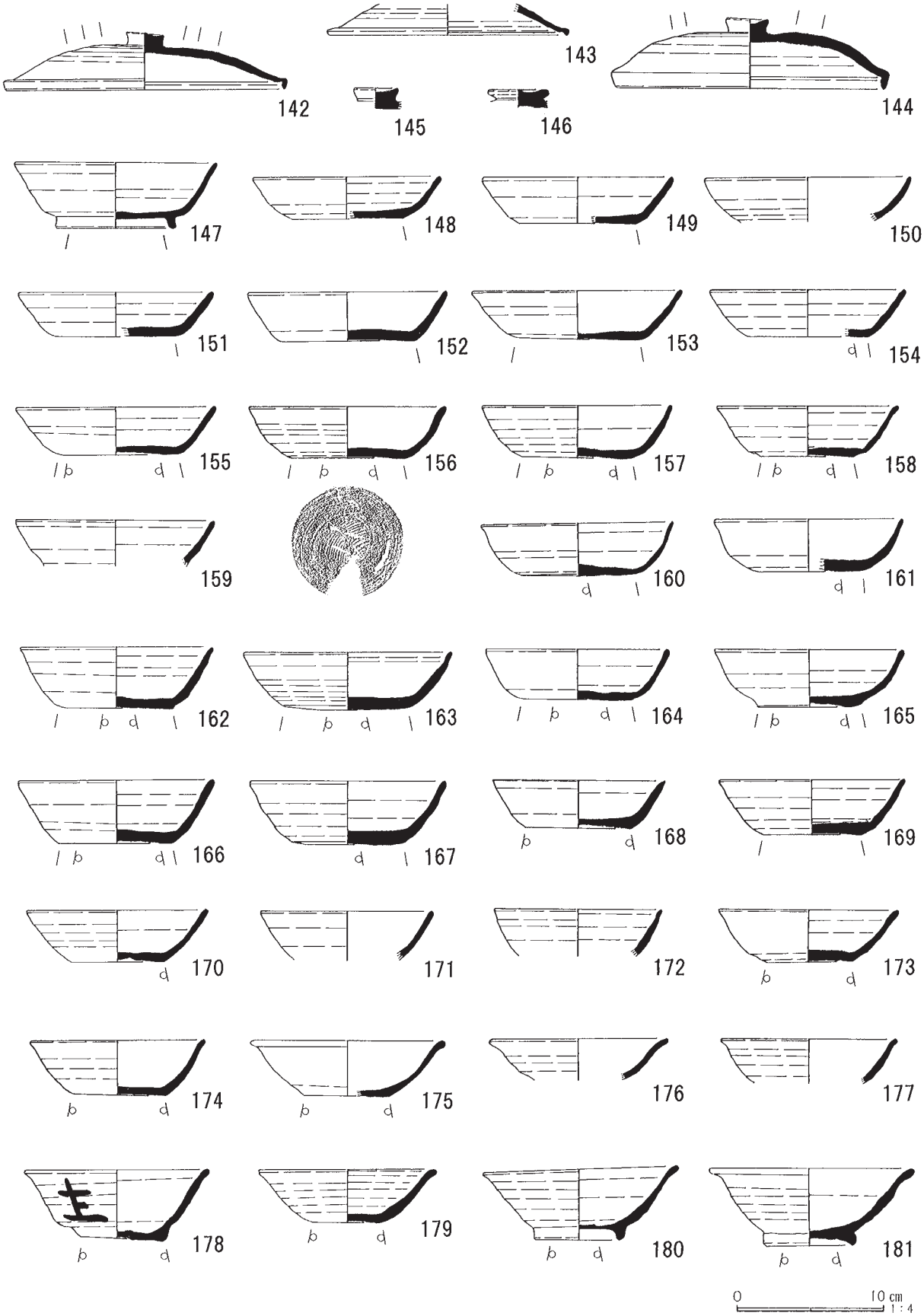
第59図　第１号河川跡出土遺物（6）

世紀代、９世紀代、10世紀以降の三つに大きく分けられ、さらに時期差が認められるものについては個別に記述する。その他の遺物については時期の特定が困難であるため個々に述べる。

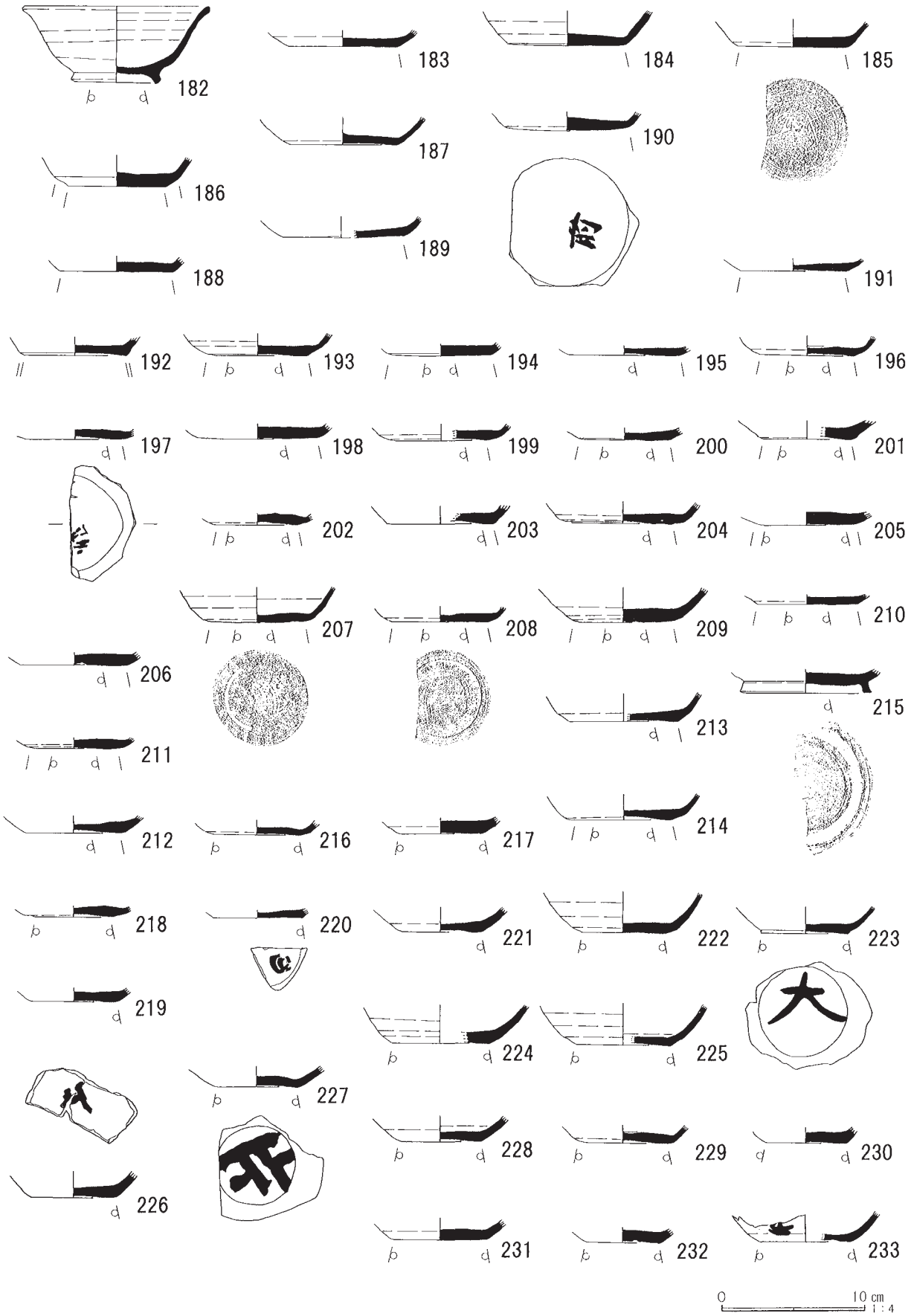
142～312は須恵器。142～146は蓋、147～179・183～233は坏、180～182・234～238は高台付椀、239～242は椀、243～251・260～307は甕、252～258・308～312は瓶類、259は無頸壺である。時期の特定が可能なものは蓋、坏、高台付椀、椀のみであり、８世紀代と９世紀代に分けられる。

８世紀代に相当するものは、蓋142・144～146、坏147～167・183～215、椀239～242である。検出された須恵器で時期の特定ができるものでは当段階が最も多く検出されている。産地は南比企産が大半を占める。蓋は全形の分かるものは二点のみである。142・144は口径からみてともに椀蓋と思われる。８世紀後半を中心とする段階と判断したが、９世紀代まで時期が下る可能性もある。坏は８世紀前半から中頃にかけての段階（147～153・183～192）と後半を中心とする段階（154～167・194～215）に分けられ、147・215には高台が付く。前者は器高が低く、口縁部がほぼ直線的に開く。口径14cm、器高３cm、底径８cm前後を測るものが主体となる。底部調整は全面回転ヘラ削りである。185の底部外面にはヘラによる刻み、190は底部外面に墨書「前」がみられた。後者は口縁部から体部にかけてやや丸みを持って立ち上がり、前者に比べて器高がやや高くなる。口径13.5cm、器高４cm、底径7.5cm前後を測るものが主体となるが、径が一回り小さいものについてはさらに時期が下る可能性もある。底部調整は回転糸切り後外周ヘラ削りである。156・207・208は底部外面にヘラによる刻み、197は底部内面に判読不能な墨書、205は内面に漆と思われる付着物がみられた。椀も坏と同じく８世紀前半から中頃にかけての段階（239・240）と後半を中心とする段階（241・242）に分けられる。前者は全形が分かるものは239のみであるが、後述する後者に比べて径が大きく、底部調整は全面回転ヘラ削りである。239の底部外面は渦巻状にヘラ削りが残る。後者は口径15cm、器高5.5cm、底径7.5cm前後を測り、底部調整は回転糸切り後外周ヘラ削りである。

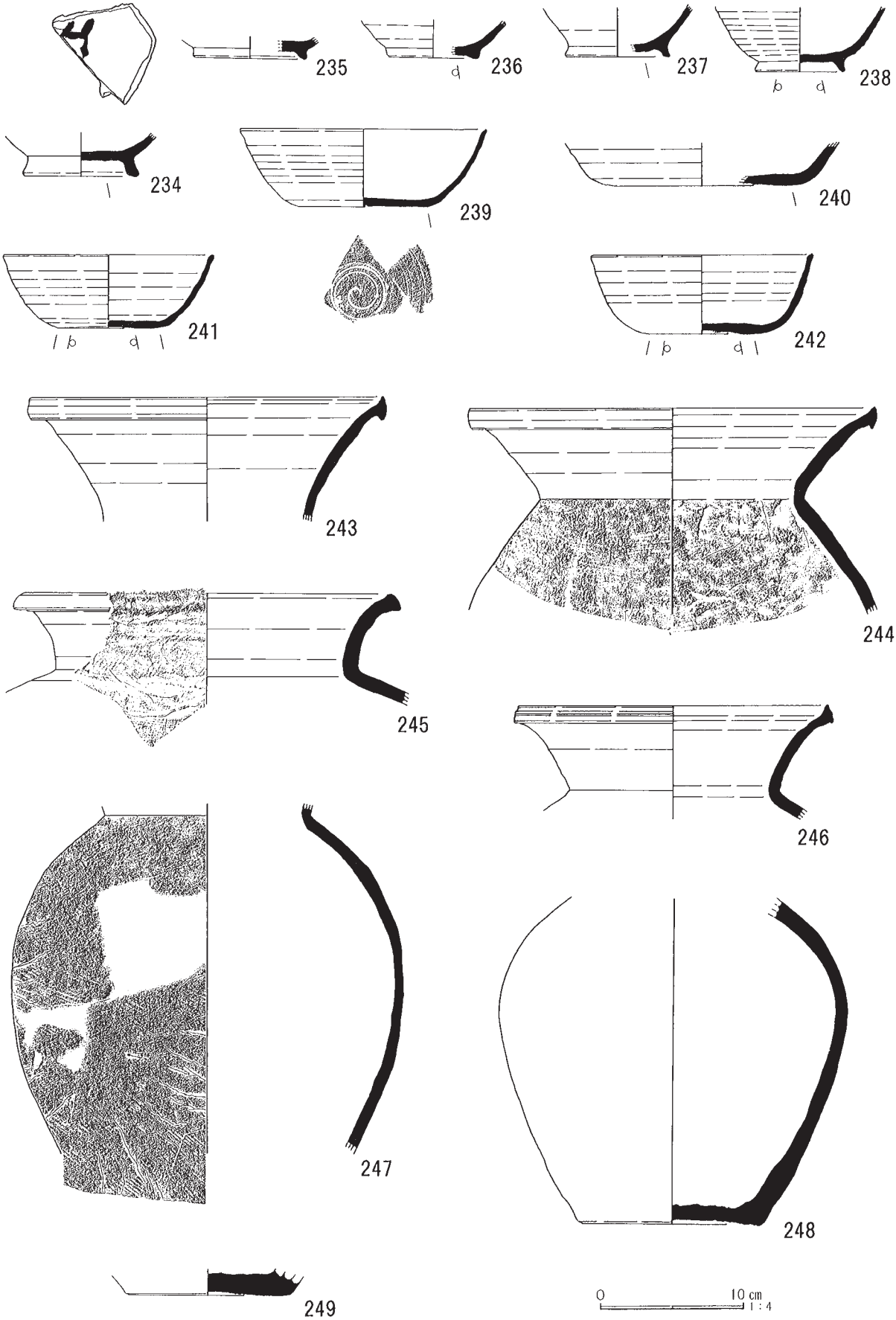
９世紀代に相当するものは、蓋143、坏168～179・216～233、高台付椀180～182・234～238である。



第60図　第１号河川跡出土遺物（7）



第61図　第１号河川跡出土遺物（8）



第62図　第１号河川跡出土遺物（9）

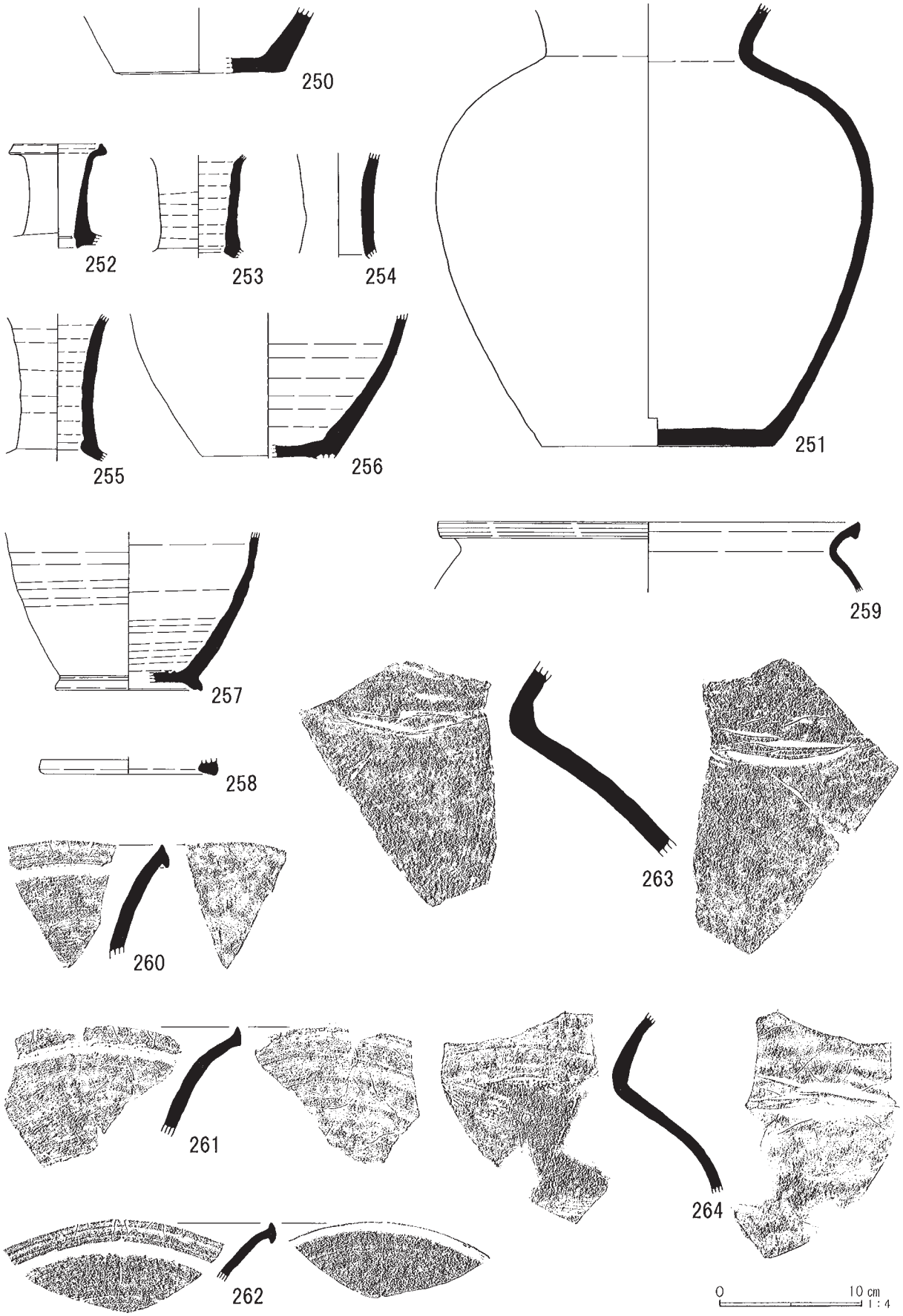
８世紀代に比べて検出数が少なく、産地は古相を示すものが南比企産、新相を示すものが末野産を多く含む傾向にある。蓋は143のみである。器壁が薄く、直線的な器形から当段階のものと判断した。口径から椀蓋か。坏は９世紀前半から中頃にかけての段階（168～172）と後半を中心とする段階（173～179）に分けられる。底部はすべて未調整で回転糸切り痕を残す。216～233は底部のみの検出であり、時期の特定が困難であるが、径の小さいものについては後半を中心とする段階に相当する可能性が高い。古相を示す168～172は口縁部から体部にかけてやや丸みを持って立ち上がる。口径は12.5㎝、器高3.5㎝、底径７㎝前後を測る。このうち171・172は底部を欠くが、径が小振りで深身になることから他に比べてやや時期が下るかもしれない。新相を示す173～179は口縁部が外反し、体部は丸みを持つ。口径及び器高は古相段階とあまり変わらないが、底径のみ６㎝前後と小さくなる。173・174は口縁部の外反が弱く、浅身であることから新相段階でも古い様相を呈する。また175～179はその器形から10世紀初頭まで下る可能性がある。178・233は体部外面、220・223・227は底部外面、226は底部内面に墨書がみられた。高台付椀はすべて９世紀後半を中心とする段階に相当し、10世紀初頭まで下る可能性もある。全形が分かるものは少ないが、口縁部が外反し、体部は丸みを持つ。高台部はハの字に開くものが多い。口径14㎝、器高５㎝、底径6.5㎝前後を測るものが主体となる。底部調整は回転糸切り痕を残すものが多い。底径の大きい234・235については他に比べて古い可能性がある。234は底部内面に墨書「上」がみられた。

時期の判別が困難な甕・瓶類・無頸壺は、古代の他の遺物に混じって37・38グリッドからの検出が多い。残存状態の良いものはほとんどみられず、破片での検出が多い。産地は不明のものもみられたが、末野産が目立つ。甕はほぼ全面から検出されているが、37・38－150～152グリッドからの検出が多い。口縁部は内外面ともに回転ナデ、胴部以下は外面がタタキ、内面は回転ナデ調整を施しているが、内面は回転ナデ前の円形ないし半円形のあて具痕が残るものが多い。247・248は内面、251は内外面の調整を図示していないが、すべて回転ナデ調整で内面に一部あて具痕が残る。口縁部は内外面、胴部は上部から中段までの外面に自然釉が付着しているものが多くみられた。瓶類は37・38－151・152グリッドからの検出が多い。比較的残りの良い頸部253～255はすべて37－151グリッドからの検出である。252～255は長頸瓶の頸部。すべて回転ナデ調整であり、外面に自然釉が付着していた。無頸壺は一点のみ検出された。40－153グリッドからの出土である。内外面回転ナデ調整である。

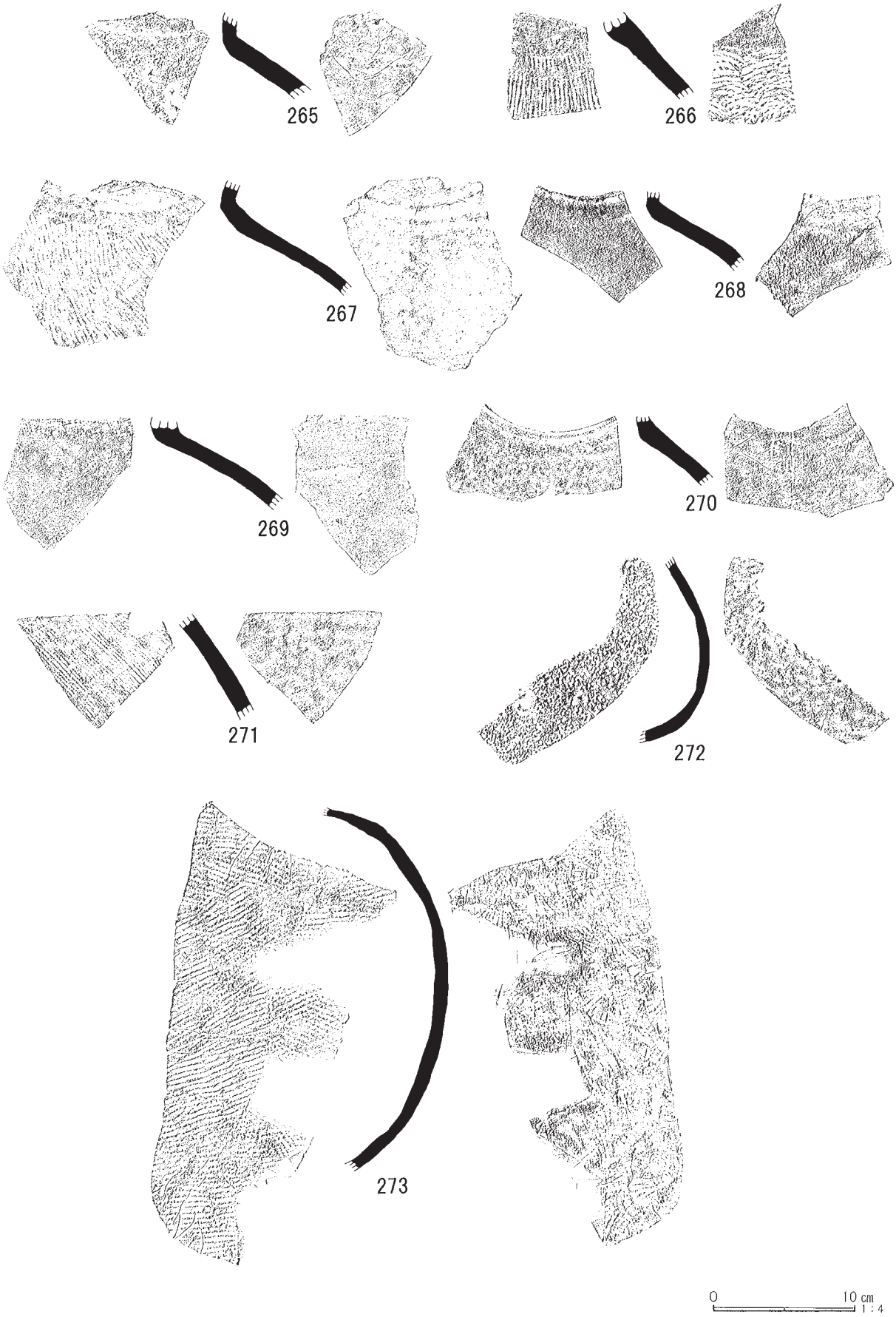
313～317は施釉陶器。313～315は灰釉、316・317は緑釉である。すべて９世紀末から10世紀初頭に相当する。大半が38－152グリッドからの検出である。313・314は椀としたが、おそらく高台が付く。ともに口縁部は外反するが、313は弱い。釉は漬けがけである。315は高台付皿。口縁部から体部にかけて内湾しながら立ち上がる。釉は刷毛塗りである。316は皿としたが、おそらく高台が付く。口縁部が大きく開き、外反する。体部内面に段を持つ。317は高台付椀の高台部。底部内外面に三叉トチンの痕跡が残る。

318～379は土師器及び土師質土器。318～337・376～379は土師器、338～375は土師質土器である。土師器は主に８世紀代と９世紀代に分けられ、土師質土器は10世紀以降に相当する。

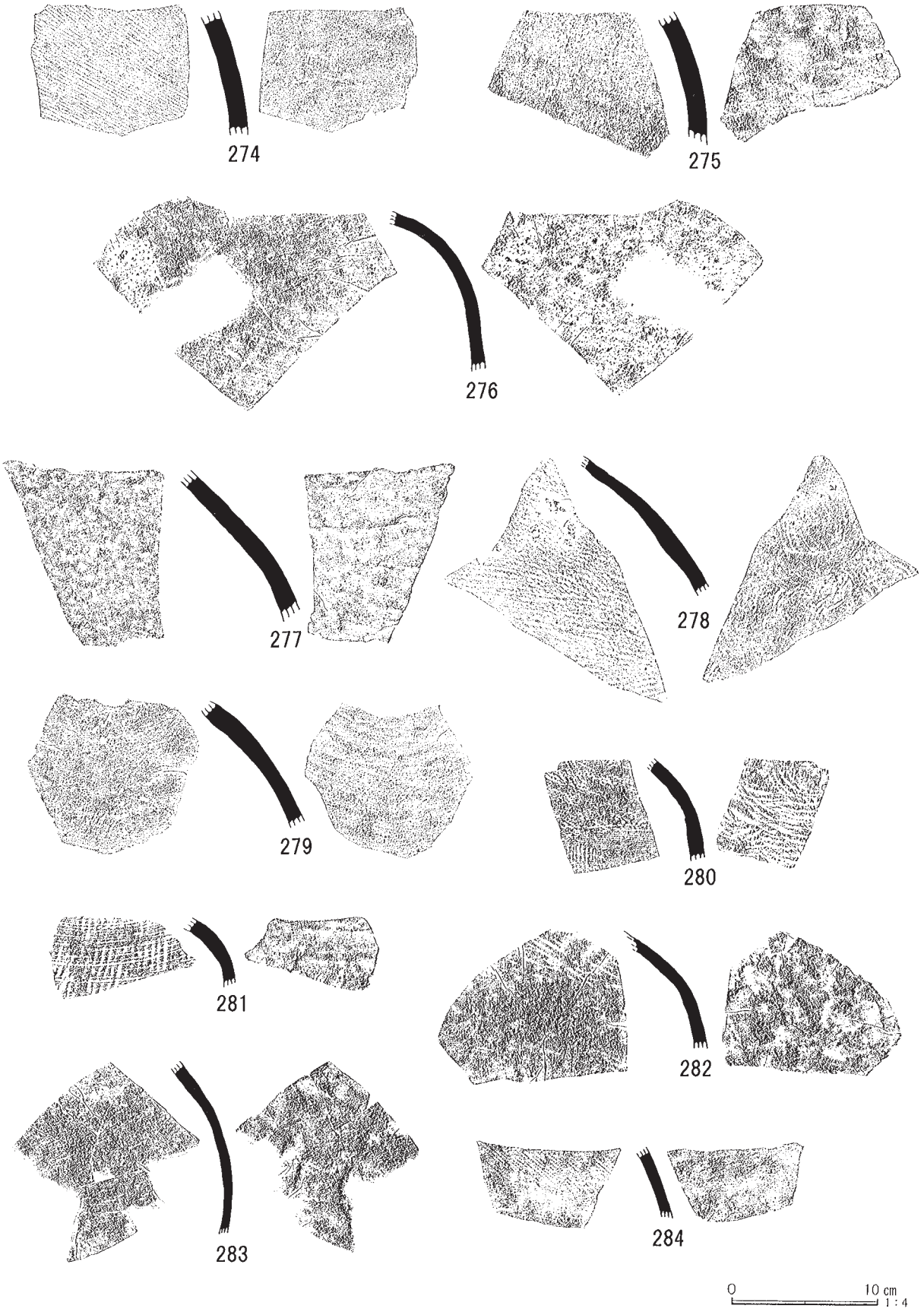
８世紀代に相当するのは、土師器坏318～328・330・331、皿332・333、甕376～378である。坏は８世紀前半のもの（318～320・322・330・331）と中頃以降（321・323～328）に分けられる。前者は短い口縁部がほぼ直立ないしやや開き、底部は丸底である。口径は12.5㎝、器高3.5㎝前後を測る。口縁部は横ナデ、体部から底部にかけてはヘラ削りである。330・331は内面に放射状の暗文がみられた。ともに７



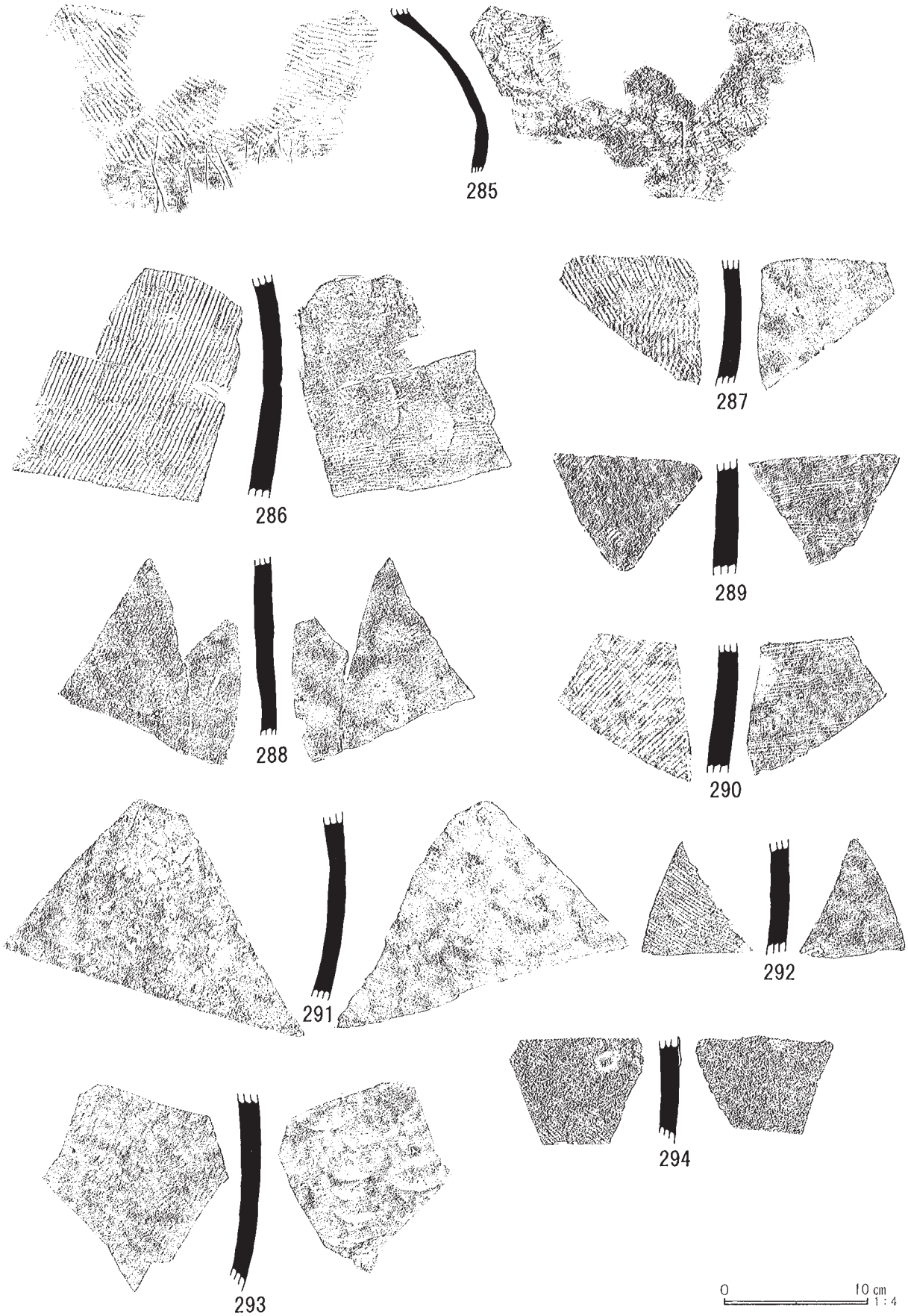
第63図　第１号河川跡出土遺物（10）



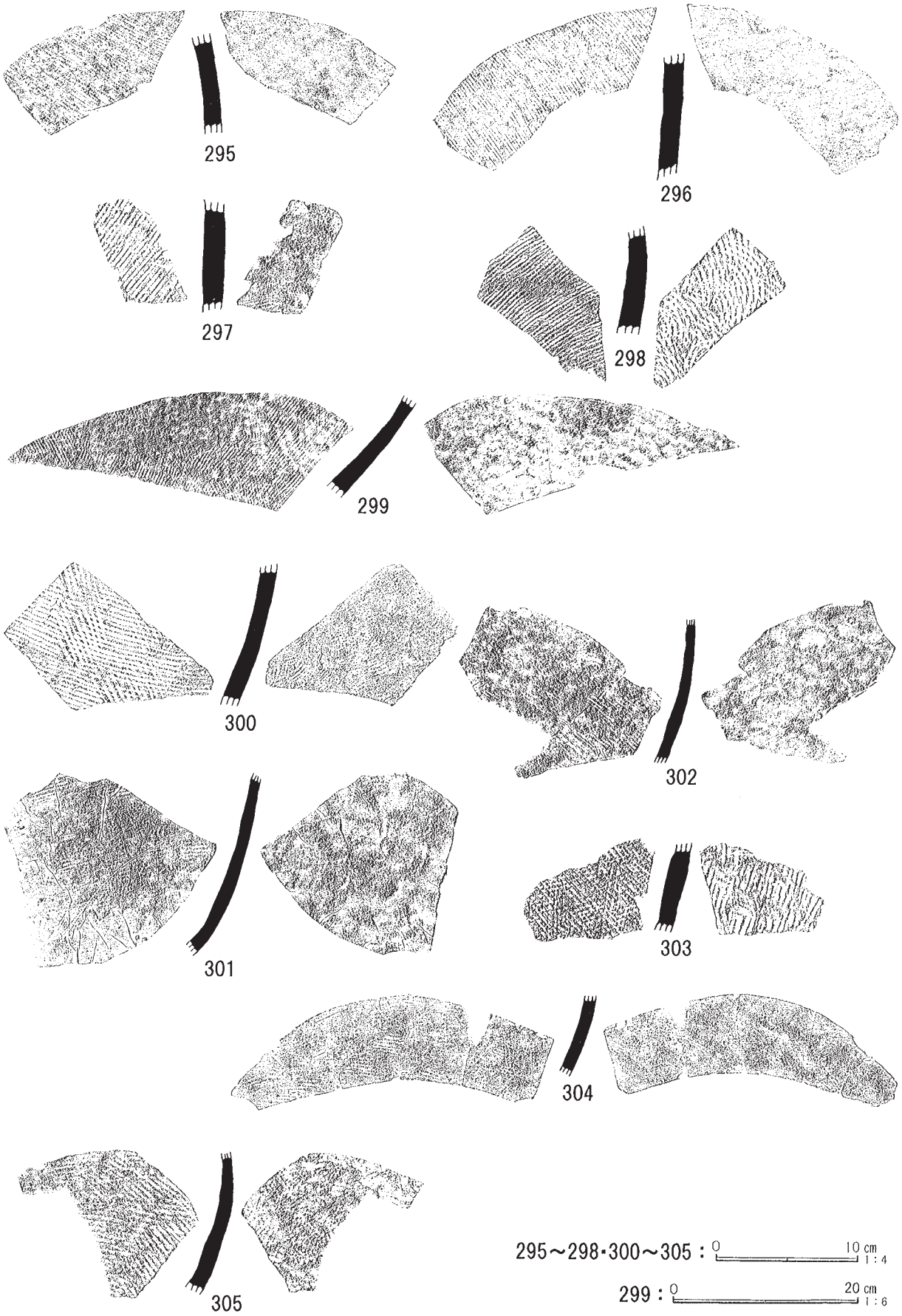
第64図　第１号河川跡出土遺物（11）



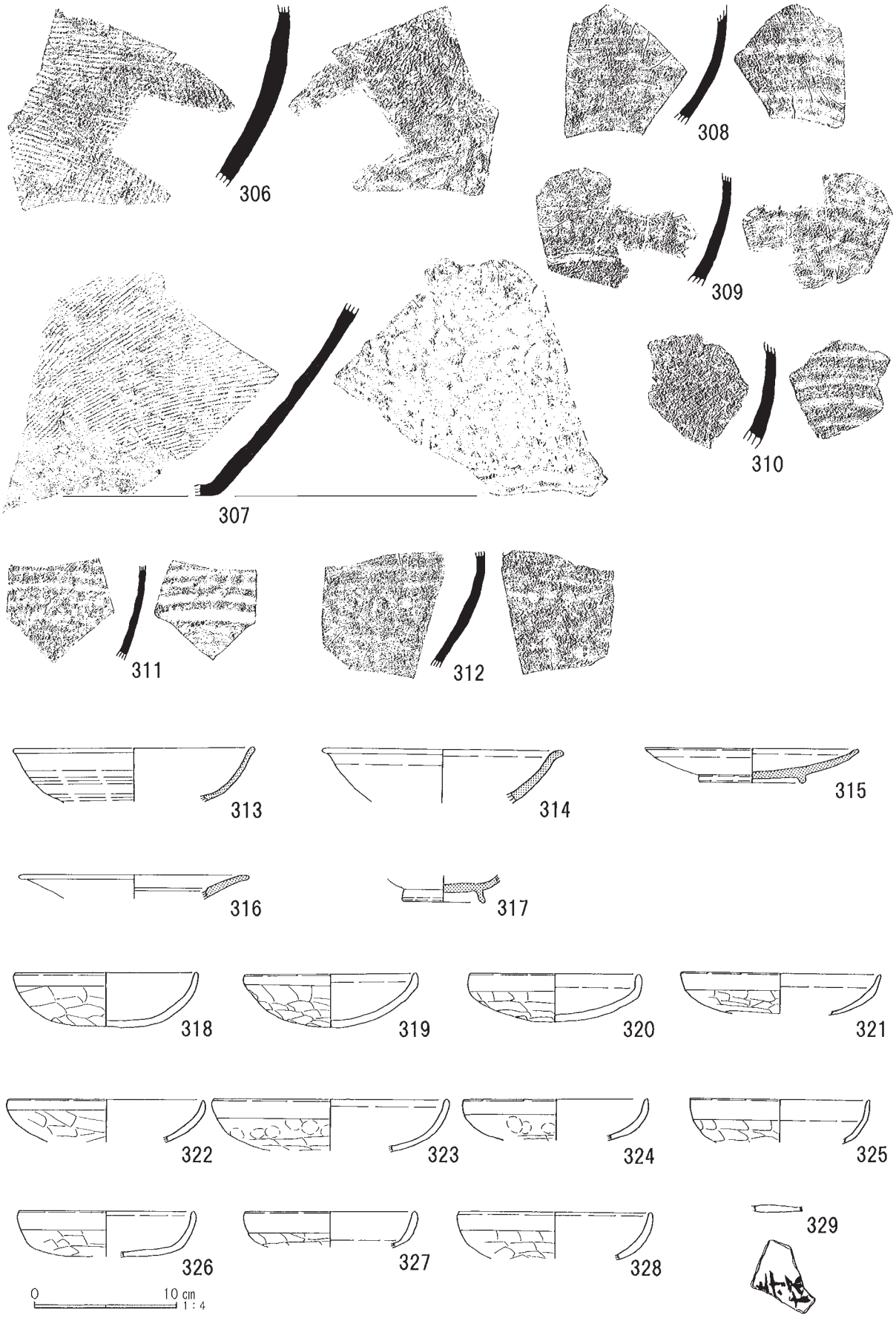
第65図　第１号河川跡出土遺物（12）



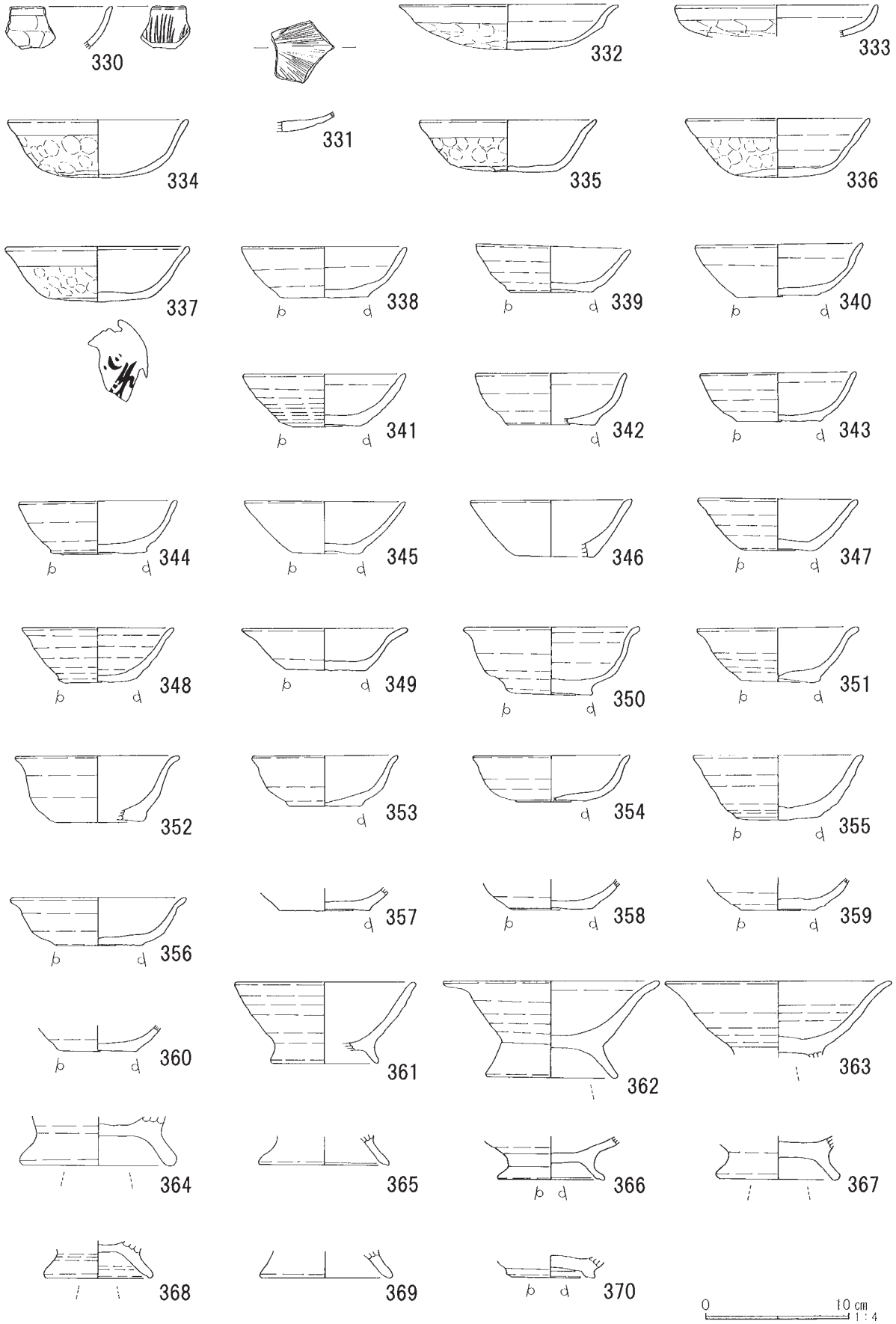
第66図　第１号河川跡出土遺物（13）



第67図　第１号河川跡出土遺物（14）



第68図　第１号河川跡出土遺物（15）



第69図　第１号河川跡出土遺物（16）

世紀末前後に遡る可能性がある。後者は口縁部がやや長く、外にやや開くもの（321・323・325）、ほぼ直立するもの（324・328）、内湾するもの（326・327）がある。底部は残存するものがないが、平底に近い。径はバラツキがみられるが、すべて浅身である。口縁部は横ナデ、体部から底部にかけてはヘラ削り調整であるが、323・324は体部に指オサエが認められた。325～327はその器形から他に比べて新相を呈する。皿は332・333のみである。332は８世紀前半、333は中頃以降に相当する。332は坏蓋模倣坏を扁平化させた器形を呈する。口縁部が大きく外反し、底部は丸底である。333は短い口縁部が外に開き、底部を欠くが平底に近い。甕は８世紀前半（376・378）と中頃以降（377）に分けられる。前者は器壁が厚い。376は丸胴甕の口縁部から胴上部にかけての部位。口縁部は横ナデ調整であり、段を持つ。胴部は球形を呈し、外面はヘラ削り調整である。378は底部。外面はヘラ削り調整である。後者の377は器壁が薄い。外面はヘラ削り調整である。９世紀代に下る可能性もある。

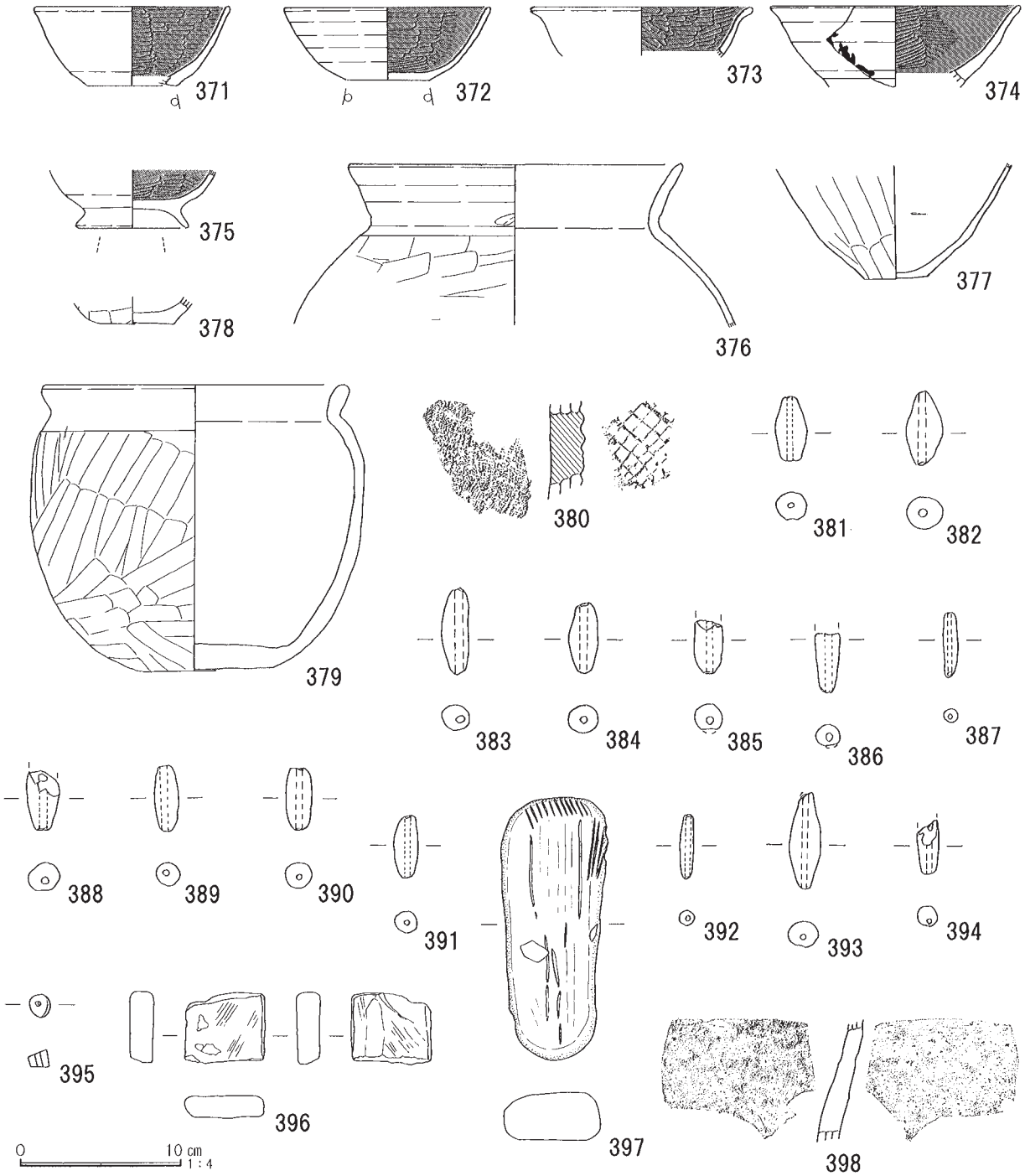
９世紀代に相当するものは、坏329・334～337のみである。須恵器同様、検出数が少なく、９世紀後半を中心とする段階に限定される。口縁部はやや外反ないし外に開き、体部は丸みを持つ。底部はほぼ平底である。調整は口縁部が横ナデ、体部は指オサエ、底部はヘラ削りである。口径12.5㎝、器高４㎝、底径７㎝前後を測る。329・337は底部外面に墨書がみられた。329は「寺坏」、337は判別不能である。334は内外面にタールが付着しており、灯明に使用されたと思われる。

10世紀代に相当するものは、土師質土器坏338～360、高台付椀361～375、土師器甕379である。坏は器形から三つのタイプに分けられる。338～344は口縁部から体部が内湾しながら立ち上がる。345～347は口縁部から体部がほぼ直線的に立ち上がる。348～356は口縁部が外反し、体部は丸みを持つが、348・355の外反は弱い。350～353は底部が柱状を呈する。355は高台が外れた可能性がある。口径は11㎝、器高はバラツキがあり、浅身のものは3.5㎝、深身のものは4.5㎝、底径は６㎝前後のものが主体となる。底部調整は352が手持ちによるヘラ削りであるが、その他は未調整で回転糸切り痕を残す。338・339は内外面にタールが付着しており、灯明に使用されたと思われる。高台付椀は内外面回転ナデ調整のもの（361～370）と外面が回転ナデ、内面はヘラミガキ調整で黒色処理が施されているもの（371～375）がある。前者は全形が分かるものが少ないが、口縁部が直線的なもの（361）と口縁部が大きく外反するもの（362・363）がある。また高台部はほぼ直立する370以外はハの字に開くが、高台が長いものと短いものがあり、底部調整は回転糸切りを残す未調整のものと回転ヘラナデがある。364は内外面にタールが付着しており、灯明に使用されたと思われる。後者は全形が分かるものはないが、すべて高台が付くと思われる。371・372は口縁部から体部が丸みを持って立ち上がる。373・374は口縁部が外反する。374は体部外面に判読不能な墨書がみられた。379の甕は残存状態が良好である。口縁部が短く、直線的に外に開く。胴部は膨らみが小さく、詰まった器形を呈する。最大径は胴部中段にあるが、口径とあまり変わらない。器壁が厚い。

380は平瓦の一部。凸面に斜格子タタキ、凹面に布目痕が残る。41－154グリッド出土。

381～394は土錘。中段が膨らみ、やや太目で短いもの（381・382・384・385・388～391）、中段が膨らみ、やや長めのもの（383・386・393）、棒状を呈する細いもの（387・392・394）の三つのタイプがある。38－152グリッドと39－153グリッドからの検出が多いが、タイプ別に出土位置の違いはみられない。

395は滑石製の臼玉。完形品。古代に含めたが、古墳時代後期～末に遡る可能性が高い。37－151グリ

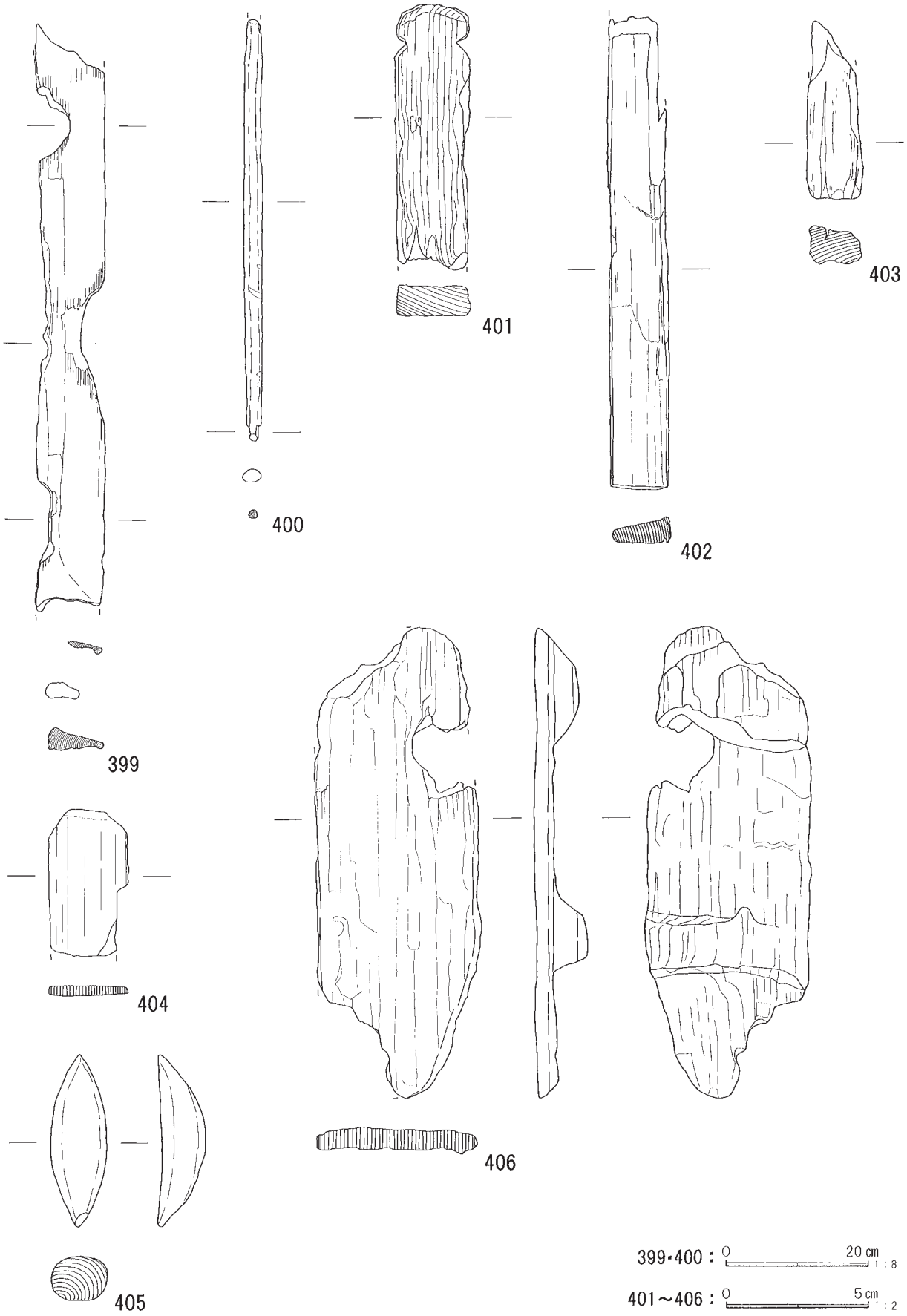


第70図　第１号河川跡出土遺物（17）

ッド出土。396・397は砥石。いずれも砂岩製である。396は両面、397は一面のみ使用しており、擦痕が認められた。396は大半を欠き、397は完形品である。

398は唯一の中世以降の遺物。陶器甕の胴下部片。常滑産である。内外面に鉄釉が施されている。

399～406は木製品。37－151グリッド付近から検出されたものが多く、古代の土器に混ざって検出されたことからおそらく古代のものと思われるが、時期の特定はできない。399は建築部材と思われる木製品。幅約10cm、厚さ３cm程の板状を呈し、両側面に半円状の抉りが交互に入る。検出された長さは83.4cmを測る。400は経巻具。幅約３cm、厚さ約２cmの棒状を呈し、片端のみ角錐状に加工されている。



第71図　第１号河川跡出土遺物（18）

第13表　第１号河川跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	41-153G	弥生土器　壺	(16.0)	(13.2)	―	ABHIN	黒褐色	B	口～胴20%	内面磨耗顕著。
2	41-153G	弥生土器　壺	(16.0)	(7.05)	―	ABDHIN	橙色	B	口～頸70%	内外面摩耗・剥離顕著。
3	38-150G	弥生土器　壺	―	(1.7)	5.5	ABDHIKMN	橙色	B	底部100%	
4	41-153G	弥生土器　壺	―	(13.2)	(10.4)	ADHN	橙色	B	胴～底70%	内面磨耗顕著。
5	41-153G	弥生土器　壺	―	(1.8)	(5.7)	ABHKN	赤褐色	B	底部40%	内外面赤彩。
6	41-153G	弥生土器　壺	―	(6.5)	(8.4)	ABIKN	にぶい橙色	B	胴～底40%	
7	42-154G	弥生土器　壺	―	(4.1)	(11.2)	ABGIN	にぶい黄橙色	B	底部40%	
8	42-154G	弥生土器　壺	―	(2.6)	6.1	ABHN	オリーブ黒色	B	底部90%	
9	42-154G	弥生土器　壺	―	(3.4)	6.6	ABHIKN	にぶい黄褐色	B	底部100%	
10	42-154G	弥生土器　壺	―	(2.65)	4.8	ABCDEIMN	明赤褐色	B	底部90%	外面赤彩。
11	41-153G	弥生土器　甕	(14.0)	(11.4)	―	ABDHIK	褐灰色	B	口～胴20%	内面輪積痕有。
12	41-153G	弥生土器　甕	―	(15.8)	―	ABIN	橙色	B	頸～胴40%	
13	41-153・154G	弥生土器　甕	(15.0)	(13.7)	―	AHJKN	黒褐色	B	口～胴30%	
14	41-154G	弥生土器　甕	(19.4)	(4.8)	―	AHIK	にぶい赤褐色	B	口～頸30%	
15	37-151G	弥生土器　甕	―	(2.3)	(5.8)	ABHKN	にぶい赤褐色	C	底部40%	
16	37-153G	弥生土器　甕	―	(3.2)	(8.6)	ABGIMN	橙色	B	底部30%	
17	38-149G	弥生土器　甕	―	(2.7)	7.8	ABCDEIKN	にぶい橙色	B	底部90%	底部外面木葉痕有。
18	38-153G	弥生土器　甕	―	(1.8)	7.5	ABDHIN	にぶい黄橙色	B	底部90%	
19	40-153G	弥生土器　甕	―	(2.45)	(7.9)	ABEHIK	赤橙色	B	底部40%	
20	41-153G	弥生土器　甕	―	(3.6)	12.4	ABDEHIN	にぶい黄橙色	B	胴～底60%	
21	41-153G	弥生土器　甕	―	(4.45)	(8.0)	ACHIKN	明赤褐色	B	胴～底30%	
22	41-153G	弥生土器　甕	―	(3.45)	(9.0)	ABCIN	赤褐色	B	胴～底40%	
23	41-153・154G	弥生土器　甕	―	(3.9)	8.6	ABEHIMN	橙色	B	胴～底100%	
24	41-153G	弥生土器　甕	―	(3.4)	(8.5)	ABIKN	灰黄褐色	B	底部40%	
25	41-153G	弥生土器　甕	―	(2.8)	(7.5)	ABHJN	明赤褐色	B	底部40%	
26	41-153G	弥生土器　甕	―	(1.95)	(10.0)	ABIKN	にぶい黄橙色	B	底部30%	
27	41-153G	弥生土器　甕	―	(4.7)	7.6	ACDHIN	にぶい黄橙色	C	胴～底100%	底部外面網代痕有。内外面磨耗顕著。
28	41-153G	弥生土器　甕	―	(3.6)	8.0	ABDIJN	にぶい褐色	B	胴～底100%	
29	41-153G	弥生土器　甕	―	(2.9)	(7.8)	ABIKN	にぶい茶褐色	B	底部50%	
30	41-153G	弥生土器　甕	―	(3.75)	(7.0)	ACHIN	赤褐色	B	底部50%	
31	41-153G	弥生土器　甕	―	(2.6)	6.2	ABDIKN	にぶい橙色	B	底部100%	
32	41-153G	弥生土器　甕	―	(2.3)	(7.8)	ABGHIKN	にぶい橙色	B	底部40%	
33	41-154G	弥生土器　甕	―	(1.45)	(9.6)	ABHK	にぶい橙色	B	底部40%	
34	41-154G	弥生土器　甕	―	(2.4)	(6.4)	ABCDEIKN	にぶい黄褐色	B	底部30%	
35	41-154G	弥生土器　甕	―	(3.0)	6.0	ABCHN	にぶい橙色	B	底部100%	底部外面網代痕有。
36	42-154G	弥生土器　甕	―	(2.05)	5.7	ABHKN	にぶい褐色	B	底部100%	底部外面木葉痕有。
37	41-152G	弥生土器　甕	―	(5.8)	(6.7)	ABCDEHIJ	明褐色	B	胴～底50%	
38	41-152G	弥生土器　甕	―	(3.85)	8.3	ABEIN	明赤褐色	B	底部100%	外面やや磨耗。
39	41-153G	弥生土器　甕	―	(2.2)	10.7	ABN	にぶい黄橙色	B	底部100%	
40	41-153G	弥生土器　甕	―	(4.6)	8.3	ABEIJN	橙色	B	胴～底60%	
41	41-153G	弥生土器　甕	―	(3.4)	7.6	ABEGHIN	灰褐色	B	底部100%	
42	41-153G	弥生土器　甕	―	(2.2)	7.0	AIKN	褐灰色	B	底部70%	
43	41-154G	弥生土器　甕	―	(5.2)	(10.4)	ABHLN	にぶい黄橙色	A	胴～底40%	内面磨耗顕著。
44	42-154G	弥生土器高坏	(14.8)	(6.5)	―	ACHKN	明赤褐色	B	坏部30%	内外面赤彩。
45	41-153G	弥生土器高坏	―	(7.35)	―	ABDIMN	橙色	B	接合部100%	坏部内面・外面赤彩、大半剥落。
46	41-153G	弥生土器高坏	―	(4.7)	6.3	ABHIN	明赤褐色	B	脚部100%	外面赤彩。
47	41-153G	弥生土器高坏	―	(6.2)	―	ABN	にぶい橙色	B	接合部100%	外面赤彩、大半剥落。
48	41-154G	弥生土器高坏	―	(7.95)	―	ABGIKN	褐灰色	B	接合部80%	外面赤彩。
49	42-154G	弥生筒型土器	―	(5.6)	4.4	ABHN	褐灰色	A	胴～底70%	底部外面木葉痕有。
50	40-152G	弥生土器　壺	―	―	―	ABHIKN	灰黄褐色	B	口縁部片	外面下部赤彩、大半剥落。
51	41-153G	弥生土器　壺	―	―	―	ABDIKN	橙色	B	口縁部片	内面剥離顕著。
52	41-153G	弥生土器　壺	―	―	―	ACHMN	明黄褐色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
53	41-153G	弥生土器　壺	―	―	―	ABHKN	橙色	B	口縁部片	外面下部赤彩。
54	41-153G	弥生土器　壺	―	―	―	ABMN	橙色	B	口～頸部片	内外面磨耗顕著。
55	41-154G	弥生土器　壺	―	―	―	ABCDEIKN	橙色	B	口縁部片	内面磨耗顕著。
56	41-154G	弥生土器　壺	―	―	―	ABHN	橙色	B	口縁部片	
57	41-154G	弥生土器　壺	―	―	―	ABN	にぶい橙色	B	口縁部片	内外面磨耗顕著。
58	41-153G	弥生土器　壺	―	―	―	ABGHKN	黒褐色	A	口縁部片	
59	41-154G	弥生土器　壺	―	―	―	ABDIK	にぶい黄褐色	B	口縁部片	
60	40-153G	弥生土器　壺	―	―	―	ABEHN	浅黄色	B	口～頸部片	
61	38-154G	弥生土器　壺	―	―	―	AHK	黄灰色	B	頸部片	
62	37-149G	弥生土器　壺	―	―	―	AIJN	褐灰色	B	肩～胴上片	内面輪積痕有。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
63	41-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIK	灰黄褐色	A	肩部片	
64	39-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
65	39-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
66	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDKN	褐灰色	B	胴上部片	
67	40-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHMN	にぶい黄橙色	B	胴部片	
68	41-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIN	黒褐色	B	胴部片	
69	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABEI	灰黄褐色	B	胴部片	
70	41-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHKN	灰黄色	B	胴上部片	
71	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	AHIJKN	褐灰色	B	胴上部片	
72	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHI	灰褐色	A	胴上部片	
73	41-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIKN	にぶい橙色	B	肩部片	
74	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHKN	褐灰色	B	肩部片	
75	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	AIKN	黒灰色	B	胴上部片	内面剥離顕著。
76	41-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDN	にぶい黄橙色	B	肩部片	外面無文部赤彩。内面輪積痕有。
77	41-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHN	にぶい黄褐色	B	胴上部片	
78	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIJN	にぶい橙色	B	胴部片	
79	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	明赤褐色	B	肩部片	
80	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABCDIJ	にぶい黄橙色	B	肩部片	
81	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABCHMN	橙色	B	肩部片	
82	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHN	にぶい橙色	B	頸～肩部片	
83	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHN	にぶい黄褐色	B	肩部片	
84	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIJN	にぶい橙色	B	肩部片	
85	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABHIKN	赤色	B	肩部片	外面無文部赤彩。
86	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDIJKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
87	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABCIN	赤色	B	胴上部片	外面無文部赤彩。
88	41-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIKN	暗灰黄色	B	胴上部片	外面摩耗顕著。
89	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ACHJN	橙色	B	頸～胴上片	外面剥離顕著。
90	41-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDEIKN	にぶい黄橙色	B	肩部片	
91	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGN	橙色	B	頸～胴上片	
92	42-154G	弥生土器　壺	—	—	—	ABN	黒褐色	B	胴上部片	
93	41-153G	弥生土器　壺	—	—	—	ABDGIKN	にぶい橙色	B	胴下部片	
94	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABN	明赤褐色	B	口～頸部片	
95	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIJMN	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
96	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDMN	黄橙色	B	口縁部片	
97	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	A	口～頸部片	
98	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	AGHJ	灰黄褐色	B	口～頸部片	
99	41-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHIN	にぶい黄褐	B	口～頸部片	
100	41-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABIJKM	灰黄褐色	B	口縁部片	
101	41-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABIKN	黒褐色	B	口～頸部片	
102	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABH	黄灰色	B	口縁部片	
103	42-154G	弥生土器　甕	—	—	—	AHIJN	黒褐色	B	口～頸部片	
104	42-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABH	黒褐色	B	口縁部片	内外面煤付着。
105	38-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABHK	黒褐色	B	頸～胴上片	
106	38-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEHN	橙色	B	頸～胴上片	
107	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABN	黒褐色	B	頸部片	
108	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABIJN	明赤褐色	B	頸～胴上片	
109	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	AHIN	にぶい黄褐色	B	頸～胴上片	
110	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIN	にぶい橙色	B	頸～胴上片	
111	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABN	にぶい褐色	B	頸～胴上片	
112	41-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDHKN	にぶい橙色	B	胴下部片	
113	42-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDKN	灰褐色	B	胴部片	
114	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKN	灰黄褐色	B	口～頸部片	
115	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIKM	にぶい黄橙色	B	口～頸部片	
116	41-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDIN	黒褐色	B	口～頸部片	
117	41-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDKN	橙色	B	口～頸部片	
118	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ADIKN	褐灰色	B	胴部片	
119	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	AHIN	暗灰黄色	B	胴部片	
120	42-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ADGI	黒褐色	B	胴部片	
121	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	AHKN	褐色	B	口～頸部片	
122	42-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABHIJ	褐灰色	B	口～頸部片	
123	38-149G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDEH	赤褐色	B	胴上部片	
124	41-153G	弥生土器　甕	—	—	—	ABDGIMN	橙色	B	頸部片	
125	41-154G	弥生土器　甕	—	—	—	ABCHIN	灰黄色	B	口～胴上片	

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
126	41-153G	弥生筒型土器	—	—	—	ABDIJN	にぶい黄橙色	B	胴部片	
127	38-154G	打製石斧	最大長(10.45)cm、最大幅(7.7)cm、最大厚(2.65)cm。重量(257.5)ｇ。粘板岩。上端一部・下半分欠。							
128	41-153G	打製石斧	最大長（10.6）cm、最大幅(9.1)cm、最大厚(2.15)cm。重量(247.5)ｇ。粘板岩。下半分欠。							
129	42-154G	打製石斧	最大長16.8cm、最大幅8.5cm、最大厚2.3cm。重量359.2ｇ。粘板岩。完形。							
130	42-154G	打製石斧	最大長16.5cm、最大幅(11.4)cm、最大厚(3.2)cm。重量(628.9)ｇ。粘板岩。刃部一部欠。							
131	42-154G	打製石斧	最大長(10.1)cm、最大幅(8.3)cm、最大厚(1.5)cm。重量(163.4)ｇ。粘板岩。下半分欠。							
132	42-154G	打製石斧	最大長(10.5)cm、最大幅(8.2)cm、最大厚(2.4)cm。重量(246.2)ｇ。粘板岩。下半分欠。							
133	41-154G	土師器　甕	(13.8)	16.0	5.6	ABHN	灰黄褐色	B	50%	口縁部内面輪積痕有。
134	42-154G	土師器　甕	(13.6)	(18.1)	—	AGHN	暗灰黄色	B	30%	
135	38-152G	土師器台付甕	—	(3.85)	—	ABDKN	にぶい黄橙色	B	接～台100%	
136	41-154G	土師器　高坏	21.4	(7.4)	—	ABHJN	赤褐色	B	坏部70%	内外面赤彩。
137	38-152G	土師器　高坏	—	(8.1)	—	ABCDEHMN	にぶい黄橙色	B	脚部100%	
138	40-153G	土師器小型壺	10.2	(4.75)	3.1	ABCHK	黄橙色、赤褐色	B	70%	内外磨耗顕著。胴部外面赤彩。内面輪積痕有。
139	38-154G	土師器　器台	9.2	9.6	11.8	ABCDEHIKN	にぶい黄橙色	B	完形	透孔3つ有。
140	38-154G	土師器　器台	10.0	10.1	11.6	ABDHN	にぶい黄橙色	B	完形	透孔3つ有。
141	40-152G	土師器　甕	—	—	—	AN	にぶい赤褐色	B	胴下部片	
142	37-150・151G	須恵器　蓋	(19.7)	4.0	—	AFN	黄灰色	B	40%	南比企産。
143	37-150G	須恵器　蓋	(16.8)	(2.1)	—	ADGN	にぶい橙色	B	口縁部20%	産地不明。
144	37-150G	須恵器　蓋	(18.8)	4.9	—	BHKN	灰黄色	B	70%	産地不明。
145	37-152G	須恵器　蓋	—	(1.4)	—	ADN	明青灰色	B	つまみ90%	産地不明。
146	38-151G	須恵器　蓋	—	(1.1)	—	ABCDHN	暗オリーブ灰色	B	つまみ100%	産地不明。
147	38-150G	須恵器高台坏	(14.2)	4.55	8.4	ADFN	灰色	B	40%	南比企産。
148	37-149G	須恵器　坏	(13.2)	2.9	(7.8)	ABN	灰色	A	40%	産地不明。
149	37-150・151G	須恵器　坏	(13.4)	3.2	(8.2)	AN	青灰色	B	30%	産地不明。
150	37-150G	須恵器　坏	(14.4)	(3.0)	—	ABDFHN	灰色	B	口～体25%	南比企産。
151	38-149G	須恵器　坏	(13.6)	3.05	(8.2)	AFJN	にぶい褐色	B	40%	南比企産。
152	38-149G	須恵器　坏	(13.8)	3.4	(9.5)	ABFN	灰白色	B	40%	南比企産。
153	38-149G	須恵器　坏	14.6	3.45	8.8	ABFHN	灰色	B	50%	南比企産。
154	37-150・151G	須恵器　坏	(13.7)	(3.25)	(8.4)	ABFN	灰白色	B	20%	南比企産。
155	38-150・151G	須恵器　坏	14.0	3.35	8.55	ABDEFN	にぶい黄橙色	B	50%	南比企産。
156	38-151G	須恵器　坏	(13.7)	3.5	7.8	ABDFJN	黄灰色	B	40%	南比企産。底部外面ヘラ刻み有。
157	37-149G	須恵器　坏	13.7	3.75	7.9	AFN	灰色	B	80%	南比企産。
158	37-150G	須恵器　坏	(12.6)	3.5	6.5	AFN	青灰色	B	60%	南比企産。
159	37-150G	須恵器　坏	(13.8)	(3.2)	—	ABFN	褐灰色	A	口～体25%	南比企産。
160	37-150G	須恵器　坏	(13.4)	3.6	(8.0)	ADFN	灰色	B	20%	南比企産。
161	37-150G	須恵器　坏	(13.2)	3.6	(7.7)	ADFN	灰色	B	40%	南比企産。
162	37-150・151G	須恵器　坏	13.5	4.25	8.0	ABEFN	灰色	A	70%	南比企産。口縁部内外面自然釉付着。
163	38-149G	須恵器　坏	14.5	4.0	8.8	ABEFN	灰色	B	90%	南比企産。
164	38-150・151G	須恵器　坏	12.8	3.5	7.8	ABFN	オリーブ灰色	B	70%	南比企産。
165	38-150G	須恵器　坏	13.2	4.0	7.3	ABDFN	灰色	B	70%	南比企産。
166	38-151G	須恵器　坏	(13.6)	4.4	7.9	ABN	灰白色	B	60%	産地不明。
167	38-151G	須恵器　坏	(13.6)	4.4	(7.9)	ADFHN	灰色	B	40%	南比企産。
168	37-151G	須恵器　坏	(12.0)	3.3	7.4	ABDLN	灰色	B	30%	産地不明。
169	38-151G	須恵器　坏	(12.9)	3.75	6.9	ABN	灰色	B	60%	産地不明。
170	38-152G	須恵器　坏	(12.6)	3.6	(6.6)	ABFN	灰色	B	30%	南比企産。
171	37-149G	須恵器　坏	(12.0)	3.4	—	AFN	黄灰色	B	口～体40%	南比企産。
172	37-150G	須恵器　坏	(11.6)	(3.3)	—	ABFN	灰色	B	口～体25%	南比企産。
173	37-151G	須恵器　坏	12.5	3.75	6.1	ABDEFN	黄灰色	B	70%	南比企産。
174	38-151G	須恵器　坏	(12.2)	3.8	6.6	ABFN	灰色	B	50%	南比企産。
175	38-153G	須恵器　坏	13.5	3.85	6.0	AHLN	灰色	B	80%	末野産。
176	40-153G	須恵器　坏	(12.4)	(2.85)	—	ABLN	黄灰色	B	口～体30%	末野産。
177	一括	須恵器　坏	(12.2)	(3.05)	—	AFN	青灰色	B	口～体30%	南比企産。
178	38-151G	須恵器　坏	12.8	4.85	5.9	ABDLN	黄灰色	B	完形	末野産。体部外面墨書有。
179	38-152G	須恵器　坏	12.4	3.8	5.0	ABDHKN	灰黄色	B	完形	産地不明。
180	37-152G	須恵器高台椀	13.6	5.1	6.3	ABL	灰白色	B	90%	末野産。
181	37-152G	須恵器高台椀	14.3	5.4	6.5	ABHK	灰黄色	B	80%	産地不明。酸化焔焼成。
182	38-152G	須恵器高台椀	13.4	5.5	6.4	ABHLN	黄灰色	B	完形	末野産。
183	37-149G	須恵器　坏	—	(1.2)	(8.0)	ABFN	灰黄褐色	B	底部30%	南比企産。
184	37-150G	須恵器　坏	—	(2.55)	8.2	ABFN	灰色	B	体～底50%	南比企産。
185	37-150G	須恵器　坏	—	(1.9)	7.6	ABFN	灰色	B	底部70%	南比企産。底部外面ヘラ刻み有。
186	37-150G	須恵器　坏	—	(2.15)	(7.0)	ABEHL	灰色	B	体～底50%	末野産。
187	37-151G	須恵器　坏	—	(2.0)	7.5	ABEFN	灰白色	B	体～底60%	南比企産。
188	37-151G	須恵器　坏	—	(1.15)	8.0	ABFN	青灰色	B	底部75%	南比企産。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
189	38-150G	須恵器　坏	—	(1.5)	(8.4)	ABEFHN	灰色	B	底部50%	南比企産。
190	38-150G	須恵器　坏	—	(1.35)	9.0	AFHN	灰色	B	底部80%	南比企産。底部外面墨書有「前」。
191	38-150G	須恵器　坏	—	(0.9)	7.5	ABFN	灰色	A	底部65%	南比企産。
192	38-150G	須恵器　坏	—	(1.35)	7.3	ABDFHN	灰白色	B	底部70%	南比企産。
193	37-150G	須恵器　坏	—	(1.6)	7.3	ADFN	灰白色	B	底部100%	南比企産。
194	37-150G	須恵器　坏	—	(0.9)	7.5	ABF	灰褐色	B	底部95%	南比企産。
195	37-150G	須恵器　坏	—	(0.65)	(8.1)	ABFN	灰白色	B	底部45%	南比企産。
196	37-150G	須恵器　坏	—	(1.4)	6.7	ABFN	灰色	B	底部100%	南比企産。
197	37-151G	須恵器　坏	—	(0.7)	(6.8)	ABFKN	灰色	B	底部50%	南比企産。底部外面墨書有。
198	37-151G	須恵器　坏	—	(1.1)	(8.6)	ABFHN	灰色	B	底部30%	南比企産。
199	37-151G	須恵器　坏	—	(1.2)	(6.6)	ADFN	灰色	B	底部40%	南比企産。
200	37-151G	須恵器　坏	—	(0.9)	(6.6)	ABFN	黄灰色	B	底部60%	南比企産。
201	37-151G	須恵器　坏	—	(1.3)	(6.4)	ADFKN	灰色	B	底部70%	南比企産。
202	37-151G	須恵器　坏	—	(0.8)	(5.9)	ACFN	灰色	B	底部80%	南比企産。
203	37-151G	須恵器　坏	—	1.3	(7.7)	AFN	灰色	B	底部50%	南比企産。
204	38-150G	須恵器　坏	—	(1.6)	(7.3)	ABDFN	褐灰色	B	底部80%	南比企産。
205	38-150G	須恵器　坏	—	(0.95)	7.4	ABFN	灰色	A	底部100%	南比企産。内面漆?付着。
206	38-151G	須恵器　坏	—	(0.9)	(7.4)	ABFN	灰色	B	底部35%	南比企産。
207	38-151G	須恵器　坏	—	(2.5)	6.9	ABFN	灰色	B	体～底70%	南比企産。底部外面ヘラ刻み有。
208	38-151G	須恵器　坏	—	(1.1)	6.8	ABFN	青灰色	B	底部75%	南比企産。底部外面ヘラ刻み有。
209	38-151G	須恵器　坏	—	(2.5)	7.2	AFN	青灰色	B	体～底70%	南比企産。
210	38-151G	須恵器　坏	—	(0.75)	7.2	ABCFJN	にぶい橙色	B	底部50%	南比企産。
211	38-151G	須恵器　坏	—	(0.8)	6.4	ABEFHN	灰色	B	底部100%	南比企産。
212	39-153G	須恵器　坏	—	(1.2)	(6.8)	ABFHN	灰色	B	底部50%	南比企産。
213	一括	須恵器　坏	—	(1.95)	(7.8)	AFN	青灰色	B	体～底30%	南比企産。
214	一括	須恵器　坏	—	(1.8)	7.0	ABFN	灰色	B	体～底50%	南比企産。
215	39-153G	須恵器　坏	—	(1.7)	(9.4)	ABDFN	灰色	B	高台部40%	南比企産。底部外面ヘラ刻み有。
216	37-150G	須恵器　坏	—	(1.1)	6.0	ABCDEFN	にぶい黄褐色	B	底部80%	南比企産。
217	37-151G	須恵器　坏	—	(1.15)	6.2	ABEFHJN	灰白色	B	底部100%	南比企産。
218	37-151G	須恵器　坏	—	(0.8)	5.5	ABFN	黄灰色	B	底部70%	南比企産。
219	37-151G	須恵器　坏	—	(1.0)	(6.3)	ABHN	灰色	B	底部30%	産地不明。
220	37-152G	須恵器　坏	—	(0.6)	(6.3)	ACHN	にぶい褐色	B	底部20%	産地不明。酸化煙焼成。底部外墨書有。
221	37-153G	須恵器　坏	—	(1.8)	(6.0)	ABLN	灰色	B	底部45%	末野産。
222	38-150・151G	須恵器　坏	—	(2.9)	5.9	ABFN	灰白色	B	体～底70%	南比企産。
223	38-150G	須恵器　坏	—	(1.9)	6.3	ABEL	灰黄色	B	底部100%	末野産。底部外面墨書有「大」。
224	38-150G	須恵器　坏	—	(2.7)	7.0	ABL	暗灰色	B	体～底70%	末野産。
225	38-150G	須恵器　坏	—	(3.0)	(7.0)	ABL	灰白色	B	体～底30%	末野産。
226	38-151G	須恵器　坏	—	(1.85)	(6.2)	ABFKN	灰白色	B	底部30%	南比企産。底部内面墨書有「上」。
227	38-151G	須恵器　坏	—	(1.5)	5.8	ADFHN	灰色	B	底部80%	南比企産。底部外面墨書有「北」。
228	38-151G	須恵器　坏	—	(1.8)	6.0	ABDFHN	灰色	B	底部100%	南比企産。
229	38-151G	須恵器　坏	—	(1.3)	6.0	ABCEFN	灰色	B	底部100%	南比企産。
230	38-152G	須恵器　坏	—	(1.1)	5.8	ABDHN	褐灰色	B	底部70%	産地不明。
231	38-153G	須恵器　坏	—	(1.65)	6.8	ABFHK	灰白色	B	底部80%	南比企産。
232	39-153G	須恵器　坏	—	(1.05)	5.4	ABFN	灰色	B	底部100%	南比企産。
233	40-153G	須恵器　坏	—	(2.1)	(6.8)	ABLN	灰白色	B	体～底50%	末野産。体部外面墨書有。
234	37-150G	須恵器高台椀	—	(3.1)	(8.2)	ABFH	灰色	B	体～高25%	南比企産。底部内面墨書有「上」。
235	37-151G	須恵器高台椀	—	(1.55)	(8.0)	ABHN	灰色	B	高台部25%	産地不明。
236	37-152G	須恵器高台椀	—	(2.7)	(6.5)	ABHN	暗灰色	B	体～高40%	産地不明。
237	37-153G	須恵器高台椀	—	(3.65)	(7.5)	ABHN	灰白色	B	体～高30%	産地不明。
238	37-153G	須恵器高台椀	—	(4.65)	6.4	ABLN	灰色	B	体～高70%	末野産。
239	38-150G	須恵器　椀	(19.6)	5.5	(9.3)	ABFN	灰色	B	20%	南比企産。
240	38-151G	須恵器　椀	—	(3.0)	(12.8)	ABHN	灰色	B	体～底40%	産地不明。
241	38-149G	須恵器　椀	(15.0)	5.2	7.4	ABFN	灰色	B	50%	南比企産。
242	38-151G	須恵器　椀	(15.8)	5.6	7.5	ABFN	灰色	B	40%	南比企産。
243	37-150・151G	須恵器　甕	(25.0)	(8.8)	—	ABDFN	褐灰色	B	口～頸25%	南比企産。
244	37-151G	須恵器　甕	(29.0)	(14.7)	—	ABCN	灰色	B	口～胴20%	産地不明。口縁部内・外面自然釉付着。
245	39-153G	須恵器　甕	(28.0)	(7.9)	—	ABHL	灰白色	B	口～肩20%	末野産。
246	39-153G	須恵器　甕	(21.9)	(8.0)	—	ABLN	暗灰色	B	口～肩40%	末野産。内外面自然釉付着。
247	37-151G	須恵器　甕	—	(24.95)	—	ABL	暗青灰色	B	頸～胴40%	末野産。外面上部自然釉付着。
248	37-151G	須恵器　甕	—	(23.2)	(13.1)	ABL	灰色	B	肩～底40%	末野産。外面上部自然釉付着。
249	37-152G	須恵器　甕	—	(1.9)	11.8	ABFN	黄灰色	B	底部100%	南比企産。
250	38-150G	須恵器　甕	—	(4.65)	(12.2)	ABDELN	褐灰色	B	胴～底20%	末野産。
251	38-152G	須恵器　甕	—	(31.6)	16.6	ABFN	灰色	A	頸～底70%	南比企産。外面自然釉付着。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
252	38-151G	須恵器長頸瓶	(7.0)	(7.4)	—	AHN	灰色	B	口～頸80%	産地不明。内外面自然釉付着。
253	37-151G	須恵器長頸瓶	—	(7.3)	—	AB	灰オリーブ色	B	頸部80%	産地不明。内外面自然釉付着。
254	37-151G	須恵器長頸瓶	—	(7.45)	—	AL	灰色	B	頸部100%	末野産。内外面自然釉付着。
255	37-151G	須恵器長頸瓶	—	(10.45)	—	ABDN	灰白色	B	頸部80%	産地不明。内外面自然釉付着。
256	37-150・151G	須恵器　瓶	—	(10.3)	—	ABLN	灰色	B	胴～底45%	末野産。外面自然釉付着。
257	37-152G	須恵器　瓶	—	(11.2)	10.5	ABHN	褐灰色	B	胴～高80%	産地不明。
258	39-153G	須恵器　瓶	—	(1.2)	(12.6)	ABN	灰色	B	高台部50%	産地不明。
259	40-153G	須恵器無頸壺	(30.0)	5.0)	—	ABHN	灰色	B	口～胴30%	産地不明。
260	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABCN	灰色	B	口～頸部片	産地不明。内外面自然釉付着。
261	38-151G	須恵器　甕	—	—	—	ABDFN	黄灰色	B	口～頸部片	南比企産。
262	38-152G	須恵器　甕	—	—	—	AFN	青灰色	B	口～頸部片	南比企産。
263	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABHLN	灰色	B	頸～胴部片	末野産。
264	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABDN	灰白色	B	頸～胴部片	産地不明。外面自然釉付着。
265	37-151G	須恵器　甕	—	—	—	ABDEN	黄灰色	B	頸～肩部片	産地不明。外面自然釉付着。
266	37-151G	須恵器　甕	—	—	—	ABDEL	灰色	B	肩部片	末野産。
267	37-152G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰オリーブ色	B	頸～肩部片	末野産。頸部内面・外面自然釉付着。
268	38-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
269	38-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
270	39-154G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	にぶい黄橙色	B	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
271	37-149G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	A	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
272	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABD	灰色	B	胴部片	産地不明。外面自然釉付着。
273	37-150・151G	須恵器　甕	—	—	—	ADLN	灰色	B	胴部片	末野産。
274	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
275	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
276	37-151G	須恵器　甕	—	—	—	ABDEL	褐灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
277	37-152G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
278	38-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
279	38-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	胴上部片	末野産。
280	38-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴上部片	末野産。
281	38-151G	須恵器　甕	—	—	—	ABDL	灰色	B	胴上部片	末野産。
282	38-151G	須恵器　甕	—	—	—	AFN	青灰色	B	胴上部片	南比企産。
283	38-151・152G	須恵器　甕	—	—	—	AB	灰色	B	胴上部片	産地不明。外面上部自然釉付着。
284	40-154G	須恵器　甕	—	—	—	ABL	オリーブ黒	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
285	一括	須恵器　甕	—	—	—	ADLN	灰色	B	肩～胴部片	末野産。№305・306と同一個体。
286	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰褐色	B	胴部片	末野産。№287・300と同一個体。
287	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰褐色	B	胴部片	末野産。№286・300と同一個体。
288	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰オリーブ色	B	胴部片	末野産。外面自然釉付着。
289	37-151G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	黄灰色	B	胴部片	末野産。
290	38-150G	須恵器　甕	—	—	—	ADLN	灰黄褐色	B	胴部片	末野産。
291	38-152G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	胴部片	末野産。外面自然釉付着。
292	38-152G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	胴部片	末野産。
293	38-152G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	胴部片	末野産。外面自然釉付着。
294	38-152G	須恵器　甕	—	—	—	ABL	暗オリーブ灰色	B	胴部片	末野産。外面自然釉付着。
295	38-153G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	胴部片	末野産。外面自然釉付着。
296	38-153G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴部片	末野産。
297	38-154G	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴部片	末野産。
298	39-153G	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴部片	末野産。
299	37-149G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	褐灰色	B	胴下部片	末野産。
300	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰褐色	B	胴下部片	末野産。№286・287と同一個体。
301	37-150G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	A	胴下部片	末野産。
302	37-151・152G	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
303	38-152G	須恵器　甕	—	—	—	ABL	青灰色	B	胴下部片	末野産。
304	38-152G	須恵器　甕	—	—	—	ADFN	灰色	B	胴下部片	南比企産。
305	一括	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴下部片	末野産。№285・306と同一個体。
306	一括	須恵器　甕	—	—	—	ADLN	灰色	B	胴下部片	末野産。№285・305と同一個体。
307	39-153G	須恵器　甕	—	—	—	ABDLN	灰色	B	胴下～底片	末野産。
308	37-150G	須恵器　瓶	—	—	—	ABFHN	灰色	B	胴下部片	南比企産。
309	37-151G	須恵器　瓶	—	—	—	ABFKN	灰白色	B	胴下部片	南比企産。
310	37-151G	須恵器　瓶	—	—	—	ABDHKLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
311	37-152G	須恵器　瓶	—	—	—	ABCFK	灰色	B	胴下部片	南比企産。
312	39-154G	須恵器　瓶	—	—	—	ABDHKLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
313	38-152G	灰釉高台椀	(17.2)	(3.8)	—	AB	灰白色	B	口～体15%	釉漬けがけ。
314	38-152G	灰釉高台椀	(17.2)	(3.8)	—	AB	灰白色	B	口～体20%	釉漬けがけ。

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
315	39-154G	灰釉高台皿	(15.2)	2.4	7.6	AB	灰白色	B	60%	釉刷毛塗り。
316	38-152G	緑釉高台皿	(16.4)	(1.7)	—	ABN	オリーブ黒	A	口～体15%	
317	38-152G	緑釉高台皿	—	(1.9)	5.9	AIJ	緑色	B	高台部100%	底部内外面三叉トチン痕有。
318	37-150G	土師器　坏	(13.2)	4.0	—	ABCDEJK	橙色	B	40%	
319	38-149G	土師器　坏	(12.4)	3.85	—	ABHKN	にぶい黄橙色	B	45%	
320	38-149G	土師器　坏	12.3	3.5	—	ABDHKN	にぶい橙色	A	70%	
321	37-150G	土師器　坏	(14.3)	(2.9)	—	ABCGHK	橙色	B	20%	
322	38-151G	土師器　坏	(14.2)	(3.05)	—	ABJK	橙色	B	30%	
323	38-151G	土師器　坏	(17.0)	(3.7)	—	ABGHKN	橙色	B	20%	
324	38-151G	土師器　坏	(13.2)	(2.9)	—	ABHKN	にぶい橙色	B	20%	
325	37-150G	土師器　坏	(12.8)	(3.1)	—	ACHJN	橙色	B	25%	
326	37-151G	土師器　坏	(12.4)	(3.2)	—	ABDHJN	にぶい褐色	B	20%	
327	38-149G	土師器　坏	(12.4)	(2.6)	—	ABHK	にぶい橙色	B	25%	
328	39-153G	土師器　坏	(14.0)	(3.3)	—	ABDHK	橙色	B	30%	
329	37-150G	土師器　坏	—	—	—	ABHK	褐色	A	底部片	底部外面墨書有「寺坏」。
330	38-149G	土師器　坏	—	—	—	ABHN	橙色	B	口～体部片	内面放射状暗文有。
331	38-149G	土師器　坏	—	—	—	ABHN	にぶい黄橙色	B	底部片	内面放射状暗文有。
332	37-150G	土師器　皿	15.5	3.4	—	ABGHKN	にぶい黄橙色	B	80%	
333	38-149G	土師器　皿	(14.4)	(2.3)	—	ABCHK	橙色	B	20%	
334	37-150・151G	土師器　坏	12.8	4.05	8.0	ABN	浅黄色	B	90%	内外面タール付着。灯明用。
335	37-151G	土師器　坏	(12.6)	3.8	7.2	ABE	にぶい黄橙色	B	70%	
336	37-153G	土師器　坏	(13.0)	4.15	7.1	ABEHN	褐灰色	B	50%	
337	37-153G	土師器　坏	(13.0)	3.9	(6.9)	ABDN	にぶい黄橙色	B	40%	底部外面墨書有。
338	37-152G	土師質土器坏	11.65	3.55	6.3	ABHN	灰黄褐色	C	90%	内外面タール付着。灯明用。
339	37-152G	土師質土器坏	10.9	3.4	6.2	ABHN	黄灰色	B	70%	内外面タール付着。灯明用。
340	38-152G	土師質土器坏	11.8	3.8	6.4	ABCHN	橙色	B	80%	
341	38-152G	土師質土器坏	11.5	3.7	6.2	ABHN	黄灰色	B	ほぼ完形	
342	38-153G	土師質土器坏	(10.7)	3.65	(6.4)	ABDIKN	暗灰黄色	B	50%	
343	38-153G	土師質土器坏	11.1	3.5	6.1	ABDHIN	灰黄褐色	B	完形	
344	38-152G	土師質土器坏	(11.2)	3.7	(6.8)	ADIN	灰黄褐色	B	30%	
345	37-152G	土師質土器坏	11.4	3.7	5.1	ABDN	灰黄色	B	70%	
346	38-152G	土師質土器坏	(11.4)	4.05	5.7	ABHN	灰色	B	50%	底部外面手持ちヘラ削り。
347	38-153G	土師質土器坏	(11.6)	3.65	5.4	ABEHN	浅黄橙色	B	40%	
348	37-152G	土師質土器坏	10.8	3.9	5.6	ABHN	灰黄褐色	B	ほぼ完形	
349	38-151G	土師質土器坏	(11.7)	3.0	5.75	ABCHK	にぶい黄橙色	B	70%	
350	38-152G	土師質土器坏	12.4	4.8	6.2	ABDHIKN	明褐灰色	B	95%	
351	38-152G	土師質土器坏	11.4	3.9	5.5	ABKN	にぶい橙色	B	ほぼ完形	
352	38-152G	土師質土器坏	(11.6)	4.65	6.8	ABEN	にぶい黄橙色	B	60%	底部外面手持ちヘラ削り。
353	38-152G	土師質土器坏	(10.4)	3.65	(5.4)	ABCDEH	明褐色	B	25%	
354	38-152G	土師質土器坏	(11.2)	3.2	(5.0)	ABHN	黄灰色	B	20%	
355	38-153G	土師質土器坏	(12.0)	4.6	6.0	ABDEGHN	暗灰黄色	B	60%	
356	38-153G	土師質土器坏	(12.4)	3.4	6.2	ABEHMN	にぶい橙色	C	50%	
357	38-152G	土師質土器坏	—	(1.6)	(6.4)	ABEHN	褐色	A	底部40%	
358	38-152G	土師質土器坏	—	(2.15)	6.1	ABCDEGHJN	明褐色	B	体～底100%	
359	38-153G	土師質土器坏	—	(2.35)	5.3	ABIN	黄灰色	B	体～底70%	
360	40-153G	土師質土器坏	—	(1.85)	5.5	ABGHN	灰色	B	底部70%	
361	37-152G	土師質高台椀	(12.9)	(5.7)	(7.7)	ABCDMN	灰白色	B	25%	
362	38-152・153G	土師質高台椀	(15.3)	6.8	(9.4)	ABMN	灰白色	B	80%	
363	38-152G	土師質高台椀	(16.0)	(5.35)	—	AGHJKN	灰黄色	B	口～体25%	
364	37-152G	土師質高台椀	—	(3.5)	11.1	ABDH	灰黄色	B	高台部100%	内外面タール付着。灯明用。
365	37-152G	土師質高台椀	—	(2.0)	9.3	ABCDEHN	にぶい褐色	B	高台部90%	
366	37-153G	土師質高台椀	—	(3.05)	7.6	ABCHKN	橙色	B	高台部90%	
367	38-152G	土師質高台椀	—	(3.0)	8.8	ABHN	黄灰色	B	高台部100%	
368	38-152G	土師質高台椀	—	(2.5)	7.7	ABCEHIKN	にぶい褐色	B	高台部100%	
369	38-152G	土師質高台椀	—	(1.9)	9.4	ABDHMN	灰白色	B	高台部100%	
370	38-153G	土師質高台椀	—	(1.5)	6.25	ABEHK	にぶい橙色	B	高台部100%	
371	37-150G	土師質高台椀	(12.4)	5.0	(5.7)	ABDHN	にぶい黄橙色	B	25%	内面黒色処理。
372	38-151G	土師質高台椀	(13.0)	4.6	5.3	ABEHJ	にぶい黄橙色	B	30%	内面黒色処理。
373	38-152G	土師質高台椀	(14.0)	(3.15)	—	ACHJ	明褐色	B	口～体30%	内面黒色処理。
374	38-153G	土師質高台椀	(15.6)	(5.1)	—	ABCHK	にぶい褐色	A	口～体20%	内面黒色処理。体部外面墨書有。
375	38-152G	土師質高台椀	—	(3.7)	7.2	ABEHN	橙色	B	体～高80%	内面黒色処理。
376	37-150G	土師器　甕	(21.2)	(10.2)	—	ABDHKN	橙色	B	口～胴40%	
377	37-150G	土師器　甕	—	(7.15)	4.0	ABDHN	にぶい褐色	B	胴～底40%	

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
378	42-154G	土師器　甕	―	(1.7)	5.2	ABCHJKN	にぶい黄橙色	B	底部70%	
379	37-151G	土師器　甕	19.4	18.05	8.2	ABHKMN	黒褐色	B	90%	外面煤付着。
380	41-154G	平　瓦	最大長(7.1)cm、最大幅(5.4)cm、最大厚(2.2)cm。胎土:ABH。色調:浅黄色。焼成:B。一部のみ残。							
381	37-151G	土　錘	最大長4.0cm、最大径2.0cm、孔径0.4cm。重量(2.8)g。ほぼ完形。							
382	37-152G	土　錘	最大長4.7cm、最大径2.3cm、孔径0.5cm。重量17.0g。完形。							
383	38-152G	土　錘	最大長5.4cm、最大径1.7cm、孔径0.5cm。重量(13.9)g。ほぼ完形。							
384	38-152G	土　錘	最大長4.4cm、最大径1.9cm、孔径0.45cm。重量15.2g。完形。							
385	38-152G	土　錘	最大長(3.4)cm、最大径1.75cm、孔径0.4cm。重量(15.3)g。半分欠。							
386	38-152G	土　錘	最大長(3.7)cm、最大径1.6cm、孔径0.55cm。重量(8.5)g。半分欠。							
387	38-152G	土　錘	最大長4.1cm、最大径0.9cm、孔径0.25cm。重量3.3g。完形。							
388	38-153G	土　錘	最大長(3.7)cm、最大径2.0cm、孔径0.45cm。重量(11.9)g。半分欠。							
389	39-153G	土　錘	最大長4.1cm、最大径1.5cm、孔径0.4cm。重量9.9g。完形。							
390	39-153G	土　錘	最大長3.9cm、最大径1.7cm、孔径0.35cm。重量11.7g。完形。							
391	39-153G	土　錘	最大長3.9cm、最大径1.5cm、孔径0.35cm。重量7.2g。完形。							
392	39-153G	土　錘	最大長4.0cm、最大径0.9cm、孔径0.3cm。重量3.3g。完形。							
393	40-153G	土　錘	最大長6.05cm、最大径1.95cm、孔径0.35cm。重量(18.2)g。ほぼ完形。							
394	一括	土　錘	最大長(3.4)cm、最大径1.4cm、孔径0.35cm。重量(3.7)g。半分欠。							
395	37-151G	臼　玉	最大径1.4cm、最大厚1.1cm、孔径0.35cm。重量13.1g。滑石。完形。							
396	38-152G	砥　石	最大長(4.45)cm、最大幅(5.05)cm、最大厚(1.45)cm。重量(59.6)g.。砂岩。大半欠。両面平滑。							
397	一括	砥　石	最大長16.5cm、最大幅6.6cm、最大厚3.05cm。重量436.2g。砂岩。完形。一面のみ平滑。							
398	38-152G	陶器　甕	―	―	―	―	褐色	B	胴下部片	常滑産。内外面鉄釉。
399	40・41-153G	建築部材	最大長(83.4)cm、最大幅(9.8)cm、最大厚(3.0)cm。両端以降欠。側面等間隔に抉り有。							
400	42-154G	経巻具	最大長(60.05)cm、最大幅(2.75)cm、最大厚(1.85)cm。上端欠。							
401	37-150G	板状木製品	最大長(9.5)cm、最大幅(2.7)cm、最大厚(1.15)cm。下端以降欠。端部両側面に抉り有。							
402	37-150G	板状木製品	最大長(16.7)cm、最大幅(2.1)cm、最大厚(0.9)cm。上端以降欠。							
403	37-150G	板状木製品	最大長(6.35)cm、最大幅(2.0)cm、最大厚(1.3)cm。大半欠。							
404	37-153G	板状木製品	最大長(5.3)cm、最大幅(2.85)cm、最大厚(0.35)cm。大半欠。端部面取り状切り込み、片側面段差有。							
405	38-152G	不明木製品	最大長(6.15)cm、最大幅(2.0)cm、最大厚(1.6)cm。完形。両端部尖り、一方向に反る。							
406	37-151G	下　駄	最大長(16.7)cm、最大幅(5.75)cm、最大厚(1.6)cm。両端部欠。鼻緒孔有。							

本来は両端に角錐状の加工があったと思われるが、片端を欠いている。検出された長さは60.05cmである。401～404は板状を呈する小型の木製品。401は上部側面に切り込みが入る。404は他に比べて薄い。405は両端が尖り、一方向に反る木製品。全面が丁寧に研磨されている。401～405の性格及び用途は不明である。406は下駄。両端部付近を欠く。鼻緒孔と思われる孔が一箇所みられた。

今回検出された河川跡は、現在も流れる衣川の東側に位置し、流れの方向も一致していることから衣川の前身と思われる。時代及び時期は出土遺物から弥生時代まで遡ることができ、検出された西端では一部が埋没して古代には流れを変えていたことも確認された。河川跡は中世の遺物が少ないことから中世以降には現在の位置に流れが変わったと思われる。

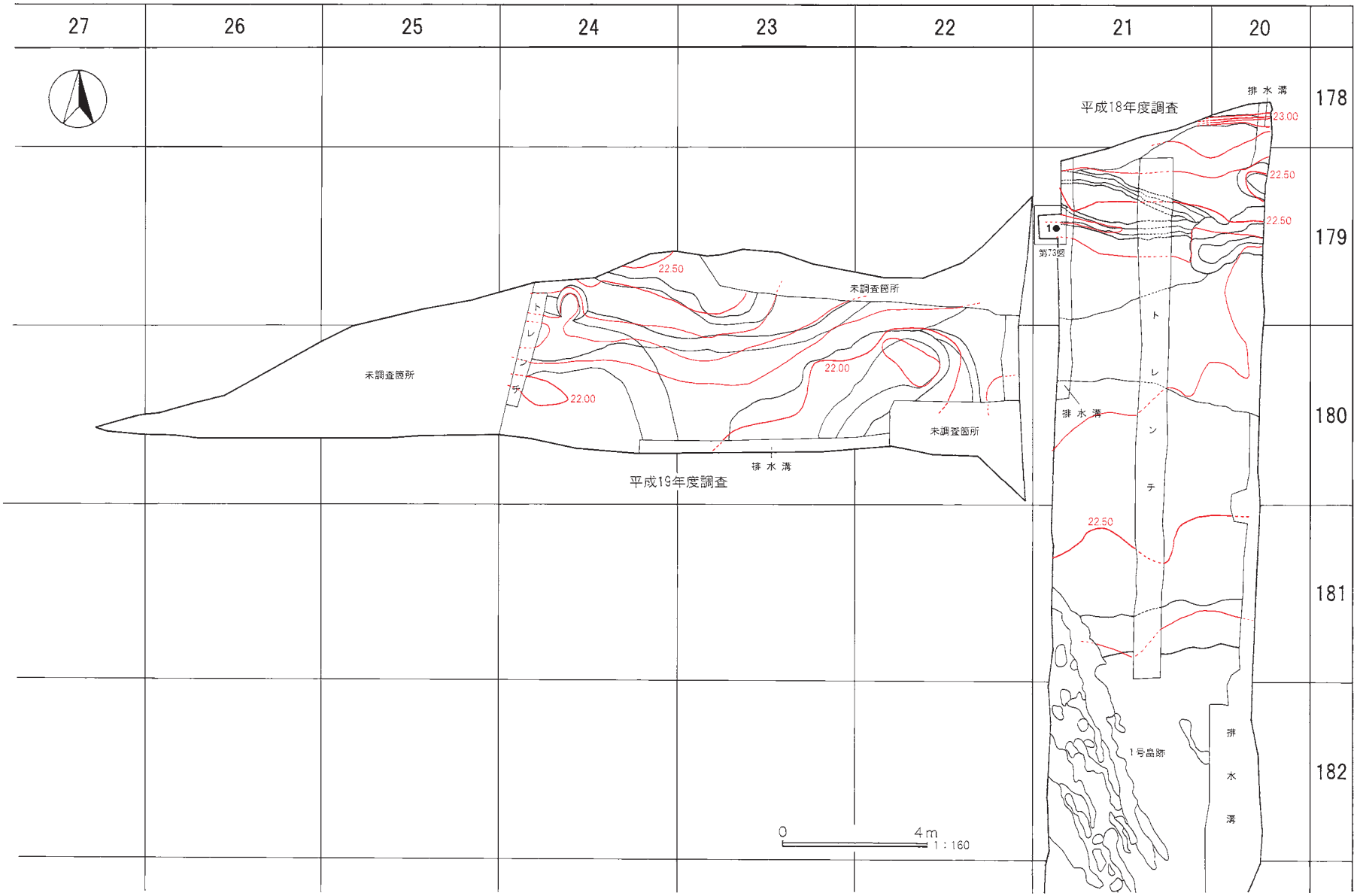
12　谷状落込跡

平成18・19年度調査の第２区20～27－178～181グリッドに位置する。平成18年度調査では南西部で１号畠跡と重複しているが、谷状落込跡が埋没した後に１号畠跡が掘り込まれている。

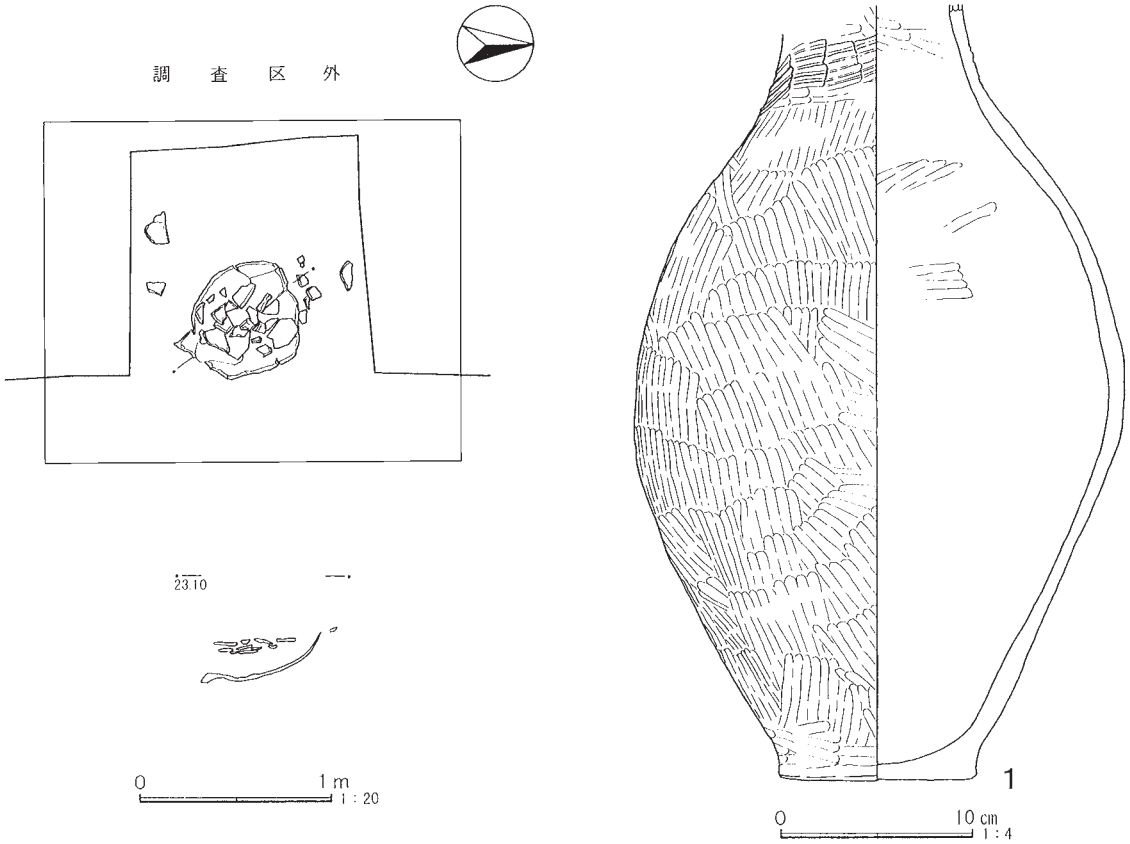
全体が検出されていないため規模等は不明であるが、高低差は約1.4mある（第72図）。平成19年度調査では安全性を確保することから調査することができない所もあったが、部分的に溝状を呈する所やピットないし土坑状を呈する所がみられた。

出土遺物（第73図）は、弥生土器壺（１）のみである。平成18年度調査の21－179グリッド西端ほぼ央から横方向につぶれた状態で検出された。土器の内面には植物繊維が付着していた。

１は口縁部を欠く。胴部は縦長の球形を呈しており、最大径を中段に持つ。文様は頸部のみであり、６本一単位の櫛歯状工具による粗い簾状文が横位に巡る。文様帯以下は無文でヘラミガキ調整が施され


27
26
25
24
23
22
21
20
178
179
180
181
182
平成18年度調査
平成19年度調査
未調査箇所
未調査箇所
未調査箇所
トレンチ
トレンチ
排水溝
排水溝
排水溝
1号畠跡
第73図
23.00
22.50
22.50
22.50
22.50
22.00
22.00
0
4m
1：160

第72図　谷状落込跡



第73図　谷状落込跡遺物出土状況・出土遺物

第14表　谷状落込跡出土遺物観察表

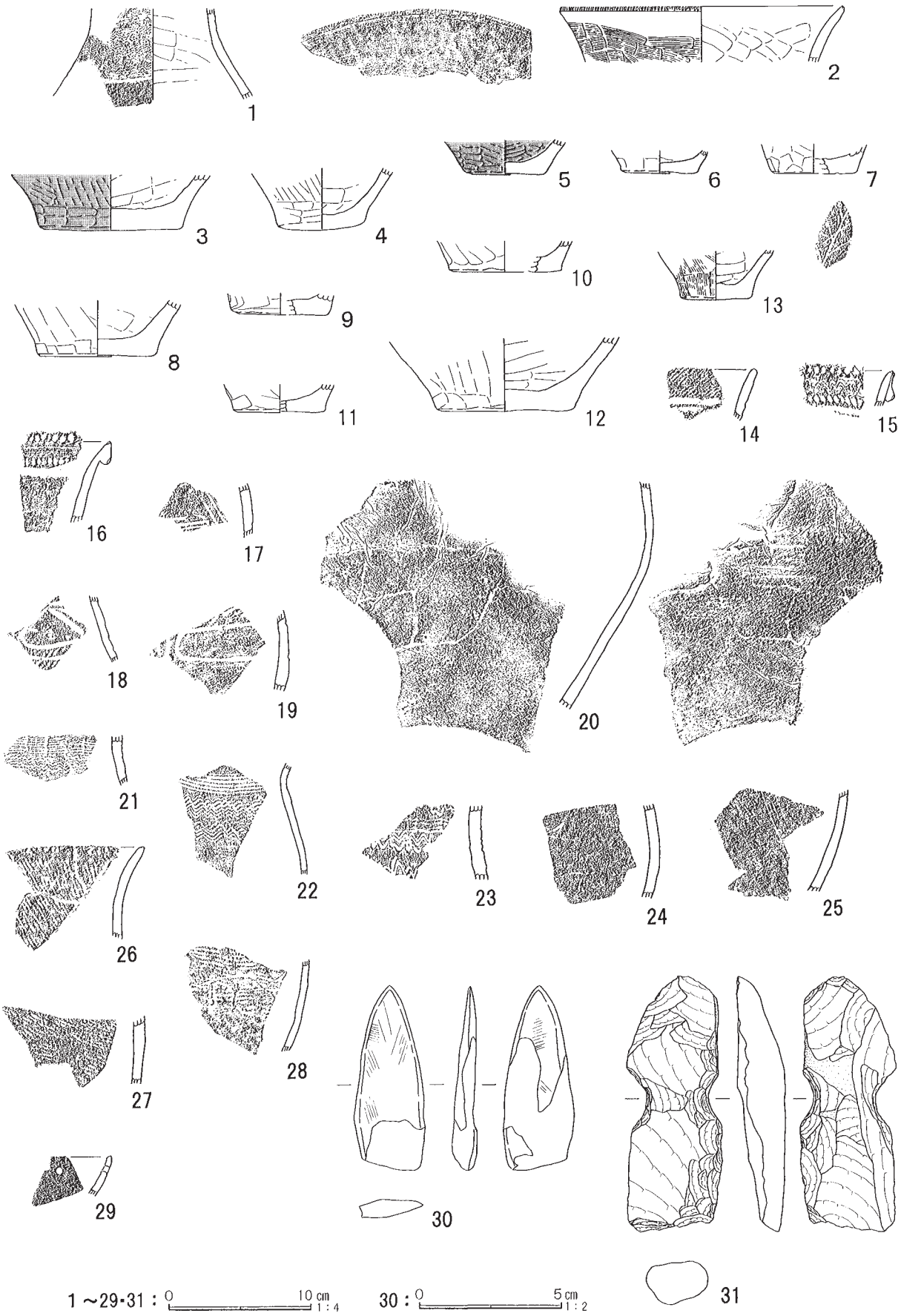
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	弥生土器　壺	―	(40.95)	(10.5)	ABDHIKN	にぶい赤褐色	B	頸～底70%	内面磨耗顕著、外面やや磨耗。

ている。内面調整は磨耗が著しいことからほとんど図示できなかったが、確認できた所はヘラミガキであった。時期は弥生時代後期初頭段階と思われる。

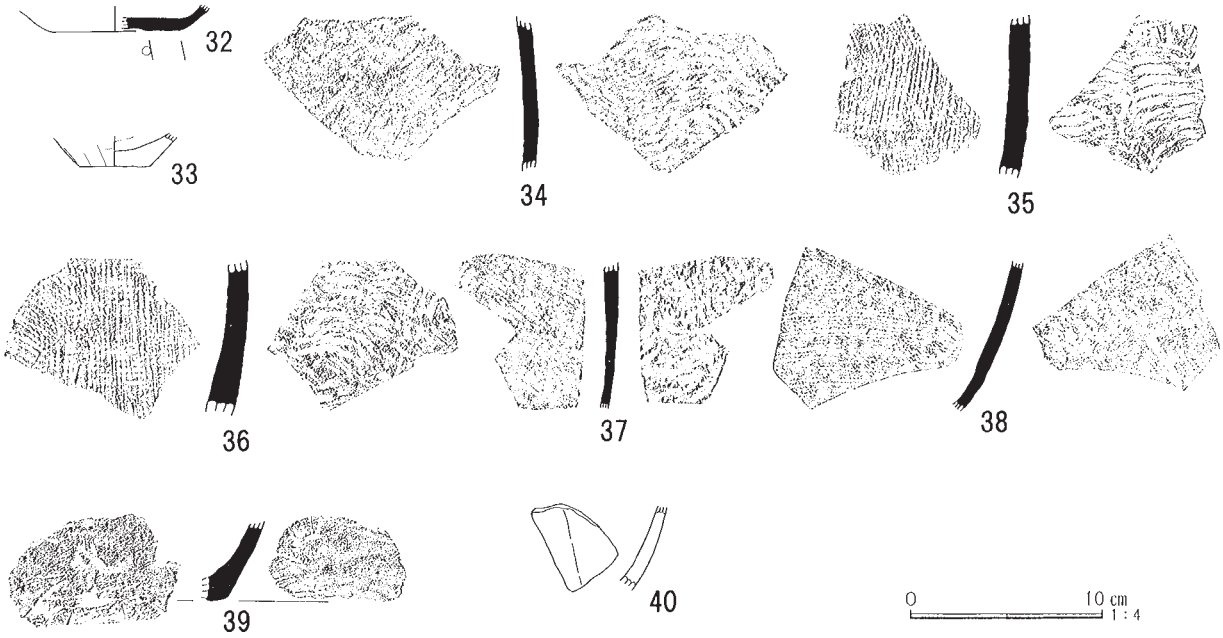
13　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、弥生土器、石器、奈良・平安時代の須恵器、土師器、中世の青磁などがある（第74・75図）。弥生時代と奈良・平安時代の遺物は第２区以外から検出されており、前者は第４区、後者は第３区からの検出が多い。以下、時代・時期及び遺物ごとに順を追って述べる。

１～31は弥生時代中期後半から後期初頭にかけての遺物。１・３～５・14～20は壺。１は頸部から胴上部にかけての部位。頸部には７本一単位の櫛歯状工具による波状文が四段以上巡り、頸部と肩部の境に横位の沈線が一条巡る。以下は横位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。内面はヘラナデ調整である。３～５は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。３・４の外面及び５の内外面はヘラミガキ調整であり、３は外面、５は内外面に赤彩が施されている。５は広口壺の可能性がある。３・４の内面調整はヘラナデである。14～16は口縁部から頸部までに収まる破片。14は口縁部片。太目の平行沈線二条の上にＬＲ単節縄文が施文されている。15・16は複合口縁で上下に刻みを持つ。15は刻みの間に３本一単位の波状文が巡る。16は刻みの間及び頸部が無文で横位のヘラナデ調整が施されている。内面調整



第74図　遺構外出土遺物（1）



第75図　遺構外出土遺物（2）

は14・16が横位のヘラナデ、15が横位のヘラミガキで赤彩が施されている。17・19は胴上部片。17は細目の沈線で重三角文が描かれている。19はやや太目の沈線で楕円状の文様が横位に描かれており、区画外にＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は17が斜位、19が横位のヘラナデである。18は肩部片。やや太目の沈線で重三角文が描かれている。地文にはＬＲ単節縄文が施文されている。内面調整は横位のヘラナデである。20は胴部中段から下部にかけての破片。無文で外面及び内面上部が横位のヘラナデ、下部は斜位のハケメ調整である。

２・６～13・21～28は甕。２は口縁部。端部に刻みを持ち、外面はハケメとナデ、内面はヘラナデ調整である。６～13は胴下部から底部にかけての部位ないし底部。13の外面がハケメである以外はすべて内外面ヘラナデ調整である。７は底部外面に木葉痕が残る。21～23は櫛歯状工具により文様が描かれる甕の頸部から胴上部にかけての破片。頸部に簾状文、21・22は簾状文下、23は上下に同一工具による波状文が巡る。22と23の簾状文下の波状文は二段である。櫛歯状工具の単位は21が７本、22が６本、23が３本である。外面無文部及び内面の調整は21が斜位、その他は横位のヘラナデである。24・25はハケメ調整主体の胴部中段及び下部片。24は外面が横・斜位、25は上部が斜位のハケメ、下部は斜位のヘラナデ調整が施されている。内面調整はともに横位のヘラナデである。26～28は縄文が施文される甕。26は口縁部から頸部にかけて、27は胴部中段、28は胴下部の破片である。26は口縁端部に刻みを持ち、外面にカナムグラ系の擬縄文が施文されている。27はＲＬ単節縄文、28は上部にＬＲ単節縄文施文、下部は横・斜位のヘラナデ調整である。内面調整は26が横位、27が横・斜位、28は斜位のヘラナデであり、27はやや丁寧に施されている。29は高坏の口縁部片。外面は縦・斜位、内面は横位のヘラミガキ調整で赤彩が施されている。口縁部に円孔がみられた。器壁が薄い。

30・31は石器。30は磨製石鏃の未製品か。両面研磨されているが、片面は剥離が顕著である。粘板岩製。31は打製石斧。片面一部に自然面を残す。中段に抉りが入り、分銅型を呈する。砂岩製。完形品。

32～39は奈良・平安時代の土器。32・34～39は須恵器。32は須恵器坏の底部。南比企産である。底部

調整は回転糸切り後外周ヘラ削りである。８世紀後半から９世紀初頭にかけてのものと思われる。34～39は甕の破片。34～37は外面にタタキ、内面に円形ないし半円形のあて具痕が残る。38は外面がカキ目、内面は回転ナデ調整であるが、一部にあて具痕が残る。39は底部片であり、内外面ともに回転ナデ調整である。33は土師器甕の底部。外面はヘラ削り、内面はヘラナデ調整である。器壁が厚い。

40は中世に青磁椀の体部片。内外面に薄く釉がかかり、外面に蓮弁文がみられた。龍泉窯系。

第15表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土遺構	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	4区	弥生土器　壺	－	(6.5)	－	ACDHJN	にぶい橙色	B	頸～胴30%	外面無文部赤彩。
2	4区	弥生土器　甕	(20.4)	(3.95)	－	ABDHIKN	にぶい黄橙	B	口縁部25%	
3	4区	弥生土器　壺	－	(4.0)	(10.3)	ABHN	灰白色	B	胴～底45%	外面赤彩、大半剥落。
4	4区	弥生土器　壺	－	(4.5)	6.2	ACHIN	暗赤褐色	B	胴～底60%	
5	4区	弥生土器　壺	－	(2.5)	(5.8)	ABEHIN	明赤褐色	B	底部45%	内外面赤彩。
6	1区14-193G	弥生土器　甕	－	(1.65)	5.4	ABHIKN	にぶい黄橙	B	底部100%	
7	3区	弥生土器　甕	－	(2.1)	(6.0)	ABHIKN	にぶい褐色	B	底部30%	底部外面木葉痕有。
8	3区	弥生土器　甕	－	(4.0)	8.5	ABHN	黒褐色	B	胴～底100%	
9	4区38-165G	弥生土器　甕	－	(1.5)	(6.8)	ACIJN	にぶい褐色	B	底部45%	
10	4区38-167G	弥生土器　甕	－	(2.2)	(8.0)	AHIKMN	灰褐色	B	底部25%	
11	40・41-165G	弥生土器　甕	－	(2.0)	(6.6)	ABDGIKN	橙色	B	底部45%	
12	一括	弥生土器　甕	－	(5.15)	9.9	ABEHMN	にぶい褐色	B	胴～底100%	外面磨耗顕著。
13	4区	弥生土器　甕	－	(3.4)	5.1	ABHIMN	にぶい黄褐色	B	胴～底90%	
14	1区14-193G	弥生土器　壺	－	－	－	ADIKN	にぶい橙色	B	口縁部片	
15	40・41-165G	弥生土器　壺	－	－	－	ADN	橙色	B	口縁部片	内面赤彩。
16	4区	弥生土器　壺	－	－	－	ABHJN	赤褐色	B	口～頸部片	
17	1区14-188G	弥生土器　壺	－	－	－	ABEGIKN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	
18	1区17-195G	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIN	明赤褐色	B	肩部片	
19	3区	弥生土器　壺	－	－	－	ABEHIKN	にぶい橙色	B	胴上部片	
20	4区	弥生土器　壺	－	－	－	ABDHIJ	にぶい黄褐色	B	胴部片	
21	4区38-165G	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHKN	にぶい赤褐色	B	頸～胴上片	
22	4区38-165G	弥生土器　甕	－	－	－	ABCIKN	橙色	B	頸～胴上片	
23	4区	弥生土器　甕	－	－	－	AEHJN	灰黄褐色	B	頸～胴上片	
24	4区	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHIKN	灰黄褐色	B	胴部片	
25	4区	弥生土器　甕	－	－	－	ABEHJN	にぶい赤褐色	B	胴下部片	
26	1区16-187G	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHJN	明赤褐色	B	口～頸部片	
27	4区	弥生土器　甕	－	－	－	ABDHN	にぶい褐色	B	胴部片	
28	1区14-192G	弥生土器　甕	－	－	－	ABHIKN	黒褐色	B	胴下部片	
29	4区40-165G	弥生土器高坏	－	－	－	AH	赤褐色	A	口縁部片	内外面赤彩。
30	1区14-194G	磨製石鏃	最大長(6.6)cm、最大幅(2.5)cm、最大厚(0.9)cm。重量(13.4)ｇ。粘板岩。表裏剥離箇所有。							
31	1区17-188G	打製石斧	最大長18.15cm、最大幅7.8cm、最大厚3.95cm。重量412.0ｇ。砂岩。完形。							
32	4区	須恵器　坏	－	(1.3)	(7.0)	AEFN	灰赤色	A	底部45%	南比企産。
33	1区	土師器　甕	－	(1.7)	3.8	ABDHKN	黒褐色	B	底部60%	
34	3区	須恵器　甕	－	－	－	ABDN	にぶい黄橙色	B	胴部片	産地不明。№37と同一個体。
35	3区	須恵器　甕	－	－	－	ABCLN	明赤褐色	B	胴部片	末野産。№36と同一個体。
36	3区	須恵器　甕	－	－	－	ABCLN	明赤褐色	B	胴部片	末野産。№35と同一個体。
37	3区	須恵器　甕	－	－	－	ABDN	にぶい黄橙色	B	胴部片	産地不明。№34と同一個体。
38	3区	須恵器　甕	－	－	－	ABDHKLN	灰黄色	B	胴下部片	末野産。
39	1区	須恵器　甕	－	－	－	ABFH	灰色	B	底部片	南比企産。
40	1区14-198G	青磁　椀	－	－	－	－	灰オリーブ色	A	体部片	龍泉窯系。体部外面蓮弁文有。

Ⅴ　調査のまとめ

前中西遺跡における調査報告は今回で５回目となる。今回報告した調査地点では遺跡の主体となる弥生時代は数少ないが遺構が確認されており、溝跡を中心に大量の遺物が出土している。また新たに確認された河川跡では弥生時代から奈良・平安時代にかけての遺物が大量に検出されている。河川跡は第Ⅳ章でも述べたとおり現在も流れる衣川の前身と思われ、本遺跡における弥生時代の集落跡や墓域の立地に大きく関与していると思われる。現時点における弥生時代集落跡と墓域の立地については、前年度報告の『前中西遺跡Ⅳ』（熊谷市教委2009）でその様相について述べたが、今回の報告や平成21年度に実施した第10次調査によりまた新たな知見を得ることができた。よって、ここで新知見を付け加えた様相について再度述べ、そして出土遺物についても注目すべきものがあることからこれらについても述べておきたい。また河川跡では弥生時代以外の遺物も大量に検出されており、特に奈良・平安時代の遺物が目立つ。中でも10世紀以降の遺物が検出されたのは本遺跡では今回が初となることから弥生時代以外についても最後に若干触れておきたい。

弥生時代の集落跡と墓域について

本遺跡の主体となる弥生時代は、これまでの調査により主に集落跡が遺跡範囲北側、墓域が南側に広がることが明らかとなってきた。時期は集落・墓域ともに中期後半と中期末から後期初頭の２つの段階に大別され、集落跡は今回の報告分も含めて中期後半の住居跡が14軒、中期末から後期初頭が11軒検出されている。墓は方形周溝墓と乳幼児葬である土器棺墓が確認されているが、土器棺墓は集落内外で確認されていることからここでは方形周溝墓の分布域を墓域とする。方形周溝墓は調査区の都合から単独の溝跡として報告したものに方形周溝墓の可能性があるものがみられるため検出数はさらに増える可能性があるが、明らかに方形周溝墓といえる遺構は今回の報告分も含めて中期後半が6基、中期末から後期初頭が13基である。以下、今回の報告と最新の発掘調査成果を交えて述べてみたい。

まず集落跡について。これまでに報告した住居跡は、中期後半は一部が遺跡範囲南東部の方形周溝墓群内に点在するが、大半は衣川北側からの検出である。そして中期末から後期初頭にかけては主に衣川南側の遺跡範囲西側で検出されていた。しかし、今回報告した住居跡３軒（中期後半２軒、後期初頭１軒）は河川跡に近接しているが、すべて遺跡範囲東の河川南側から検出された。ただ平成21年度に実施した第10次調査では、今回報告の第３区から北西100m程の衣川を挟んだ調査地点において中期末から後期初頭にかけての住居跡が十数軒まとまって確認されており、またその南側では平成20年度の第９次調査により中期後半の北島式段階の住居跡が十数軒広がっていることが確認されている。よって、河川北側には時期の区別なく、多数の住居跡が存在することが明らかとなってきた。

本遺跡における弥生時代集落跡は主に遺跡範囲北側、衣川の北側に広がっているが、遺跡範囲北側の東西600m内には中期後半と中期末から後期初頭にかけての２つの段階の集落跡がまとまりを持ちつつも点在して営まれていたことが徐々に明らかとなってきており、時期別による集落跡の立地に違い等がみられない状況を呈してきた。

一方、墓域は方形周溝墓が主に遺跡範囲南東部に多く分布しているが、今回報告の第４区からも方形周溝墓が検出されたことにより墓域が北側に広がることが確認された。そして平成21年度に実施した今回報告の第３区北側の調査地点でも四隅の切れない方形周溝墓が数基検出されていることからさらに北

側に広がることが認められ、遺跡範囲東側では墓域が河川南側に限定されることが確実となってきた。

確認された方形周溝墓の大半は四隅の切れるタイプであるが、平成13年度報告の３号墓のみ四隅の切れないタイプであった。３号墓は出土遺物に中期後半のものが多くみられたが、その平面プランから前年度報告では時期が下る可能性を指摘した（熊谷市教委2009）。今回報告した２基のうち、１号墓は四隅が切れるタイプであり、出土遺物から中期後半に相当すると思われるが、２号墓は平成13年度報告の３号墓と同じく四隅の切れないタイプであり、検出した範囲内では東溝中央に土橋を持つ。時期は出土遺物や重複する住居跡との関係から後期初頭と思われることから平成13年度報告の３号墓も後期初頭のものである可能性が強まった。方形周溝墓は中期後半から後期初頭まで四隅の切れるタイプが継続して造られるが、後期初頭には平面プランの異なる方形周溝墓も造られるようになったと推測される。

集落跡と墓域の立地については、中期後半は集落跡が衣川北側と遺跡範囲東側、墓域は衣川南側、中期末から後期初頭は集落跡が衣川南側、墓域は遺跡範囲東側に広がっていると報告した（熊谷市教委2009）が、中期末から後期初頭の集落跡は南側のみならず、北側にも広がっていることが明らかとなってきた。本遺跡範囲中央から南側には衣川を含め小河川が数条東に向かって流れているが、このうち衣川を主な境界線として北側に集落跡、南側に墓域が形成されており、住居跡は南側にも少数ながら認められるが、大半は北側にあることから集落跡の中心は時期に関係なく河川北側にあることは間違いない。そして墓域は時期別による立地を把握することが困難な状況となってきたが、河川南側の遺跡範囲ほぼ中央付近から東側にかけて広範囲に分布しており、中期後半以降四隅の切れるタイプが多く構築されるが、後期初頭には溝がほぼ全周するタイプも出現すると思われる。

出土遺物について

今回報告した出土遺物のうち、注目すべき遺物に第32号溝跡出土の壺形土器（第32図32－１・２）と第２方形周溝墓出土の土偶型容器（第46図65）がある。前者については中期後半の北島式の範疇で捉えることができるが、その文様構成などからポスト北島式土器との見方もできる。後者についてはその形態が弥生時代の土偶型容器として著名な熊谷市池上遺跡出土例に極めて近似しており、本遺跡周辺における土偶型容器の展開を探ることができるものと言える。以下、これらの遺物について述べてみたい。

まず第32号溝跡出土の壺形土器について。個々の詳細については第Ⅳ章に記述済みであるため割愛するが、２つの土器は中期後半の北島式土器に共通する点と異なる点を併せ持つ。まず共通点としては主に①文様要素、②文様手法、③調整技法などが挙げられる。①の文様要素は北島式土器を提唱した吉田稔氏の分類（埼玉考古学会2003）に倣えば、文様主要素として「平行線＋波状文系列」に相当する。ただし北島式では本例のように沈線区画内に縄文を充填するのではなく、平行線や波状沈線と縄文帯を交互に施文するものを指すことからあくまでも広義に解釈した場合となる。また口縁部に縄文を施文し、頸部を無文にする点は北島式に共通する要素である。前中西遺跡では北島式段階の土器は「平行線＋波状文系列」を文様の主要素として採用するものが多くみられ、現時点ではフラスコ文等を主体とする北島遺跡との微妙な違いと言える。②の文様手法は、32－２のみに当てはまるが、口縁部と頸部の文様帯に区画線として描かれる波状沈線が２本一単位の施文具による点が挙げられる。これは北島遺跡でもみられた手法であり、本遺跡では多く認められる。③の調整技法はヘラミガキの多用化である。文様の簡素化が進むことでより多くヘラミガキが使用されている点は北島式より新しい要素と言える。

次に相違点について。相違点は主に①文様構成、②器形などが挙げられる。①の文様構成は、文様自

体は北島式と同じく胴部中段、ないし直下まで描かれるが、簡素化が進むことで無文部が増え、北島式の特徴である頸部に描かれる鋸歯文や頸部と肩部境に設けられた段に刻まれる刺突列などを欠く。このうち32－１は文様を口縁部と胴部中段にしか持たないことから口縁部、頸部、胴上部、胴部中段の４つの文様帯を持つ32－２よりは若干新しい様相を呈すると思われる。②の器形については、複合口縁でない口縁部の開きが小さく、胴部が北島式に比べるとやや長胴化する点などが挙げられる。

本例は北島式の文様主要素「平行線＋波状文系列」上にあり、北島式の文様手法などを持ちつつも簡素化が進んだものと言え、中期末段階に相当すると思われる。類似するものは破片であるが、過去の報告や35号溝跡からも若干出土しており、本例のみが特異なものではないと思われる。

本遺跡では中期後半以降見られる甕に続き、後期初頭には壺も文様主体が櫛歯状工具によるものが出現し、また久ケ原式やその系統と思われる土器群もみられるようになる。本例が次段階にどう繋がるかは資料の増加を待って検討することとし、今回は北島式との共通点と相違点を提示するにとどめたい。

次に土偶型容器について。本例は後期初頭の第２号方形周溝墓南溝より出土したが、流れ込みと思われるものである。顔面下部のみの検出であるが、その形態が池上遺跡出土の土偶と極めて似ている。しかし、細部で違いもみられたことから両者を比較することでその特徴や時期について言及してみたい。

両者は鼻下から突き出た半円状の顎の形態が非常に似通っている。ただ異なる点としてまず鼻が本例は角張った粘土帯を貼り付けただけであるのに対し、池上例は鼻筋の通った滑らかな造りであり、鼻の孔や鼻筋まで細かく表現されている。また本例には鼻両脇の頬に二条のやや太い沈線でイレズミが表現されているが、これは池上例にはみられない。鼻下には両者ともヒゲが表現されているが、池上例は輪郭を沈線で描き、その中に直線ないし曲線的な刺突を充填しているのに対し、本例は縄文を施文しているだけであり、口は池上例が横位の短い沈線で表現しているが、本例は小さい円形の刺突を刻んだだけである。両者ともに粘土紐を積み上げて大まかな形を造るまでは同じであるが、池上例は細部にまで表現が及び、全体的に丁寧な造りであるのに対し、本例は表現が雑で簡素化が進んだものと言える。

本遺跡北東約1.5㎞に位置する池上遺跡は弥生時代中期中頃の集落跡であり、東日本の弥生時代を語る上で欠かせない重要な遺跡である。そして池上遺跡出土の土偶型容器もまた弥生時代の土偶として広く知られている。本遺跡の集落跡は時期的に池上遺跡の直後に位置づけられるが、遺物は池上段階のものやさらに古い時期のものも検出されている。本例がどの時期に相当するか定かではないが、その造りは雑で簡素化が認められることから池上例よりは新しい段階のものと思われる。ただ鼻脇にあるイレズミに使用された沈線の太さから推察するとそれほど時期差があるとは思えない。

本遺跡出土の土偶型容器は今回で３例目となり、未報告分にも２例あることから計５例が検出されている。全形の分かるものが少なく時期の特定も難しいが、数的にこれほど出土している遺跡は稀であり、現時点では本遺跡と同じく池上遺跡に後続する北島遺跡とは異なる特徴と言える。

弥生時代以外について

本遺跡では遺跡の主体となる弥生時代を筆頭に古墳時代、奈良・平安時代、中世と幅広く確認されているが、今回古代の遺物が河川跡から大量に見つかったことで周辺に集落跡が存在する可能性がでてきた。

古代の集落跡は奈良時代が遺跡範囲南東部において住居跡が数軒確認されていたが、平安時代は全く確認されていなかった。特に10世紀以降の遺物は遺構外出土遺物も含めてこれまでにほとんど確認され

ていなかったが、今回遺物が確認されたことにより古代も集落がほぼ絶え間なく営まれていたことを予感させる。

本遺跡では時代によって集落の立地が異なることは過去の調査によって確認された弥生時代と古墳時代後期の集落跡からも読み取れる。時代による立地の違いは低地にあることから地形の変化などによるものと考えられるが、遺跡内のどこかに古代の集落跡が眠っている可能性が高くなったと言える。

以上、紙数の都合もあり、簡潔に述べた。遺跡の主体となる弥生時代は中期後半と中期末から後期初頭の二つに大別され、各段階で重複する遺構があることから時期差を持つ。よって今後は各段階における動向について把握していくことが課題となる。そして時期別による集落跡と墓域の立地については調査の進行に伴い、混沌としてきたが、発掘調査は今後も継続して実施されることから資料の増加とともに検討していきたい。

引用・参考文献

熊谷市遺跡調査会　2001　『諏訪木遺跡』

熊谷市教育委員会　1979　『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』

1983　『めづか』

1999　『横間栗遺跡』

2001　『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群14・15・16号墳』

2002　『前中西遺跡Ⅱ』

2003　『前中西遺跡Ⅲ』

2004　『籠原裏遺跡』

2007　『諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第２号墳』

2008　『藤之宮遺跡』

2009　『前中西遺跡Ⅳ』

熊谷市前中西遺跡調査会　1999　『前中西遺跡』

埼玉県遺跡調査会　1971　『横塚山古墳』

埼玉県教育委員会　1984　『池守・池上』

1988　『埼玉の中世城館跡』

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

1993　『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集

2002　『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集

2002　『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集

2003　『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集

2004　『北島Ⅷ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集

2007　『諏訪木遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第336集

2008　『諏訪木遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第351集

埼玉考古学会　2003　『埼玉考古学会シンポジウム　北島式土器とその時代－弥生時代の新展開－』埼玉考古別冊７

写　真　図　版

第１区全景（北から）

第１区全景（南から）

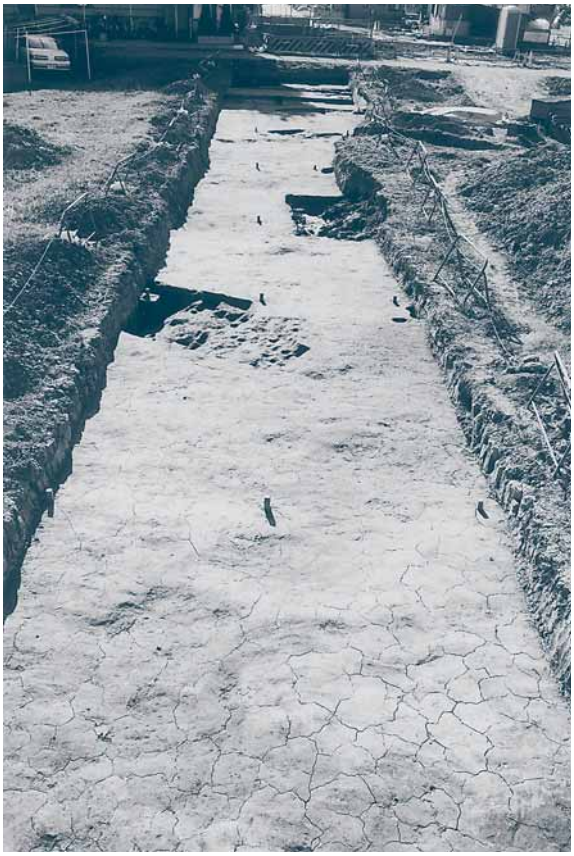
第１区14～17－187～189Ｇ
全景（西から）

図版2

第１区14～17－195・196G
全景（西から）

第２区（平成18年度調査）
全景（南から）

第２区（平成19年度調査）
全景（東から）



第３区南側全景（北から）

第３区全景（南から）

第４区38～42－164～166Ｇ全景（西から）

第４区38・39－163～169Ｇ全景（北から）

図版4

第１号住居跡

第３号住居跡遺物出土状況

第２号住居跡

第４号住居跡・第５号溝跡・第４号土坑

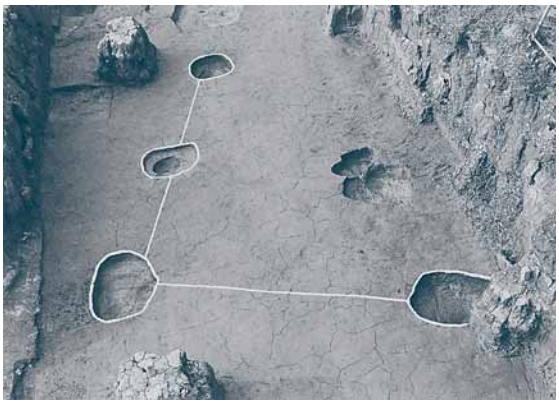
第２号住居跡Ｐ16遺物出土状況

第５号住居跡

第３号住居跡

第１・２号竪穴状遺構・第６号土坑

第３号竪穴状遺構



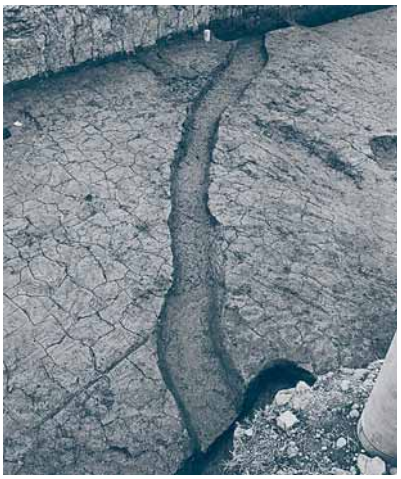
第１号掘立柱建物跡

第１号溝跡

第２号溝跡・第１号土坑

第４号溝跡

第７～９号溝跡・第９～11号土坑



第10号溝跡

第12号溝跡

図版6

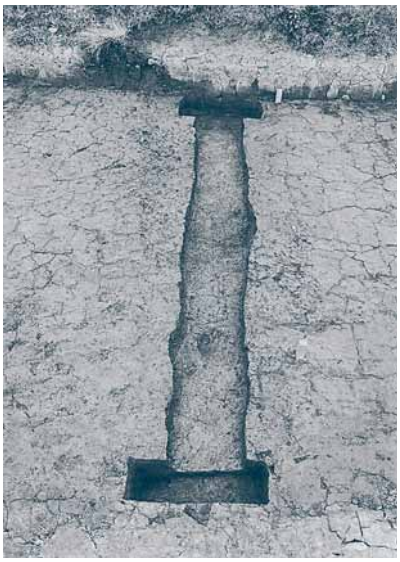
第13・14号溝跡

第20・21号溝跡

第22号溝跡

第23号溝跡

第15号溝跡



第18号溝跡

第19号溝跡

第24号溝跡

第25・26号溝跡

第27号溝跡

第28号溝跡

第28号溝跡遺物出土状況

第29～31号溝跡・第21号土坑

第32号溝跡

図版8

第32号溝跡遺物出土状況

第35号溝跡遺物出土状況（2）

第33・34号溝跡

第35号溝跡遺物出土状況（3）

第35号溝跡

第２号土坑

第35号溝跡遺物出土状況（1）

第５号土坑

第７号土坑

第８・12・13号土坑

第15号土坑

第20号土坑

第１号井戸跡

第１号方形周溝墓

第２号方形周溝墓

第２号方形周溝墓
遺物出土状況

38－167ＧＰ１遺物出土状況

第１号河川跡（南から）

第１号河川跡
（北から）

第１号河川跡
（西から）

第１号河川跡西側（北から）

第１号河川跡37・38－150・151Ｇ遺物出土状況

第１号河川跡37・38－152Ｇ遺物出土状況

第１号河川跡遺物出土状況（1）

第１号河川跡遺物出土状況（2）

第１号畠跡（東から）

第１号河川跡遺物出土状況（3）

谷状落込跡（南東から）

第１号河川跡遺物出土状況（4）

谷状落込跡弥生土器出土状況（上から）

第１号畠跡（南東から）

谷状落込跡弥生土器出土状況（東から）

図版12

第２号住居跡　第12図６

第２号住居跡　第12図７

第３号住居跡　第13図１

第20号溝跡　第31図20－１

第32号溝跡　第32図32－１

第32号溝跡　第32図32－２

第32号溝跡　第33図32－４

第32号溝跡　第33図32－６

第32号溝跡　第33図32－７

第35号溝跡　第34図35－１

第35号溝跡　第34図35－２

図版14

第35号溝跡　第34図35－４

第35号溝跡　第34図35－５

第35号溝跡　第34図35－６

第35図35－21

第35図35－25

第35図35－26

第37図35－65

第37号溝跡　第37図37－1

第２号方形周溝墓　第45図１

第２号方形周溝墓　第45図５

第１号河川跡　第54図１

第１号河川跡　第54図２

第１号河川跡　第54図４

第１号河川跡　第54図11

第１号河川跡　第54図12

図版16

第１号河川跡　第54図13

第１号河川跡　第55図44

第１号河川跡　第55図46

第１号河川跡　第55図49

谷状落込跡　第73図１

遺構外　第74図１

第28号溝跡　第32図28－１

第１号河川跡　第59図136

第１号河川跡　第59図139

第１号河川跡　第59図140

第35号溝跡　第37図35－75

第１号井戸跡　第42図１

第１号河川跡　第60図144

第１号河川跡　第60図152

第１号河川跡　第60図153

図版18

第１号河川跡　第60図155

第１号河川跡　第60図157

第１号河川跡　第60図162

第１号河川跡　第60図163

第１号河川跡　第60図164

第１号河川跡　第60図165

第１号河川跡　第60図173

第１号河川跡　第60図175

第１号河川跡　第60図178

第１号河川跡　第60図179

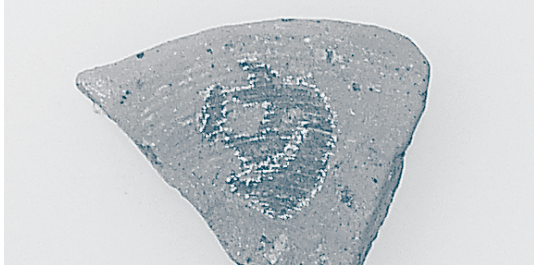
第１号河川跡　第60図180

第１号河川跡　第60図181

第１号河川跡　第61図182

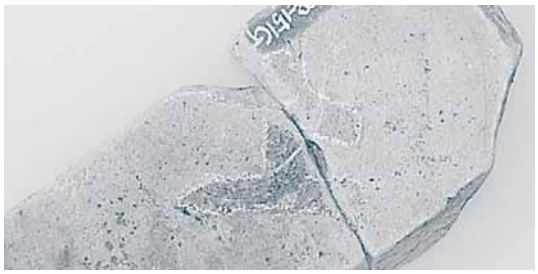
第１号河川跡　第61図190墨書

第１号河川跡　第61図197墨書



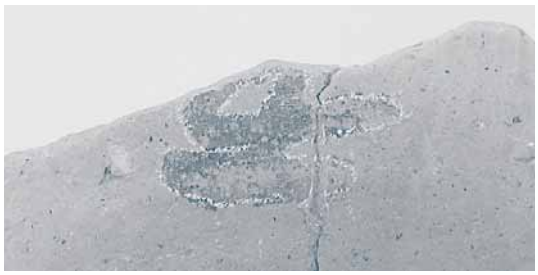
第１号河川跡　第61図220墨書

第１号河川跡　第61図223墨書

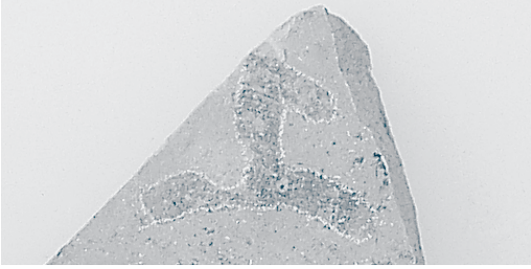


第１号河川跡　第61図226墨書

第１号河川跡　第61図227墨書



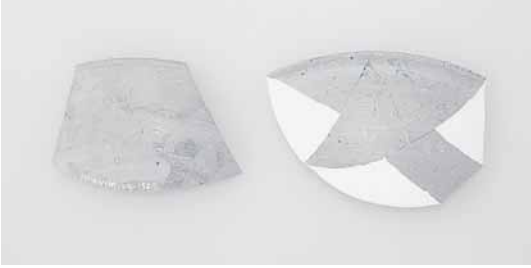
第１号河川跡　第61図233墨書



第１号河川跡　第62図234墨書

第１号河川跡　第62図248

第１号河川跡　第63図251



第１号河川跡　第68図313・314

第１号河川跡　第68図315

第１号河川跡　第68図316

第１号河川跡　第68図317

第１号河川跡　第68図318

第１号河川跡　第68図319

第１号河川跡　第69図337墨書

第１号河川跡　第68図320

第１号河川跡　第69図338

第１号河川跡　第68図329墨書

第１号河川跡　第69図339

第１号河川跡　第69図332

第１号河川跡　第69図340

第１号河川跡　第69図334

第１号河川跡　第69図341

図版22

第１号河川跡　第69図343

第１号河川跡　第69図348

第１号河川跡　第69図349

第１号河川跡　第69図351

第１号河川跡　第69図362

第１号河川跡　第69図364

第１号河川跡　第70図375

第１号河川跡　第70図376

第１号河川跡　第70図379

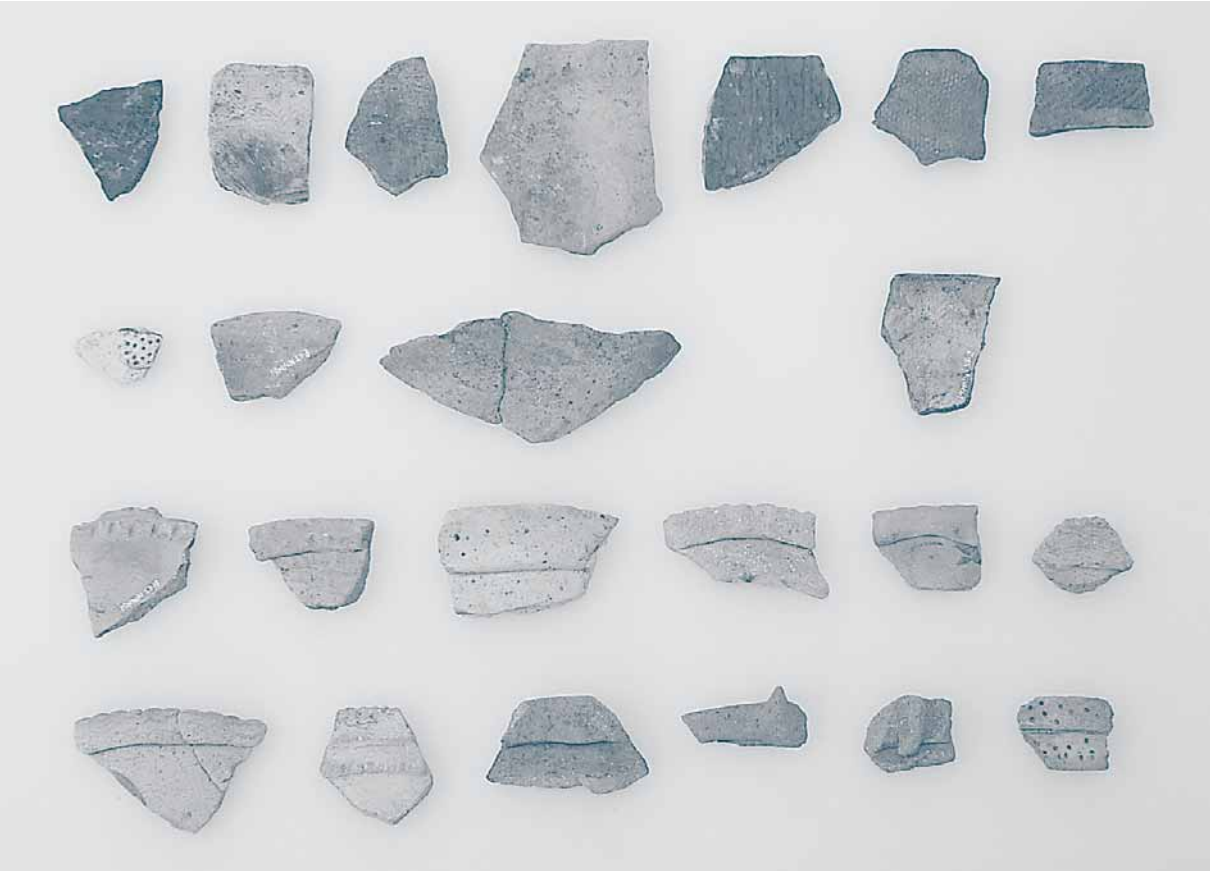
第１号住居跡　第９図１～４　　第２号住居跡　第12図１・８～13　　第３号住居跡　第13図２～７
第３号溝跡　第31図31－１　　第15号溝跡　第31図15－１　　第16号溝跡　第31図16－１

第19号溝跡　第31図19－３～６　　第20号溝跡　第31図20－６～９　　第22号溝跡　第31図22－１・２
第23号溝跡　第31図23－１・２　　第24号溝跡　第31図24－１　　第28号溝跡　第32図28－３～７
第31号溝跡　第32図31－１・２

第32号溝跡　第33図32－５・８・22～34

第32号溝跡　第34図32－35～38・40　　第35号溝後　第34図35－３・第35図35－22・23・27～37

第35号溝跡　第36図35－42～57



第35号溝跡　第36図35－58～61・第37図35－69～74　　第37号溝跡　第37図37－１
第２号方形周溝墓　第45図14～25

第２号方形周溝墓　第45図26～33・35～40・第46図41～47

第２号方形周溝墓　第46図48～56・58～61　　ピット出土遺物　第41図１・３～６
第１号河川跡　第55図50～54

第１号河川跡　第55図55～64・第56図65～76

第１号河川跡　第56図77～91

第１号河川跡　第56図94～101・第57図102～111・114～117

第１号河川跡　第57図121～123・125・126　　遺構外　第74図２・14～19・21～23・26・29

第35号溝跡　第35図35－38・第36図35－39・40

第35号溝跡　第36図35－41　　第２号方形周溝墓　第45図34　　遺構外　第74図20

第３号竪穴状遺構　第18図１～８　　第１号柵列跡　第21図１

第27号溝跡　第31図27－１～３　　第１号河川跡　第62図243～245

第１号河川跡　第63図260～264・第64図265・266

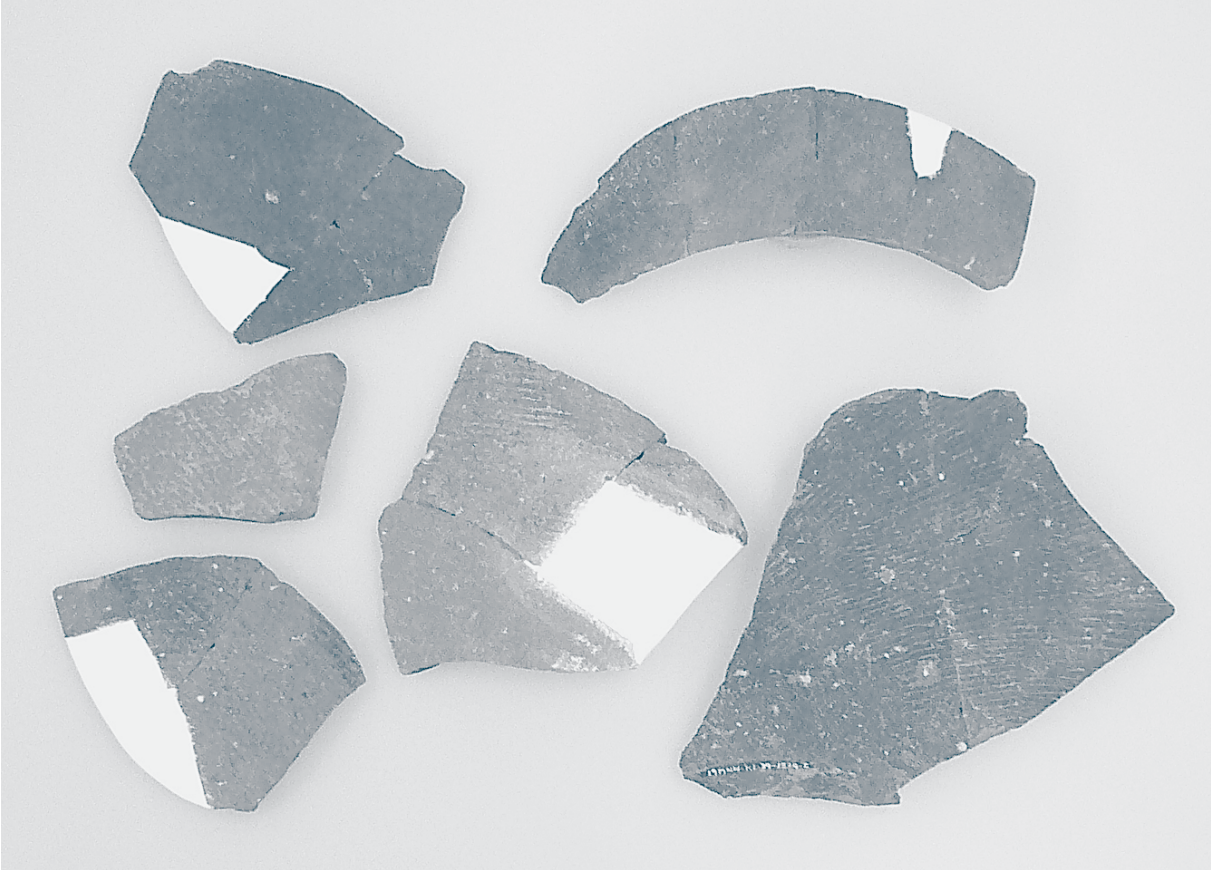
第１号河川跡　第64図267～273

第１号河川跡　第65図274～280

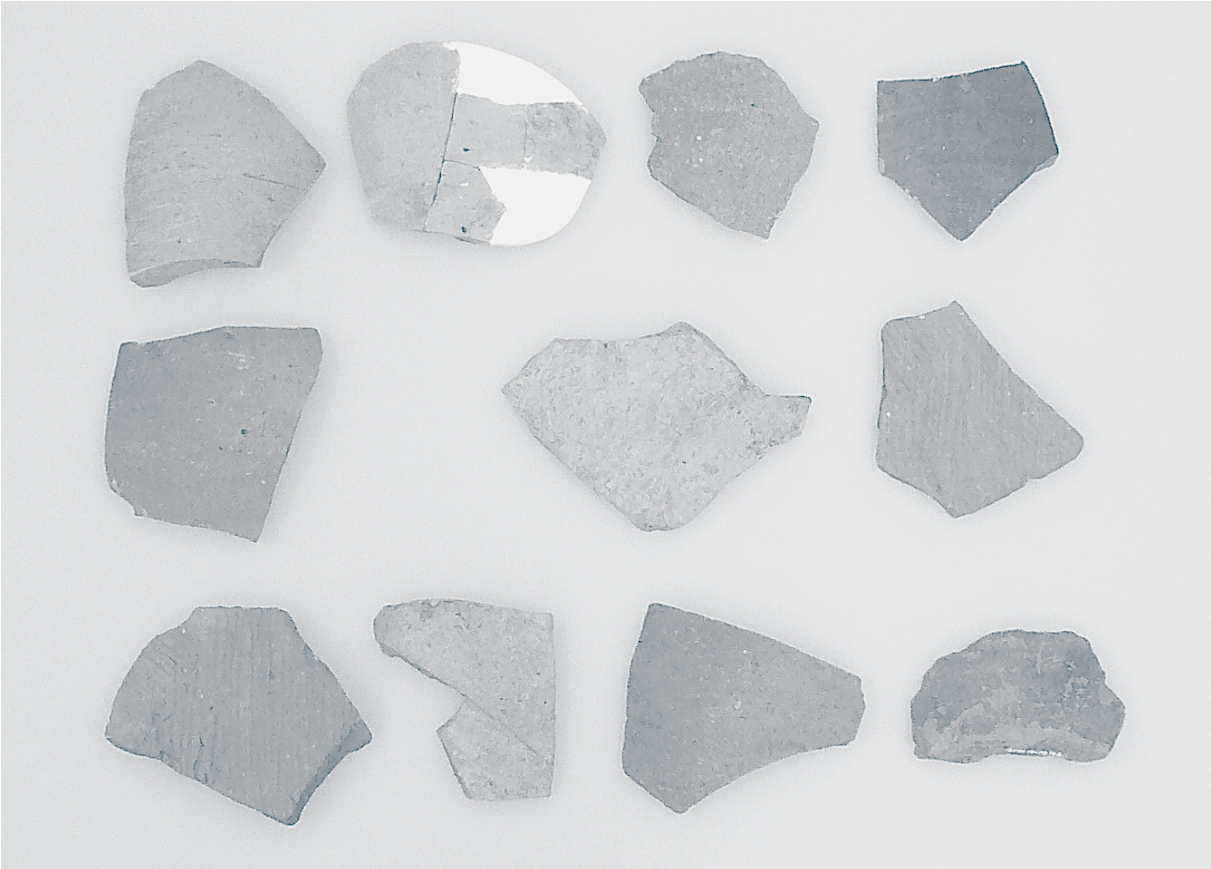
第１号河川跡　第65図281～284・第66図285～287

第１号河川跡　第66図288～294

第１号河川跡　第67図295～301



第１号河川跡　第67図302～305・第68図306・307



第１号河川跡　第68図308～312　　遺構外　第75図34～39

第２号住居跡　第12図19・20

第３号住居跡　第13図８
第３号竪穴状遺構　第18図13
第３号溝跡　第31図３－２

第15号溝跡　第31図15－２・３
第20号溝跡　第31図20－11

図版36

第32号溝跡　第34図32－41
第２号方形周溝墓　第46図62・63

第１号河川跡　第58図127～129

第１号河川跡　第58図130～132

遺構外　第74図30

遺構外　第74図31

第１号柵列跡　第21図２
第１号河川跡　第70図396・397

第２号方形周溝墓　第46図65（表）

第２号方形周溝墓　第46図65（裏）

第２号方形周溝墓
第46図64

第１号河川跡　第70図381～394

第１号河川跡
第71図399

第１号河川跡　第71図401～404

第１号河川跡　第71図405（上）

第１号河川跡　第71図405（側面）

第１号河川跡
第71図400

第１号河川跡　第71図406（表）

第１号河川跡　第71図406（裏）

報告書抄録

ふりがな	まえなかにしいせきご
書名	前中西遺跡Ⅴ
副書名	熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅵ
巻次	―
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第７集
編集者名	松田 哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360－0107　熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター　TEL 048－536－5062
発行年月日	西暦2010（平成22）年３月19日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東緯 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
まえなかにしいせき 前中西遺跡	くまがやしはこだぼんちほか 熊谷市箱田18番地１他	11202	092	36° 8′ 42″	139° 24′ 24″	20060419～ 20060627	767.1	区画整理 街路築造 工事
	くまがやしはこだぼんちほか 熊谷市箱田13番地２他					20070109～ 20070209	120.6	
	くまがやしかみのぼんちほか 熊谷市上之2663番地他					20070903～ 20071225	636	
	くまがやしかみのぼんちほか 熊谷市上之2688番地３他					20071201～ 20080314	208.2	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前中西遺跡	集落跡 祭祀 墓	弥生中期後～ 後期初	住居跡　３軒 溝跡　９条 方形周溝墓　２基 谷状落込跡　１箇所	弥生土器・石器 土偶型容器	・方形周溝墓と思われる溝跡から大量の遺物が出土し、底面からほぼ完形の良好な壺形土器が２個体まとまって検出された。 ・後期初頭の方形周溝墓から流れ込みと思われる土偶型容器の顔面下部が検出された。
		古墳時代前期	溝跡　１条	土師器	
		古墳時代後期 以降	竪穴状遺構　３基 柵列跡　１列 溝跡　５条 土坑　３基	須恵器・土師器 石製品	
		奈良・平安時代	住居跡　２軒 掘立柱建物跡　１棟 溝跡　５条 土坑　２基 井戸跡　１基	須恵器・土師器 石製品	
		中・近世	溝跡　１条	陶器	
		弥生～中世	河川跡　１条	弥生土器・石器 須恵器・土師器 土師質土器 灰釉・緑釉陶器 瓦・土製品 石製品・木製品 陶器	
		時期不明	溝跡　16条 土坑　18基 畠跡　１箇所 ピット群		

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書　第７集

前　中　西　遺　跡　Ⅴ

－熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅵ－

平成22年３月19日
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／巧和工芸印刷株式会社